

八十塚古墳群の研究

関西大学文学部考古学研究 第7冊

2002年3月

関西大学文学部考古学研究室 編

八十塚古墳群の研究

関西大学文学部考古学研究 第7冊



2002年3月

関西大学文学部考古学研究室 編



八十塚古墳群 岩ヶ平支群第52～56号墳

卷首原色図版 2



1. 八十塚古墳群 岩ヶ平支群第52号墳



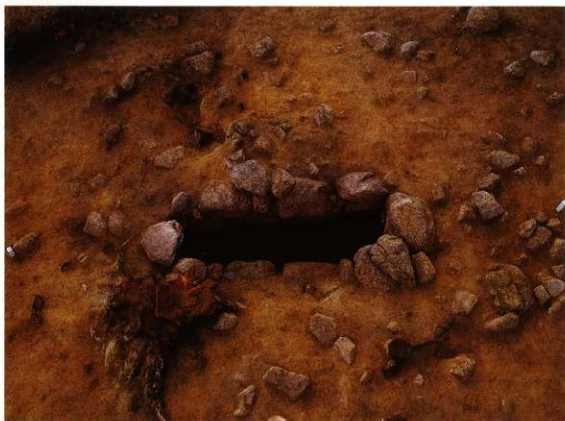
2. 八十塚古墳群 岩ヶ平支群第53号墳



1. 八十塚古墳群 岩ヶ平支群第54号墳



2. 八十塚古墳群 岩ヶ平支群第55号墳



1. 八十塚古墳群 岩ヶ平支群第56号墳



2. 八十塚古墳群 岩ヶ平支群第52～55号墳 出土土器

序 文

平成6年、兵庫県芦屋市六麓荘町177番地に個人住宅が新築されることになった。この周辺は従来から「八十塚古墳群」の一画として知られており、すでに半破壊された古墳石材と思われるものが露出している箇所もあって、周知の遺跡として法令に基づく事前の発掘調査を行う必要があった。

そこで、諸般の事情により遺跡の発掘調査にかかわる事業を、芦屋市教育委員会より関西大学文学部考古学研究室に依頼があった。考古学研究室では再三にわたり芦屋市教育委員会と協議した結果、考古学研究室内に「八十塚古墳群発掘調査団」を結成し、この調査を単なる開発行為の事前調査との認識ではなく、学術・学際的に遂行することを目的として、周辺のエ育委員会の埋蔵文化財担当者に参加を願ひ、調査指導委員会を設置、運営することにした。

今回の調査は、芦屋市教育委員会による分布調査及び一部試掘調査において少なくとも4基の古墳が存在することが知られており、これを後期群集墳である「八十塚古墳群岩ヶ平支群」と位置付けていた。なお、この周辺は徳川氏大坂城築城の際に採石・採集された刻印のある石材や矢穴石のある石材も確認され、近世初頭の「東六甲採石場岩ヶ平刻印群」にもおよんでいるものと考えられてきた。

発掘調査は大学の夏期休講期間中にあたる平成6年7月1日から9月30日の3ヶ月間を当てることとし、平成6年6月11日、関西大学飛鳥文化研究所において、兵庫県西宮市教育委員会西川卓志・合田茂伸両氏を中心に、八十塚古墳群と周辺地域における古墳群の従前の発掘調査を学習する研究会を開催し、調査参加学生諸君に調査の目的と方法、内容等について周知するようにした。

現地調査は予定通り実施し、完了することができた。その後、考古学研究室において報告書の作成に努力した。ここに報告するのはその成果である。また、寄せられた考察・論考編を収録した。

本報告書を刊行するにあたり、発掘調査中調査指導委員会の諸氏には度々現地において指導・助言をいただき、芦屋市教育委員会の関係者も連日調査の遂行にご尽力下され、円滑に、しかも事故もなく調査を終了することができたことに感謝する。なお炎天酷暑のなか、発掘調査に参加した学生諸君は貴重な体験を持ったであろうし、将来、研究者・博物館学芸員・埋蔵文化財担当者として成長されることを期待する。そして、本書が六甲山麓地域における古墳、特に群集墳の研究に役立つことがあれば幸甚である。

最後に発掘調査に理解と協力を示された八千代建物株式会社（代表取締役前田邦夫氏）に謝意を表するものである。

平成14年3月31日

八十塚古墳群発掘調査団団長・関西大学名誉教授

網干 善教

例 言

1. 本書は、兵庫県芦屋市六麓荘町177番地に所在する八十塚古墳群岩ヶ平支群第52号墳・第53号墳・第54号墳・第55号墳・第56号墳の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、八千代建物株式会社代表取締役・前田邦夫氏の個人専用住宅建築に伴う事前調査で、八十塚古墳群発掘調査団が実施した。
3. 発掘調査および本書の印刷・刊行にかかる費用は、八千代建物株式会社代表取締役・前田邦夫氏が全額負担した。
4. 発掘調査で検出した古墳は、いずれも今回の調査によって新たに確認されたものであり、古墳の番号は芦屋市教育委員会の指示により設定した。
5. 発掘調査は1994年6月26日～9月30日にわたって実施した。実働日数は89日間である。整理作業および報告書作成・編集は1994年～2001年にわたって、関西大学文学部考古学研究室内で行った。調査経過は第1章に記した。
6. 調査は、関西大学文学部教授網干善教を団長とする調査団を組織して実施した。発掘調査は網干善教・関西大学文学部非常勤講師米田文孝の指導のもとに、関西大学大学院博士課程前期課程学生竹村忠洋を担当者として行い、関西大学文学部史学・地理学科学学生井上主税・太田宏明が補佐した。発掘調査および整理・編集の参加者名は、第1章に記した。
7. 本書で使用した遺構の写真は米田・竹村が撮影し、海邊博史・鬼頭彰が補佐した。出土遺物の撮影は小野秀幸が行い、板東明子が補佐した。遺物の実測は、竹村・井上・太田・海邊・上島玲子・鬼頭・中里伸明が行った。土器実測については、藤原 学氏の指導を受けた。押図図版の整図は、太田・海邊・阿部泰之・山本おかり・中里が行った。校正全般は、米田・竹村・太田・海邊・阿部・谷村卓哉・山本・中里・布谷依子・日置 智・巽 陽介・大岡まゆみが行った。
8. 本書の執筆は米田・竹村・井上・太田・海邊・辻 康男・鬼頭・阿部・谷村・山本・中里・日置が分担した。それぞれの執筆分担は執筆者名を第1章5に掲げ、その分担と責を明らかにした。
9. English Contents・English Summaryは関西大学大学院博士課程前期課程山下大輔が作成し、同博士後期課程上杉彰紀の校閲を受けた。
10. 本書で使用した図面・図版は可能な限り縮尺を統一し、遺物番号は本文・押図・図版とも、共通して用いた。
11. 本書で示す方位は、特に明記していない限り磁北である。磁北と真北との偏差は、西偏約6°20'である。また、本書で用いた標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。
12. 本書に掲載した図面のうち、既往の地図、分類図などを使用したものについては、それぞれの原典を明記した。なお、国土地理院発行の地図・航空写真については例言の末尾に一覧表で示した。
13. 第5章論考については、合田茂伸氏、直宮憲一氏、西川卓志氏、藤原 学氏、森岡秀人氏より玉稿を賜った。
14. 本書の編集は網干・米田の指導の下、竹村・太田・海邊が行った。
15. 本調査に関わる遺物・写真・実測図などは、すべて芦屋市教育委員会が保管している。広く利用されることを希望する。
16. 発掘調査の実施にあたっては、関西大学評議員である徳山喜昭氏、柳楽喜祐氏に多大な御支援を賜った。記して感謝の意を表するものである。

17. 発掘調査ならびに本書の作成にあたっては、下記の方々から御援助・御指導・御教示をいただいた。記して感謝の意を表するものである。(五十音順、敬称略)

明尾圭造 尼子奈美枝 池峯龍彦 石田成年 石野照代 入江文敏 内山裕子 大岡まゆみ
大下 明 大城道則 大村敬通 奥田哲通 奥谷由香 柏原正民 葛野 豊 金田明大
河野克人 河野千裕 木許 守 木南アツ子 近藤康司 十河良和 田中晋作 土井和幸
富田尚夫 中島 薫 仲谷由利子 林部 均 白谷朋世 濱野俊一 平松良雄 廣岡孝信
藤川祐作 藤田和尊 藤原 学 古川久雄 前田敬彦 増田真木 松田和義 水川登紀子
村川義典 山口卓也 山田正右 和田秀寿 渡邊邦雄

18. 本書の題字は嗣干善教の揮毫によるものである。

【挿図使用地図一覧】

Fig.13 猪木幸男 『日本地質体系』近畿地方 1996年

Fig.14 国土地理院 『大阪北西部』(1:50000)

【図版使用航空写真一覧】

PL.1 八十塚古墳群 周辺航空写真(1)

PL.2 八十塚古墳群 周辺航空写真(2)

「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の空中写真を複製したものである。
(承認番号7近複、第99号)」

八十塚古墳群の研究

本文目次

序 文	関西大学名誉教授 網干善教
挿図目次・表目次・巻首原色図版目次・写真図版目次	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
1 調査の目的	1
2 調査に至る経緯	1
3 調査組織	2
4 調査の方法および経過	2
5 整理作業および報告書作成の経過と方法	4
第2章 位置と環境	13
1 地理的環境	13
2 歴史的環境	17
3 八十塚古墳群の研究史	31
第3章 調査成果	37
1 発掘調査区	37
2 岩ヶ平支群第52号墳	53
3 岩ヶ平支群第53号墳	79
4 岩ヶ平支群第54号墳	105
5 岩ヶ平支群第55号墳	133
6 岩ヶ平支群第56号墳	159
7 古墳に伴わない遺物	173
第4章 総括	179
第5章 論考	199
1 西摂平野の古墳と遺跡群の動態	西川卓志 203
2 西摂における群集墳の築造とその展開	直宮憲一 223
3 類型化による群集墳の検討	太田宏明 237
4 横穴式石室の床面について	合田茂伸 256
5 摂津・八十塚古墳群と菟原郡葦屋郷・賀美郷周辺の古代史	森岡秀人 265
6 芦屋市域の古墳時代後期から飛鳥時代の遺跡について	竹村忠洋 362
7 群集墳と群集窯	藤原 学 379
引用・参考文献一覧	407
英文要旨	419
跋 文	関西大学文学部助教授 米田文孝

挿 図 目 次

Fig.1	調査前風景	6
Fig.2	調査前風景	6
Fig.3	第53号墳 調査前現状	7
Fig.4	調査風景	7
Fig.5	第53号墳 天井石除去	8
Fig.6	第53号墳 検出	9
Fig.7	現地説明会風景	10
Fig.8	現地説明会風景	10
Fig.9	第53-55号墳間土層実測	11
Fig.10	第53号墳実測	11
Fig.11	第55号墳実測	12
Fig.12	芦屋市の位置	13
Fig.13	八十塚古墳群周辺 地質図	14
Fig.14	地質図凡例	15
Fig.15	八十塚古墳群 周辺遺跡分布図	18・19
Fig.16	八十塚古墳群の古墳分布・支群と地形	38
Fig.17	岩ヶ平支群における小支群の分布 (矢印の方向は開口方向を示す)	39
Fig.18	調査前地形測量図	42
Fig.19	遺構面測量図	43
Fig.20	発掘区 土層断面図 (Bライン)	45
Fig.21	発掘区 土層断面図 (3ライン, Eライン)	46・47
Fig.22	古墳間 土層断面図	48・49
Fig.23	基盤層 土層断面模式図	50・51
Fig.24	第52号墳 挿図配置図	54
Fig.25	第52号墳 調査前墳丘測量図	55
Fig.26	第52号墳 墳丘測量図	56
Fig.27	第52号墳 遺物分布図	57
Fig.28	第52号墳 墳丘西側周溝 土器出土状況図	58
Fig.29	第52号墳 墳丘東側裾部 土器出土状況図	59
Fig.30	第52号墳 石室検出状況実測図	61
Fig.31	第52号墳 石室上面実測図	62
Fig.32	第52号墳 石室実測図	63
Fig.33	第52号墳 石室横断面図	64
Fig.34	第52号墳 石室床面遺物出土状況図	66
Fig.35	第52号墳 木棺位置推定図	67
Fig.36	第52号墳 石室および石室掘形実測図	68

Fig.37	第52号墳 基底石および石室掘形実測図	69
Fig.38	第52号墳 石室掘形実測図	70
Fig.39	第52号墳 土層断面図	72・73
Fig.40	第52号墳出土 遺物実測図(1)	74
Fig.41	第52号墳出土 遺物実測図(2)	76
Fig.42	第52号墳出土 遺物実測図(3)	77
Fig.43	第53号墳 挿図配置図	80
Fig.44	第53号墳 調査前墳丘測量図	81
Fig.45	第53号墳 墳丘測量図	82
Fig.46	第53号墳 遺物分布図	84
Fig.47	第53号墳 前庭部 土器出土状況図	85
Fig.48	第53号墳 墳丘構築作業面 土器出土状況図	85
Fig.49	第53号墳 石室検出状況実測図	86
Fig.50	第53号墳 石室上面実測図	87
Fig.51	第53号墳 石室実測図	88
Fig.52	第53号墳 石室横断面図	89
Fig.53	第53号墳 石室床面遺物出土状況図	91
Fig.54	第53号墳 石室および石室掘形実測図	93
Fig.55	第53号墳 基底石および石室掘形実測図	94
Fig.56	第53号墳 石室掘形実測図	95
Fig.57	第53号墳 石室掘形面土坑内円礫検出状況図	96
Fig.58	第53号墳 土層断面図	98・99
Fig.59	第53号墳出土 遺物実測図(1)	100
Fig.60	第53号墳出土 遺物実測図(2)	101
Fig.61	第53号墳出土 遺物実測図(3)	102
Fig.62	第53号墳出土 遺物実測図(4)	103
Fig.63	第54号墳 挿図配置図	106
Fig.64	第54号墳 調査前墳丘測量図	107
Fig.65	第54号墳 墳丘測量図	108
Fig.66	第54号墳 列石実測図	110
Fig.67	第54号墳 遺物分布図	111
Fig.68	第54号墳 墳丘東側周溝土器出土状況図	112
Fig.69	第54号墳 墳丘東側周溝土器出土状況立面断面図および土層断面図	113
Fig.70	第54号墳 墳丘北側裾部土器出土状況図	114
Fig.71	第54号墳 石室検出状況実測図	116
Fig.72	第54号墳 石室上面実測図	117
Fig.73	第54号墳 石室実測図	118
Fig.74	第54号墳 石室横断面図	119

Fig.75	第54号墳	石室床面遺物出土状況図	120
Fig.76	第54号墳	石室および石室掘形実測図	122
Fig.77	第54号墳	基底石および石室掘形実測図	123
Fig.78	第54号墳	石室掘形実測図	124
Fig.79	第54号墳	石室掘形面土坑実測図	125
Fig.80	第54号墳	土層断面図	126・127
Fig.81	第54号墳出土	遺物実測図(1)	129
Fig.82	第54号墳出土	遺物実測図(2)	130
Fig.83	第55号墳	挿図配置図	134
Fig.84	第55号墳	調査前墳丘測量図	135
Fig.85	第55号墳	墳丘測量図	136
Fig.86	第55号墳	遺物分布図	138
Fig.87	第55号墳	墳丘北西側周溝 土器出土状況図	139
Fig.88	第55号墳	前庭部 土器出土状況図	140
Fig.89	第55号墳	墳丘南西側裾部 土器出土状況図	141
Fig.90	第55号墳	石室検出状況図	142
Fig.91	第55号墳	石室上面実測図	143
Fig.92	第55号墳	石室実測図(第2次面)	144
Fig.93	第55号墳	石室実測図(第1次面)	145
Fig.94	第55号墳	石室横断面図	147
Fig.95	第55号墳	石室および石室掘形実測図	149
Fig.96	第55号墳	基底石および石室掘形実測図	150
Fig.97	第55号墳	石室掘形実測図	151
Fig.98	第55号墳	土層断面図	152・153
Fig.99	第55号墳出土	遺物実測図(1)	155
Fig.100	第55号墳出土	遺物実測図(2)	155
Fig.101	第55号墳出土	遺物実測図(3)	156
Fig.102	第56号墳	調査前墳丘測量図	160
Fig.103	第56号墳	墳丘測量図	161
Fig.104	第56号墳	石室検出状況実測図	163
Fig.105	第56号墳	石室上面実測図	164
Fig.106	第56号墳	石室実測図	165
Fig.107	第56号墳	石室および石室掘形実測図	167
Fig.108	第56号墳	基底石および石室掘形実測図	168
Fig.109	第56号墳	石室掘形実測図	169
Fig.110	第56号墳	土層断面図	171
Fig.111	発掘区出土	遺物実測図(1)	174
Fig.112	発掘区出土	遺物実測図(2)	175

Fig.113	発掘区出土 遺物実測図(3)	177
Fig.114	八十塚古墳群 用石法の分類	187

表 目 次

Tab. 1	八十塚古墳群 一覧表	35
Tab. 2	第52号墳出土 鉄釘観察表(1)	75
Tab. 3	第52号墳出土 鉄釘観察表(2)	76
Tab. 4	第52号墳出土 土器観察表	78
Tab. 5	第53号墳出土 耳環観察表	100
Tab. 6	第53号墳出土 鉄釘観察表	102
Tab. 7	第53号墳出土 土器観察表	104
Tab. 8	第54号墳出土 鉄釘観察表	129
Tab. 9	第54号墳出土 土器観察表	131
Tab.10	第55号墳出土 耳環観察表	155
Tab.11	第55号墳出土 土器観察表	157
Tab.12	発掘区出土 遺物観察表(1)	174
Tab.13	発掘区出土 遺物観察表(2)	175
Tab.14	発掘区出土 遺物観察表(3)	177
Tab.15	八十塚古墳群 有袖形石室一覧	188
Tab.16	八十塚古墳群 無袖形石室一覧	188
Tab.17	八十塚古墳群出土 須恵器一覧	191
Tab.18	八十塚古墳群出土 土師器一覧	191
Tab.19	八十塚古墳群 小支群一覧	195

巻首原色図版目次

巻首原色図版 1	八十塚古墳群 岩ヶ平支群第52～56号墳
巻首原色図版 2	1. 八十塚古墳群 岩ヶ平支群第52号墳 2. 八十塚古墳群 岩ヶ平支群第53号墳
巻首原色図版 3	1. 八十塚古墳群 岩ヶ平支群第54号墳 2. 八十塚古墳群 岩ヶ平支群第55号墳
巻首原色図版 4	1. 八十塚古墳群 岩ヶ平支群第56号墳 2. 八十塚古墳群 岩ヶ平支群第52～55号墳 出土土器

写真図版目次

- PL. 1 1. 八十塚古墳群 周辺航空写真(1)〔左側が北, ▲の交点が調査地点, 1949年撮影〕
- PL. 2 1. 八十塚古墳群 周辺航空写真(2)〔左側が北, ▲の交点が調査地点, 1994年撮影〕
- PL. 3 1. 岩ヶ平支群第52～56号墳 調査地点周辺近景〔上から〕
- PL. 4 1. 岩ヶ平支群第52～56号墳 調査地点全景〔上から〕
- PL. 5 1. 第53～56号墳 全景〔上から〕
2. 第52号墳 全景〔上から〕
- PL. 6 1. 第53号墳 全景〔上から〕
2. 第54号墳 全景〔上から〕
- PL. 7 1. 第55号墳 全景〔上から〕
2. 第56号墳 全景〔上から〕
- PL. 8 1. 第52～56号墳 調査地点近景〔南から〕
2. 調査地点南東方の眺望〔北西から〕
- PL. 9 1. 第52～56号墳 発掘調査前の状況(1)〔北から〕
2. 第52～56号墳 発掘調査前の状況(2)〔東から〕
- PL. 10 1. 第52～56号墳 完掘状況(1)〔南東から〕
- PL. 11 1. 第52～56号墳 完掘状況(2)〔南東から〕
2. 第52～56号墳 完掘状況(3)〔南東から〕
- PL. 12 1. 調査地点北東方に残置された刻印石〔南東から〕
2. 刻印石 刻印と矢穴細部〔南東から〕
- PL. 13 1. 第52号墳 石室検出状況(1)〔南から〕
2. 第52号墳 石室検出状況(2)〔東から〕
- PL. 14 1. 第52号墳 完掘状況〔南から〕
2. 第52号墳 石室全景〔南から〕
- PL. 15 1. 第52号墳 墳丘東側裾部土器出土状況(1)〔東から〕
2. 第52号墳 墳丘西側周溝土器出土状況(2)〔西から〕
- PL. 16 1. 第52号墳 石室西壁〔南東から〕
2. 第52号墳 石室東壁〔南西から〕
- PL. 17 1. 第52号墳 石室奥壁(1)〔南から〕
2. 第52号墳 石室奥壁(2)〔東から〕
- PL. 18 1. 第52号墳 石室床面北半部遺物出土状況〔南から〕
2. 第52号墳 石室床面南半部遺物出土状況〔南から〕
- PL. 19 1. 第52号墳 石室床面南半部須恵器出土状況〔東から〕
2. 第52号墳 石室床面北半部須恵器出土状況〔西から〕
3. 第52号墳 石室床面北半部鉄釘出土状況〔南から〕
- PL. 20 1. 第52号墳 石室と墳丘の関係(1)〔南から〕
2. 第52号墳 石室と墳丘の関係(2)〔東から〕

- PL.21 1. 第52号墳 墳丘東側土層断面〔南から〕
2. 第52号墳 墳丘西側土層断面〔南から〕
- PL.22 1. 第52号墳 石室と掘形全景(1)〔南から〕
2. 第52号墳 石室と掘形全景(2)〔東から〕
- PL.23 1. 第52号墳 石室基底石と掘形全景(1)〔南から〕
2. 第52号墳 石室基底石と掘形全景(2)〔東から〕
- PL.24 1. 第52号墳 石室掘形全景(1)〔南から〕
2. 第52号墳 石室掘形全景(2)〔東から〕
- PL.25 1. 第53号墳 石室検出状況(1)〔南から〕
2. 第53号墳 石室検出状況(2)〔東から〕
- PL.26 1. 第53号墳 完掘状況(1)〔南から〕
2. 第53号墳 完掘状況(2)〔東から〕
- PL.27 1. 第53号墳 石室奥壁周辺〔北から〕
2. 第53号墳 石室全景〔南から〕
- PL.28 1. 第53号墳 石室西壁〔南東から〕
2. 第53号墳 石室東壁〔南西から〕
- PL.29 1. 第53号墳 石室奥壁・西壁隅角部〔南東から〕
2. 第53号墳 石室奥壁・東壁隅角部〔南西から〕
3. 第53号墳 石室奥壁〔南から〕
- PL.30 1. 第53号墳 前庭部土器出土状況(上面)〔南から〕
2. 第53号墳 前庭部土器出土状況(下面)〔南から〕
- PL.31 1. 第53号墳 石室掘形面東側土坑内円礫〔西から〕
2. 第53号墳 石室掘形面西側土坑内円礫〔東から〕
3. 第53号墳 石室掘形面土坑内円礫〔南から〕
- PL.32 1. 第53号墳 石室と墳丘北側土層断面〔東から〕
2. 第53号墳 石室と掘形全景〔南から〕
- PL.33 1. 第53号墳 石室奥壁と裏込め石〔北から〕
2. 第53号墳 石室基底石と掘形全景〔南から〕
- PL.34 1. 第53号墳 石室掘形全景(1)〔南から〕
2. 第53号墳 石室掘形全景(2)〔東から〕
- PL.35 1. 第54号墳 石室検出状況(1)〔南から〕
2. 第54号墳 石室検出状況(2)〔東から〕
- PL.36 1. 第54号墳 石室検出状況細部(1)〔東から〕
2. 第54号墳 石室検出状況細部(2)〔北から〕
- PL.37 1. 第54号墳 完掘状況(1)〔南から〕
2. 第54号墳 完掘状況(2)〔東から〕
- PL.38 1. 第54号墳 石室全景(1)〔南から〕
- PL.39 1. 第54号墳 石室全景(2)〔西から〕

2. 第54号墳 石室全景(3)〔東から〕
- PL.40 1. 第54号墳 石室西壁〔南東から〕
2. 第54号墳 石室東壁〔南西から〕
- PL.41 1. 第54号墳 石室奥壁〔南から〕
2. 第54号墳 石室床面南半部遺物出土状況〔南から〕
- PL.42 1. 第54号墳 石室全景〔南から〕
2. 第54号墳 石室北半部敷石〔南から〕
- PL.43 1. 第54号墳 石室西壁と列石(1)〔西から〕
2. 第54号墳 石室西壁と列石(2)〔南から〕
- PL.44 1. 第54号墳 石室と墳丘の關係〔南から〕
2. 第54号墳 石室奥壁と裏込め石〔東から〕
- PL.45 1. 第54号墳 石室と墳丘北側土層断面〔東から〕
2. 第54号墳 石室と墳丘西側周溝の關係〔北から〕
- PL.46 1. 第54号墳 列石と石室掘形の關係(1)〔南から〕
2. 第54号墳 列石と石室掘形の關係(2)〔東から〕
- PL.47 1. 第54号墳 墳丘東側周溝内土器出土状況(1)〔北から〕
2. 第54号墳 墳丘東側周溝内土器出土状況(2)〔東から〕
- PL.48 1. 第54号墳 石室と掘形全景〔南から〕
- PL.49 1. 第54号墳 石室と掘形北半部〔東から〕
2. 第54号墳 石室と掘形南半部〔東から〕
- PL.50 1. 第54号墳 石室基底石と掘形全景(1)〔南から〕
- PL.51 1. 第54号墳 石室基底石と掘形全景(2)〔南から〕
2. 第54号墳 石室基底石と掘形全景(3)〔東から〕
- PL.52 1. 第54号墳 石室掘形全景(1)〔南から〕
- PL.53 1. 第54号墳 石室掘形全景(2)〔南から〕
2. 第54号墳 石室掘形全景(3)〔東から〕
- PL.54 1. 第54号墳 石室と基盤層内巨礫の關係(1)〔南から〕
2. 第54号墳 石室と基盤層内巨礫の關係(2)〔東から〕
- PL.55 1. 第54号墳 石室掘形と基盤層内巨礫の關係(3)〔東から〕
2. 第54号墳 石室掘形と基盤層内巨礫の關係(4)〔北から〕
- PL.56 1. 第54号墳 石室掘形面土坑全景(1)〔南から〕
2. 第54号墳 石室掘形面土坑全景(2)〔東から〕
- PL.57 1. 第55号墳 石室検出状況(1)〔南から〕
2. 第55号墳 石室検出状況(2)〔東から〕
- PL.58 1. 第55号墳 完掘状況(第2次面)〔南から〕
2. 第55号墳 完掘状況(第2次面)〔東から〕
- PL.59 1. 第55号墳 石室完掘状況(第2次面)〔南から〕
2. 第55号墳 石室完掘状況(第2次面)〔東から〕

- PL.60 1. 第55号墳 石室西壁〔東から〕
2. 第55号墳 石室東壁〔西から〕
- PL.61 1. 第55号墳 石室奥壁〔南から〕
2. 第55号墳 前庭部付近遺物出土状況〔南から〕
- PL.62 1. 第55号墳 石室第2次面耳縁出土状況〔南から〕
2. 第55号墳 石室第2次面耳縁出土状況細部〔南から〕
- PL.63 1. 第55号墳 完掘状況(第1次面)〔南から〕
2. 第55号墳 完掘状況(第1次面)〔東から〕
- PL.64 1. 第55号墳 石室全景(第1次面)〔南から〕
2. 第55号墳 石室全景(第1次面)〔上から〕
- PL.65 1. 第55号墳 石室と掘形全景(1)〔南から〕
2. 第55号墳 石室と掘形全景(2)〔東から〕
- PL.66 1. 第55号墳 石室と掘形全景(3)〔南から〕
2. 第55号墳 石室掘形全景〔南から〕
- PL.67 1. 第56号墳 石室検出状況(1)〔南から〕
2. 第56号墳 石室検出状況(2)〔東から〕
- PL.68 1. 第56号墳 完掘状況(1)〔南から〕
2. 第56号墳 完掘状況(2)〔東から〕
- PL.69 1. 第56号墳 石室全景(1)〔南から〕
2. 第56号墳 石室全景(2)〔東から〕
- PL.70 1. 第56号墳 石室西壁〔東から〕
2. 第56号墳 石室東壁〔西から〕
- PL.71 1. 第56号墳 石室北壁〔南から〕
2. 第56号墳 石室南壁〔北から〕
- PL.72 1. 第56号墳 石室と掘形全景(1)〔南から〕
2. 第56号墳 石室と掘形全景(2)〔東から〕
- PL.73 1. 第56号墳 石室基底石と掘形全景〔南から〕
2. 第56号墳 石室掘形全景〔南から〕
- PL.74 1. 第53号墳 北西方礫集中部分検出状況〔南から〕
2. 第53号墳 墳丘西側自然流路〔南から〕
- PL.75 第52号墳 出土遺物〔1:2ca.〕
- PL.76 第53・54号墳 出土遺物〔1:2ca.40・71のみ原寸〕
- PL.77 第55号墳 出土遺物〔1:2ca.〕
- PL.78 第55号墳 出土遺物〔1:2ca.97のみ1:3ca.〕
- PL.79 第54・55号墳および発掘区 出土遺物〔1:2ca.88・103～105のみ原寸〕

八十塚古墳群の研究

第1章 調査に至る経緯と経過

1 調査の目的

関西大学文学部考古学研究室では、古墳文化の一端を復原し得る調査・研究のフィールドとして、芦屋市に所在する八十塚古墳群をその対象とすることにした。八十塚古墳群は六甲山南麓部に分布する群集墳であり、6世紀後葉から7世紀中葉までの間に、100基程度の古墳が築造されたと推測されている。古墳群は六麓荘台地とそこから南方に派生する4本の尾根上に分かれて立地しており、地形に則して北から剣谷・苦楽園・老松・岩ヶ平・朝日ヶ丘の5支群が設定されている。

八十塚古墳群周辺では1929年以降の宅地開発を主な原因として、多くの古墳が消滅していった。1960年代以降は芦屋市教育委員会・西宮市教育委員会や芦の芽グループなどによって分布・測量・発掘調査が行われ、現在までに56基の古墳が確認されている。それらのうちの35基の古墳は発掘調査が行われ、当古墳群の性格が把握されてきた。

今回の調査は、八十塚古墳群における既往の調査の中では調査対象面積が比較的広い。さらに、これまでの調査が部分的なトレンチ調査であったのに対し、全面調査を行うことになった。これらの条件を考慮して、本研究室は以下の調査目的をもって発掘調査に臨んだ。

- ・当調査地に分布する各古墳の築造順位を推測し、小支群の形成過程を考察する。
- ・各古墳の墳丘土層や微細な痕跡から、墳丘築造や葬送儀礼の復原の可能性を追究する。
- ・発掘区全面を調査することによって、各古墳の墳丘周辺や各古墳間の空間にある遺構の検出を試みる。
- ・6世紀末から7世紀中葉に至る古墳の薄葬化の流れの中で、この時期に築造が続けられた八十塚古墳群内部での副葬品組成の変遷と石室構造の変化を把握する。
- ・八十塚古墳群岩ヶ平支群の新資料を追加することによって岩ヶ平支群の性格を考察し、他の支群との相互比較の中で本支群の古墳群内部での位置付けを行う。このような検討を行うことで八十塚古墳群の性格を明らかにし、西摂地域における他の群集墳との相互比較を行う。
- ・調査地内各古墳の築造位置や築造順位・規模・副葬品などから、群集墳の被葬者階層の具像を推察する。

2 調査に至る経緯

本研究室が古墳文化の復原に最適な調査・研究のフィールドを探索している最中に、芦屋市所在の八十塚古墳群岩ヶ平支群の一面に住宅の建築計画がもちあがった。

当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である八十塚古墳群の分布範囲内であり、岩ヶ平支群の分布範囲の中心と考えられている地域であることと、現状が山林で自然地形を残していることから、古墳が存在していることが予測された。そこで芦屋市教育委員会は、1993年11月5日・

9日に古墳の存否の確認を目的として、開発事前の分布調査と確認調査を行った。その結果、敷地内には少なくとも5基の横穴式石室墳が存在することが確認された。芦屋市教育委員会は当該地における現状変更を伴う一切の行為に対して、埋蔵文化財の事前調査が必要であると判断した。

当該地の地権者である八千代不動産株式会社は関西大学文学部研究室に当該地の発掘調査を依頼し、当研究室がこれを受けることとなった。この調査の計画に対応するために当研究室内において、八十塚古墳群発掘調査団を編成した。

以上の経緯をもって当該地の発掘調査は、八千代不動産株式会社と芦屋市教育委員会、八十塚古墳群発掘調査団の三者によって協定が結ばれ、八十塚古墳群発掘調査団を調査主体として発掘調査を実施することとなった。

3 調査組織

八十塚古墳群発掘調査団は、当研究室が当調査を実施するにあたって研究室内で編成したものである。その構成は、以下のとおりである。

八十塚古墳群発掘調査団

団 長	網干善教							
発掘調査担当	米田文孝		竹村忠洋					
調 査 参 加 者	上杉彰紀	小野秀幸	大谷宏治	永井正浩	井上主税	太田宏明	深野信之	
	伊藤嘉昭	荒田 恵	落合高晴	海邊博史	佐藤直子	田中里奈	辻 康男	
	沼沢志津	板東明子	上島玲子	鬼頭 彰	萩奈々美	矢田直樹		
調 査 指 導	樺本誠一	大村敬通	奥田哲通	直宮憲一	森岡秀人	西川卓志	合田茂伸	

整理および報告書作成に伴う作業には、上記参加者のほかに以下の者が携わった。

赤塚 亨 阿部泰之 井上宗嗣 大岡まゆみ 渋谷綾子 谷村卓哉
山本かおり 巽 陽介 中里伸明 布谷依子 日置 智 正岡大実 山下大輔
網本裕子 内野 花 川口奈穂子 高島 洋 深谷 淳 荻野亜衣 中野 咲

4 調査の方法および経過

A 調査準備

発掘調査地は雑木林が繁茂し、発掘調査を行うのは現状では困難な状態であった。そこで地権者と芦屋市教育委員会、調査団との三者協議を行った結果、調査に先立ち調査地内の樹木を敷地西隅の一本を残してすべて伐採することとなった。調査団は伐採後から調査に入った。調査は、諸般の準備が整った1994年6月26日より開始し、9月30日に終了した。

B 測量調査

6月26日より、現状における古墳や刻印石等の分布調査と測量調査を開始した。分布調査と併行して、調査前の現状を撮影した。分布調査では、雑木林が伐採されたので微地形を明確に観察することができ、芦屋市教育委員会の分布・確認調査の所見どおり、現状において古墳が5基存在することが推定できた（発掘調査の過程で5基中2基は古墳でないことが判明し、その後、新たに2基の古墳を検出した。結果として、古墳数は変化しなかった）。

現状地形の測量調査では当地点が微地形では尾根筋に立地することから、その尾根筋に合わせる基準線を設定し、その基準線上に基準杭を設定した。基準線は磁北より42度西に振っており、北西-南東方向に5m間隔で設定し、それに直交させた北東-南西方向の5m間隔の基準線を設定した。この二つの基準線を直交させることによって、5m方眼の発掘調査区を設定した。基準線の名称は、北西-南東方向のものを北東からA、B、C・・・ラインとし、北東-南西方向の基準線を北西から1、2、3・・・ラインとした。発掘調査区の名称は、各発掘調査区の北の角にあたる基準線の交点を用いて、2本の基準線名の組み合わせでA1、A2、A3・・・、B1、B2、B3・・・、C1、C2、C3・・・発掘調査区とした。ただし、以後、発掘調査区は、例えば「A1区」のように、「区」と略する。

現状の地形測量は、基準杭を用いて縮尺100分の1の平板測量によって行った。基準高は芦屋市下水道台帳記載のマンホール上面基準高（T.P.85.71m）から水準測量によって導いた。等高線は、現状において墳丘などがより微細に現れるように、12.5cm間隔とした。

C 発掘調査

測量調査は7月19日に終了し、7月20日より発掘調査を開始した。表土掘削に際して、掘削後も旧地形や表土層の堆積状況を確認できるように、10m間隔で基準線を中心にして両側に50cmの幅で、幅1mの畦を残し（1・3・5ライン、A・C・Eライン）、その間の5m間隔には、基準線を中心にして両側に25cmの幅で、幅50cmの畦を残した（2・4ライン、B・Dライン）。つまり、幅1mの畦に囲まれた10m四方の発掘調査区が、十字に交わる50cm幅の畦によって四分分割されている状態となる。これらの畦を残しながら、表土を人力掘削で剥ぎ取っていった。その結果、横穴式石室4基、竪穴系小石室1基を検出した。現状ではいずれの古墳も墳丘盛土の大半が流出しており、石室天井石などは、すでにその多くが取り除かれていた。

検出した各古墳の石室を基準として主軸を推定し、各古墳にその主軸を基準として基準線を設定した。当初の計画では、調査区基準線に沿った畦を土層観察のために残しながら、遺構面まで掘り下げる予定であった。しかし、その畦の存在によって掘り下げが困難になったために、石室検出後それらをすべて除去した。そして、改めて各古墳の石室の主軸に合わせた十字状の土層観察用畦を設定して、遺構面上に堆積した流土を人力掘削により除去した。遺構面上の堆積土は、土層観察用畦において縮尺20分の1で記録した。この作業に併行して、石室内流入土を四分法にしたがって上層より除去した。そして、石室内の流入土堆積状況を観察し縮尺10分

の1で記録した。石室内流入土除去の進行に合わせて、石室内に落下した天井石・崩落石材を除去した。第53号墳と第54号墳の天井石は人力では除去できなかったで、チェーンブロックを用いて除去した。

発掘区全体において古墳時代遺構面を検出した9月1日に各種報道機関に発表を行い、9月2日に各社の新聞に記事が掲載された。9月4日には一般市民を対象とした現地説明会を開催した。

9月7日には、兵庫県教育委員会（檀本誠一氏）・芦屋市教育委員会（山本英明・森岡秀人氏）・調査団（米田文孝）・地権者で各古墳の保存について協議した。その内容は、

・第52・54号墳については、計画建物の設計上、埋没保存できないか

・第55・56号墳については、別の場所に移築保存できないか

というものであった。その結果、第55・56号墳は芦屋市朝日ヶ丘町に所在する朝日ヶ丘集会所敷地内に移築保存されることになったが、他の古墳については保存できないこととなった。

古墳を保存することができなくなった以上、古墳解体調査を実施し、やむを得ず、写真・図面・ビデオカメラなどによる記録保存を行った。墳丘を主軸にしたがって、四分法を用いて掘削し、掘削内裏込め土を取り除き、石室を露出させた。その時点で、墳丘盛土層断面を縮尺20分の1で記録した。石室の検出後は、各記録を行った。そして、石室石材をすべて除去し、石室掘形を完掘した。この際、第55号墳と第56号墳については、移築できるように石室壁面に白色の水性塗料を塗り表裏の区別を明示し、その後、赤色水性塗料によって基準線を割り付けた。各石材には番号を付けて、復元できるようにした上で解体した。

石室掘形の完掘後、各古墳に関する記録作業を終了してから、古墳築造の基盤層である段丘礫層を観察するために、各古墳の主軸に沿って重機によってトレンチを掘削し、土層の観察・記録を行った。9月30日にすべての考古学的記録を済ませ、調査を終了した。同日、全ての器材を撤収し、敷地は現状復旧した。

5 整理作業および報告書作成の経過と方法

【1994年度】

現地調査が終了した10月以降は、関西大学文学部考古学研究室において、図面・写真の整理および持ち帰った石室内流入土の水洗を中心に整理作業を進めた。石室内の流入土の量は、土嚢袋約80袋に達しており、洗浄作業は11月5日まで続いた。その後は鉄釘を中心とする遺物実測および図面整理に重点を置いて、12月末まで行った。

10月から12月は研究室において秋期調査が、また翌年1月から3月までは研究室の冬期調査が行われ、整理作業参加者の大半がその調査に参加したため、整理作業は一時中断した。

【1995年度】

4月以降に整理作業を再開した。4月から6月にかけては報告書の草稿の作成や、今後の整理作業計画の検討に時間を費やした。7月には、類例調査を含めた報告書作成の計画がまとまった。

7月下旬以降は研究室の夏期調査が行われたが、本報告書作成のために一部の学生が研究室

に残り、類例調査や図面の作成を行った。

各古墳の事実報告の文章および図面の作成は、比較的多くの遺構が検出された第54号墳の検討から行った。この際、第54号墳から検出された列石、焼土坑、石室、遺物などの類例調査を行い、調査時に作成した図面に検討を加えた。また、報告書に記載する文章の草稿も同時に作成した。この後、トレース原図を作成した。12月まで、他の古墳についても、同様の方法で整理・検討を進めた。

1996年1月以降は、鉄釘を除く遺物の整理作業に移った。1月から3月にかけては出土した遺物の接合を行った。

【1996年度】

4月以降は遺物の復元作業と併行して遺物実測を行い、7月に作業が終了した。この後、研究室の夏期調査が行われ、作業を10月まで一時中断した。

10月以降はトレースを開始し、この間に遺物の写真撮影も実施した。1997年の3月には、基本的な挿図の版下が完成した。

【1997年度】

4月以降は挿図の版下の確認を行い、修正が必要なものについては再トレースを行った。それと併行して、遺物の補足的な実測を行った。

【1998年度】

4月以降は作成した草稿をもとに、本文の執筆を行い、その後は作成した挿図を含めた編集作業を行った。

【1999年度～2001年度】

編集作業および校正作業を行った。

【執筆分担】

執筆分担は以下のとおりである。

阿部泰之	第2章2-A・B
井上主税	第3章3
太田宏明	第1章4・5 第2章2-D・F 第3章4 引用・参考文献一覧
海邊博史	第1章4・5 第2章2-A・E 第3章2・7-A・C
鬼頭 彰	第2章2-D
竹村忠洋	第1章1・2・3・4・5 第3章1・3・5・6
巽 陽介	引用・参考文献一覧
谷村卓哉	第2章3-B・C
辻 康男	第2章1
中里伸明	第2章2-E 第3章7-B
日置 智	第2章2-C 引用・参考文献一覧
山下大輔	英文目次 英文要旨
山本かおり	第2章3-A
米田文孝	第4章

調査日誌抄

6月26日(日) 天候 快晴
調査前全景の写真撮影を行う。芦屋市教育委員会の確認調査の所見をもとに仮称A～E号墳の5基の古墳を確認する。(発掘調査によって、B号墳およびE号墳は古墳でないことが判明する。A号墳は第52号墳、C号墳は第53号墳、D号墳は第54号墳と改称する。)

6月27日(月) 天候 晴れ
調査前風景の写真撮影を行う。

6月29日(水) 天候 快晴
基準杭を設定する。

6月30日(木) 天候 曇りのち雨
基準杭を設定する。

7月1日(金) 天候 曇り
昨日打った一部の杭に誤差が生じていることが判明したため、杭の位置を再度確認し、打ち直しを行う。

7月2日(土) 天候 快晴
基準杭の位置の確認、打ち直しを行う。

7月4日(月) 天候 晴れ
前日までに打った基準杭の位置を確認する。

7月5日(火) 天候 晴れ
南側道路の基準マンホールの標高を基準杭に移す。

7月6日(水) 天候 晴れ
基準杭の位置を確認しながら、新しい基準杭を追加設定する。

7月7日(木) 天候 曇りのち雨
調査区北半分の平板測量を開始する。本日は、北西隅のA1杭付近を測量する。

7月8日(金) 天候 曇り一時雨
平板測量を行う。

7月9日(土) 天候 曇り時々晴れ
平板測量を行う。

7月11日(月) 天候 晴れ
コンテナハウスの搬入・設置に伴って地形が変更されるドンドン川西岸から平板測量を行う。併行して調査地南側の清掃を進め、夕方に調査前風景の再撮影を行う。

7月12日(火) 天候 快晴
ドンドン川西岸を中心に平板測量を行う。

7月13日(水) 天候 快晴
ドンドン川西岸を中心に平板測量を行う。

7月14日(木) 天候 晴れ
調査地北半分の平板測量を行う。

7月15日(金) 天候 晴れ
午前中に重機を搬入して、コンテナハウス・トイレ・ダンプ進入路の造成を行う。調査区南半分の平板測量を開始する。

7月16日(土) 天候 晴れ
調査区南半分の平板測量を行う。

7月18日(月) 天候 晴れ
本日、電気・電話・トイレが設置される。午後からドンドン川西岸の平板測量を行う。

7月19日(火) 天候 晴れ
午前中、調査器材の搬入を行う。午後から基準杭を追加設定する。

7月20日(水) 天候 晴れ
調査区を設定する。調査区周辺を清掃し、テン



Fig. 1 調査前風景



Fig. 2 調査前風景

ト設置など現場を設営する。4時より現地で慰霊祭を行う。

7月21日(木) 天候 晴れ
調査地周囲のフェンスを補強し、敷地の西側に看板を設置する。

7月22日(金) 天候 晴れ
ドンドン川東岸の平板測量を行う。また、調査区南にある矢穴石の写真撮影を行う。

7月23日(土) 天候 晴れ
ドンドン川東岸の平板測量を行う。

7月25日(月) 天候 曇り
午前中、ドンドン川東岸の平板測量を行う。午後から基準杭を追加する。

7月26日(火) 天候 晴れ午後一時雨
第53号墳の石室側壁を検出する。石室の幅は1.1~1.2mであり、全長5.5m程度の無袖形横穴式石室と推定される。

7月27日(水) 天候 晴れ
ドンドン川東岸の平板測量を行う。第54号墳の石室を検出し、西壁の北半部が倒壊している状況と天井石が築造部に落下している状況を確認する。

7月28日(木) 天候 晴れ
第53号墳の石室を検出し、石室主軸基準線を設定する。試掘第1トレンチ(B4区)および試掘第2トレンチ(C4区)を再掘削し、基本層位を確認する。

7月29日(金) 天候 曇り時々晴れ
第53・54号墳に伴う遺物の取り上げ、主軸の設定を行う。また、昨日に引き続き、試掘トレンチの壁面分層を行う。夕方、第53号墳検出状況の写真撮影を行う。

7月30日(土) 天候 晴れ



Fig. 3 第53号墳 調査前現状

第52・53号墳の清掃を行う。第54号墳石室東壁の検出を行う。

8月1日(月) 天候 晴れ
第53号墳周辺を清掃する。夕方から第53号墳検出状況の写真撮影を行う。

8月2日(火) 天候 晴れ
第52号墳の石室西壁を検出する。第53号墳の石室検出状況の実測準備をする。第54号墳の西壁を検出する。発掘調査区畦の土層断面を実測する。

8月3日(水) 天候 晴れ
A3区の東側を拡張する。第53号墳の主軸を設定する。第54号墳主軸の設定および石室側壁の検出を行う。

8月4日(木) 天候 晴れ
第52号墳の石室側壁を検出し、主軸を設定する。第53号墳の検出状況図を作成する。第54号墳の石室側壁を検出し、石室内流入土の土層断面図を作成する。

8月5日(金) 天候 晴れ
第52号墳の主軸の杭を設定する。第53号墳の検出状況図を作成する。第54号墳の石室内流入土観察用畦の清掃を行った後、石室内土層断面図を作成する。発掘調査区畦の土層断面図を作成する。

8月6日(土) 天候 晴れ
第53号墳の検出状況図を作成する。第54号墳の石室内土層断面図を作成する。本日、第54号墳の石室東壁を確認する。B4区・C4区から第55号墳を新たに検出する。

8月7日(日) 天候 晴れ
第52号墳の清掃を行い、検出状況の写真撮影を行う。第55号墳の主軸を設定する。

8月8日(月) 天候 晴れ
第52号墳の清掃をした後、写真撮影を行う。第



Fig. 4 調査風景

53号墳の石室奥壁を落下した天井石の下から検出する。第54号墳の検出状況を写真撮影するために、清掃を行う。第55号墳の石室側壁を検出する。

8月9日(火) 天候 晴れのち曇り
第52号墳の検出状況の写真撮影を行った後、検出状況の実測を開始する。第53号墳の検出状況図を補足する。第54号墳の清掃を行い、検出状況の写真撮影を行う。

8月10日(水) 天候 晴れ時々曇り
第52号墳の検出状況平面図を作成する。第54号墳の石室内流入土土層と奥壁倒壊状況の写真撮影を行った後、石室検出状況の実測を開始する。第55号墳の清掃後、検出状況の写真撮影を行う。

8月11日(木) 天候 曇り時々雨
第52・53号墳の検出状況平面図を作成する。第54号墳の検出状況平面図を作成する。第55号墳の石室を検出し、検出状況平面図の実測を開始する。B1区から竪穴系小石室である第56号墳を検出する。

8月12日(金) 天候 晴れ時々雨
第52号墳の検出状況平面図を作成する。第53号墳の立面・断面図の作成を完了し、石室内北東区・南西区を掘削する。第54号墳の検出状況平面図を作成する。第56号墳の石室壁体を検出する。発掘調査区畦の土層断面図を作成する。

8月13日(土) 天候 晴れ時々雨
第52号墳の検出状況平面図を作成する。第53号墳の石室床面の検出を行う。第54・55号墳の検出状況平面図を作成する。第56号墳の石室を検出し、夕方、写真撮影を行う。

8月14日(日) 天候 晴れ
第52号墳の検出状況立面・断面図を作成する。第53号墳の前庭部床面を検出する。第54号墳の検出状況平面図を作成する。第55号墳の検出状況平面図を作成する。第56号墳の主軸を設定する。



Fig. 5 第53号墳 天井石除去

8月15日(月) 天候 晴れ
第52号墳の石室検出状況立面・断面図を作成する。第53号墳の石室内流入土・羨道部流入土を分層する。その後、前庭部床面を検出する。第54号墳の東西土層断面図を作成する。第56号墳の検出状況平面図を作成する。

8月16日(火) 天候 晴れ
第52号墳の検出状況立面・断面図を作成する。第53号墳の石室内流入土を分層する。第54・55号墳の検出状況立面・断面図を作成する。第56号墳の検出状況平面図を作成する。

8月17日(水) 天候 晴れ
第52号墳の検出状況立面・断面図を実測する。第53号墳の石室内流入土を分層後、石室内土層断面図を作成する。また、墳丘南東部の掘削を行う。

8月18日(木) 天候 晴れ一時雨
第52号墳の検出状況の再撮影を行う。第53号墳の石室内東西土層断面図を作成する。第54号墳の石室内流入土を除去し、流入土を分層する。第56号墳の検出状況立面・断面図を作成する。

8月19日(金) 天候 晴れ一時雷雨
第52号墳の開口部付近の遺物を取り上げる。併行して石室北東区を掘削する。夕方、墳丘西側の炭化物集中状況の写真撮影を行う。第53号墳の石室北西区流入土を除去する。午後より、天井石をチェーンブロックを使って除去する。第54号墳の南北土層断面図を作成する。また、開口部付近の遺物を取り上げる。第56号墳の検出状況立面・断面図を作成する。発掘調査区畦の土層断面図を作成する。

8月20日(土) 天候 晴れ一時雨
第53号墳の石室北西区と南半部の床面検出を行う。第54号墳の床面検出を行う。第56号墳の石室北東区・南東区を掘削する。発掘調査区畦の土層断面図を作成する。

8月22日(月) 天候 曇り一時雨
第52号墳の南北土層断面図を作成する。併行して石室北西区を掘削する。第53号墳の前庭部を掘削する。第54号墳の床面を検出する。第55号墳の列石を平面実測する。第56号墳の石室内南北・東西土層断面図を作成する。Aラインの土層断面図を作成する。

8月23日(火) 天候 曇り一時雨
第52号墳の石室北半部流入土を除去する。第53号墳の羨道部流入土を除去する。第54号墳の南北土層断面図を作成する。第55号墳の平面図の補足

を行った後、検出状況の立面・断面図を作成する。
第56号墳の北東区・南西区の流入土を除去する。

8月24日(木) 天候 晴れ

第52号墳の東西土層断面図を作成する。第53号墳の前庭部を掘削する。第54号墳の床面検出を行う。夕方、奥壁付近に集中する炭化物の写真撮影を行う。その後、炭化物の試料を採取する。第55号墳の検出状況の立面・断面図を作成する。第56号墳の土層断面図を作成する。

8月25日(木) 天候 晴れ

第52号墳の床面を検出する。第53号墳は開口部西側の土師器片集中部の写真撮影および実測を行う。第54号墳の石室床面の検出を行う。床面から敷石を検出する。第55号墳開口部東側の土器出土状況を撮影し、石室内部を掘削し始める。第56号墳の床面の検出を行う。現地説明会資料に掲載する石室平面プランを略測する。

8月26日(金) 天候 晴れ

第52号墳の石室内流入土の土層断面図を作成する。石室各部より鉄釘や須恵器が出土し、床面を確認する。第53号墳の石室内流入土の土層の分層および実測を行う。第54号墳の西側小流路埋土を除去する。その後、石室内を清掃する。第55号墳の石室北東区・北西区を掘削する。第56号墳は炭化物層上面まで掘削する。

8月27日(土) 天候 晴れ

第52号墳の床面を検出する。第53号墳に伴う出土遺物を取り上げる。第53号墳～第54号墳間小流路の埋土を除去する。第55号墳の石室内流入土層断面図を作成する。第56号墳の床面を検出し、石室内土層断面図を補足する。

8月29日(月) 天候 晴れ

第52号墳の床面を検出し、土層断面図を作成する。墳丘西側小流路埋土を除去する。第53号墳周辺の堆積土を除去する。第54号墳の墳丘東側の堆積土を除去する。第53号墳～第55号墳間の土層断



Fig. 6 第53号墳 検出

断面図を作成する。第55号墳の床面検出を行う。耳環が石室床面から出土する。石室内流入土の土層断面図を作成後、石室内および墳丘の遺物を取り上げる。また、墳丘主軸・中軸の土層断面図を作成する。併行して前庭部西側出土土師器窯の出土状況図を作成する。

8月30日(火) 天候 晴れ一時雨

第52号墳の石室石材の洗浄を行う。西側周溝で長頸壺を検出する。第53号墳の東側・南東側を掘削する。第54号墳北側を掘削する。第55号墳の床面を検出する。

8月31日(水) 天候 晴れ一時雨

第52号墳の墳丘東西土層断面図を作成する。第55号墳の墳丘南北土層断面図を作成する。第56号墳の墳丘東西土層断面図を作成する。

9月1日(木) 天候 晴れ時々曇り

記者発表を行う。第52号墳の墳丘東西土層断面図を作成する。第53号墳の西側の小流路を掘削する。第56号墳の南西区流出土を除去する。第53号墳～第56号墳間の土層断面を実測する。

9月2日(金) 天候 晴れ一時雨

第52号墳の石室床面を検出する。墳丘西側頸部の長頸壺の出土状況を撮影する。夕方、墳丘東西土層断面図を作成する。第54号墳墳丘北側から出土した土師器窯の写真撮影を行う。併行して、墳丘北側流出土・東側流出土を掘削する。第55号墳の石室床面敷石を精査する。午後、A2区付近を掘削する。第53号墳西側の小流路および第52・53・54・55号墳東側の堆積土を除去する。

9月3日(土) 天候 晴れ

第52号墳の石室床面の検出および墳丘東西土層断面図を補足する。第53号墳の石室床面の精査と西側小流路の検出を行う。第54号墳の床面の精査と東・西・北側墳丘流出土の除去を行う。第55号墳の墳丘北側土層断面図を補足する。第56号墳の石室内の東西・南北土層断面図を作成する。第53号墳～第55号墳間の小流路とBラインの土層断面を追加実測する。

9月4日(日) 天候 晴れ一時雨

午前中、現地説明会の準備を行う。現地説明会を2時より開催する。約130名の見学者があった。

9月5日(月) 天候 晴れ

第52号墳の石室内を清掃する。第53号墳の床面を精査する。第54号墳の西側流路を掘削する。第55号墳の石室・前庭部の遺物を取り上げる。発掘調査区の土層断面図を作成する。

9月6日(火) 天候 曇り
午前中、空中撮影準備のために機材などを整頓、調査区および周辺の清掃を行う。空中撮影は12時よりラジコンヘリで行い、1時に終了した。その後、写真撮影用足場から発掘区全景、第54号墳主体部の写真撮影を行う。各古墳全景の写真撮影を行う。

9月7日(水) 天候 曇りのち晴れ
第52・53・55号墳の写真撮影を行う。第53号墳の石室実測を行った後、墳丘の平板測量を行う。第54号墳石室の立面・断面図を作成する。その後、墳丘の平板測量を行う。第55・56号墳床面の平面実測を行う。

9月8日(木) 天候 晴れ一時雨
第52号墳の石室内を清掃した後、奥壁・側壁などの細部の写真撮影を行う。午後、墳丘西側出土の須恵器長頸壺を取り上げる。第53号墳の石室を実測する。併行して床面置土を除去する。後道部付近東側より、直径2cm程度の礫が集中する遺構を検出する。奥壁・側壁などの写真撮影を行う。第54号墳の石室実測を行う。第55号墳石室床面の平面図を作成する。第56号墳の石室実測を行う。調査区の平板測量を行う。

9月9日(金) 天候 晴れ
第52号墳の遺物出土状況の写真撮影を行う。その後、石室床面平面図を作成する。併行して墳丘西側の長頸壺の出土状況立面・断面図を作成する。第53号墳の立面・断面図を作成し、床面を検出する。耳環が石室内より出土する。第54号墳の後道部土器出土状況を実測する。第56号墳の石室実測を行う。調査区の平板測量を行う。

9月10日(土) 天候 快晴
第52号墳の石室床面の遺物出土状況図を作成する。第53号墳の石室立面・断面図および前庭部付近の平面図を作成する。第54号墳の石室内を掘削する。敷石を除去して、床面置土を掘り下げる。夕方、石室完掘状況の写真撮影を行う。第55号墳

の遺物出土状況図を作成する。第56号墳の石室立面・断面図を作成する。調査区の平板測量を行う。

9月11日(日) 天候 曇り時々雨
第52号墳の遺物出土状況立面・断面図を作成する。第53号墳～第55号墳間小流路や、ドンドン川、第53号墳西側小流路、第54号墳石室内細部の写真撮影を行う。

9月12日(月) 天候 晴れ
第52号墳の床面出土遺物を取り上げ、床面を掘り下げる。墳丘平面図の実測準備に取りかかる。第53号墳の石室の平面実測を行い、石室床面を掘り下げる。第54号墳の墳丘周辺の実測図を作成する。第55号墳の石室立面・断面図を作成する。第56号墳の清掃を行う。

9月13日(火) 天候 晴れ
第52号墳の立面・断面図を作成する。併行して墳丘平面図を作成する。第53号墳の石室内遺物出土状況図を作成した後、遺物を取り上げ、基盤層まで掘り下げる。第54号墳の石室平面図および墳丘平面図を作成する。第55号墳の石室平面図および立面・断面図を作成する。第56号墳の写真撮影を行い、その後、石室立面・断面図を作成する。

9月14日(水) 天候 晴れ
第52号墳の石室立面・断面図および墳丘平面図を作成する。第53号墳の石室内遺物を取り上げる。墳丘の東西方向に中軸に沿って断ち割りを行い、基盤層の検討を試みる。夕方、開口部基盤面の礫集中遺構の平面図を作成する。第54号墳の石室床面を掘り下げて基盤層を検出する。第55号墳の石室床面を掘り下げると、下層からもう一面敷石が検出された(第1次面)。

9月15日(木) 天候 晴れ
第52号墳の石室平面図および墳丘平面図を作成する。第53号墳の床面を掘り下げ、基盤層を検出する。石室の遺物出土状況図を補足し、遺物の取り上げを行う。午後、開口部の礫集中遺構を実測



Fig. 7 現地説明会風景



Fig. 8 現地説明会風景

する。墳丘の石室掘形を検出する。第54号墳の床面を掘り下げ、基盤層を検出する。午後、清掃を行った後、列石の写真撮影を行う。第55号墳の床面（第2次面）を掘削する。第56号墳の石室平面図を作成する。

9月16日（金） 天候 雨時々曇り
第53号墳の石室床面を掘削し、床面遺物出土状況図を作成した後、遺物の取り上げを行う。併行して竈集中遺構の平面図および立面図を作成する。第55号墳の石室床面敷石（第2次面）を除去し、第1次面を検出する。発掘調査区の土層断面図を作成する。

9月17日（土） 天候 曇り一時雨
第52号墳の墳丘を掘削する。第53号墳の竈集中遺構の立面・断面図を作成する。午後、南西区石室掘形の検出、石室石材および墳丘を清掃する。第54号墳の石室床面と墳丘を掘削する。第55号墳の清掃を行った後、床面（第1次面）検出状況の写真撮影を行う。墳丘の平板測量を行う。

9月18日（日） 天候 快晴
第52号墳の石室掘形を検出する。床面を断ち割り、土層断面図を作成する。第53号墳の墳丘を掘削する。竈集中遺構の写真撮影を行う。第54号墳の墳丘を断ち割った後、南西区を掘り下げ、写真撮影を行う。墳丘平面図および東側墳丘土器の立面・断面図を作成する。午後から、第54号墳に伴う遺物を取り上げる。第55号墳の石室床面（第1次面）を実測し、写真撮影を行う。第56号墳の石室平面図および立面・断面図を作成する。

9月19日（月） 天候 晴れ時々曇り
第52号墳石室掘形を検出する。墳丘東西土層断面を分離し、実測を行う。第53号墳の墳丘北側土層断面図を作成する。午後から裏込めを実測する。第54号墳の石室掘形の検出および控え込みの実測を行う。夕方、石室掘形の写真撮影を行う。墳丘平面図を作成した後、墳丘北側を断ち切る。夕方、墳丘東側裾部土器群の写真撮影を行う。第55号墳



Fig. 9 第53—55号墳間土層実測

石室を実測する。第56号墳の墳丘平面図を作成する。C1区平面図を作成する。

9月20日（火） 天候 曇りのち晴れ
第52号墳の墳丘東西土層断面図を作成する。第53号墳の石室掘形埋土を掘削する。石室石材控え込みを実測する。第54号墳の墳丘北東部を掘削し、石室掘形を検出する。石室掘形検出後は埋土を除去し、墳丘控え込みを実測する。墳丘北半部の平面図を作成する。第55号墳床面（第1次面）の立面・断面図を作成する。墳丘東側土器群を取り上げる。第56号墳の石室掘形を検出する。石室内の炭化物層を除去すると、敷石が検出された。第54号墳北側周溝付近の平板測量を行う。

9月21日（水） 天候 曇りのち晴れ
第52号墳の墳丘の清掃および写真撮影を行う。墳丘内の竈の平面図を作成する。墳丘東側裾部の土器群出土状況を実測する。第53号墳の墳丘東西土層断面図を作成する。第54号墳の奥壁と土層の関係写真および北側周溝の写真撮影を行う。墳丘北西区を掘削する。石室控え込みを実測する。第55号墳の南西区から墳丘を掘削する。第56号墳の石室敷石を検出する。第54号墳墳丘の平板測量を行う。

9月22日（木） 天候 晴れ
第52号墳の墳丘内竈の平面図を作成する。石室掘形内埋土を除去する。第53号墳の土層断面図を作成する。裏込めの石を実測後、写真撮影を行う。第54号墳の裏込めの石を実測後、除去し石室掘形を完掘する。夕方、石室掘形内出土の土器の写真撮影を行う。第55号墳は、移築するために第1次面に伴う敷石に基準線を割り付けて取り上げる。第56号墳の石室内の炭化物層を除去する。

9月23日（金） 天候 晴れ
第52号墳の墳丘内竈および石室掘形の実測を行った後、除去する。第53号墳竈集中遺構の竈を取り上げる。基底石から2段目の石材と裏込めの石を除去し実測を行う。第54号墳の石室掘形底の土



Fig. 10 第53号墳実測

器出土状況図を作成する。裏込めをすべて除去後、写真撮影を行う。撮影後、石室の基底石以外の石材を除去する。第55号墳の床面を掘削する。併行して墳丘を掘削し、石室掘形の検出を行う。墳丘西側裾部から出土した土師器査を実測する。第56号墳の石室掘形を掘削する。

9月24日(土) 天候 晴れ

第52号墳の石室掘形裏込めの実測図を作成する。第53号墳の基底石を実測する。第54号墳の基底石の写真撮影を行った後、基底石を実測する。実測後、基底石を除去し、清掃を行う。第55号墳の石室掘形埋土を除去する。第56号墳の石室床面平面を実測する。

9月25日(日) 天候 晴れ時々曇り

第52号墳の清掃後、石室および石室掘形完掘状況の写真撮影を行う。第53号墳の石室掘形内石材の平面図を作成する。第54号墳の石室掘形立面・断面図を作成する。石室掘形の写真撮影を行う。前庭部付近で炭化物が集中して検出された。第55号墳の前庭部を掘削する。第56号墳の床面掘削後、石室床面平面を追加実測する。

9月26日(月) 天候 快晴

第52号墳の石室断面図を作成後、2段目の石材を除去する。第53号墳の石室掘形内基盤層中の礎を実測する。基底石の写真撮影を行う。写真撮影終了後、基底石を除去する。第54号墳の石室掘形平面図と立面・断面図を作成する。第55号墳の墳丘土層断面図を作成する。

9月27日(火) 天候 曇り一時雨

第52号墳の基底石と奥壁の写真撮影を行う。基底石の平面図を作成する。第53号墳の石室掘形の完掘状況の写真撮影後、石室掘形の立面・断面図を作成する。第54号墳の石室掘形を半載後、基盤層の土層断面図を作成する。石室掘形の炭化物面を検出し、検出状況図を作成する。第55号墳の石室各部の写真撮影を行う。石室および石室掘形の実測を行い、前庭部の須恵器窯の出土状況を実

測する。第56号墳の石室床面を実測後、石室掘形を完掘する。

9月28日(水) 天候 曇り一時雨

第52号墳の基盤層に含まれる礎を実測する。基底石の立面・断面図を作成した後、石室石材を除去する。石室掘形を完掘した後、写真撮影を行う。石室掘形平面図を作成する。第53号墳の石室掘形の立面・断面図を実測後、半載する。夕方、基盤層の土層断面図を作成する。第54号墳の前庭部土坑の実測を行い写真撮影を行う。撮影後、第54号墳を半載し土層断面図を作成する。第53・54号墳は本日ですべての調査を終了した。第55号墳の石室裏込めと石室掘形を平面実測する。前庭部の土器を取り上げる。移築のための基準線を石室壁体に割り付ける。第56号墳の裏込めの実測を行う。床面の立面・断面図を作成後、床面を除去し石室立面・断面図を追加実測を行う。石室石材を移築できるように壁体に基準線を割り付ける。

9月29日(木) 天候 雨(台風26号接近)

第52号墳の石室掘形の平面図と立面・断面図を作成する。第55号墳の石材を除去する。石室掘形を完掘し、写真撮影を行う。撮影後、石室掘形の平面図と立面・断面図を作成する。実測後、基盤層の土層を観察するために重機で掘削していたところ、前庭部より須恵器・土師器が出土する。第56号墳の石室掘形埋土を除去する。2段目の石材を除去し、基底石の実測を行う。

9月30日(金) 天候 晴れ

第52号墳の石室掘形平面図と立面・断面図を作成後、基盤層を半載し、土層断面図を作成する。第55号墳の石室掘形平面を実測後、基盤層を半載し、土層断面図を作成する。墳丘北西側の土器群を実測した後、写真撮影を行う。第56号墳の石室掘形を完掘し、清掃後、基底石の写真撮影を行う。その後、移築できるように石室の解体準備を進め、石室を解体する。石室掘形完掘状況の写真撮影を行う。夕方、石室掘形の平面図と立面・断面図を作成する。実測後、石室掘形を半載し土層断面図を作成する。

午後からコンテナハウス内の整理を行い、研究室に調査器材や石室内流入土の土嚢袋を運搬する。また、朝日ヶ丘集会所に移築保存する第55・56号墳の石室石材を運搬する。

現地における調査を完了し、現場を撤収する。



Fig. 11 第55号墳実測

第2章 位置と環境

1 地理的環境

八十塚古墳群が所在する兵庫県芦屋市は、六甲山地が市域の半分以上を占めている。基盤岩は砂岩を主とし、砂質頁岩や頁岩の互層からなる古生層と花崗岩で構成されている。本地域に存在する古生層は丹波層群と総称され、北摂山地から丹波山地にかけて広く分布しているが、六甲山地では地盤の隆起に伴いそのほとんどが侵食され、現在、芦屋川と住吉川の間の山地にパッチ状に分布するのみである〔前田1971〕。花崗岩は六甲山地の大部分を構成する六甲花崗岩と、芦屋川以西の山地南縁部にわずかに分布している布引花崗閃緑岩の2種類に分類される。六甲花崗岩は優白色の斜長石と紫色を帯びた淡黄色の石英からなる基地に淡黄色のカリ長石と黒雲母が混じり、結晶粒の大きさから1～3mmの中粒と3mm以上の粗粒のものにと大別できる。布引花崗閃緑岩は一般に中粒質で、灰色の長石や石英と黒ないし暗緑色の黒雲母や角閃石がごま塩状に混じり、しばしば有色鉱物が濃集した、直径が数cmから20cm大の黒色の団塊状捕獲岩を含む特徴をもつ〔藤田1989〕。

花崗岩の割れ目の間隔は、山地内において一定ではなく地域性が認められる。岩石の割れ目の大きさは、大割れ（1m以上）、中割れ（1m～30cm）、小割れ（30cm以下）の3地域に区分することが可能である。このような地域差はそのまま山地地形とも対応し、それぞれに異なった自然景観を生み出している。大割れ地域には、丸みのある岩肌をもち、巨大な岩塊群が散在するロックガーデンのパットランドや、ゴロゴロ岳、荒地山などの六甲山地の南東部が、小割れ地域には、尖塔状の岩肌が続く蓬莱峽や煙ヶ峰などの山地北東部があげられる。中割れ地域

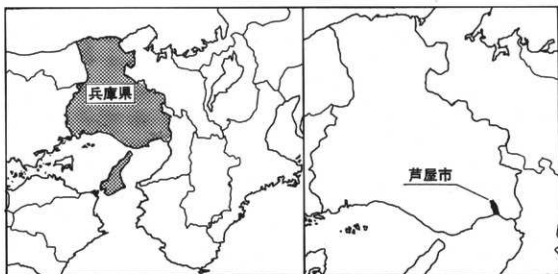


Fig. 12 芦屋市の位置

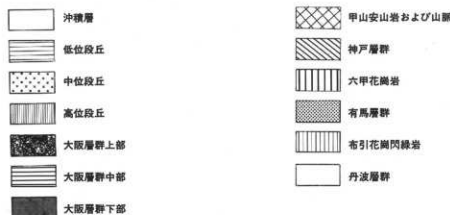


Fig. 14 地質図凡例

は両者の中間部から西方にかけての摩耶山や六甲主稜部付近で、植生の密度が高く、岩肌露出も少なく、全体的に平坦な地形を示すのが特徴である（池田1996）。

本地域の花崗岩は深層風化を受けて、いわゆる「真砂」と呼ばれる風化層が厚く形成されている。この風化層は侵食を受けやすく、下流部への土砂供給を活発なものとしている。このような風化の進んだ花崗岩山地では豪雨時などに大きな土砂災害をもたらすことがあり、芦屋市域でも斜面崩壊や土石流の被害を幾度となく被ってきた。明治時代以降においては、1896年・1938年・1968年の3度にわたり大規模な土砂災害が発生した。このときの被害は芦屋市域だけにとどまらず阪神間全域に広がったもので、山地から流れ出た土石流が山麓の住宅などを押し流し、さらに河川の氾濫による浸水などで、多くの死者・行方不明者を出した。

六甲山地はその南北両側に活断層を有する地塊山地であり、山地南斜面側にあたる芦屋市域では五助橋断層・芦屋断層・甲陽断層などが存在している。これらは、ほぼ平行に北東から南西に走る逆断層で、山地は平野部に一番近い甲陽断層から山頂部に向けて階段状に高度を増していく。六甲山地は、比良山地、生駒山地、鈴鹿山地と同様に、第四紀、特に中期更新世以降に顕著となった急速な断層運動によって形成されてきた。この運動は「六甲変動」と呼ばれ、現在、近畿地方中部でみられる地形の基本部分を形成した構造運動である。六甲変動によって隆起した山地に共通してみられる特徴は、山腹が急傾斜となすのに対し、山頂部は侵食小起伏面と呼ばれる、第三紀以前の安定した時代に形成された平坦面が広がっていることである。六甲山地においては標高800～900mの六甲山地頂部と標高400～500mのゴロゴロ岳から荒地山付近に至る2つの侵食小起伏面が存在している。これらはかつて同一面であったものが、五助橋断層の運動によって別々の面に分離し、約300mの高度差が生じたものと考えられている（前田1971）。

六甲山地と沖積低地の間の山麓部には、丘陵を構成する大阪層群と、台地を形成する段丘構成層が存在している。これらは断層によって激しい変位を受け、その層序は複雑なものである。鮮新世末から更新世中期にかけて堆積した大阪層群は、砂礫層と粘土層の互層で構成されている。大阪層群中の粘土層は、その堆積環境から海成、非海成の2種類に分類され、前者は上半部に発達するのに対し、後者は下半部に顕著である。海成粘土層はMa記号で現され、大阪層群中ではMa-1からMa 10までの全部で12枚の海成粘土層が存在している。地層中には30枚以

上の火山灰層がはさまれていて、いずれも広範囲にわたって連続し、これらを鍵層として層順の決定が行われてきた。なかでも Ma 3 粘土層中にはさまれる「あずき火山灰」は他の火山灰層と比べて特徴的で識別が容易であり、頻繁に鍵層として利用されてきたため、一般的にこれを境として大阪層群を「大阪層群下部」と「大阪層群上部」に区分している〔藤田1989〕。

本地域では甲陽新層より北側では大阪層群下部が、南側では大阪層群上部が分布している。大阪層群下部は段丘構成層に広く覆われ、六麓荘町から朝日ヶ丘町、山手町、三条町にかけての谷壁斜面に露出しているに過ぎない。また、奥池の北側芦屋ゴルフ場付近の山地にも飛び地状に分布している。大阪層群上部は宮川より東の翠ヶ丘町から楠町、春日町、打出小鵜町付近に分布している〔前田1971〕。

阪急電鉄神戸線より北側では、段丘構成層が広く分布している。段丘構成層はその形成年代から、高位段丘、中段段丘、低位段丘の3つの段丘面に区分される。それぞれの年代は高位段丘が更新世中期末、中段段丘が更新世中期末～更新世後期、低位段丘は更新世後期～末期とされている〔前田1971〕。段丘は古い年代のものほど標高の高い位置にあり、高位段丘は、標高90～165m付近の奥池北側付近や芦屋川上流の蛇谷周辺、芦屋川の谷口にあたる山手町から東芦屋町や東山町にかけて分布する。中段段丘は標高75～85m付近の奥池の西側付近や六麓荘町から翠ヶ丘町付近に、低位段丘は標高70m以下の芦屋川沿いの山手町の一部や三条南町から翠ヶ丘町付近にかけて分布している〔前田1971〕。

今回、調査を行った岩ヶ平支群第52号墳から第56号墳は、中段段丘と推察される地形面上に立地している。機械掘削による下層確認の際、確認できた礫層は中段段丘に相当するものと思われる。

山麓から海岸にかけての沖積低地は、その大部分が完新世に形成されてきた。芦屋市域では海岸部にはデルタがほとんど発達せず、芦屋川や宮川が形成した扇状地が沖積低地を広く覆っている。芦屋川扇状地は扇形の形態を示さず、海岸部へ舌状に張り出していることが特徴としてあげられる〔前田1971〕。芦屋川と宮川はともに人間によって流路の固定化が行われたため、天井川化している。海岸付近には縄文海進とその後の海退によって形成されたと推定される、数列の砂州ないし浜堤が形成されている。宮川より東の地域では、阪神電鉄本線と国道二号線の間と、打出町付近の海岸との2ヶ所に東西にのびる明瞭な砂州・浜堤があり、その背後は後背湿地が存在している。これらの地形条件の違いは現在の土地利用にも明確な差となって現れており、微高地である砂州・浜堤上には集落や主要な交通路である阪神電鉄本線や西国街道が通る一方、後背湿地は水田やハス田など耕地に利用されてきた〔高橋1987〕。近年、沖積低地や丘陵、台地上においては都市化の進行が著しい。大規模な地形の改変を被った場所も多く、旧地形の復元や地形形成の考察は現地においては非常に困難なものとなってきている。

2 歴史的環境

A 旧石器時代

西摂地域の新石器時代の遺跡は主として六甲山南麓部・伊丹台地・三田盆地等の低位、中位段丘上に立地しており、立地点の標高は25～60mあたりに集中している〔森岡・村川1996〕。

最古の新石器時代の遺跡に関しては、西摂平野を含めて近畿地方全般にわたり議論が行われており未解決の問題を多く残している。特に前期新石器時代の遺構・遺物の存在に対する議論は活発であり、具体的には戦前に直良信夫氏によって採集された角岩製の石器と呼ばれるものが前期新石器時代の遺物であるかどうかについての議論がある〔芹沢1970, 春成1984〕。

西摂平野およびその周辺部で新石器時代の遺跡の存在が確実視されているのは、後期新石器時代からである。兵庫県春日町・七日市遺跡からは約2万2000～2万1000年前に降下したと考えられている〔町田・新井1976〕。始良 Tn 火山灰下のシルト層から3ヶ所の礫群と20ヶ所以上の遺物集中部が検出されている〔藤田1985〕。兵庫県西紀町・板井・寺ヶ谷遺跡では始良 Tn 火山灰をはさんだ上下の土層からそれぞれ様相の異なる石器群が検出されている〔山口1985〕。西摂地域内部における当該時期の遺跡は六甲山系で神戸市・滝ノ奥遺跡、芦屋市・打出小槌遺跡、朝日ヶ丘遺跡、岩ヶ平遺跡、老松町遺跡、伊丹台地では川西市・加茂遺跡、三田盆地では三田市・溝口遺跡がある。

滝ノ奥遺跡は標高150mの尾根上に立地しておりナイフ形石器が1点出土している〔黒田・阿部1994〕。打出小槌遺跡は、台地上に立地しており、国府型のナイフ形石器が1点出土している。この石器は全長5.15cm・幅1.50cm・厚さ0.55cmを測り、後期新石器時代のもものと推定されている。当該地域でナイフ形石器が発掘調査によって確認されたのは本例がはじめてである〔森岡・白谷¹⁾1993〕。朝日ヶ丘遺跡は、標高50mの洪積台地上に立地しており、1964年2月に道路工事中に見えられ、芦屋市教育委員会によって緊急調査が行われた。その後、1973年2月に芦屋市教育委員会によって行われた再調査により、刃器・彫器・尖頭器・石核等の遺物が出土した〔村川1966a, 藤井1976, 森岡1979b〕。岩ヶ平遺跡は、標高60～110mの丘陵上に立地しており、1929年に国府型ナイフ形石器が採集されている〔藤井1976〕。老松町遺跡は標高100mの尾根上に立地しており、八十塚古墳群の構成墳である老松1号墳から国府型ナイフ形石器が1点出土している〔森岡・丹治1985〕。

加茂遺跡は標高44mの洪積台地上に立地している。地元の宮川雄逸氏が開設した宮川石器館には当該遺跡採集のナイフ形石器2点が現存しており、また富田好久氏もナイフ形石器1点を採集している〔横田1968, 森岡・村川1996〕。溝口遺跡は標高200mの丘陵上に立地している。当該遺跡は溝口城の試掘に伴い発見された。遺跡は数カ所のブロックから構成されており、ナイフ形石器を含む1121点の石器が出土した〔山下・南1986〕。

以上のように西摂地域の旧石器時代研究は先進的とは言えないものの〔森岡・村川1996〕、資料は徐々に蓄積されつつある。



Fig. 15 八十塚古墳群 周辺遺跡分布図

B 縄文時代

西摂地域における縄文時代の遺跡は早期に通るものがあるが、草創期の遺跡は発見されていない。縄文早期の近畿地方は押型文土器の分布圏にあり、大川式、神宮寺式、黄島式、高山寺式と変遷する〔泉1996〕。この時期の遺跡は神戸市・境川遺跡、宇治川南遺跡、西岡本遺跡、岡本北遺跡、都賀遺跡、滝ノ奥遺跡、郡家遺跡、本山遺跡、芦屋市・月若遺跡、山芦屋遺跡等がある。

最古のものは山芦屋遺跡である。当該遺跡は標高75～95mの眺望のすぐれた高台上にあり、黄島式を特徴づける文様である押型文水平施文が施された縄文土器片が出土している。また、山形押型文土器と楕円形押型文が層位的に分離できることが確認されている。土器以外では石鏃・石匙・楔形石器・剥片・石核等の石器類も出土した。石匙については、類例の非常に少ない二頭石匙が含まれる〔網干・米田・山口1985〕。宇治川南遺跡は、標高8m付近の宇治川氾濫原に位置し、楕円文が施された早期の押型文土器が出土しており、他にわずかながら、綾杉文を有する土器片も確認されている〔喜谷1989〕。滝ノ奥遺跡は標高140mの六甲山南麓の丘陵上に位置する。山形押型文および異形押型文土器が出土している。この他に、有茎尖頭器1点を始め、サヌカイトやチャートの剥片・細片が出土している〔黒田・阿部1994〕。西岡本遺跡は、住吉川左岸の標高80mの丘陵上に位置している。楕円押型文土器が出土しており、遺存状況のよい早期の住居跡が2棟検出されている〔浅岡1989〕。また、隣接する岡本北遺跡からは、山形押型文土器が出土している〔浅岡1992〕。

縄文前期になると、近畿地方を中核とする北白川下層式が成立する。北白川下層式は爪形文を基本とし、早期の押型文の土器群とは断絶が認められる。北白川下層式はⅠ～Ⅲ式に細分されており〔鎌木1959〕、条痕調整に爪形文の施文、爪形文と縄文の併用、縄文地に特殊突帯文の施文がそれぞれの特徴とされている。またその後の研究では、羽島下層Ⅰ式が北白川下層式の成立型式として設定され、さらに細分化が進んでいる〔網谷1981〕。

西摂地域ではこの時期の遺跡として、神戸市・雲井遺跡、本庄町遺跡、芦屋市・朝日ヶ丘遺跡、山芦屋遺跡、月若遺跡等がある。山芦屋遺跡は早期から継続しており、羽島下層Ⅱ式、北白川下層Ⅰ式、北白川下層Ⅱ式が出土している。朝日ヶ丘遺跡はこの時期に出現する。朝日ヶ丘遺跡は標高50m前後の洪積台地上に位置し、羽島下層Ⅱ式、北白川下層Ⅱ式、彦崎Ⅱ式が出土している。また、石器類では石鏃・尖頭器・石匙・ナイフ形石器・石核等が出土した。これらには黒曜石製のものもみられ、他地域との交流が想定されている〔山中・森岡・和田・関野1988〕。雲井遺跡は旧生田川の扇状地末端に位置し、屋外炉4基・集石遺構1基が検出され、羽島下層Ⅱ式土器が出土している。石器では石鏃、異形石器、磨製石斧、打製石斧、スクレイパー等が出土している。〔丹治1991〕。

縄文中期では、前半には瀬戸内地域に分布の中心がある船元式が分布しており、中期末には関東・中部地方の加曾利Ⅴ式の影響を強く受けた北白川Ⅲ式が成立する。近畿地方では、前期以来瀬戸内地域と同一の土器分布をとっていたが、北白川Ⅲ式の成立により、これが崩壊する〔泉1996〕。

西摂地域では、この時期の遺跡として神戸市・垂水日向遺跡、宇治川南遺跡、上津遺跡、篠原遺跡、雲井遺跡、本山遺跡、芦屋市・月若遺跡、伊丹市・大阪空港A遺跡等がある。宇治川南遺跡において前葉の船元Ⅰ式・中葉の船元Ⅲ式・後葉の里木Ⅱ式土器といった、瀬戸内を中心として大阪湾周辺に広く分布する土器が後期に至るまで多く出土している〔丹治・池野1986、喜谷1989〕。篠原遺跡では中期から晩期にわたる竪穴住居・土坑・土器溜・礫溜等が検出されており、また、同市所在の雲井遺跡においても、中期には瀬戸内系の船元式土器が出土している〔定森1984〕。月若遺跡では北白川C式が多量に出土しており〔森岡・村川1996〕、山芦屋遺跡では北白川C式期の竪穴住居が検出されている〔森岡・村川1996〕。

後期になると再び、九州東部から近畿地方にかけて類似した土器が分布するようになる〔泉1981〕。後期初頭の中津式では磨消縄文の施文が確立する。初頭の中津式・福田Ⅱ式は瀬戸内中部が分布圏の中心をなしており、前葉の北白川上層式は近畿地方に起源をもち〔泉1981〕、これ以降は一乗寺K式、元住吉Ⅰ式、元住吉Ⅱ式、宮滝式まで比較的連続した変遷を示す〔泉1996〕。

西摂地域ではこの時期に宝塚市域を除く全域で遺跡が発見されており、生活空間が拡大していったことが窺える〔森岡・村川1996〕。この時期の遺跡としては神戸市・垂水日向遺跡、印路遺跡、宇治川南遺跡、堅田遺跡、雲井遺跡、篠原遺跡、芦屋市・月若遺跡、山芦屋遺跡、芦屋鹿寺遺跡、伊丹市・大阪空港A遺跡、大阪空港B遺跡、小花遺跡、川西市・加茂遺跡等がある。宇治川南遺跡では中津式、福田Ⅱ式、北白川上層式、宮滝式が出土しているが、東日本から搬入されたと推定される土器も含まれ、当該期における交流範囲を示唆している〔丹治・池野1986、喜谷1989〕。雲井遺跡では北白川上層式土器が出土している〔丹治1991〕。加茂遺跡では、第44次調査で遺跡西部より後期の縄文土器を含む土坑やピットが検出されている〔岡野・祭本1988〕。篠原遺跡では北白川上層式が出土しており、東北北陸系の注口土器や遮光器土偶が出土している〔多淵1983〕。

晩期になると、文様が簡素化される。晩期の土器は滋賀里式、口酒井式、船橋式、長原式と変遷する。当該地域におけるこの時期の遺跡は海岸平野部に多く分布し、弥生時代前期の遺跡と重複するものが多い〔森岡・村川1996〕。

西摂地域における、この時期の遺跡は神戸市・宇治川南遺跡、上津遺跡、五番町遺跡、雲井遺跡、篠原南遺跡、篠原遺跡、三番町遺跡、本山遺跡、本庄町遺跡、尼崎市・上島遺跡、瀬川河床遺跡、猪名川河床遺跡、口酒井遺跡、田能遺跡、川西市・加茂遺跡、栄根遺跡等がある。宇治川南遺跡では、滋賀里Ⅱ～Ⅲ式土器が出土した。土器には在地産と考えられるものに加え、河内系や播磨系と推定されるものも出土している。その他、大分県姫島産黒曜石や大洞系統の土器も伴出しており、活発な交流を伺い知ることができる〔丹治・池野1986〕。篠原A遺跡では船橋式が出土しており、これらに混じって弥生時代前期の土器が出土した〔定森1984〕。篠原B遺跡では滋賀里式が出土しており、この時期の甕棺が9基、集石遺構が1ヶ所検出されている。また、遺物では大洞式土器が出土している〔多淵1983〕。東北系土器分布の西限として当該遺跡は宇治川南遺跡とともに重要な遺跡である。雲井遺跡においては、終末期の突帯文土器が出土している〔丹治1991〕。加茂遺跡では、晩期の深鉢形土器の落ち込んだ土坑が検出され、後期の遺構とともに、当該遺跡の近辺に小規模の集落が営まれていた可能性が指摘されている

〔岡野・祭本 1988〕。口酒井遺跡は猪名川左岸の自然堤防上に位置しており、口酒井式の標識遺跡となっている。当該遺跡では刃痕をもつ突帯文土器が出土している。さらに、石包丁も突帯文土器と伴出しており、突帯文土器と炭化米が同一土坑から出土する等、水稻農耕の痕跡がみられる〔南 1988, 浅岡 1988, 森岡・村川 1996〕。大開遺跡は標高 2～3 m の沖積平野に立地する。当該遺跡は近畿地方最古の環壕集落であるが、弥生土器と縄文晩期の土器が伴出しており、破砕された石棒が出土している。これによって、縄文時代の終焉と新たな水稻農耕文化の到来を伺い知ることができる。

C 弥生時代

西摂地域における弥生時代の遺跡の分布をみると、瀬戸内海ルートを通して伝播した弥生文化は、東西に細長い平地部のうち、南北に流れる水系ごとに定着し、多くは海岸に近い低湿地、河口、河川沿いの微高地に集落を形成したようである。

西摂地域の弥生時代の遺跡を時期を追って概観すると、前期では神戸市・大開遺跡、楠・荒田町遺跡、雲井遺跡、篠原遺跡、本山遺跡、北青木遺跡、本庄町遺跡、芦屋市・寺田遺跡、業平遺跡、西宮市・越水山遺跡、甲風園遺跡、尼崎市・東武庫遺跡、上ノ島遺跡、田能遺跡、川西市・下加茂遺跡等があげられる。

まず、前期の大開遺跡では、直径約 40 m の環壕、それを拡張した長径約 70 m、短径約 40 m の環壕が検出された。環壕の断面は概ね V 字形を呈する。そこからは生駒西麓産土器を含む前期前半の土器が出土している。また、前期の銅鋳造滓が出土しており、小規模な小物銅製品の熔解作業が行われていたと推定される〔前田 1993〕。本山遺跡では、多数の流路が検出されている。17 次調査で検出された前期前半の流路の最下層から、前期初頭の壺・甕や縄文時代晩期の土器とともに、斧柄・鋤・鍬・泥除け・臼等の木製品とその未製品、加工材が多数出土した。18 次調査では、前期の掘立柱建物跡（1 間×2 間）、中期の掘立柱建物跡（2 間×3 間）、水田跡が検出された。遺物では、生駒西麓産の胎土をもつ土器等が出土し他地域との交流の跡が認められる〔原 1984, 安田 1998〕。北青木遺跡は、六甲山地から供給された土砂によって形成された砂堆と砂堆の間の後背湿地に立地する。木杭列、砂堆から旧河道への落ち際に、転用材や自然木を杭で留めた護岸遺構やピット群が検出された。遺物では、鋤や鍬等の木製農具、石鍬・石錐・楔形石器等の石器が前期前半の土器と共に出土し、この地域における最古の弥生集落であることが判明した〔小川 1986〕。本庄町遺跡では、前期末の水田遺構が 14 面検出され、規則的配列をもつ人の足跡も検出された〔原田 1985〕。東武庫遺跡では、前期前半から中期初頭にかけての方形周溝墓群が検出された。方形周溝墓は 22 基検出されたが、古い段階の方形周溝墓（20 号墓）は全国でも最古の方形周溝墓に位置付けられる。方形周溝墓群は大きく 4 段階の過程を経て形成されたと考えられている。2 号墓の主体部の木棺跡からは、赤漆塗り結歯式堅櫛が出土した〔山田 1995〕。

中期になると低湿地の集落の多くは廃絶し、標高 10 m～30 m の扇状地から洪積台地上に新たに多くの集落や周溝墓群が形成される。この時期の遺跡としては神戸市・雲井遺跡、森北町遺跡、住吉宮町遺跡、西宮市・仁川高台遺跡、川西市・下加茂遺跡、栄根遺跡等があげられる。

また各小地域に拠点的大集落が出現し、その例としては、先にあげた本山遺跡、楠・荒田町遺跡、田能遺跡のほかに、尼崎市武庫庄遺跡、川西市加茂遺跡等があげられる。

本山遺跡では、搬入土器の量により中期以降、中河内地方より紀伊地方との交流が盛んになったことが窺える〔原₁₉₈₄〕。楠・荒田町遺跡、武庫庄遺跡、加茂遺跡では、大型掘立柱建物が出検された。楠・荒田町遺跡の例では、梁間2間(3.8m)、桁行8間(8.5m)で独立棟持柱をもつ〔黒田・阿部1995〕。武庫庄遺跡の例では、梁間1間(8.6m)、桁行4間(10m)以上の独立棟持柱・屋内持柱をもつ〔半澤・三輪1997〕。加茂遺跡は、伊丹台地上に位置し、5重の環壕と土塁を巡らす、最大規模東西約700m、南北約300mを有する大集落遺跡である。大型掘立柱建物は、居住域の中心的位置に南北3条、東西2条の溝による方形区画内で検出された〔岡野₁₉₉₄〕。この溝には厚さ約5cm、幅約30cmの板を垂直に並べた痕跡があり、南北2条、東西1条の塀板になる可能性がある。大型掘立柱建物の柱穴は、直径0.7m～1m、深さ0.4m～0.65mを測り、3.5m～4.5m間隔で5個並び、その中間に直径0.35mを測る小型の柱穴がある。建物は1間×3間以上の大型のものになる〔村尾₁₉₉₅〕。

中期には六甲山系において、神戸市・伯母山遺跡、保久良神社遺跡、芦屋市・城山遺跡、会下山遺跡、西宮市から宝塚市にわたる仁川五ヶ山遺跡等の高地性集落が出現する。また、中期後半には神戸市・布引丸山遺跡、荒神山遺跡等が現れる。

会下山遺跡では、長さ200m、幅約15mの尾根上に堅穴住居7棟、掘立柱建物1棟、祭祀場跡2ヶ所、土壌基4基、焼土坑3基等多数の遺構が検出されている。当遺跡の出土土器の4分の3が後期のものであることから、この時期に盛行したと考えられる。他に石鏃・石剣・石錐・石弾等豊富な石器、鉄ノミ・ヤリガンナ・鉄斧・鉄鏃・釣針・釘・鉄金具等の鉄器が出土した。また、中期後半以降伝播してきた大陸系・九州系文化の遺物である漢式三翼鏃が出土している〔村川・石野・森岡₁₉₈₅〕。

後期になると、先にあげた拠点的大集落は解体していく。後期の主要な遺跡としては、神戸市・熊内遺跡、篠原遺跡、住吉宮町遺跡、岡本北町遺跡、本山北遺跡、深江北町遺跡、芦屋市・三条岡山遺跡、三条九ノ坪遺跡、寺田遺跡、芦屋庵寺遺跡、冠遺跡、月若遺跡、打出岸造り遺跡等がある。深江北町遺跡・郡家遺跡等では円形周溝墓が多数検出された。特に深江北町遺跡の円形周溝墓群は、墓壇主軸と周溝陸橋部主軸がほぼ直交するが、埋葬頭位には規則性は認められず、前方後円墳との主軸概念において、共通点と相違点が認められる〔山下₁₉₈₈〕。

西摂地域は青銅器の出土例の多い地域であるが、特に銅鐸の出土例が目立つ。神戸市桜ヶ丘遺跡では、流水文銅鐸3個・契捺文銅鐸11個・大阪湾型銅戈7本が一括埋納されていた。そのうち、4号・5号銅鐸には人物や動物が描かれている〔武藤・三木・赤松・村川・石野₁₉₇₂〕。他にも、神戸市・渦ヶ森遺跡、本山遺跡、生駒・森遺跡、芦屋市堂ノ上、西宮市津門、宝塚市中山荘園、川西市栄根から銅鐸が出土している。他には保久良神社遺跡で大阪湾型銅戈が〔石野1967〕、森北町遺跡では重圓銘帯鏡が出土している〔西岡₁₉₈₇〕。

D 古墳時代

古墳時代の西摂地域は、前方後円(方)墳や大型円墳の分布等から6つの地域に区分されて

いる〔森岡・藤田1984〕。6つの地域とは神戸市東部、芦屋市、武庫川右岸、武庫川左岸、長尾山丘陵、猪名川右岸である。またこれらの地域の他に、神戸市中央部にも前方後円墳の分布が見られる。

これらの地域の中で、最も早く古墳の造営が開始されるのは神戸市東部である。神戸市東部では、4世紀初頭に西求女塚古墳が築造される。西求女塚古墳は、1993年に神戸市教育委員会が発掘調査を行った。その結果、舶載の三角縁神獣鏡7面を含む12面の銅鏡をはじめとする豊富な副葬品が出土した〔安田■1995〕。また、墳頂部からは山陰系の土器群が出土した。神戸市東部ではこの後、ヘボソ塚古墳、処女塚古墳、東求女塚古墳と4世紀を通じて首長墓と考えられる大型古墳の築造が続く。ヘボソ塚古墳は前方後円墳であり、四面の舶載鏡を含む六面の銅鏡が出土している〔梅原1925〕。処女塚古墳は前方後円墳であり、墳丘盛土からは山陰系の壺形土器片や甎形器台の破片が検出されている〔千種1985〕。埋葬施設については不明である。東求女塚古墳は前方後円墳であり、前方部・後円部ともに埋葬施設が存在する。後円部の埋葬施設からは多数の中国鏡が出土している〔渡辺1985〕。

神戸市中央部では、東部にやや遅れて、夢野丸山古墳、会下山二本松古墳、得能山古墳が丘陵部に築造される。4世紀末葉には現存はしないものの、旧刈藻川河口付近に念仏寺山古墳が存在したとされる。念仏寺山古墳は全長190m程度に復元されており〔喜谷1989〕、六甲山南麓全体を統括する首長の登場と位置づけられている〔森田1995〕。他の3基の古墳は前方後円墳であり、埋葬施設はすべて竪穴式石室である。これらは在地性の強い首長墓として評価されている〔森岡1990〕。

4世紀後半以降になると、この2地域以外でも50m級の前方後円墳が各地域に点在するようになり、武庫川左岸に水堂古墳が、長尾山丘陵に万籬山古墳が猪名川右岸に池田山古墳がそれぞれ築造されている。水堂古墳は全長60mの前方後円墳である。埋葬施設は粘土槨であり、多くの鉄製品が出土している〔村川1967〕。万籬山古墳は全長54mの前方後円墳であり、埋葬施設は竪穴式石室である〔梅原■1937、直宮・笠間■1975〕。長尾山古墳は全長36mの前方後円墳であり埋葬施設は粘土槨と考えられている〔榎本■1971〕。

この時期の集落は弥生時代後期後半から引き続くものが多くみられ神戸市・郡家遺跡をはじめとして、神戸市・岡本遺跡、森北町遺跡、芦屋市・寺田遺跡、三条九ノ坪遺跡、芦屋廃寺遺跡、月若遺跡、川西市・栄根遺跡が存在している。住吉宮町遺跡では竪穴住居、木棺墓、土壇墓等様々な遺構が検出されている〔丸山■1990b〕。森北町遺跡では多くの搬入土器が出土している〔丹治・須藤1992〕。

5世紀に入ると、古墳の規模は急激に縮小化する。5世紀は首長墓が縮小し、それまでの前方後円墳から帆立貝式古墳に変わることは全国的に見られる現象である。小野山節氏は、王権が強化される5世紀には地域首長墓が規制を受け、前方後円墳から帆立貝式古墳に変わることを指摘した〔小野山1970〕。これに対し、都出比呂志氏は5世紀の大王権力が特定の盟主的首長を介して、その配下の首長系譜を支配下においた結果、前方後円墳を築くことができるのが一部の首長に限られることを述べた〔都出1988〕。また、和田晴吾氏も南山城地域の分析から都出氏と同様の結論に達している〔和田1994〕。

当該地域においても、この時期は首長墳と考えられている古墳は帆立貝式古墳が多く、前方

後円墳の築造を続ける地域は猪名川右岸に限られる。この地域では前期の池田山古墳以降、前方後円墳の築造が続き、伊居太古墳、御願塚古墳、御園古墳が5世紀を通じて築造されている。特に伊居太古墳は全長92mの西摂地方最大規模の前方後円墳である〔村川¹⁾1980〕。他の地域において首長墳と考えられているのは主に帆立貝式古墳であり、神戸市西部に脇浜天王塚古墳が芦屋地域に金津山古墳等が存在する。また、1986年の調査で確認された打出小槌古墳は当初、金津山古墳に続く時期の前方後円墳と考えられていたが、その後一辺が36m程度の方墳と考えられるようになっている〔森岡・白谷²⁾1993〕。

この時期の集落は森北町遺跡、月若遺跡、栄根遺跡等が前期から断続的に営まれる。中期前半には神戸市・日暮遺跡、郡家遺跡が出現し、中期末から後期初頭にかけては神戸市・生田遺跡、松野遺跡、神楽遺跡、芦屋市・寺田遺跡、尼崎市・若王子遺跡等多くの集落が出現する。この時期には大規模な集落の再編が行われたものと考えられる。生田遺跡〔丸山³⁾1990〕、寺田遺跡〔堀江田・重藤・森岡・竹村⁴⁾1998〕では、西摂地域における初現期の竈が検出されている。

6世紀に入ると、猪名川右岸や前期以来大型古墳の築造が低調であった武庫川右岸に前方後円墳が継続的に築造される。これらの古墳は後に築造が開始される後期群集墳との位置関係から、本地域における後期群集墳の出現に大きく関与していたことが想定されている〔森岡⁵⁾1984〕。

猪名川右岸では中期の御園古墳に続き、尼崎市・園田大塚山古墳が築造されている。園田大塚山古墳は全長45mの前方後円墳である。埋葬施設は後円部に南北2基が存在する。南主体部は木炭層であり、馬具を含む豊富な鉄製品が出土した。北側の主体部からは鏡や玉類等の遺物が出土した〔梅原・小林⁶⁾1941〕。

武庫川右岸では、西宮市・津門稻荷山古墳、津門大塚古墳、上ヶ原車塚古墳が6世紀前半にわたり築造される。これらは前方後円墳と考えられているが、現存していない〔紅野⁷⁾1940〕。津門稻荷山古墳は近接地から6世紀初頭の円筒埴輪が出土しており、築造時期が推定されている。津門大塚古墳、上ヶ原車塚古墳はともに横穴式石室を主体部としており、6世紀前半から中葉にかけて築造されたものと考えられている〔森岡・藤田⁸⁾1984〕。この時期には古式群集墳が出現する。当該地域の古式群集墳は平野部に近い扇状地上の緩斜面に立地しており、現在までに住吉宮町古墳群、野寄古墳群が確認されている。住吉宮町古墳群は坊ヶ塚古墳、住吉東古墳の中規模古墳を包括する大規模な群集墳である〔丸山⁹⁾1990b〕。

6世紀後半には前方後円墳は築造されなくなる。この時期の首長墓は単独で立地する円墳もしくは方墳と考えられており、上ヶ原台地縁辺に立地する西宮市・門戸天神裏古墳、岡田山古墳、具足塚古墳、高塚山丘陵周辺部に立地する芦屋市・王子ヶ丘古墳がその候補としてあげられる。墳丘規模や石室規模は群集墳中に存在するものと比較した場合、大きな変化はみられない〔森岡¹⁰⁾1984〕。

6世紀後半の単独墳は山麓から台地にかけての傾斜変換線上に立地しているが、山麓斜面には、横穴式石室を主体部とする後期群集墳が築造される。西摂地域の群集墳は大きく2つの地域に分かれて存在している。1つは西摂平野北辺部に存在する長尾山丘陵に存在するものである。もう1つが六甲山南麓部のもので、住吉川から武庫川に至る範囲に複数の群集墳が存在している。さらに、これらの2つの地域間には後期古墳が存在していない地域が4kmほど続いていることが指摘されている〔森岡¹¹⁾1984〕。

長尾山丘陵の後期古墳は、現在までに200基程度古墳が確認されている。これらを1つの群集墳と捉える考えもあるが〔石野1970〕、現在では7つの古墳群と1つの単独墳にわけて考えられている〔直宮1980〕。これらの群集墳は有袖形の石室を中心に群が構成され、6世紀末から7世紀初頭にかけて形成されたと考えられるものと、無袖形の石室を中心に群が構成され、7世紀中葉に形成されたものがある〔直宮1980〕。前者の例としては宝塚市・雲雀丘古墳群、山本古墳群、中筋山手古墳群があり、後者の例として、宝塚市・平井古墳群、山本奥古墳群がある。雲雀山東尾根古墳群および雲雀山西尾根古墳群は無袖形石室、有袖形石室両方がみられるが、群を構成する支群単位でみた場合、両者は支群を異にしている。

六甲山南麓部の後期古墳は、西宮市・仁川旭ヶ丘古墳群、五ヶ山古墳群、五ヶ山西古墳群、上ヶ原古墳群、神園古墳群、高塚山古墳群、芦屋市・八十塚古墳群、城山古墳群、三城古墳群、笠ヶ原古墳群、神戸市・中野森古墳群、岡本梅林古墳群、野寄群集墳が存在する。八十塚古墳群、野寄古墳群は6世紀後半から7世紀中葉にかけて造墓活動が続いているが、他の古墳群は6世紀末から7世紀の初頭にかけて築造された有袖形の石室を中心としている。

終末期古墳としては宝塚市・中山荘園古墳、神戸市・生駒古墳、西宮市・入組野古墳がある。中山荘園古墳は直径11mの多角形墳である。墳丘には外護列石がめぐり、埋葬施設は有袖形の小型横穴式石室である〔直宮・古川1985〕。生駒古墳は径17mの円墳と推定されており、主体部は無袖形の横穴式石室である〔渡辺1992〕。入組野古墳は小型の石室を主体部としている〔武藤1959〕。

後期の集落は、中期末の郡家遺跡、寺田遺跡、月若遺跡、若王子遺跡が後期にも引き続き営まれる〔森岡・村川1996〕。この時期の特徴としては、建築様式が竪穴住居から掘立柱建物へ移行することがあげられる。また6世紀後半から新たに出現する集落もみられ、住吉宮町遺跡ではこの時期から再び住居が営まれている〔小野田・湊1996〕。

E 歴史時代

古代律令制下にあつて、地方に国・郡・里が設置されると、六甲山麓南方の夙川から生田川に至る地域に摂津国菟原郡が設置された。この時期の遺跡としては官衙、集落、寺院、窯、墳墓等があげられる。

神戸市郡家遺跡は、その地名より「菟原郡衙」所在地に比定されているが、調査成果をみる限り奈良・平安時代の遺構は多いとは言えない〔浅岡・古川1995a〕。しかし、その小字名により郡衙の正倉の存在が予想される大蔵地区では、当該期の遺物・遺構の検出例が多く、柱穴規模の大きい方形掘形の掘立柱建物等が検出されていること等から、現在もなお「菟原郡衙」の最有力候補地とされている〔喜谷1989〕。郡家遺跡に隣接する神戸市住吉宮町遺跡では、7世紀後半から8世紀中葉の石敷道路とそれに伴う柵跡が検出され、円面硯が出土していること等からも官衙関連施設とみられている〔小野田・秦1998〕。また当遺跡では、方位の揃った規格性の高い掘立柱建物群周辺の土坑より、七宝を意識したと思われる土師器壺7個を一列に並べた地鎮遺構が検出されている〔丸山1990b〕。

神戸市日暮遺跡では、7世紀初頭の大規模建物群および平安時代後期から末期の掘立柱建物

が検出されており、緑釉陶器・灰釉陶器・瓦・鉄製品や、兵庫県下では出土例の少ない越州窯産の青磁等の遺物が多量に出土している。また、掘立柱建物に伴って発見された地鎮造構では、皇朝銭が埋納されており、それらの入手が可能である富裕な階層の人々が住んでいたと考えられる〔谷▲1989, 東1997〕。その他、官衙に関連する遺跡として、銅製の鈴帯・円面硯が出土している神戸市深江北町遺跡〔山下▲1988〕、須恵器の佐波理碗が出土している旧三宮構内遺跡〔管本・富山1994〕、墨壺が出土している川西市栄根遺跡〔岡野・納谷▲1983〕、神戸市楠・荒田町遺跡等があげられる。また、福原京や平家の別邸との関連が指摘されている神戸市祇園遺跡では、中国より渡来した吉州窯系小碗や京都系の軒瓦が出土している。平安時代末期の庭園の池からは数千枚にもわたる土師器皿が出土している〔神戸市教委▲1995〕。

「葦屋駅」との関連で注目される遺跡として、芦屋市・寺田遺跡、月若遺跡、三条九ノ坪遺跡があげられる。寺田遺跡では、奈良時代末から平安時代前期の倉庫跡とみられる掘立柱建物や欄跡、溝等が検出され、白鳳期の瓦片も出土している〔南・山田・大下・森下1985〕。寺田遺跡に隣接する三条九ノ坪遺跡においても、同時期の掘立柱建物跡等の遺構が検出され、また灰釉陶器、石帯や、「三壬子年□」と墨書された木簡等が出土している〔高瀬▲1997〕。これらのことから、当遺跡には葦屋郷の中核部を担う建物が存在していた可能性がある。津知遺跡では、掘立柱建物群が検出され、墨書土器や硯等の官衙的な性格を示す遺物が出土している〔和田1994〕。尼崎市猪名庄遺跡は東大寺の荘園領と推定されているが、奈良時代の倉庫と考えられる2棟の大型の総柱建物が検出された。「西庄」と記された墨書土器が出土しており、これを裏付ける重要な手がかりをえることができた〔岡山・榎垣▲1998〕。伊丹市南本町遺跡からは近年の数回にわたる発掘調査で掘立柱建物群が検出され、遺跡の性格が明らかになりつつある。検出された井戸からは「中井□」の墨書のある須恵器が出土している〔高瀬・小淵1997〕。

当該地域の古代寺院の建立は奈良時代前期（白鳳期）に始まり、飛鳥時代にさかのぼるものは現在のところ確認されていない。芦屋市芦屋廃寺は芦屋川扇状地上に建立されており、白鳳期法隆寺系瓦をはじめ、古代から近世にかけての瓦類が出土している。創建時の伽藍配置は未だ明らかではないが、近年調査された第62地点では古代の寺院に関連する基壇が検出された。芦屋廃寺の東側に所在する月若遺跡では、遺跡内に芦屋廃寺のものと思われる塔心礎が残されていた。第10次地点においては、芦屋廃寺のものと思われる瓦が出土している〔浅岡▲1993〕。元禄5（1692）年刊の『寺社御改変細帳』には、行基によって建立された堀通山法恩寺の伝承が記されており、芦屋廃寺がそれに相当すると推定される〔武藤・有坂・末中・村川▲1976〕。尼崎市猪名寺廃寺は猪名川・藻川分岐点から南方約1kmの洪積台地上に建立されている。伽藍配置は法隆寺式であり、奈良時代の前半に創建されたことが明らかになっている。発掘調査により金堂跡、塔跡、講堂跡、中門跡、回廊跡等が確認されている。金堂からは凝灰岩製の地覆石、羽目石が検出されており、塔心礎とみて大過ない巨石が法園寺本堂北側に保存されている〔岡田▲1984〕。伊丹廃寺は伊丹段丘の東縁に建立されている。伽藍は講堂が金堂の背後に位置しているものの、法隆寺式の伽藍配置と考えられている〔高井▲1963〕。創建は奈良時代であり、鎌倉時代後期まで存続したようである。発掘調査により金堂跡、塔跡、講堂跡、回廊跡が検出されている。

当該地域において、官衙・集落、寺院以外の遺跡としては、生産遺跡では宝塚市・平井窯跡、

宝塚市勅使川窯跡があり、墳墓では宝塚市北米谷古墓があげられる。

西摂地域の中世遺跡としては、集落、寺院、城郭、墳墓等がある。生産遺跡は水田等の検出例はあるものの、大規模な窯跡等は知られていない。集落遺跡は神戸市滝ノ奥遺跡で、9世紀から11世紀にかけての掘立柱建物、12世紀後半の経塚のほか、13世紀以降の火葬跡および火葬墓が検出されている。経塚は副葬品の埋納状態が良好であり、経典埋納の儀式の復元に役立つ貴重な資料である〔森田1982、武藤1992〕。神戸市岡本北遺跡では、鎌倉時代の掘立柱建物等が検出された。遺物は瓦器碗・土師器皿・瓦質羽釜・東播系須恵器碗・捏鉢等、鎌倉時代を中心とした遺物が出土している〔浅岡1992〕。郡家遺跡からは多数の掘立柱建物が検出されている〔浅岡・古川1995a〕。芦屋市三条岡山遺跡では、中国華南の龍泉窯系の青磁が出土している〔森岡1979b〕。芦屋市津知遺跡では、室町時代を中心とする中世の井戸、集石遺構、水田跡、河川跡等が検出され、日常雑器類も多数出土している。この一帯は日吉神社を中心に旧津知村があった地域で、近世津知村の初源形態を知る上でも重要な遺跡である〔和田1994〕。尼崎市道ノ下遺跡では掘立柱建物群、柵列、溝が検出されており、12世紀から13世紀にかけて形成されていたことが明らかになっている〔小野田・北原1997〕。この他に当該地域の集落遺跡と考えられるものとして、神戸市・湊川遺跡、楠・荒田町遺跡、日暮遺跡、岩屋北町遺跡、徳井町遺跡、住吉宮町遺跡、本山遺跡、森北町遺跡、尼崎市・東武庫遺跡で中世の遺構や遺物が確認されている。

室町時代には、当該地域でも山城が築かれる。芦屋市城山山頂には、摂津地域の土豪である瓦林政頼によって鷹尾城が築城される〔武藤・有坂・末中・村川1976〕。芦屋市城南麓遺跡では、鷹尾城の城郭の一部と考えられる遺構と共に、同時期の集団墓が検出されている〔森岡1980b〕。また、伊丹市南本町遺跡からは、中世末に比定される溝が検出されている。溝は「箱堀」とよばれる断面が逆台形を呈するものであり、織豊期の築城技法である「折れ」が採用されていた。これらのことから織田信長の有岡城攻めの際に築造された陣城であることが示唆されている〔渡辺・高瀬・河合1997〕。

寺院では川西市満願寺旧伽藍遺構、宝塚市旧清遺跡がある。これらは、ともに平安時代後期に創建され、中世にも存続している。旧清遺跡からは金堂はじめ法華堂、常行堂、経蔵、鐘楼等が検出されており、遺物は土器類の巴文軒丸瓦、波文軒平瓦、宝珠唐草文軒平瓦、鬼瓦、塑像、飾金具、玉等が出土している〔高井1973〕。また、当該遺跡からは瓦窯が検出されている。満願寺では現在の本堂の下層から平安時代から室町時代の建物群が検出されている。これらは本堂の前身と考えられている。遺物は土器類の他に瓦、銅製品、鉄釘、銅銭、ガラス玉、水晶、硯、金箔、水晶制舍利容器、銅製花瓶等が出土している〔岡野・田中・多淵1985〕。

中世の段階になると、これまで未開発であったところまで開発が進むようになり、この時期の水田跡が各所で検出されている。1987年に行われた久保遺跡の発掘調査を皮切りに、神戸市深江北町遺跡、芦屋市・大原遺跡、打出小槌遺跡、打出岸造り遺跡、月若遺跡、尼崎市・上ノ島遺跡等において次々と水田面が発見された。また、芦屋市冠遺跡のように、標高50mの高い台地上でも灌漑がみつかる例もある。

この他に保久良神社遺跡では、奈良時代の瓦および鎌倉時代の懸仏等が出土し〔樋口1941〕、堂坂遺跡からは、七個体の銭壺が出土し、壺内には合計19万4825枚の銅銭が収められていた

〔高井・葛野₁₉₇₁〕。

近世になり、豊臣秀吉が天下を統一すると芦屋地方は直轄地となった。その後、元和元(1615)年の大坂夏の陣で豊臣家が滅びると、この地方は引き続き徳川氏の直轄地となった〔武藤・有坂・末中・村川₁₉₇₆〕。この時期の遺跡は、都市・集落、城郭、採石場等が知られている。当該地域の都市・集落遺跡では芦屋市・月若遺跡、伊丹市・伊丹郷町、西宮市・越水山遺跡等がある。伊丹郷町は江戸時代の在郷町であり、礎石建物、井戸、埋甕、柵列、肥桶、土坑、瓦窯等が検出されている。また、土師質土器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器等の豊富な遺物が出土している〔藤本・前川₁₉₈₇〕。越水山遺跡では瓦器羽釜、備前焼鉢、伊万里焼碗等、16世紀～18世紀を中心とする遺物が出土している〔合田・西川₁₉₉₁〕。また、芦屋市月若遺跡では、江戸時代中期に酒造りの際に使用されたと考えられる半地下式の甕が検出され、この地方の酒造史をたどるうえで貴重な資料といえる。

城郭では伊丹市・有岡城跡、尼崎市・尼崎城跡の調査が行われている。有岡城跡では2時期の遺構が検出されており、これらがそれぞれ伊丹城時代と有岡城時代に対応する。伊丹城時代の遺構には土塁、堀、礎石建物、石組溝、庭園遺構、通路状石敷、井戸、貯蔵穴等が検出されており、有岡城時代の遺構としては、土塁、堀、礎石建物、石組溝、庭園遺構、井戸、貯蔵穴などが検出されている〔浅岡・田中₁₉₈₃〕。尼崎城跡では本丸御殿の建物と考えられる遺構が検出されている〔佐藤・家塚・山上₁₉₉₇〕。

芦屋市・西宮市域の六甲山麓は、徳川大坂城東六甲採石場として利用されており、現在でも、矢穴石や刻印石が点在している。これらは尾根筋や地形変化を境界として城山刻印群、奥山刻印群、岩ヶ平刻印群等の6つの刻印群に区分される。このうち、岩ヶ平刻印群は八十塚古墳群岩ヶ平支群と分布域が重なっており、当古墳群の石室材も採石されたと推測される。1959年、大坂城石垣の総合学術調査が行われた際、北と西の外濠から、平仮名で「あしや」と刻まれた刻印が11個確認されているが、現在六甲山系からは「あしや」の刻印は見発見されていない。おそらく採石場以外の場所で刻まれたのであろう。また、大坂城再築用石材の集石場として芦屋市呉川遺跡があげられる。この遺跡は、採石場から大坂城への石材海送ルートの中継地点と考えられる〔森岡・白谷₁₉₉₄〕。

F まとめ

以上述べてきたように西摂地域では各時期にわたって遺跡の分布が認められる。しかし、その密度が増加するのは弥生時代以降である。弥生時代では前期から居住域、生産域、墓域にわたって資料が比較的整っている。弥生時代中期には遺跡が扇状地や洪積台地に移動する他、高地性集落が河内や大和に先行して出現する。弥生時代後期には特別な施設と考えられる大型の掘立柱建物出現する。古墳時代では前期から前方後円墳の築造がみられ、中期にその数が減少し、後期前半を最後に前方後円墳の築造が停止する。このような傾向は畿内地域において一般に見られる傾向と一致している。また住吉宮町遺跡で検出された特異な方形周溝墓の存在は注目すべきことである。横穴式石室の導入においては河内や大和と比較して若干遅れるようであるが、雲雀丘C北支群4号墳や勝福寺古墳は当該地域における導入期の石室として位置づけ

ることが可能である。古代においては、郡家遺跡が菟原郡衙の有力候補地としてあげられており、この地域の中心的位置を占めていたと考えられる。郡家遺跡の他にも、芦屋市域ではこの時期の遺構が密に分布しており、当該地域の中心的な役割を担ったと推定される。寺院建築の導入に関しては、大和や河内と比較して若干遅れ、白鳳期に芦屋廃寺・猪名寺廃寺・伊丹廃寺等の寺院が建立される。中世では、それまで開発が及ばなかった台地上が開墾され、可耕地が拡大していく。満願寺旧伽藍遺構や旧清遺跡等の寺院遺構も存在しており、城山山頂には鷹尾城が築城された。近世初頭には六甲山東南麓は、大坂城再築用の採石場として利用され、これに関連する遺構が検出されている。このほか有岡城や尼崎城等の近世城郭の遺構が検出されている。

3 八十塚古墳群の研究史

八十塚古墳群の調査の成果については、これまで多くの調査報告がなされている。その中でも『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』（藤川・森岡・古川、1979）には、1970年代までの八十塚古墳群の調査・研究史がまとめられている。本節ではこれらの諸文献を参考としつつ、調査・研究史を捉えることによって群集墳研究における八十塚古墳群の意義について考えることとする。

A 近世・近代の研究

八十塚古墳群が人々に注目され始めたのは、近世にまでさかのぼる。大正時代に成立した『武庫郡誌』（兵庫県武庫郡教育会、1920）には、1734年に編纂された『摂津志』『荒墳の部』より引用した、「打出村西岩平、山中有数塚曰八十冢」という記述がある。したがって、18世紀前半には、「八十塚」という固有名詞が存在していたことになる。

明治時代に編まれた『西摂大観』上巻（仲1911）や上述の『武庫郡誌』には、「打出村の内字岩が平山隈に数多くの石窟あり、名所図会に八十塚とあるものは是れなり」とある。さらに『摂津志』の記述を引用した上で、「されば、此地方は、甚だ古き土地にして或は上古土蜘蛛種族の穴居せし所ならんか」と、周辺の歴史的環境にまでふれている。現在使用されている「八十塚古墳群」の呼称は、近世の諸文献が小規模墳の多く群集する様子を「八十塚」と表現し、それを今に受け継いだものである。そうした意味でも、上記の地誌は研究史上、決して無視できないものと言える。

また、この頃から地域の郷土史家が地元の歴史・文化財を研究する団体を結成する動きが現れる。1915年には紅野芳雄氏や吉井良尚氏、田沢金吾氏らによって西宮史談会が結成され、芦屋市内でも岩ヶ平を中心とした積極的な踏査・記録活動が開始されている。紅野氏は、「考古小録」と題する克明な踏査記録を残しており、後に刊行されて貴重な文献となっている（紅野1940）。

B 戦前の研究

戦前から、八十塚古墳群周辺では住宅地としての開発が行われ、それに伴い古墳の破壊も進んだ。特に、海拔100～200mと見晴らしのよい六麓荘町では、1929年に数万坪の宅地造成がなされ、高級住宅地としての開発が始まっている（『阪神間モダニズム』展実行委、1997）。このような中、西宮史談会などによって八十塚古墳群を含む芦屋市域の遺跡の踏査・研究が続けられ、その結果、いくつかの研究報告書が著された。1944年に吉岡昭氏によって著された『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』や『考古随録』はその代表例である（武藤・有坂・末中・村川、1976）。前者には、「打出字岩ヶ平群集古墳、現在岩ヶ平附近、苦楽園に至る道に沿って原形を止めている古墳は、五六に過ぎないが、古墳であったと認められるものは数多く存在す

る」と、八十塚古墳群についての言及がある。挿図がスケッチであるなど、現在の調査報告書の水準にはおよばないものの、丁寧な踏査と観察がなされた上で記録されている。また、現在では確認できない消滅墳についての記録もあり、破壊前の古墳の様子を伝えるものとして研究史的にも貴重な文献となっている。

C 戦後の研究

戦後、古墳時代研究は急速に発展し、1950年の文化財保護法の制定や1960年代以降の周辺の開発の活発化に伴って、芦屋市域でも埋蔵文化財に対する関心が高まっていった。

八十塚古墳群に対して、本格的な発掘調査が行われたのは1950年代後半以降であり、芦屋市教育委員会や関西学院大学考古学研究会などによって開始された。まず1956年には、六麓荘町で造園に伴う土取り作業中に、陶棺の破片が出土したことをきっかけとして、芦屋市教育委員会を調査主体とした緊急調査が実施された。1959年には、陶棺が出土した古墳と周辺の2基の古墳を含めた3基、すなわち岩ヶ平支群第1・2・3号墳（調査当時は「八十塚A・B・C号墳」と呼称）が、芦屋市教育委員会によって発掘調査された。この調査は、岩ヶ平支群最初の本格的な発掘調査例となり、前述の陶棺が岩ヶ平支群第1号墳に埋葬されていたことが明らかとなった。この陶棺は、石室内の調査で2棺分検出された。八十塚古墳群ではその後、陶棺の検出例はなく貴重な調査例となった〔村川¹⁾1959〕。また、剣谷支群で最初の調査がなされたのもこの年であり、剣谷支群第1号墳が発掘された。この古墳は、開発行為によってすでに大部分が破壊されていたが、出土した土器の型式から7世紀中頃の築造とされている〔村川1966a〕。

1964年には、朝日ヶ丘支群第1・2号墳が発掘された。いずれも6世紀後半の築造である。第1号墳では粘土床、第2号墳では石敷床が検出された。両墳ともかなり荒廃していたが、遺物はすべて玄室床面上から出土した。特に第2号墳からは、断面六角形の純金製垂飾付きと推測される耳環が出土している。垂飾付き耳飾は、そのほとんどが朝鮮半島と密接な関わりをもつといわれ〔菅谷1973〕、6世紀後半から末にかけて消滅していったと考えられている〔宇野1988〕。したがって、6世紀後半の築造である当墳から出土したことは大変重要であり、当墳の群形成時における位置付けを考える上で有効な資料といえる〔村川1966a〕。

また同年、芦屋市内の文化財調査に参加していた人々が、文化財保護団体「芦の芽グループ」を結成した。以後、芦の芽グループは、積極的な調査参加や啓蒙活動を展開し、八十塚古墳群に対しても市民の立場から種々の貢献をすることとなった。

1965年には、岩ヶ平支群第1・2・3号墳に隣接する岩ヶ平支群第5号墳が造園工事に伴い発掘調査された。当墳は、土地所有者の同意を得て調査終了後に庭内の地下に埋没保存されることとなった〔藤岡²⁾1967〕。また、八十塚古墳群の中でも東部に位置する苦楽園支群の学術調査は、1965年に苦楽園支群第1・2号墳が西宮市教育委員会によって調査されたことを皮切りに始められる。2基の古墳は、無袖形の横穴式石室で同一封土中に築造されており、さらに周囲に外護列石を巡らせていることが判明した。外護列石は第1・2号墳を開口部で連結し、さらに封土の周囲に貼り石状に石を巡らせる構造となっている。こうした例は周辺地域にも類例がなく、興味深い調査となった。ただし、二つの石室は同時に構築されたものではなく、二次

的な改造の結果、出現したものであるとされる〔村川¹⁹⁶⁶〕。両墳の石室は、現在、西宮市立大社中学校に移築保存されている。苦楽園地域は、1968年に兵庫県埋蔵文化財特別地域に指定され、その後三年間にわたる勇正広・藤岡弘両氏や、関西学院大学考古学研究会による分布調査、後述の六甲南麓群集墳測量調査団の活動などにより、新たに老松・苦楽園地域から、半壊・埋没した状態の古墳が数基確認された。

発掘を伴う調査のほか、1966年からは芦屋市教育委員会の委託を受けた芦の芽グループにより芦屋市域の遺跡分布調査が行われ、その結果は翌年に、「芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳」〔佐々木1967〕にまとめられた。八十塚古墳群についても多くその所在が確認され、未調査のまま破壊されていくことに一定の歯止めがかけられただけでなく、八十塚古墳群の群構成を考える上での基礎資料を提供した。

1972年には芦の芽グループと兵庫県立芦屋高等学校史学研究部が主体となって、「六甲南麓群集墳測量調査団」が結成された。測量調査に基づく古墳の実態把握と保護を目的としたもので、その調査活動は8月の岩ヶ平支群第14号墳測量調査に始まり、10月には岩ヶ平支群第13号墳、1973年7月に岩ヶ平支群第15号墳、1974年5月に岩ヶ平支群第12号墳と、各墳の測量調査が進められた。調査結果は、後に一冊の報告書にまとめられている〔藤川・森岡¹⁹⁷⁹〕。これら4基の調査や、並行して行われた周辺遺跡の綿密な分布調査は、個々の古墳のみならず、群全体を考察するものとして大きな意義をもつものである。「八十塚古墳群」という呼称は岩ヶ平支群周辺に分布する古墳を包括したものと広義に捉えられていたが、支群の関連性や群形成過程の検討により、従来の呼称である「八十塚」は「岩ヶ平支群」と改称されるようになった。同時に、周辺に存在する古墳はそれぞれ「朝日ヶ丘支群」・「老松町支群」・「苦楽園支群」・「剣谷支群」と称されるようになり、個別の支群として認識されるようになった。

また、1974年には苦楽園支群第5号墳、1975年に苦楽園支群第6・7号墳、1976年に老松町支群第3号墳、1977年に剣谷支群第2号墳が西宮市教育委員会などによって調査された。これらの古墳は開発計画が押し寄せるままに放置しておく破壊されるおそれがあり、遺跡の遺存状況の確認と保存のため、調査・整備が急務であった。苦楽園支群第5・6・7号墳はいずれも、直径14m内外の円墳で無袖形の横穴式石室を内部主体としている。また以前より指摘されていた外部施設として列石を有するという特色が確認された〔勇・藤岡・古川¹⁹⁷⁸〕。老松町支群第3号墳は6世紀後半の築造とされる直径14mほどの円墳である。天井石が二枚石室に架かった状態で残っており、右片袖形の横穴式石室を内部主体とする。外部施設は確認されていない。本例は、老松町支群に遺存している4基の古墳中、最初の発掘調査となった〔勇・藤岡・古川¹⁹⁷⁸〕。1975年以降、埋蔵文化財の保護が行政的にも整備され、周知の古墳については徹底して保存措置が講ぜられるようになったこともあり、この一連の調査が行われた古墳は、すべて現地保存された。

苦楽園支群第5・6・7号墳周辺においては、芦屋市内で確認されていた矢穴や刻印を有する石材が多数確認された。これらの石材は徳川氏大坂城の石垣再築に関連するものであり、苦楽園支群第5・6・7号墳一帯は、近世の採石場という歴史的価値をも有することが明らかとなった〔勇・藤岡¹⁹⁷⁸〕。当地域は、芦屋・西宮両市にまたがる「東六甲採石場」を6分類したもののうち、「岩ヶ平刻印群」と呼ばれる場所に該当する。「岩ヶ平刻印群」の呼称は1976年

末から使用され、芦屋市六麓町全域と剣谷・岩園町北部、および西宮市苦楽園4・5・6番町の一部をその範囲とする〔藤川・森岡₁₉₈₁1979〕。

その後も、断続的に調査が進められた。1979年には岩ヶ平支群第6・7・8・19・26号墳、および近隣における埋蔵文化財存否確認調査が行われた。第6号墳は、直径8mから9mの円墳である。第8号墳は、直径約16mの円墳で6世紀後半の築造とされる。長さ9.2m、幅1.5m、推定高2.3mを計る有袖形の横穴式石室を内部主体としており、八十塚古墳群では、最大規模を誇る。第19号墳は、直径10mから11mの円墳で、石室が基底石から最上段までほぼ完全に遺存することが確認された〔藤川・森岡₁₉₈₁1979〕。さらに1980年には住宅建設に先立って岩ヶ平支群第6・7・8・26・28号墳の緊急調査〔森岡1982b〕、1981年には第23・24・25・29号墳の調査が行われた〔森岡1984〕。1982年には第19号墳の主体部の発掘調査と第27・30号墳推定地の確認調査が行われた。第19号墳の石室の遺存状態は良好で、架構された天井石一枚と両側壁の上端部の多くを残していた。これらの調査は4年間にわたるF小支群の調査の最後となった〔藤岡1985〕。また1983年には、第22号墳の確認調査が行われた。この古墳は、右片袖形の横穴式石室を内部主体にもつ直径16mの墳丘をもっていることが確認された。出土した須恵器の型式から6世紀後半から7世紀はじめの築造とされている〔藤岡・勇1987〕。1987年には岩ヶ平支群第10号墳の確認調査が行われた。この調査は文化財保護法違反の開発行為による古墳の損壊に伴うものであり、世論の批判を浴びた経緯をもつ。本墳は、今回が最初の調査であり、その破壊状態が危惧されたが、墳丘基盤には破壊が及んでおらず、墳丘規模や石室型式が判明した。石室型式や出土した須恵器から、6世紀末から7世紀はじめの築造とされている〔古川₁₉₉₀〕。当古墳は『西摂大観』にも紹介されているもので、岩ヶ平支群の中では最も早くから知られてきたものの一つとされている。また、天井石3石が架構された状態で遺存しており、良好な状況であると指摘されていたものである。

1991年には、西宮市教育委員会によって剣谷支群第2号墳の第2次発掘調査が行われた。剣谷支群は、確認できる古墳が少ないこともあり不明な部分が多い。この調査は、剣谷支群の解明と適切な保存を行うための基礎資料作成を目的としたものである。当墳は、横穴式石室を有する直径10mから13mの円墳と推定され、出土遺物として須恵器の平瓶・提瓶・土師器の甕が奥壁に接して出土した。耳環がみられないなど、他の支群とは様相を異にすることが確認された〔合田・西川₁₉₉₁〕。

1991年度には、芦屋市教育委員会によって岩ヶ平支群第50号墳が発掘された。この古墳は岩ヶ平支群に含まれているが、既掘墳により設定されている北限ラインより約160m北側の地域に位置している。この地点は老松尾根の基幹でもあるため、本群集墳の支群分類に難点が見られることになり、別の一支群を構成する要素が見い出された。石室型式は、森岡秀氏の横穴式石室平面プランの類別〔森岡1984〕によると、玄室と羨道部の意識区分が残る「無袖式甲型」であるが、従来のものより全長が長く、有袖形からの退化傾向を段階的に考える上で重要な一例を加えることとなった。出土遺物では、鉄釘18点が原位置を保って出土したため、木棺一棺分の棺配置がほぼ推測できた。当古墳は、盗掘痕跡が見られない初めての例で、貴重な資料を提供した〔森岡・白谷₁₉₉₂〕。

以上のように、1950年代後半以降の地道な調査結果の累積により、八十塚古墳群は西摂地域

Tab. 1 八十塚古墳群 一覧表

古 墳 名	墳 形	墳丘規模(m)	石室形	玄室長(m)	玄室幅(m)	羨道長(m)	羨道幅(m)	副 葬 品
岩ヶ平1号墳	円墳	17~18	両袖	4.5	1.8	3.7	1.5	須恵器・土師器・銀・ガラス小玉・刀子・鉄釘
岩ヶ平2号墳	円墳	15	—	—	1.8	—	—	須恵器・土師器・銀・紡錘車・鉄釘・石鏃
岩ヶ平3号墳	円墳	12~20	右袖	3.7	1.8	5.3	1.2	須恵器・土師器・銀・白土・管玉・直刀・鉄釘
岩ヶ平4号墳	円墳	18	—	—	1.4	—	—	—
岩ヶ平5号墳	円墳	15	左袖	3.5	1.7	3.4	1.4	須恵器・土師器・石製紡錘車・武器小片・鉄釘
岩ヶ平6号墳	円墳	8~10	無袖	5.45	1.18	—	—	須恵器・土師器・耳環・刀子・鉄製品・鉄釘
岩ヶ平7号墳	円墳	9~13	右袖	4.65	1.65	3.15	1.25	須恵器・土師器・耳環・勾玉
岩ヶ平8号墳	円墳	16	両袖	4.55	1.9	5.4	1.85	須恵器・土師器・耳環・刀子・鏃・馬具・鉄釘
岩ヶ平10号墳	円墳	10.5~13	右袖	3.5	1.5	3.6	1.1	須恵器
岩ヶ平11号墳	—	—	—	—	—	—	—	—
岩ヶ平12号墳	円墳	12~13	右袖	4.6	1.3以上	3	1	—
岩ヶ平13号墳	円墳	17~18	左袖	4.4	1.8以上	3.6	1.2	—
岩ヶ平14号墳	円墳	15	—	—	—	—	1.3	—
岩ヶ平15号墳	円墳	10~11	無袖	0.8以上	1.0	—	—	鉄釘
岩ヶ平16号墳	円墳	12	—	—	1.2	—	—	—
岩ヶ平17号墳	円墳	10	無袖	6 (推定)	1.0	—	—	—
岩ヶ平18号墳	円墳	15	—	—	—	—	1.5	—
岩ヶ平19号墳	円墳	10~11	右袖	3.6	1.35	3.3	1.21	須恵器・土師器・耳環・鉄鏃・鉄釘・石鏃
岩ヶ平20号墳	円墳	10	左袖	5.5?	1.6	3.5	1.4	—
岩ヶ平21号墳	円墳	12	不明	—	1.1	—	—	—
岩ヶ平22号墳	円墳	16	右袖	4.1	1.55	5.44	—	須恵器・耳環・鉄釘
岩ヶ平23号墳	円墳	7~7.6	無袖	3.08	1.02	—	—	須恵器・土師器・耳環
岩ヶ平24号墳	方墳?	7.5~7	無袖	4.42	0.89	—	—	須恵器・土師器・耳環・鉄釘・石鏃
岩ヶ平26号墳	円墳	10	右袖	—	—	3.8	1.22	須恵器・土師器・耳環・馬具残欠・鉄釘
岩ヶ平28号墳	円墳	6.5~10.4	無袖	4.41	1.01	—	—	須恵器・鉄鏃・鉄釘・刀子
岩ヶ平29号墳	円墳	15	有袖	3.3以上	1.75	—	—	須恵器・土師器・耳環・ガラス小玉・鉄釘
岩ヶ平30号墳	—	—	—	—	—	—	—	—
岩ヶ平45号墳	—	—	—	—	—	—	—	—
岩ヶ平46号墳	—	—	—	—	—	—	—	—
岩ヶ平50号墳	円墳	10	無袖	5.02	0.91	—	—	須恵器・刀子・鉄釘・針金・石鏃
岩ヶ平51号墳	—	—	—	—	—	—	—	—
岩ヶ平52号墳	方墳	7.4	無袖	3.68	1.14	—	—	須恵器・土師器・鉄釘
岩ヶ平53号墳	円墳	5.37~9.45	無袖	4.83	1.05	—	—	須恵器・土師器・耳環・鉄釘
岩ヶ平54号墳	円墳	15	無袖	5.75	1.14	—	—	須恵器・土師器・鉄釘
岩ヶ平55号墳	円墳	3.25~5.73	無袖	2.22	0.7	—	—	須恵器・土師器・耳環
岩ヶ平56号墳	—	—	小石室	1.59	0.45	—	—	—
老松町2号墳	—	—	—	—	—	—	—	—
老松町3号墳	円墳	13~15	右袖	3.76	1.82	2.58	1.16	須恵器・土師器・刀子・耳環・鉄釘
老松町4号墳	円墳	5.2~6.4	無袖	5.38	1.37	—	—	須恵器
老松町5号墳	—	—	—	—	—	—	—	—
朝日ヶ丘1号墳	—	—	右袖	3.4	1.9	2.7	1.3	須恵器・土師器・ガラス小玉・刀子・鉄釘
朝日ヶ丘2号墳	—	—	右袖	3.6	1.7	3.4	1	須恵器・土師器・銀・銀製品・銅製品・鉄釘
剣谷1号墳	円墳	—	不明	1.5	—	—	—	須恵器・土師器・鉄釘
剣谷2号墳	円墳	10	不明	1.4	—	—	—	須恵器・土師器
吉楽園1号墳	方墳	—	無袖	5.93	1.2	—	—	須恵器・土師器・鉄釘
吉楽園2号墳	方墳	—	無袖	5.5	1.25	—	—	須恵器・土師器・耳環・鉄釘
吉楽園5号墳	円墳	14~15	無袖	5.6	1.08	—	—	須恵器・耳環・鉄釘
吉楽園6号墳	円墳	15	無袖	不明	1.15	—	—	須恵器・鉄釘
吉楽園7号墳	円墳	15	無袖	5.4	1.07	—	—	須恵器・耳環・鉄釘

における古墳時代後期の群集墳のあり方を探る上で貴重な存在となっている。また、同古墳群について、その展開や支群構成、岩ヶ平支群における小支群設定〔藤川・森岡・古川1979〕をはじめとする諸研究も進められている。その上、六麓荘町や苦楽園町周辺には、未だ自然地形を残した場所が多く残されており、現在未確認の古墳が今後新たに確認され、より詳細な検討ができるようになる可能性は高い。今後は継続的な調査とともに、造墓集団の性格や付近の集落遺跡との関連性など、八十塚古墳群を題材にした総合的な後期群集墳の研究が望まれる。また、そういった歴史的・学術的意義からも、調査後の積極的な保存・活用が求められるのであるが、残念ながら他の古墳群と同様に開発によってその姿を消しつつあるのが現状である。また、群集墳の保存方法についても、「類例が近在にある」ことを口実に、いともたやすく破壊されてきた」といった批判〔丸山1988〕がある。「目立ったものだけ残せば良い」といった保存の方法ではなく、群としての性格が十分把握できるような手法による手厚い保存が理想である。そのためには、移築保存なども含めた多様な方法を検討する余地があろう。また、一ヶ所でも多くの遺跡を保存するため、一般市民に対して埋蔵文化財に深い理解と協力を求めていく努力を怠ってはならない。私たちもそういった視点を忘れずに、これからも調査・研究に参加していかなければならないだろう。

第3章 調査成果

1 発掘調査区

A 八十塚古墳群内における	D 基本土層
調査地点の位置	E 基盤層
B 調査前の状況	F まとめ
C 遺構面の状況	

A 八十塚古墳群内における調査地点の位置

八十塚古墳群は六甲山南麓に分布し、岩ヶ平・六麓荘台地と呼ばれる台地および台地から派生する尾根上に形成された群集墳である。行政区画では兵庫県芦屋市と西宮市にまたがっており、現在、両市で確認されている古墳は約50基におよぶ。本来は、100基程度で構成されていたものと推測されている。

八十塚古墳群には立地する地形より、剣谷・苦楽園・老松町・岩ヶ平・朝日ヶ丘の5支群が設定されている。これらの支群が形成された時期には差違があり、朝日ヶ丘支群が最も古く6世紀後半のものである。岩ヶ平支群・剣谷支群・老松町支群は、6世紀末から7世紀中葉にかけて形成されている。苦楽園支群は、やや遅れて7世紀中葉から古墳の築造を開始している。

その中で、今回の調査地点は、岩ヶ平支群に含まれる（Fig.16・17, PL.1・2）。岩ヶ平支群は、六麓荘・岩ヶ平台地の南端、標高65mから100mにいたる緩傾斜面に分布している。現在までに東西約250m、南北約300mの範囲に36基の古墳が調査されている。調査地点は、支群内のほぼ中央部に位置している。

岩ヶ平支群は、A小支群からI小支群までの9つの小支群に細分されている〔森岡1979a〕。各小支群については、古川久雄氏が岩ヶ平支群第10号墳の報告書の中でまとめられている〔古川1990〕。ここでは、今回の調査地点と比較するため、これまでの芦屋市教育委員会によって設定された各小支群の内容を概述する〔村川1959, 藤川・森岡・古川1979, 森岡1982a・1982b・1984, 藤岡1985, 藤岡・勇1987〕。

A小支群 第13・14号墳からなる。両古墳とも発掘調査は行われていないが、大型石材を使用しており、実測調査の結果、第13・14号墳ともに有袖形石室の可能性が高い。

B小支群 第12・15・18・20号墳の4基からなる。この内、第15号墳は発掘調査が行われている。他の3基は有袖形石室である可能性が高い。

C小支群 第11・21号墳からなる。第11号墳は1973年に破壊されており、その詳細は不明である。第21号墳は埋没しているため、平面形が不詳である。

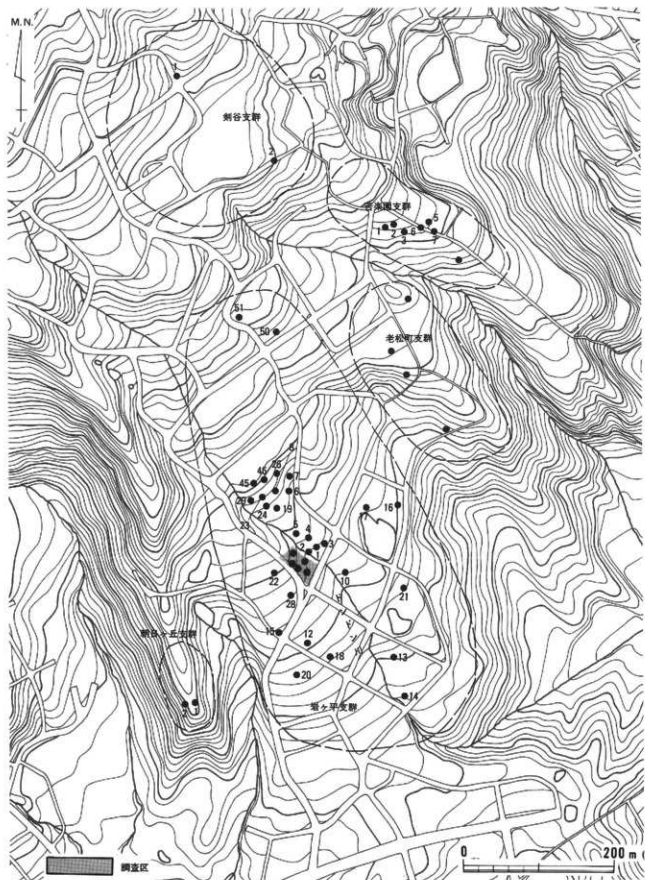


Fig. 16 八十塚古墳群の古墳分布・支群と地形

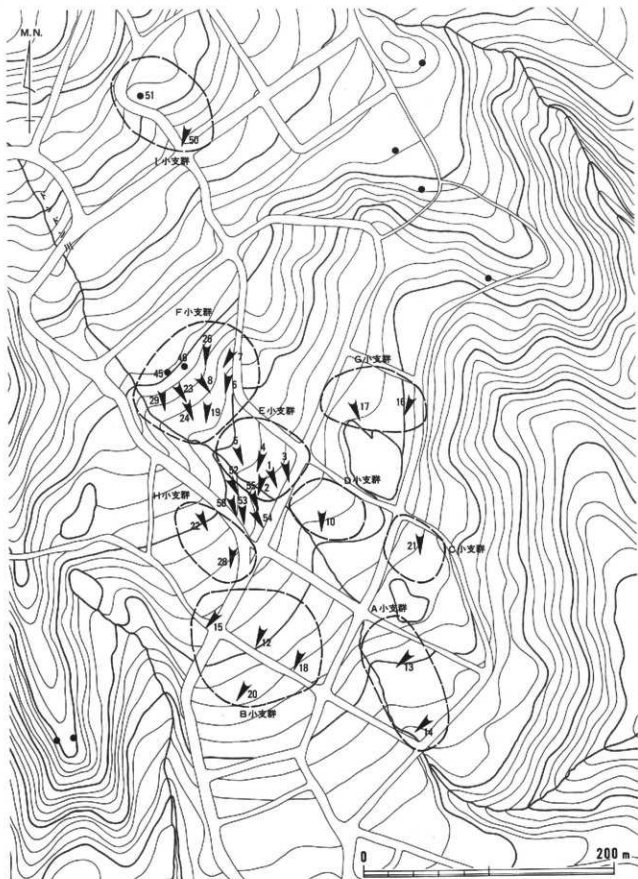


Fig. 17 岩ヶ平支群における小支群の分布 (矢印の方向は開口方向を示す)

D小支群 第10号墳のみで構成される。第10号墳は発掘調査が行われており、右片袖形の石室が検出された。

E小支群 第1・2・3・4・5号墳の5基から構成される。第4号墳以外は発掘調査が行われており、いずれも6世紀末から7世紀初頭にかけて築造されたことが明らかとなっている。第1号墳の石室は他と比較してやや大型であり、内部から四注式家形陶棺が出土している。

F小支群 第6・7・8・19・23・24・26・29・45・46号墳の10基からなる。第45・46号墳以外の8基は、発掘調査が行われている。第7・8・19・26・29号墳は有袖形石室であり、6世紀末から7世紀初頭にかけて築造されたことが明らかとなっている。第23・24号墳は無袖形石室で、7世紀中葉に築造されたと推定する。

G小支群 第16・17号墳の2基からなる。芦屋市教育委員会が行った分布調査では第16号墳が有袖形の石室として、第17号墳が無袖形の石室として報告されている。6世紀末から7世紀中葉にかけての築造とされる。

H小支群 第22・28号墳の2基からなる。2基ともに調査されているが、第28号墳は無袖形の石室である。6世紀末から7世紀中葉にかけて古墳を築造している。

I小支群 第50・51号墳により構成される。1991年度に行われた第50号墳の調査を契機として発見された小支群であり、岩ヶ平支群の中心からやや離れた場所に位置している。いずれの古墳も、無袖形の石室である。

これらの小支群には6世紀末から7世紀初頭の古墳で構成されているものと、小支群内にこれらに加えて7世紀中葉の古墳を含むものがある。これらは6世紀後半から7世紀の初頭にかけて築造された有袖形石室をもつ古墳が主体となるものが多い。今回、検出した5基の古墳はすべて7世紀中葉以降のものであり、これまで確認されている小支群ではH小支群に様相に近い。このようなことから検出した5基はH小支群に含める。

B 調査前の状況

調査地点の敷地平面形は南北方向にやや長い長方形を呈しており、敷地面積は1161.91㎡である。この内、616㎡について発掘調査を行った。

調査地点は南向きの緩傾斜地であり、標高85.50mから91.25mにわたり比高差は約5.75mとなる。発掘調査以前は、雑木や下草が密生する山林であったため、古墳の分布を確認するのは困難な状況であった。そのため、既往の分布調査で調査地点内に古墳の分布が推測されながらも、その存在はまったく確認されていなかった。

本調査に先立って、芦屋市教育委員会によって1993年11月5・9日に行われた分布・確認調査では、5基の古墳の存在が確認された。後の全面調査の結果、これらのなかで3基は古墳（第52・53・54号墳）であることが判明したが、残りの2基は自然の礫の集中や隆起であることが分かった。なお、第55・56号墳は、分布・確認調査の段階では確認されていなかった。樹木を伐採した時点で第53・54号墳の墳丘が確認され、古墳の立地の大まかな地形を把握することが可能になった。しかし、周溝や小流路などは大部分が埋没しており、地表面では確認する

ことはできなかった (Fig.18, PL.8-1・9)。

八十塚古墳群が立地する六麓荘・岩ヶ平台地は上方の花崗岩基盤露頭より崩落流出した土石流堆積物である段丘礫層が地表面に露出しているために、これまでの調査においても古墳が築造されている基盤面に多くの花崗岩礫が含まれていた。今回の調査地点でも発掘調査以前から多くの自然礫が観察され、特に第54号墳南西側において花崗岩の巨石が顕著にみられた。調査地の東側にはドンドン川が流れており、この川岸や川底にも自然礫が多数露出していた。八十塚古墳群が段丘礫層上に立地していることについて、「全国各地に多数見られる横穴式石室を主たる埋葬主体部とする群集墳は、その多くが段丘礫層上に分布し、その礫層中の石材を使用しているということができるとはなからうか」と指摘されている (古川₁₉₉₀)。

この段丘礫層と関連して、当地域は近世以来、採石場として利用されてきた。特に、元和年間 (1620年代) の徳川氏大坂城再築に伴い、石垣用石材が当地域から多数採石されており、刻印石や矢穴石などの関係石材が多く検出されている (藤川1979)。これらを総称して、徳川氏大坂城東六甲採石場と呼ばれている。今回の調査地点は、その中でも岩ヶ平刻印群に含まれている。当該敷地内では、第54号墳の南側で矢穴石1石が確認された。これは長辺約1.2m、短辺約0.8mを測り、幅5.1cmから5.5cmの矢穴が4個穿たれていた。また、ドンドン川の対岸では、刻印石が1石確認された (PL.12)。この刻印石は上面に1列の矢穴列が穿たれており、「井」の刻印が認められている。その規模や形状から、調整石を切り出そうとしていたが、何らかの理由で途中で放棄されたものと考えられる。なお、この刻印石は今回の調査対象地の隣接地にあったため、綿密な調査をすることはできなかった。

C 遺構面の状況

発掘区にはグリッドを設定し、このグリッドにしたがい腐植土を除去した。腐植土を除去した結果、古墳墳丘の範囲を推定することができたので、遺構面上の土層の堆積状況を観察するために、東西ではB・Eライン、南北では3ラインに畦を設定し、古墳時代の遺構面まで掘り下げた。

遺構面は現状地形とは異なり、起伏に富む地形であった。発掘区内には、南北に延びる尾根状地形が3筋、手の指をひろげたように、南北方向にのびていた。これらの内、西側のものには第56号墳が立地しており、中央のものには第52・53号墳、東側のものには第54・55号墳が立地している (Fig.19, PL.10・11)。発掘区で検出されたいずれの古墳も、尾根状地形上に立地していることから、古墳の築造にあたって、このような地形が選地されていたことが推測される。

また、発掘区では、これら尾根状地形間の谷間を流れる小流路を検出した。規模や埋土の堆積状況から、降雨のたびに地形的に低い場所に水が流れ形成されたものであり、常に水が流れているような流路ではなかったと判断している。流路の埋土の観察から、小流路は古墳築造後にも水が流れていたことが分かった。

流路は第52号墳の西側から南へ延び、第56号墳の東側で、東西に分岐している。これは第53号墳の墳丘に沿って掘られた周溝に雨水が流れて形成されたものであろう。西に分岐した流路

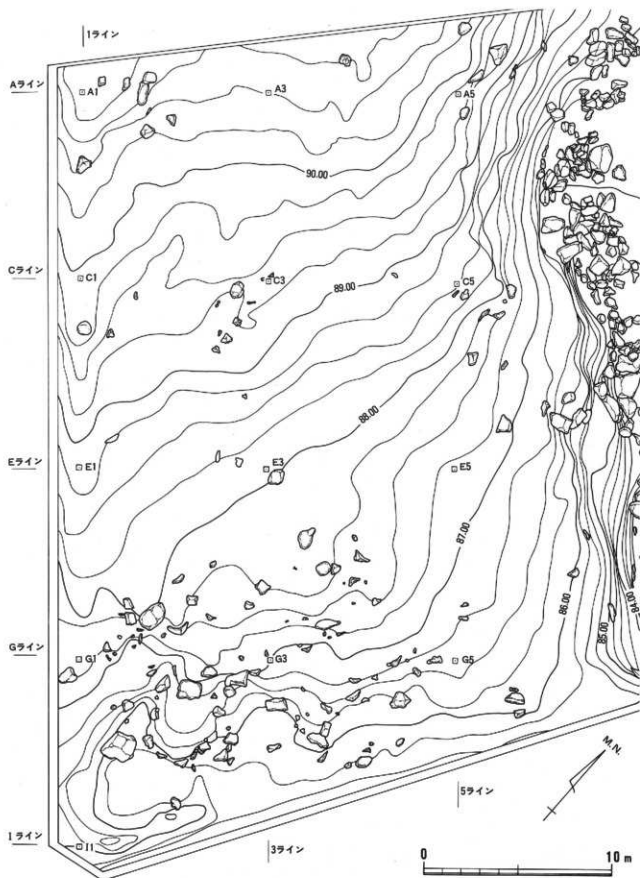


Fig. 18 調査前地形測量図

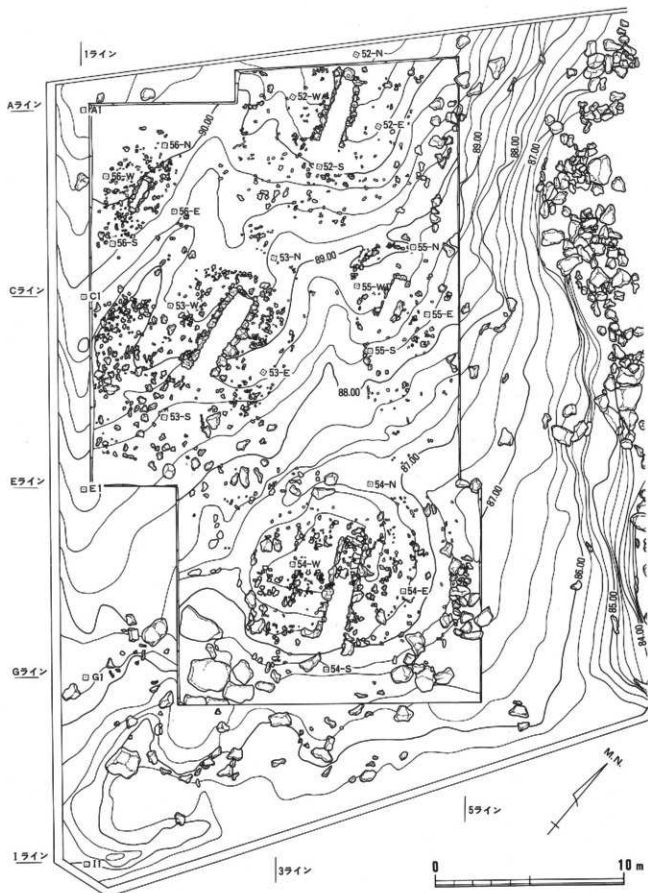


Fig. 19 遺構面測量図

は、第53号墳の西側を通り発掘区の西肩の中央付近で発掘区外へと延びていた。東方に分岐した流路は、第53号墳と第55号墳の間を通り第54号墳の北側で再び東西に分かれる。これも第54号墳の東側へ分岐した流路は、この南方では第54号墳の周溝の影響を受けて分流したのであろう。分かれた流路は、東側は発掘区外へ続き、西側へ分岐した流路は、第54号墳の西裾を通り発掘区外へと続く。

調査地では腐植土上面においても自然礫が多く露出していたが、遺構面では基盤層に含まれる礫がさらに数多く露頭していた。特に第54号墳の南側では巨礫が多く含まれ、直径3mを超えるものもみられた。この場所には基盤層中に含まれる礫によって小規模な段差が認められることから、段丘礫層が形成される時期に起きた土石流の先端に堆積した礫であると考えている。このことから、この南端の礫による段差は微視的に地形の区分になるのではないだろうか。そういう意味では、第54号墳は微地形的に区切られた範囲の南端に位置することが想定できる。

D 基本土層

古墳の埋没過程や遺構面上の堆積状況を観察するために東西方向に2本(B・Eライン)、南北方向に1本(3ライン)の畦を設定し、この畦にしたがって土層の観察および記録を行った。また、古墳間にも畦を残し、腐植土から遺構面にいたるまでの土層を記録した。しかし、遺構面が浅く随所で攪乱や削平を受けていたため、古墳築造の先後関係を確認することはできなかった。なお、各古墳に関連する土層は、古墳の主軸・中軸で観察した。

遺構面上に堆積した土層は、大別して4層に細分することができる。すなわち、下層から順に填丘盛土・流出土層、小流路の埋土層、これらを覆う流土層、現表土である腐植土層である。以下、主な土層について各ラインごとに堆積の順にしたがって、下層から説明する。

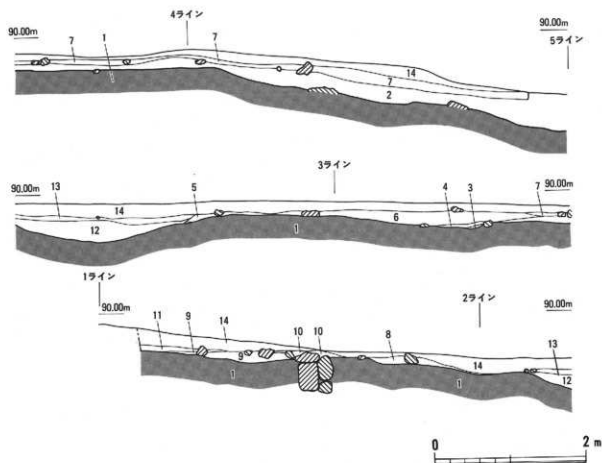
a 3ライン

3ラインは北から第52号墳填丘西側、第53号墳填丘東側、第54号墳填丘西側を通っている(Fig.21)。土層観察は3ライン西側50cmのラインで行った。

1層は、基盤層である。2層から4層は、第53号墳填丘からの流出土である。5層は流路の埋土であり、第53号墳填丘盛土に起因する土層の上に堆積していた。このことから、填丘の構築が流路の形成に先行していたことが分かる。これらの上層には12層が堆積し、この上部に腐植土が堆積していた。

b Bライン

Bラインは、東から第52号墳の前庭部、第56号墳石室を通っている(Fig.20)。土層観察はBライン南側25cmのラインで行った。1層は基盤層である。3・4層は第52号墳の填丘盛土と近似しており、52号墳から流出した填丘盛土が堆積したと推定できる。これらの土層上に5・6層が堆積しており、小流路はこの5層を侵食して形成されていた。小流路の埋土は、12・13層である。



Bライン

- | | | | | | | | |
|---|---------|------|----------|---------|---------|------|--|
| ① | 基盤層 | | | | | | |
| ② | 2.5Y7/4 | 浅黄 | 粗砂混じり細砂 | 1mm~3mm | しまり悪い | 砂質 | |
| ③ | 2.5Y6/6 | 明黄褐 | 極細砂~細砂 | 1mm~3mm | しまり悪い | やや粘性 | |
| ④ | 2.5Y7/6 | 明黄褐 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm~3mm | しまり普通 | 砂質 | |
| ⑤ | 2.5Y6/4 | にぶい黄 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm~3mm | しまり普通 | やや粘性 | |
| ⑥ | 2.5Y5/4 | 黄褐 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm~3mm | しまり普通 | やや粘性 | |
| ⑦ | 2.5Y7/6 | 明黄褐 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm~5mm | しまり普通 | 砂質 | |
| ⑧ | 2.5Y2/2 | 黒 | 粗砂混じり極細砂 | 2mm以下 | しまり悪い | 砂質 | |
| ⑨ | 2.5Y6/4 | にぶい黄 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm~3mm | しまりやや悪い | 砂質 | |
| ⑩ | 2.5Y7/6 | 明黄褐 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm~3mm | しまり悪い | 粘性砂質 | |
| ⑪ | 2.5Y5/4 | 黄褐 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm~2mm | しまり悪い | 砂質 | |
| ⑫ | 2.5Y7/6 | 明黄褐 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm~3mm | しまり良い | やや粘性 | |
| ⑬ | 2.5Y6/4 | にぶい黄 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm~3mm | しまりやや良い | 砂質 | |
| ⑭ | | 腐植土 | | | | | |

Fig. 20 発掘区 土層断面図 (Bライン)

c Eライン

Eラインは54号墳の墳丘北側裾部を通っており、墳丘北側で分流する流路の土層が観察された (Fig. 21)。土層観察はEライン南側50cmのラインで行った。1層は基盤層である。第54号墳の墳丘流出土はEラインでは観察されず、墳丘盛土上に流路の埋土である11層から13層が直接堆積していた。15層および16層も流路の埋土である。これら流路埋土の下層から8層がみられた。これらの上部に腐植土である18層が堆積していた。

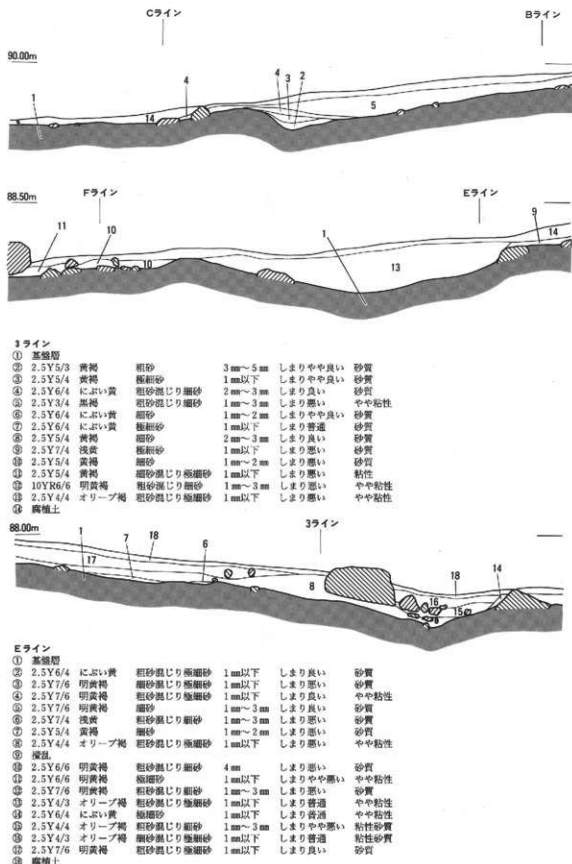
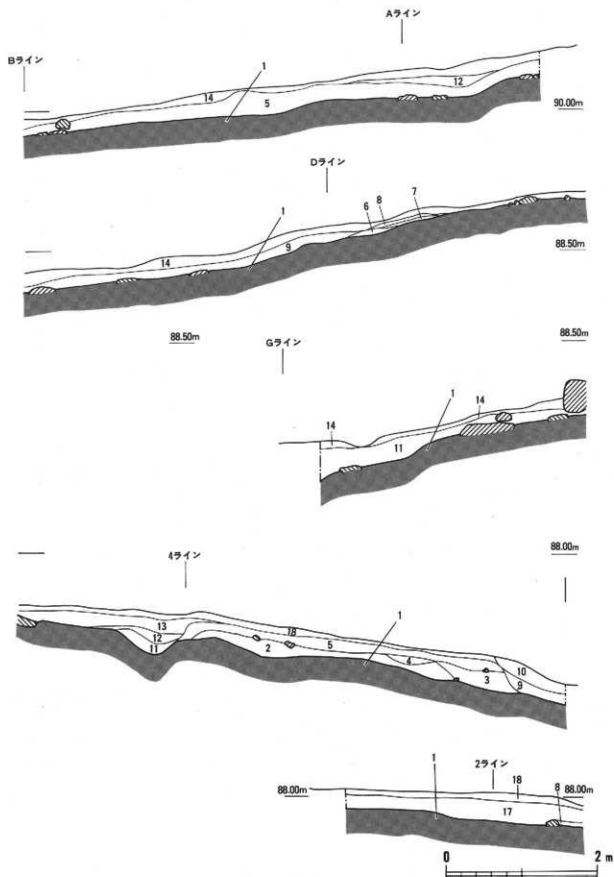


Fig. 21 発掘区 土層断面図 (3ライン, Eライン)



八十塚古墳群の研究

第52号墳主軸ライン

90.00m

第53号墳主軸ライン

89.00m

第53号墳主軸ライン

89.00m

第52-55号墳間

- | | | | | | |
|-----------|------|----------|---------|-------|----|
| ① 2.5Y7/6 | 明黄褐色 | 粗砂混じり細砂 | 1mm～2mm | しまり良い | 砂質 |
| ② 5.5Y6/6 | 黄色 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm以下 | しまり良い | 砂質 |

第53-55号墳間

- | | | | | | |
|-----------|------|----------|---------|-------|----|
| ① 2.5Y7/4 | 浅黄 | 粗砂混じり細砂 | 1mm～3mm | しまり良い | 砂質 |
| ② 2.5Y7/6 | 明黄褐色 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm～3mm | しまり良い | 砂質 |
| ③ 2.5Y6/3 | にぶい黄 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm～3mm | しまり悪い | 砂質 |
| ④ 2.5Y7/4 | 浅黄 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm～3mm | しまり良い | 砂質 |

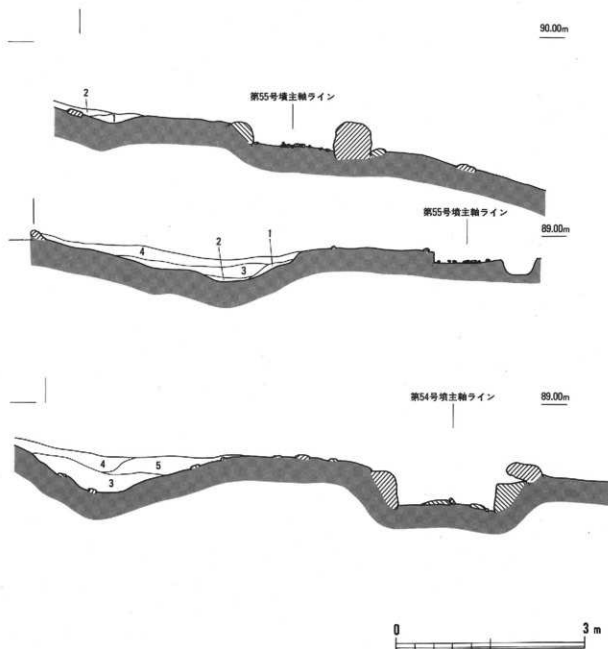
第53-54号墳間

- | | | | | | |
|-----------|-------|----------|---------|---------|------|
| ① 2.5Y6/3 | にぶい黄 | 粗砂混じり細砂 | 1mm～3mm | しまりやや悪い | 砂質 |
| ② 2.5Y7/4 | 浅黄 | 細砂 | 1mm～3mm | しまり悪い | 砂質 |
| ③ 2.5Y6/4 | にぶい黄 | 極細砂 | 1mm以下 | しまり普通 | やや粘性 |
| ④ 2.5Y4/4 | オリーブ褐 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm～3mm | しまり悪い | やや粘性 |
| ⑤ 2.5Y7/4 | 浅黄 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm～3mm | しまり良い | 砂質 |

Fig. 22 古墳間 土層断面図

d 第52号墳-第55号墳間の土層

第52号墳と第55号墳の築造の先後関係を確認するために、第52号墳の主軸・中軸の交点と、第55号墳の主軸・中軸の交点を結んだ線上に畦を設定し、墳丘上の土層を観察した (Fig. 22)。しかし、この土層の観察からは第52号墳と第55号墳の層序的な先後関係を確かめることはできなかった。1層は第55号墳の墳丘盛土と近似しており、墳丘上に直接堆積していたことから墳



丘流出土であることがわかる。2層は第52号墳の墳丘盛土からはやや離れた位置に堆積しており、土質も異なることから、第52号墳丘流出土ではないと推測した。

e 第53号墳－第55号墳間の土層

第53号墳と第55号墳の築造の先後関係を確認するために、第53号墳の主軸・中軸の交点と、

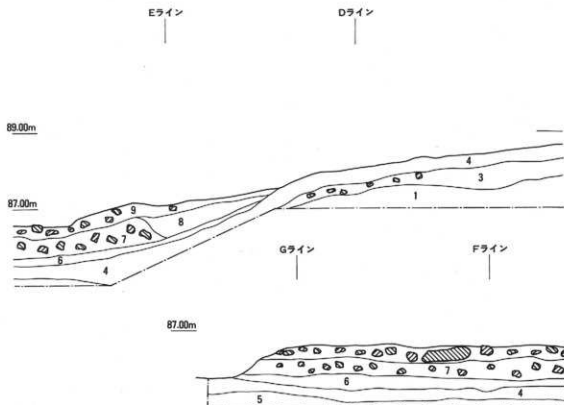


Fig. 23 基盤層 土層断面模式図

第55号墳の主軸・中軸の交点を結んだ線上に畦を設定し、墳丘上の土層を観察した (Fig. 22)。しかし、第53号墳－第55号墳間には小流路が形成されていたため、層序的には古墳の先後関係を確認できなかった。1層から4層までは流路の埋土であるが、これらは第53号墳および第55号墳の残存墳丘上に直接堆積していた。これらの土層は、墳丘盛土と異なっていた。

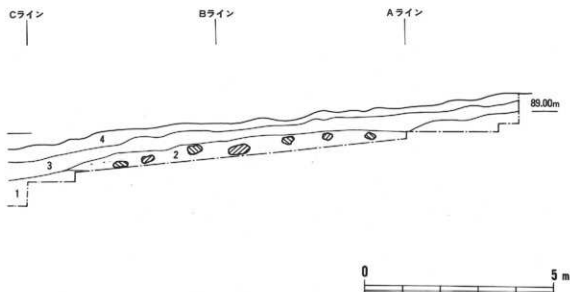
f 第53号墳－第54号墳間の土層

第53号墳と第54号墳の築造の先後関係を確認するために、第53号墳の主軸・中軸の交点と、第54号墳の主軸・中軸の交点を結んだ線上に畦を設定し、墳丘上の土層を観察した (Fig. 22)。第53号墳－第54号墳間には流路が形成されていたため、層序的に古墳の先後関係を確認できなかった。1層および2層は、第53号墳墳丘流出土である。なお、第54号墳墳丘上には流路の埋土である3層から5層が直接堆積しており、墳丘流出土は認められなかった。

E 基盤層

各遺構の調査がすべて終了した後に、古墳の立地基盤を調査するため基盤面に各古墳の主軸・中軸に沿ってトレンチを設定し、土層の観察を行った (Fig. 23)。

基盤層中には、遺構面に露頭している花崗岩礫より大きな礫が含まれていた。しかし、基盤層中の花崗岩礫の数や大きさには、土層によってかなりの差異が認められた。土層はすべて北



① 10YR6/6	明黄褐色	粗砂混じり極細砂	1mm以下	しまり非常に良い	粘性砂質
② 7.5YR7/	黄褐色	粗砂混じり極細砂	1mm～3mm	しまり非常に良い	粘性砂質
③ 10YR6/6	明黄褐色	細砂混じり極細砂	1mm～3mm	しまり非常に良い	粘性砂質
④ 10YR6/6	明黄褐色	粗砂混じり細砂	1mm以下	しまり非常に良い	粘性砂質
⑤ 10YR5/6	黄褐色	粗砂混じり粘土	1mm～3mm	しまり非常に良い	粘性
⑥ 2.5Y4/6	によい黄	粗砂混じり細砂	1mm～3mm	しまり良い	やや粘性砂質
⑦ 10YR7/4	によい黄	粗砂混じり粘土	1mm以下	しまり良い	粘性
⑧ 10YR6/6	明黄褐色	粗砂混じり極細砂	1mm以下	しまり非常に良い	粘性砂質
⑨ 2.5Y6/6	明黄褐色	粗砂混じり極細砂	1mm以下	しまり悪い	やや粘性

から南へ向かって斜め方向に堆積しており、水平堆積は認められなかった。

1層は調査区の北半部で認められた。きめの細かい粒子で構成され、花崗岩礫をほとんど含んでいなかった。下部は確認しておらず、層厚は不明である。1層上に堆積している2層は北半部に限って認められ、調査区外へ続いている状況が確認された。この土層を構成している粒子は大きく、また、直径が1m以上を超える巨石を多く含み、1層との明瞭な質的相違が認められた。1層および2層上に堆積していた3層は、1層と近似した土質であったが、粒子が1層よりやや大きく、直径50cm程度の礫を若干含んでいた。4層は3層上に堆積しており、広範囲にわたって観察された。4層を構成する粒子はやや大きく、直径1mmから3mm程度のものである。第52号墳および第55号墳は4層上に立地しており、石室掘形はこの土層上面から穿たれていた。また、3層および4層には、花崗岩礫が少量含まれていた。5層は南半部に認められ、北半部の土層とは質的な相違がある。この5層上には4層が堆積していた。4層上に堆積している6層には、花崗岩礫が少量含まれていた。6層上に堆積している7層には、直径1m前後の巨石が数多く含まれていた。4層および7層上に堆積している8層は、礫の量が比較的に少なく、含まれる礫もやや小さい。4層および7・8層上に堆積する9層は、非常に大きな花崗岩礫を数多く含んでいた。

F まとめ

調査地点は、ドンドン川対岸にあたる北東側にはE小支群、南西側にはH小支群など八十塚古墳群やヶ平支群の中で古墳が濃密に分布する地区が至近距離に所在し、従来より古墳の存在が推測されていた地点であった。現状地形は南向きの緩傾斜面で、山林であった。傾斜面の標高は85.50mから91.25mを測る。芦屋市教育委員会によって行われた確認・分布調査では、当敷地内に少なくとも5基の古墳が存在することが確認された。

全面調査の結果、当該敷地内からは5基の古墳が検出された。確認・分布調査で確認されていたもののうち、3基（第52・53・54号墳）は横穴式石室墳であった。また、敷地北西部の隆起は敷地外に存在する古墳墳丘の一部の可能性がある。敷地南西部の残り1基については、自然の隆起であることが判明した。

八十塚古墳群が立地する六麓荘・岩ヶ平台地の表層部は花崗岩の巨礫を多く含む段丘礫層に覆われており、地表には多くの花崗岩礫が露頭していた。このような場所に群集墳が形成された理由として、石室石材が容易に採れるためであるとの指摘もある〔古川¹¹1990〕。同様に石材が豊富であることから、元和年間（1620年代）に再築された大坂城の石垣用石材の多くも当地域から採石されている。その痕跡が刻印石や矢穴石などの関連石材として確認されており、当地域周辺は徳川氏大坂城東六甲採石場やヶ平刻印群と呼ばれている〔藤川¹²1979〕。今回の調査地点内においても、敷地南端部の第54号墳南方で矢穴石1石を検出した。また、ドンドン川対岸の東側隣接敷地内で、「井」刻印が刻まれた刻印石を検出した。これらの石材から当該敷地周辺においても、大坂城石垣用石材が採石されていたことが推測され、採石地で調整石に加工された石材は、ドンドン川を経由して、海浜部の船着場に運搬されたことが想像できる〔森岡・白谷¹³1994〕。

調査地点は、起伏に富んだ地形で、手の指を広げたように数本の尾根状地形がみられ、その間の谷間には雨水が流れる流路が形成されていた。各古墳は、尾根状地形の鞍部を意識的に利用して築造されていた。また、流路は、土層から墳丘構築後に墳丘裾を侵食しながら形成していったことが観察された。

古墳築造の先後関係の解明を試み、各古墳間に畦を設定し土層の観察を行った。しかし、いずれの古墳間にも先述した流路が形成されており築造時の堆積状況は既に失われていたため、層序的に古墳の先後関係を確認することはできなかった。

古墳の立地基盤を確認することを目的として、基盤面に各古墳の主軸と中軸に沿ってトレンチを設定し、土層の観察を行った。基盤層中には、遺構面に露頭している花崗岩礫より、さらに大きな礫が含まれていた。その中には直径が1mを超える巨石も含まれていた。また、調査地点南端部付近で第54号墳の南側にあたる地点では、土石流堆積物の先端であると考えられる多くの花崗岩礫によって形成された段差が認められた。

このように今回の発掘調査では、八十塚古墳群やヶ平支群および徳川氏大坂城東六甲採石場やヶ平刻印群について、従来の調査では得られなかった新たな知見を得ることができた。

2 岩ヶ平支群第52号墳

A 古墳の立地	E 土 層
B 墳丘の調査	F 出土遺物
C 石室の調査	G まとめ
D 石室掘形の調査	

A 古墳の立地

第52号墳は、発掘区の北端で検出された。今回調査を行った5基の中では最も高所に位置し、標高89.00mから90.50mに至る緩傾斜地に築造されている (Fig.19)。当古墳が立地している地点は、微地形的にみると周辺より基盤層が隆起しており、幅10m程度の緩やかな尾根状の地形をなしている (Fig.25)。当古墳は、この尾根状地形の中央部に石室掘形を穿ち築造されている。なお、この尾根状の地形は、南方の第53号墳へと続いている。

当古墳の周辺地形をみると墳丘の東方約15mには、現在、ドンドン川が流れている。当河川と当古墳の間は急な斜面をなしており、基盤層に含まれる花崗岩の巨石が多く露頭している。墳丘西側では自然流路を検出した。この流路は当古墳の周溝と1.5m程度の間隔を保ちながらほぼ平行しており、他の古墳でみられたように周溝が流路によって侵食されていることはなかった。古墳と流路の先後関係については、遺構の重複関係や土層の観察からは明確にすることができなかった。しかし、この流路が第53号墳より後に形成されたことが明らかになっており、当古墳においても築造後にこの流路が形成された可能性が高い。なお、流路は北側が深く南方へいくほど浅くなっていく。墳丘南方は比較的緩やかな斜面地であるが、多くの土砂は既に流出しており堆積土はほとんどみられなかった。墳丘北方は発掘区外へとのびており、詳細な状況は不明である。このように周囲の地形は、東方と南方を中心に土砂の流出が著しく、墳丘盛土の多くも流出していた。

古墳が立地している基盤層には花崗岩の巨石が含まれており、基盤面にも墳丘東方を中心にそれらが露頭していた。

B 墳丘の調査

a 調査前の墳丘

調査前において、墳丘は確認されなかった。これは石室規模等から、本来、低墳丘であったと推定される上、墳丘盛土の流出をはじめとして大幅な改変を受けていたためである。当古墳の場合は、むしろ、墳丘の中央部に奥壁や東西の側壁が一部露出していたことが、古墳の存在

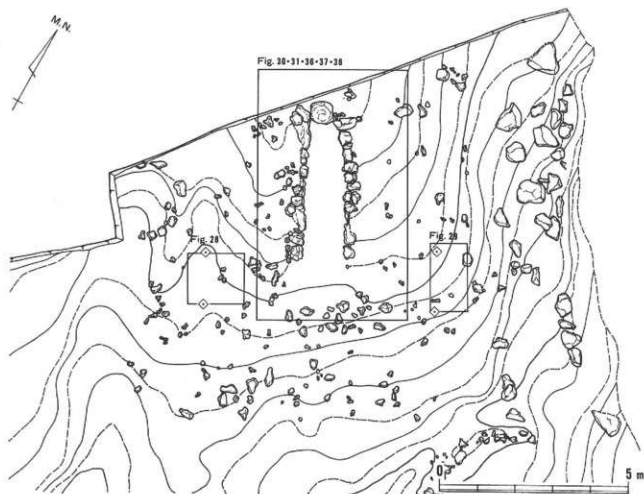


Fig. 24 第52号墳 挿図配置図

を確認するのに良好な指標となった。

地形測量を行った結果、石室西側において標高90.00mから90.75mにかけて等高線が南側に直線的に張り出していることを読みとることができた (Fig. 25)。墳丘東側は裾部がドンドン川の谷地形へと続いていたので、東側裾部を明確に把握することはできなかった。墳丘南側の裾部は、確認できなかった。このように墳丘は、発掘調査を行う以前においてかろうじて測量図から読みとることができたものの、墳形や墳丘規模を明らかにすることはできなかった。

b 検出時の墳丘

墳丘盛土の残存状況は悪く、石室より南側で基盤面から厚さ約0.1m、東側で約0.4m、西側で約0.25m程度遺存しているにすぎなかった (Fig. 26, PL. 14)。前庭部から残存墳丘の最高点までの比高差は、わずか0.6mである。墳丘盛土内には、石室掘形掘削時に基盤層に含まれていたものが排出されたと推測する握拳大から人頭大の礫が多量に含まれていた。これらの礫は石室西側において一部みられたものの、その多くは石室東側に集中していた。礫の分布には、列石のような規則性はまったく認められなかった。

墳丘盛土が残存していた範囲は、主軸上で南北5.8m、中軸上で東西7.4mである。ただし、墳丘北側が発掘区外にあたるため、南北の規模はさらに大きくなる可能性が高い。墳丘西側で

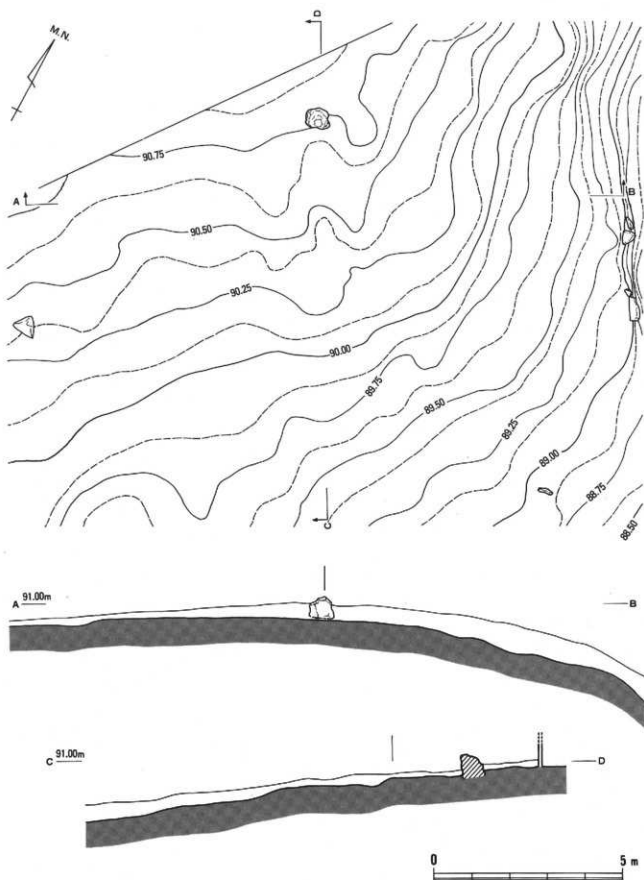


Fig. 25 第52号墳 調査前墳丘測量図

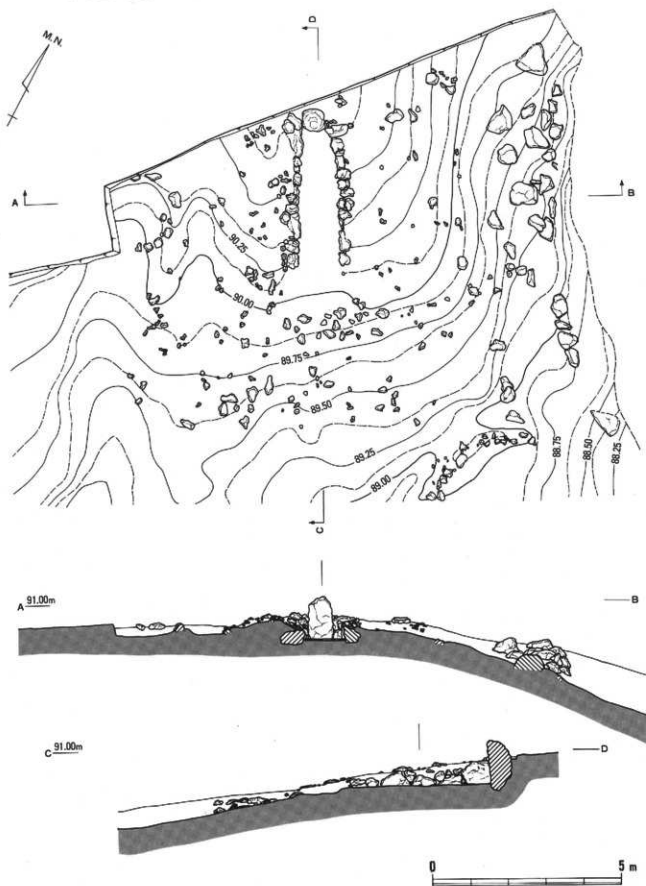


Fig. 26 第52号墳 墳丘測量図

は周溝が検出されており、裾部は良好に遺存していた。石室主軸から西側裾部までの距離は、石室中軸上で2.6mとなり、東側裾部は石室主軸から3.1mの距離にある。このことから、石室は墳丘のやや西側に偏って設けられたことが分かる。

墳形については、盛土の多くが流出しているため、築造当初の状況をどの程度とどめているのか不明である。しかし、裾部は西側が比較的良好に築造当時の状況をとどめており、周溝が直線的であることと墳丘の等高線もほぼ方形に巡ることから、方墳と考えられる。ただし、隅角は円く不整の方形を呈するものであろう。

墳丘規模は、前述したとおり墳丘北側が完掘できないので全体を明確にし得ないが、東西辺の規模から一辺が7m前後であったと推測する。

なお、古墳を区画する列石等の外部施設は、まったく検出されなかった。

c 墳丘に関連する遺構

①周 溝

墳丘の西側に接して、石室主軸にほぼ平行する周溝を検出した (Fig.26, PL.14-1)。ただし、北側は発掘区外にのびており詳細は不明である。周溝は、墳丘形状に沿って直線的に掘削

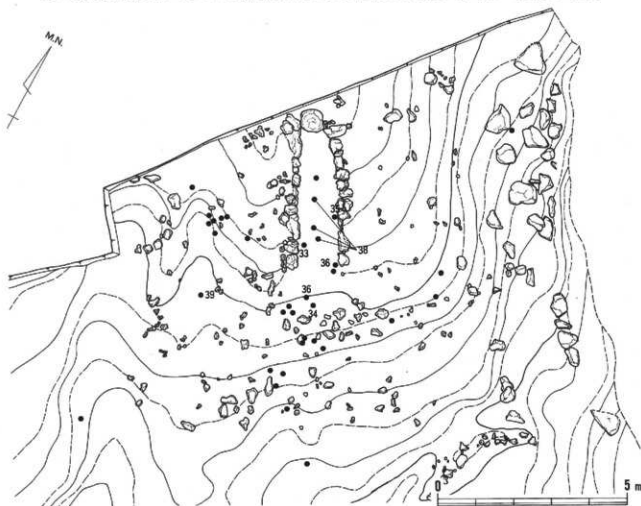


Fig. 27 第52号墳 遺物分布図

されている。規模は、長さ約6.2m以上、幅約1.3mを測る。深さは最も深い箇所です約0.4mを測り、南側を下るにつれ浅くなっていき、やがて消滅する。なお、墳丘東側および墳丘南側では周溝は確認されなかった。

d 墳丘に伴う遺物の出土状況

西側周溝内から須恵器の長頸壺、東側墳丘裾部から土師器の甕が出土した。また、前庭部からは須恵器の杯蓋・杯身、土師器の甕が出土している。他にも器種が不明な須恵器の細片が、各所より出土した (Fig.28・29)。

①墳丘西側の周溝の遺物出土状況

墳丘西側の周溝内からは、須恵器の長頸壺 (39) が出土した (Fig.28, PL.15-2)。長頸壺

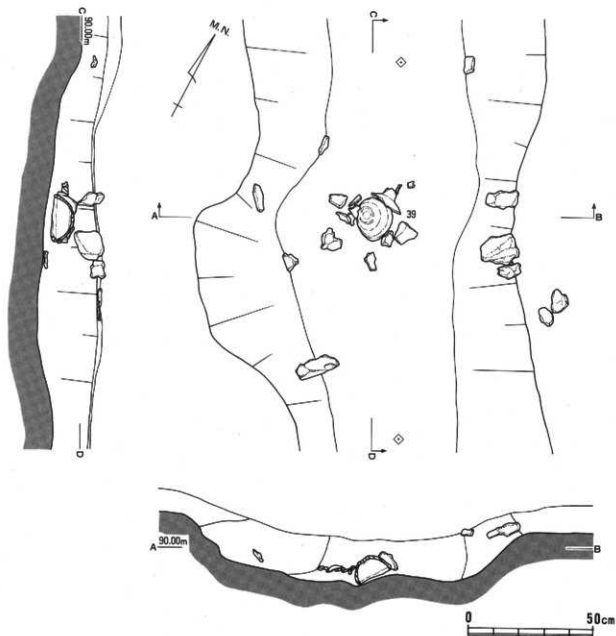


Fig. 28 第52号墳 墳丘西側周溝 土器出土状況図



Fig. 29 第52号墳 墳丘東側裾部 土器出土状況図

は周溝底面に接して検出され、原位置を保っていると考えられる。底部は上を向き、頸部が周溝底部に接している状態であった。長頸壺は口縁部が完全に欠損していたものの、頸部や胴部、脚部はほぼ完存していた。このような出土状況から、意図的に口縁部を打ち欠いた後、周溝内に置かれたと想定される。

②墳丘東側裾部の遺物出土状況

墳丘東側裾部からは、須恵器の杯身(37)、土師器の甕が出土した(Fig.29, PL.15-1)。これらはいずれも基盤面もしくは墳丘に接して検出されていることから、原位置を保っていると考えられる。土師器の甕は、細かい小片となって比較的広い範囲に散在していた。他にも須恵器や土師器の小片が、若干出土した。

③前庭部の遺物出土状況

前庭部からは須恵器の杯身、土師器の甕が出土している。しかし、前庭部の樹木を除去している際に木根の下から出土したため、詳細な記録をとることができなかった。土師器の甕は口縁部の形状や胎土・器壁の調整手法の観察から、少なくとも2個体以上あったと考えられる。煤等は付着していなかった。これら土師器の甕は、原位置を保っていた可能性が高い。

須恵器の杯身片は石室内から出土したものと接合関係にあるので、前庭部から出土した土器の一部には石室内から流出したものも含まれていることが分かる。出土状況や出土層位、土器片の接合関係等を勘案すると、本来、石室内に副葬されていたものが、後世の攪乱によって流出したものであろう。

C 石室の調査

第52号墳の内部施設は無袖形の横穴式石室であり、主軸上で全長3.68m、中軸上で幅1.14mを測る。南南東に開口し、調査のため設定した主軸方位は磁北から28°15'24"西偏する。

石室は、基盤層を掘り込んで造成した石室掘形内に築かれていた。石室平面形は、開口部を最大幅とし奥壁側が狭くなる形状を呈している。

a 石室の検出状況

石室上面の腐植土を除去した段階で、奥壁および東西の両側壁の一部が露出し、当古墳が南北方向に主軸をもち、南南西に開口する無袖形の横穴式石室であることが判明した(Fig.30, PL.13)。石室内部には転落した石室石材と思われる扁平な石材や、後世の採石時に生じた屑石がみられた。特に石室検出時において石室中軸よりやや北側の東壁に接して2石の扁平な石材を検出した。これらは形状や大きさが石室石材と近似している。また、石室内へ流入した堆積土の中にも大小さまざまな自然礫が観察された。これらの礫は、奥壁側から南へ2.0m付近までに顕著にみられた。

b 石室の構造

石室は東壁が屈曲する不整形な平面形を呈する(Fig.31・32, PL.14)。石室幅は開口部付近を最大として、奥壁側ほど狭くなっている。奥壁は一石の石材により構成され、東西の側壁を

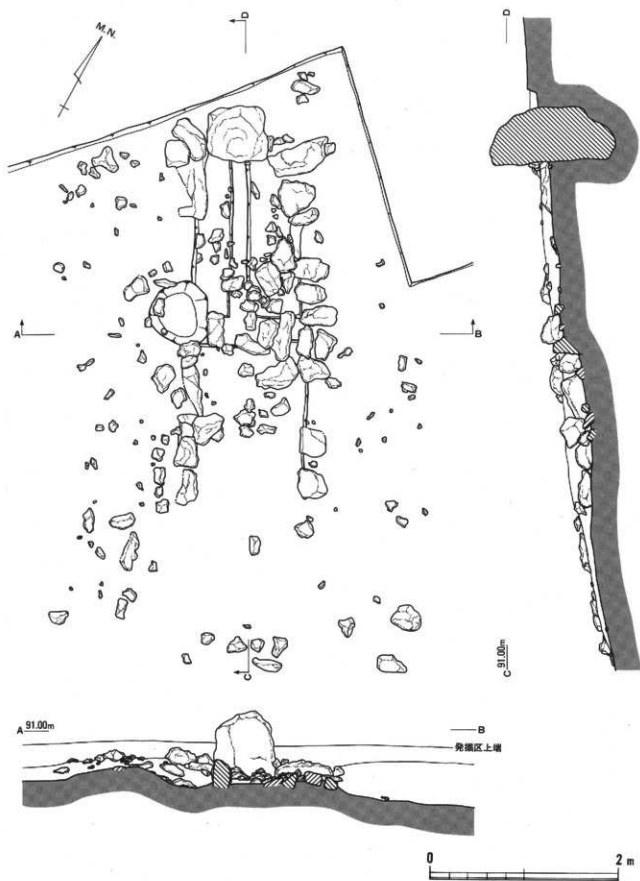


Fig. 30 第52号墳 石室検出状況実測図

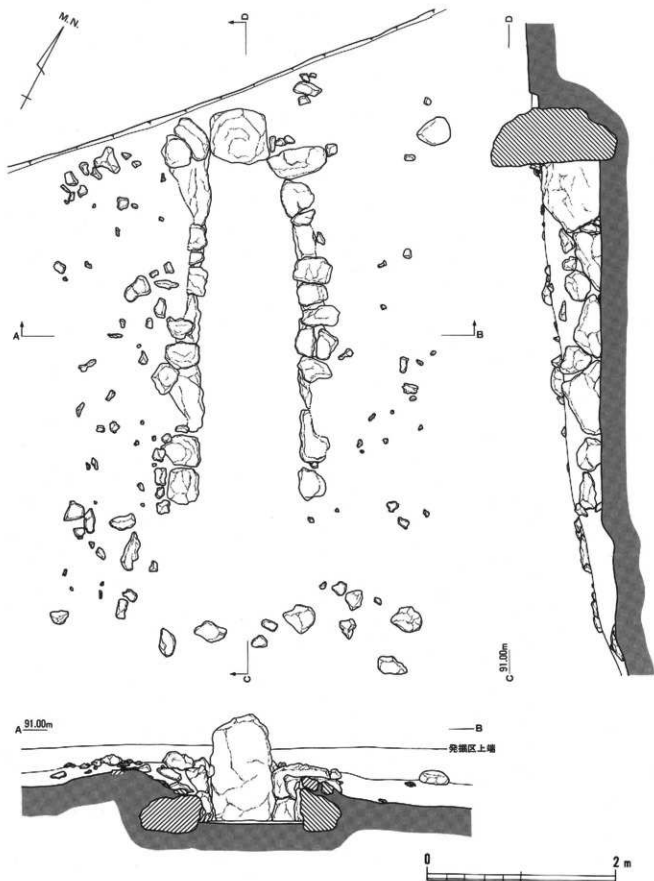


Fig. 31 第52号墳 石室上面実測図

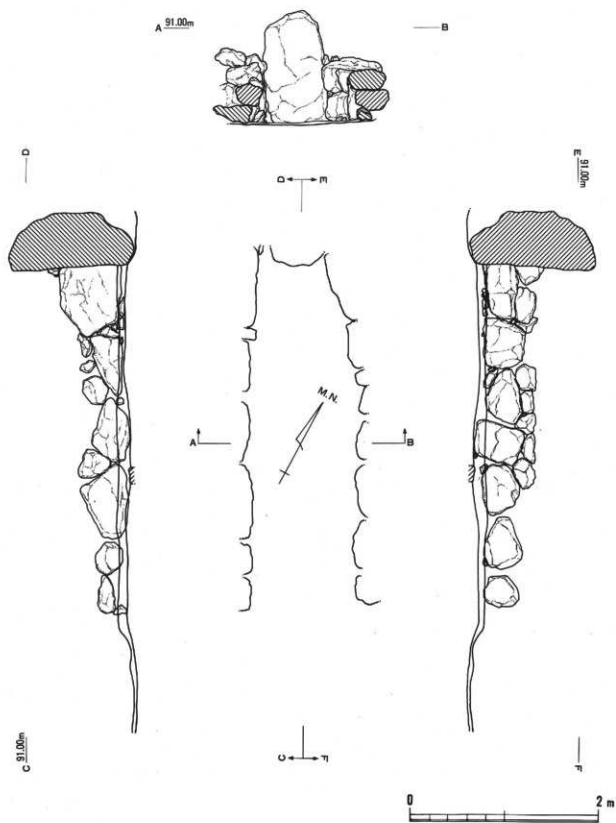


Fig. 32 第52号墳 石室実測図

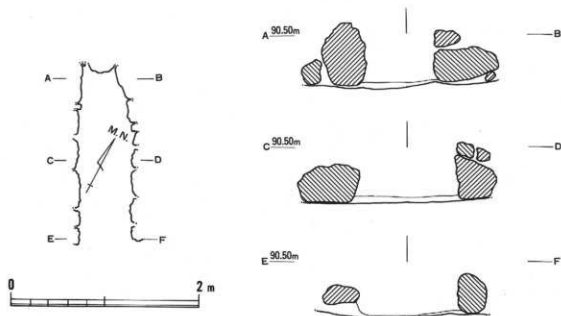


Fig. 33 第52号墳 石室横断面図

奥壁であるこの石材の幅に合わせるように石室を構築したため、このような平面形になったと考えられる。壁体は、良好な箇所まで基底石から2段目まで残存していた。閉塞施設は、まったく検出されなかった。

①奥壁

奥壁は、縦置きにした柱状の石材1石から構成されている(PL.17)。石材は高さ1.14m、幅0.76m、厚さ0.61mを測る。石材の平滑な部分を選択し、壁面として使用していた。

②西壁

基底石は計6石で構成されており、2段目の石材は4石遺存していた(PL.16-1)。壁体は長さ3.85mで、残存高は遺存状況が最も良好な箇所まで床面から0.62mを測る。基底石の大きさにはばらつきがあるが、奥壁に近い位置ほど大振りな石材を使用するという傾向がみられる。開口部側の側壁2石は他の側壁より小振りな石材を使用し、他の基底石と異なり置土上に据えられていた。これらのことから、他の基底石とは区別して考える必要がある。おそらく、構築の工程が別で、この基底石付近には天井石が架構されていなかったのではなかろうか。基底石の据え方は、大部分のものが石材の面積が広い面を接地面として使用しているが、奥壁から1石目の石材のみ立てて使用していた。これは石室掘形が、奥壁側の方が深いことに起因していると考えられる。なお基底石上面の標高は揃っておらず、1段目と2段目の間に目地は通っていない。

2段目の石材は基底石と比較して小振りの石材を使用しており、いずれも面積の広い面を底面として使用していた。2段目の石材は、標高90.40m前後でほぼ揃えられている。この高さは、東壁基底石の高さにほぼ一致している。これらの石材は、基底石間の隙間に谷積みされているものが多かった。

西壁は石材の大きさや類例から想定すると、開口部側の2石を除いて本来、3段から4段積

みであったと推測される。

③東 壁

基底石は計7石で構成されており、2段目の石材が8石遺存していた。壁体の長さは、3.5mを測る(PL.16・2)。残存高は、遺存状況が最も良好なところで床面から0.63mを測った。基底石は、すべての石材が面積の最も広い面を接地面として使用している。基底石上面の標高は、厳密には揃っていない。開口部側の側壁2石は他の側壁より小振りの石材を使用し、他の基底石と異なり置土上に据えられていた。また、石材上面は丸みを帯びた形状をしている。以上のことから西壁と同様、他の基底石とは区別して考える必要がある。

2段目石材もすべて面積が最も広い面を底面として、基底石上に積まれていた。なお、2段目石材の上面は標高90.50mにほぼ揃っており、この高さに目地が通っていたことが想定される。

④床 面

床面には、全面にわたって厚さ10cm程度の置土が認められた。置土は盛土と石室掘形の埋土に近似していた。なお、床面の置土上には敷石等の施設はなく、粘土による貼土も施されていないかった。

c 石室内の遺物出土状況

当古墳は築造後、盗掘等を受ける間もなく早い時期に崩壊したと考えられ、石室内の遺物の遺存状態は他の4基の古墳と比べて良好であった(Fig.34, PL.18・19)。石室内からは、鉄釘(1~32)と須恵器が出土した。

鉄釘は木棺を緊結していたと推定されるもので、奥壁付近から南約2.35m付近までの範囲に散在していた。鉄釘が東壁沿いからは出土しないことから、西壁側に寄せて木棺が置かれていたと推測される。出土した鉄釘で完形のもの、まったくなかった。しかし、鉄釘片すべての合計長は、1本あたりの長さを8cmとした場合、約25本分となる。この本数は1棺あたりの必要本数としては首肯できる数である。

須恵器は杯蓋が2個体、杯身・高杯・蓋が各1個体出土した。杯蓋(33)は、石室南西部から出土した。杯蓋(35)は、石室中央部から上下逆の状態出土した。杯身(36)は、開口部東側から出土した。杯身(37)は、石室南部中央から出土した。この杯身は後の整理段階で前庭部から出土した杯身片と接合でき、このことから前庭部の杯身片は本来石室内にあったものであることがわかった。高杯(38)は、石室南部中央から出土した。床面自体が攪乱を受けていないことから、これらの遺物は原位置を保っていると考えられる。鉄釘の出土状況や須恵器に型式差がみられないことなどから、単葬であったと推測できる。

なお、石室内流入土はすべて水洗選別を行ったが、玉類など他の遺物はまったく確認されなかった。

D 石室掘形の調査

当古墳では、平面がU字形を呈する石室掘形を検出した(Fig.38, PL.24)。石室掘形は石室と同程度の規模で穿たれており、石室掘形が石室より一回り大きな他の古墳とは様相を異にす

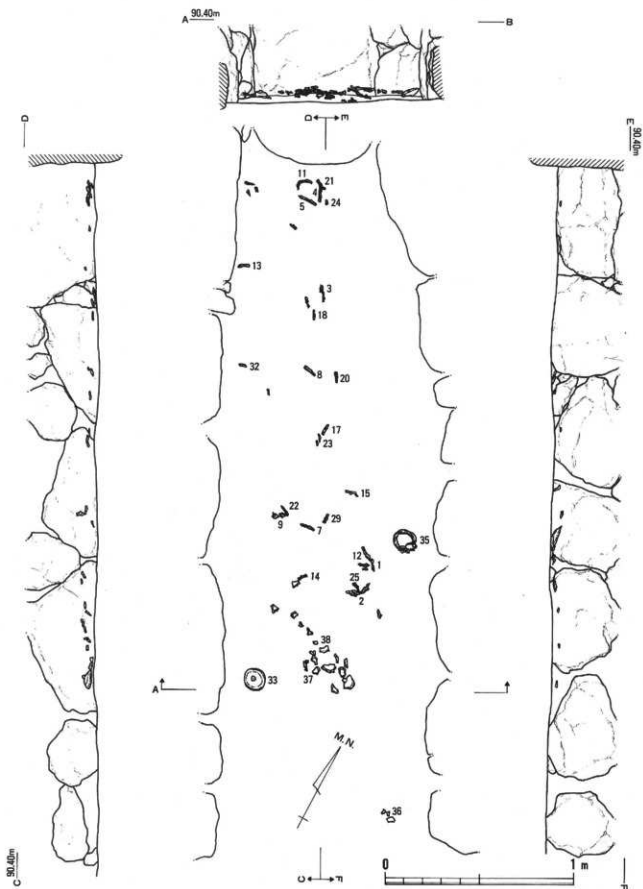


Fig. 34 第52号墳 石室床面遺物出土状況図

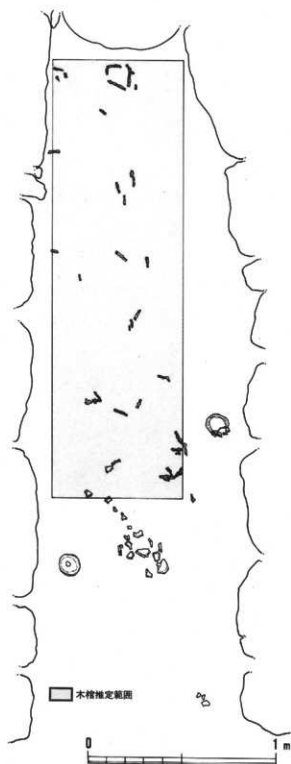


Fig. 35 第52号墳 木棺位置推定図

え付け穴が穿たれていた。据え付け穴は、奥壁および西壁4石、東壁5石に認められ、すべての基底石に穿たれていた訳ではない。いずれも、不整形で浅いものであった。

る。当古墳が立地する尾根状地形のほぼ中央部稜線上に穿たれている。周辺は広い平坦面をなしており、石室掘形掘削に先行して基盤面を一部平坦に造成したことが想定される。石室掘形周辺は東側肩部を中心として基盤層中に含まれる花崗岩礫が多数露頭していた。なお、基盤層中の花崗岩礫は一部、基底石とかみ合っており控え積みとしての役割を果たしている。

a 裏込めの状況

裏込め土は質的には基盤層のものと近似しており、掘形掘削時に排出した土をそのまま利用したと考えられる (Fig. 36, PL. 20)。裏込め土には、直径5 cmから30 cm程度の花崗岩礫が含まれていた。これらの一部は基底石にかみ合っており、控え積みとしての役割を果たしている。墳丘盛土中にも同様の礫が多くみられた。また、裏込めの土質は、墳丘盛土とも類似していた。

b 石室掘形の形態

石室掘形は、主軸上で南北4.15 m、中軸上で東西2.53 mを測り、U字形を呈する (Fig. 38, PL. 24)。石室掘形底部から肩までの高さは、北西側が最も高く比高差0.27 mとなっている。南側へ行くほどこの比高差は小さくなり、やがて消滅する。底部から東西の肩までの高さは、ほぼ同じである。石室掘形面は、東西はほぼ水平で南北では南側が若干低くなっている。底面には、基底石を置くための据

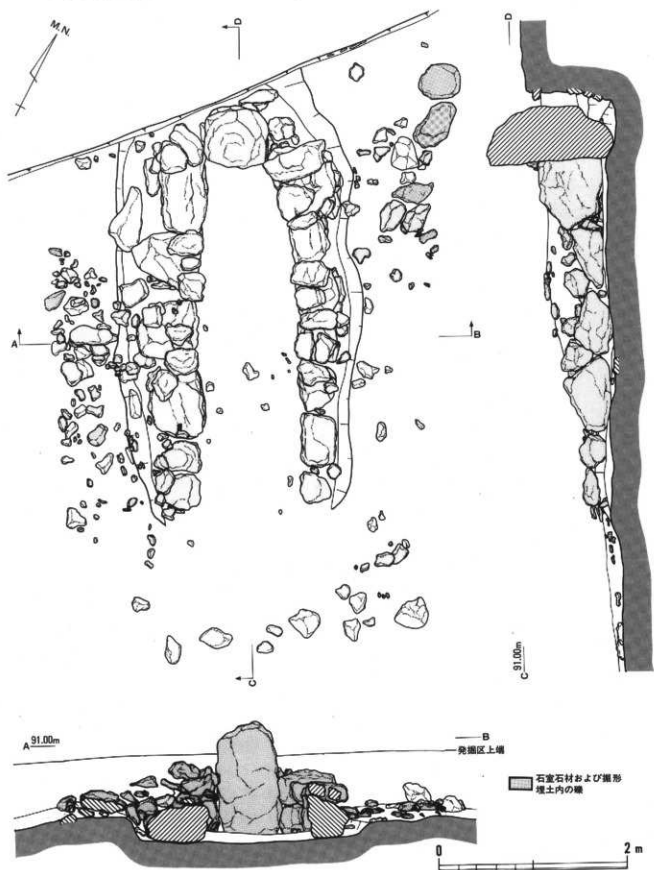


Fig. 38 第52号墳 石室および石室掘形実測図

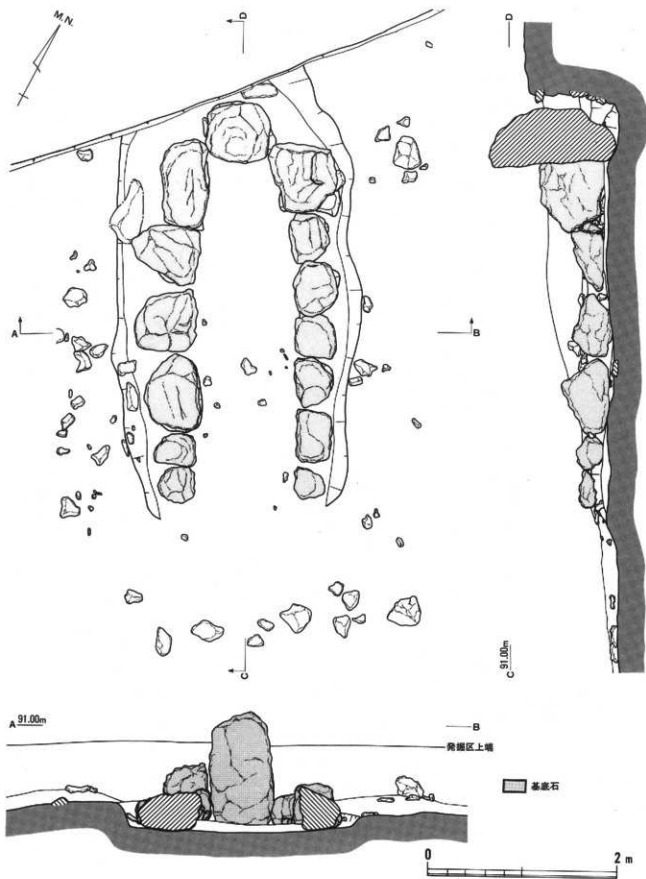


Fig. 37 第52号墳 基底石および石室掘形実測図

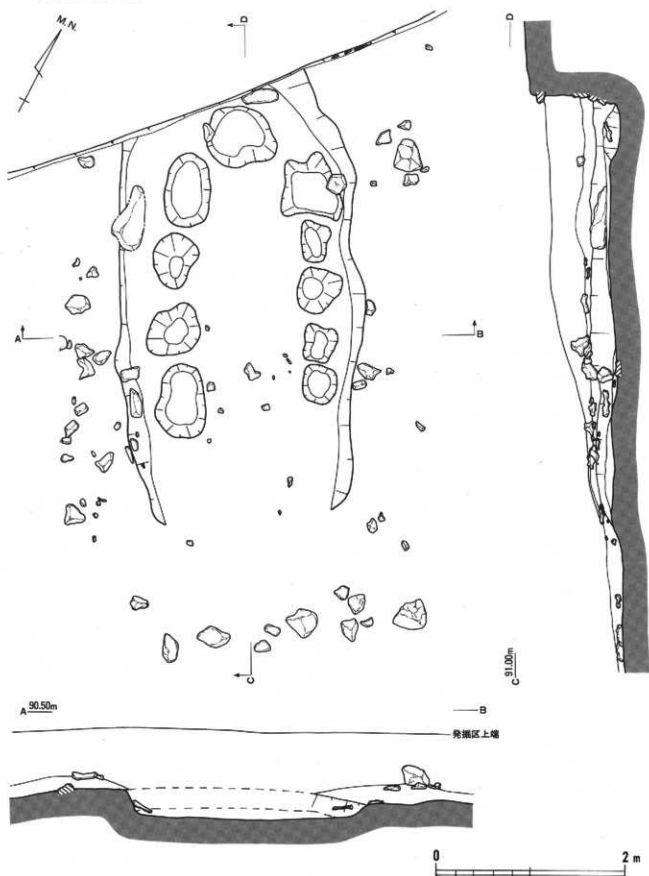


Fig. 38 第52号墳 石室掘形実測図

E 土 層

当古墳の調査では、石室主軸と中軸に沿って畦を設定し、土層観察および図面作成を行った。土層は大きく墳丘盛土、石室掘形埋土、床面置土、石室内流入土、残存墳丘上の堆積土および小流路埋土にわかれる (Fig. 39, PL. 21)。

a 墳丘盛土および石室掘形埋土

2層から14層は、墳丘の盛土および石室掘形埋土である。墳丘盛土と石室掘形埋土の質的な相違はみられなかった。18層から30層は、残存墳丘上の堆積土および自然流路の埋土である。18層から21層は、流出した墳丘盛土が裾部に堆積した土層であると考えられる。小流路は墳丘上に堆積した土層を侵食していることから、当古墳築造後に形成されたことが分かる。なお、石室東側の14層中と石室西側の19層中には、直径約0.7mにわたって炭化物が散在していた。中には直径3cm程度の炭化物もみられた。

b 床面置土

当古墳では、基盤面に置土をして床面としていた。置土は15層から17層である。15層の上に16層が、16層の上に17層が堆積していることから、奥壁側から置かれていることが分かる。なお、これら置土から形成される床面は、一面のみである。

c 石室内流入土

31層から43層は、石室内に流入した堆積土である。39層は、奥壁より南へ約1mまでの範囲でみられる黄橙色砂質土層で非常にしまりが良く、壁土のような土質であった。33層および36層は、比較的多くの礫を含んでいた。36層・39層中には、後世の採石時に生じた石屑が含まれていた。おそらく、石室埋没過程にできた凹みに投棄されたものであろう。流入土中の32層に含まれる礫は、一部が床面置土中にまで入り込んでいることから、早い段階に石室が崩壊していたと推測することができる。

F 出土遺物

a 石室床面の出土遺物

原位置を保っていると考えられるものは、鉄釘(1~32)、須恵器の杯蓋(33・35)、杯身(37)、高杯(38)である (Fig. 40~42, Tab. 2~4, PL. 75)。鉄釘の出土した石室南西側の南北2.35m、東西0.7mの範囲では、他の遺物は出土しなかった。鉄釘出土範囲の周辺から土器類が出土することからも、この範囲に木棺を納置していたと推測される。他に石室内に堆積した流入土より、若干の須恵器および土師器の細片が出土したが、これらはいずれも原位置を保っておらず図化し得ないものであった。

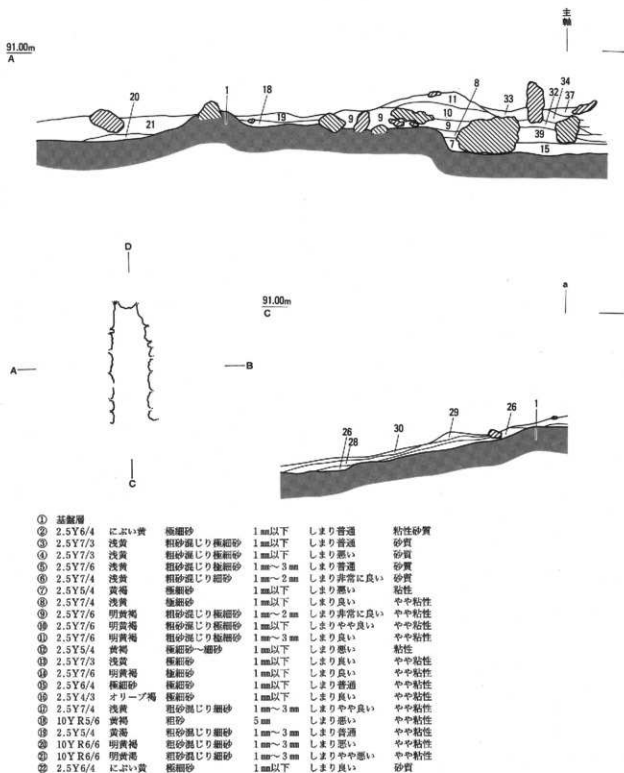
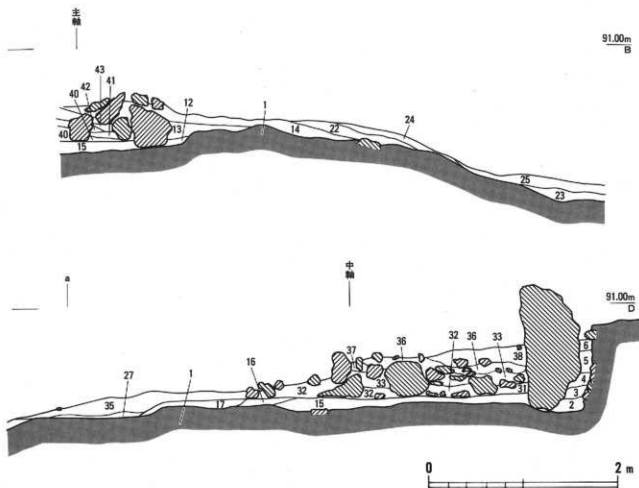


Fig. 39 第52号墳 土層断面図

b 前庭部の出土遺物

須恵器の杯蓋(34)、杯身(36)が出土している。これらは堆積土中で検出したので、原位置は保っていないと推測した。杯身片(36)は石室内出土の破片と接合できたことから、石室内から流出したものと考えられる。



㊸	2.5Y6/6	明黄褐色	粗砂混じり細砂	1mm~3mm	しまり悪い	粘性砂質
㊹	2.5Y7/6	明黄褐色	極細砂	1mm以下	しまり良い	砂質
㊺	2.5Y7/6	明黄褐色	極細砂	1mm以下	しまりやや良い	砂質
㊻	2.5Y6/6	明黄褐色	極細砂~細砂	1mm~2mm	しまり普通	砂質
㊼	2.5Y6/6	明黄褐色	極細砂~細砂	1mm~2mm	しまり悪い	やや粘性
㊽	2.5Y7/6	明黄褐色	粗砂混じり細砂	1mm~3mm	しまり普通	砂質
㊾	2.5Y7/6	明黄褐色	粗砂混じり細砂	1mm~3mm	しまり悪い	砂質
㊿	2.5Y5/4	黄褐色	粗砂混じり細砂	1mm~3mm	しまり普通	やや粘性
㊸	2.5Y3/4	黒褐色	細砂~粗砂	1mm~3mm	しまり悪い	砂質
㊸	2.5Y7/6	浅黄褐色	粗砂混じり極細砂	1mm以下	しまりやや良い	砂質
㊸	2.5Y4/3	オリーブ褐色	極細砂~細砂	1mm~2mm	しまり良い	やや粘性
㊸	2.5Y5/4	にぶい黄褐色	極細砂~細砂	1mm以下	しまり良い	砂質
㊸	2.5Y4/3	オリーブ褐色	極細砂~細砂	1mm~2mm	しまり普通	やや粘性
㊸	2.5Y3/4	黒褐色	細砂~粗砂	1mm~3mm	しまり悪い	砂質
㊸	2.5Y5/4	黄褐色	細砂	1mm	しまり良い	やや粘性
㊸	2.5Y3/4	黒褐色	細砂~粗砂	1mm~3mm	しまり普通	砂質
㊸	2.5Y7/6	浅黄褐色	粗砂混じり極細砂	1mm以下	しまり良い	砂質
㊸	2.5Y5/4	黄褐色	極細砂~細砂	1mm以下	しまりやや良い	やや粘性
㊸	2.5Y5/4	黄褐色	極細砂~細砂	1mm~3mm	しまり良い	やや粘性
㊸	2.5Y6/4	にぶい黄褐色	粗砂混じり極細砂	1mm以下	しまり悪い	砂質

c 墳丘上および周溝の出土遺物

墳丘西側で検出した周溝より、須恵器長頸壺(39)が出土している (Fig.28, Tab. 4, PL.75)。出土状況から原位置を保っていると考えられる。この他に墳丘上の堆積土中より須恵器と土師器の細片が出土しているが、原位置は保っていない。

また墳丘東側裾部からは土師器甕が出土したが (Fig.29)、細片のため図化できなかった。

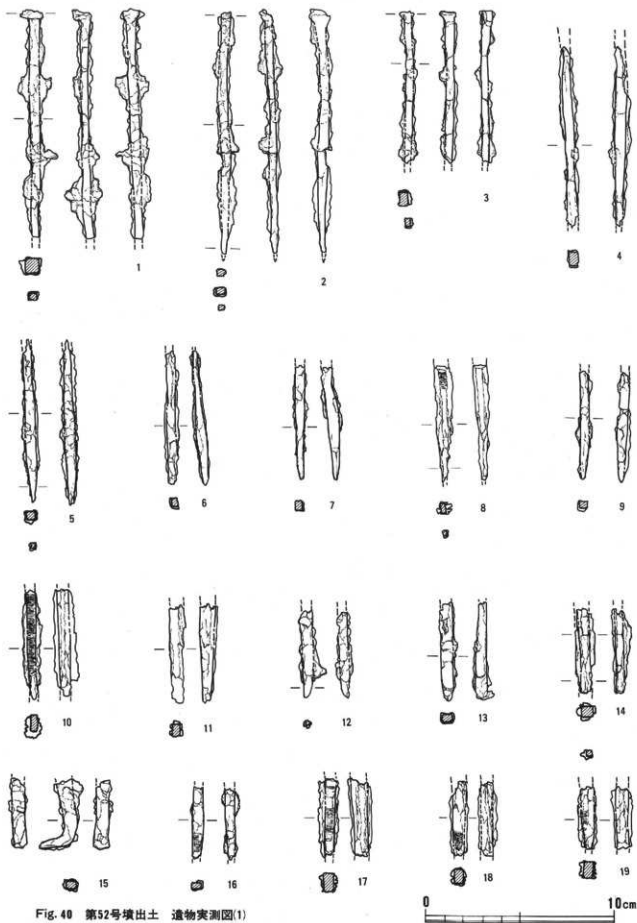


Fig. 40 第52号墳出土 遺物実測図(1)

Tab. 2 第52号墳出土 鉄釘観察表(1)

番号	種類	出土場所	法量			木質の状態	形態	備考
			長さ (cm)	断面径 (cm)	厚さ (cm)			
1	鉄釘	石室内床面直上	12.1	1.2	1		尖部欠損。	Fig. 34cに出土位置を記載。
2	鉄釘	石室内床面直上	12.85	0.45	0.55		頭部一面欠損。 尖部欠損。	Fig. 34cに出土位置を記載。
3	鉄釘	石室内床面直上	8.1	0.7	0.85		頭部一面欠損。 尖部欠損。	Fig. 34cに出土位置を記載。
4	鉄釘	石室内床面直上	9.6	欠損	0.9		頭部欠損。 尖部欠損。	Fig. 34cに出土位置を記載。
5	鉄釘	石室内床面直上	8.65	欠損	0.7		頭部欠損。	Fig. 34cに出土位置を記載。
6	鉄釘	石室内床面直上	7.05	欠損	0.34			
7	鉄釘	石室内床面直上	6.1	欠損	0.55		頭部欠損。 断面は方形。	Fig. 34cに出土位置を記載。
8	鉄釘	石室内床面直上	6.15	欠損	0.63	残存頭部より0~28mmの間に横目に付着。	頭部欠損。	Fig. 34cに出土位置を記載。
9	鉄釘	石室内床面直上	5.8	欠損	0.59	残存頭部より29~37mmの間に横目に付着。	頭部欠損。	Fig. 34cに出土位置を記載。
10	鉄釘	石室内床面直上	5.85	欠損	1.2	残存頭部より0~44mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。	
11	鉄釘	石室内床面直上	5.4	欠損	0.85	残存頭部より2~40mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。 身部は炭酸鉄らしい。	Fig. 34cに出土位置を記載。 Fig. 34cに出土位置を記載。
12	鉄釘	石室内床面直上	4.65	欠損	0.45		頭部欠損。	
13	鉄釘	石室内床面直上	5.3	欠損	0.58	残存頭部より10~15mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部は屈曲。	Fig. 34cに出土位置を記載。
14	鉄釘	石室内床面直上	4.3	欠損	1		頭部欠損。 尖部欠損。 身部は炭酸鉄らしい。	Fig. 34cに出土位置を記載。
15	鉄釘	石室内床面直上	3.8	欠損	0.65		頭部欠損。 尖部欠損。 尖部は屈曲。	Fig. 34cに出土位置を記載。
16	鉄釘	石室内床面直上	3.85	欠損	0.5	残存頭部より25~35mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。	
17	鉄釘	石室内床面直上	4.3	欠損	1	残存頭部より20~33mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。 身部は炭酸鉄らしい。	Fig. 34cに出土位置を記載。
18	鉄釘	石室内床面直上	4.05	欠損	0.9	残存頭部より27~37mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。 身部は炭酸鉄らしい。	Fig. 34cに出土位置を記載。
19	鉄釘	石室内床面直上	3.35	欠損	0.92	残存頭部より12~18mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。 身部は炭酸鉄らしい。	

G まとめ

第52号墳は南北にやや長い不整形の方墳で、現状で南北5.8m以上、東西7.4mの墳丘規模をもつ。八十塚古墳群中で方墳とされている例は、岩ヶ平支群第24号墳、苦楽園支群第1号墳、同第2号墳等がある〔村川1966b, 森岡1983_a〕。これらはいずれも7世紀中葉の築造年代が与えられている。

主体部は長さ3.68m、幅1.14mの規模をもつ無袖形横穴式石室であり、八十塚古墳群でこれまで確認されている無袖形石室の規模では小型の部類である〔森岡1979a〕。石室の平面形は、奥壁へ行くにしたがい石室幅が収縮するという特異な形状をしている。このような形態をもつ石室は、岩ヶ平支群第19号墳の例があげられる〔藤岡1985〕。

奥壁は柱状の石材を一石縦置きにして使用しており、このような用石法は岩ヶ平支群第1号

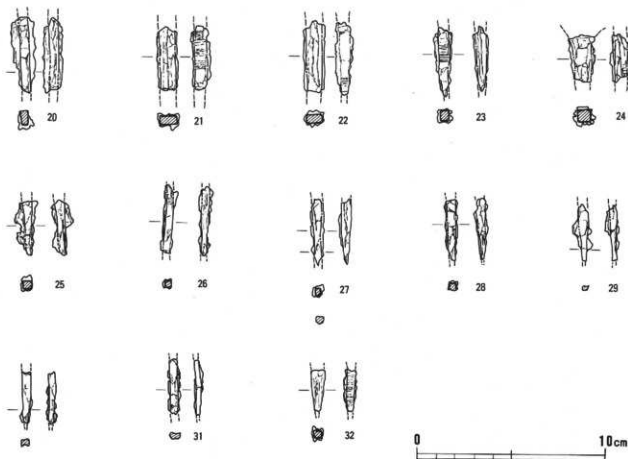


Fig. 41 第52号墳出土 遺物実測図(2)

Tab. 3 第52号墳出土 鉄釘観察表(2)

番号	種類	出土遺構	決量			本質の状態	形態	備考
			長さ (cm)	頭部径 (cm)	厚さ (cm)			
20	鉄釘	石室内床面直上	4	欠損	0.92	残存頭部より5～36mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。 身部は腐蝕著しい。	Fig. 34に出土位置を記載。
21	鉄釘	石室内床面直上	3.4	欠損	0.9	残存頭部より3～31mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。 身部は腐蝕著しい。	Fig. 34に出土位置を記載。
22	鉄釘	石室内床面直上	3.8	欠損	0.85	残存頭部より3～34mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。 身部は腐蝕著しい。	Fig. 34に出土位置を記載。
23	鉄釘	石室内床面直上	3.3	欠損	0.65	残存頭部より5～30mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。	Fig. 34に出土位置を記載。
24	鉄釘	石室内床面直上	2.45	欠損	0.93		頭部一部欠損。 尖部欠損。 身部一部欠損。	Fig. 34に出土位置を記載。
25	鉄釘	石室内床面直上	2.85	欠損	0.73		頭部欠損。 尖部欠損。 尖部に近い部分。	Fig. 34に出土位置を記載。
26	鉄釘	石室内床面直上	3.65	欠損	0.43		頭部欠損。 尖部欠損。	
27	鉄釘	石室内床面直上	3.45	欠損	0.55		頭部欠損。 身部は腐蝕著しい。	
28	鉄釘	石室内床面直上	3.2	欠損	0.5		頭部欠損。 身部は腐蝕著しい。	
29	鉄釘	石室内床面直上	2.95	欠損	0.2		頭部欠損。 尖部わずかに欠損。	Fig. 34に出土位置を記載。
30	鉄釘	石室内床面直上	2.75	欠損	0.35		頭部欠損。 身部は腐蝕著しい。	
31	鉄釘	石室内流入土	2.9	欠損	0.35	残存頭部より19～24mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。	
32	鉄釘	石室内流入土	2.25	欠損	0.7	残存頭部より1～21.5mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部わずかに欠損。 身部は腐蝕著しい。	Fig. 34に出土位置を記載。

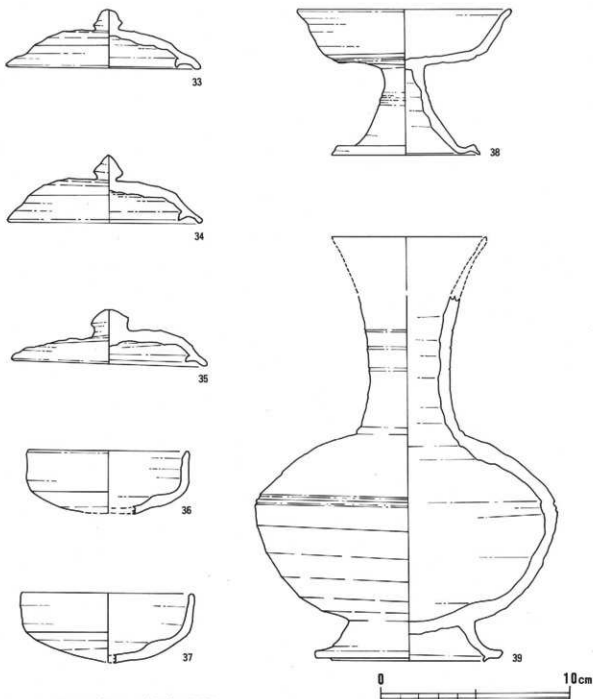


Fig. 42 第52号墳出土 遺物実測図(3)

墳や剣谷支群第1号墳の類例がある〔村川1966a〕。

当古墳は石室が早い段階で倒壊したため、他の4基と比較して石室床面の遺存状況は良好であった。床面からは、鉄釘（1～32）と須恵器の杯蓋（33）、蓋形土器（35）、杯身（37）、高杯（38）を検出した。

床面置土が単層であることや出土遺物の型式差がみられないことなどから、追葬は行われなかったと考えられる。

出土須恵器では、石室床面や前庭部から計3個体の杯蓋、蓋形土器が検出された。これらはすべてつまみをもち、口縁にかえりを有する点が新しいが、全体に厚ぼったくつまみも大きい

Tab. 4 第52号墳出土 土器観察表

番号	種類	図形	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
33	須恵系	口縁	10.3	口縁部は丸くおきめ、口縁部内面に内傾するかえりを付す。	マキアデ、ミズビキ成形。	ロクロ回転：右方向。
		胴高	3.1	に内傾するかえりを付す。	天井部外面3/4に回転ヘタ削り調整。	色調：暗灰色。
		つまみ径	1.5	かえりは断面三角形を呈し、端部は丸くおさめる。	底面粘土結成形。	胎土：密。2mm以下の石炭、長石を含む。
34	須恵系	口縁	10.2	口縁部は丸くおきめ、口縁部内面に内傾するかえりを付す。	マキアデ、ミズビキ成形。	ロクロ回転：右方向。
		胴高	3.55	に内傾するかえりを付す。	天井部外面3/4に回転ヘタ削り調整。	色調：灰黄色。
		つまみ径	1.6	かえりは断面三角形を呈し、端部は丸くおさめる。	底面粘土結成形。	胎土：密。1mm以下の石炭、長石、黒色粒を若干含む。
35	須恵系	口縁	10.4	口縁部は丸くおきめ、口縁部内面に内傾するかえりを付す。	マキアデ、ミズビキ成形。	ロクロ回転：右方向。
		胴高	3.1	に内傾するかえりを付す。	天井部外面2/3に回転ヘタ削り調整。	色調：暗灰色。
		つまみ径	1.4	かえりは断面三角形を呈し、端部は丸くおさめる。	底面粘土結成形。	胎土：密。2mm以下の石炭、長石、黒色粒を若干含む。
36	須恵系	口縁	8.45	口縁部は丸くおきめ、口縁部内面に内傾するかえりを付す。	マキアデ、ミズビキ成形。	ロクロ回転：右方向。
		胴高	2.45	に内傾するかえりを付す。	天井部外面2/3に回転ヘタ削り調整。	色調：灰黄色。
		つまみ径	1.4	かえりは断面三角形を呈し、端部は丸くおさめる。	底面粘土結成形。	胎土：密。1mm以下の石炭、長石、黒色粒を若干含む。
37	須恵系	口縁	9.15	口縁部は丸くおきめ、口縁部内面に内傾するかえりを付す。	マキアデ、ミズビキ成形。	ロクロ回転：右方向。
		胴高	2.45	に内傾するかえりを付す。	天井部外面2/3に回転ヘタ削り調整。	色調：暗灰色。
		つまみ径	1.4	かえりは断面三角形を呈し、端部は丸くおさめる。	底面粘土結成形。	胎土：密。1mm以下の石炭、長石、黒色粒を若干含む。
38	須恵系	口縁	11.3	口縁部は丸くおきめ、口縁部内面に内傾するかえりを付す。	マキアデ、ミズビキ成形。	ロクロ回転：右方向。
		胴高	7.75	に内傾するかえりを付す。	天井部外面2/3に回転ヘタ削り調整。	色調：暗灰色。
		つまみ径	1.5	かえりは断面三角形を呈し、端部は丸くおさめる。	底面粘土結成形。	胎土：密。1mm以下の石炭、長石、黒色粒を若干含む。
39	須恵系	口縁	不明	口縁部は丸くおきめ、口縁部内面に内傾するかえりを付す。	マキアデ、ミズビキ成形。	ロクロ回転：右方向。
		胴高	19.45	に内傾するかえりを付す。	天井部外面2/3に回転ヘタ削り調整。	色調：暗灰色。
		つまみ径	1.5	かえりは断面三角形を呈し、端部は丸くおさめる。	底面粘土結成形。	胎土：密。1mm以下の石炭、長石、黒色粒を若干含む。

もの(35)と、頂頭部を尖らし擬宝珠状に調整した小型のつまみをもつもの(33)・(34)がある。

受け部口端は(35)が厚ぼったく、(33)・(34)は薄く引き出しているが、なかでも(34)は最もシャープで、つまみの形状も鋭く先頭化して、最も新しい傾向をもつ。これらはいずれも、受け部先端が口縁より垂下しない中村浩氏の編年〔中村1978〕でのⅢ型式2段階に位置する一連の杯蓋群ではあるが、各個体・各部位に相対的な新旧の差を正しくもつ杯蓋群であることが重要である。なお、これら杯蓋に対応するとみられる杯身(36)・(37)は全体を復元できないが、底部内面は平坦化したものではない。

長頸蓋は周溝出土で同列には扱えないが、脚部には透し穴がなく脚部は大きく外側に開いて引き出した脚端を内側に反転して、その端をきらにつまみ上げるなど、後世の蓋形土器の台脚部に通じる新しい特徴をもつ。

須恵器は灰黄色の白っぽい硬い胎土をもつ播磨系の土器とそうでないものとに大別できるが、杯身(37)や長頸蓋(39)など、形態的に新しい要素をもつ一連のものは前者であることは興味深い。

築造時期は、石室床面から出土した須恵器杯蓋が田辺昭三氏の編年によるTK217併行期に対応〔田辺1966〕、中村浩氏の編年でのⅢ型式2段階に対応するものであることから〔中村1978〕、7世紀第3四半期にあてられる。

3 岩ヶ平支群第53号墳

- | | |
|-----------|--------|
| A 古墳の立地 | E 土 層 |
| B 墳丘の調査 | F 出土遺物 |
| C 石室の調査 | G まとめ |
| D 石室掘形の調査 | |

A 古墳の立地

第53号墳は発掘区のほぼ中央に位置し、標高88.25mから89.50mにかけての南向きの斜面地に立地している (Fig.19)。微地形をみると、この斜面地は幅10m程度の尾根状の地形であり、第52号墳もこの尾根状地形上に立地している。当古墳はこの尾根状の高まりを利用して造られている。

古墳の周辺では、墳丘の東側に接して南方へと流れる小流路を検出した。古墳の西側においても、第52号墳の西側を通り南方へ流れる小流路を検出した。この流路は、墳丘を大きく侵食している。古墳の南方は、比較的緩やかな斜面地が約5m続いている。特に石室開口部から南へ2mの範囲までは、石室の床面との比高差が0.2m以内におさまる平坦である。墳丘北側には墳丘を区画する掘り割りが認められ、それから上りの傾斜地となり第52号墳へと続く。

B 墳丘の調査

a 調査前の墳丘

調査前の踏査による地表観察では、露出した石室石材を中心として若干の墳丘の隆起が確認された。地形測量を行った結果、標高88.50mから89.50mにかけての等高線が南東へ張り出しており、測量図からも墳丘を読みとることができた (Fig.44)。しかし、測量図から明らかに墳丘は南向きの斜面地である周辺地形と一体化しており、墳丘裾部を確認することは容易ではなかった。このため、調査前の段階では古墳の存在は確認できたものの、墳丘規模や墳形を明らかにすることは困難であった。

墳丘の中央部には、石室埋没に伴う凹みがみられた。石室は側壁の一部が露出しており、崩落した天井石が一石残存していた。

b 検出時の墳丘

墳丘の残存状況は、他の4基の古墳に比べて良好であった (Fig.45, PL.26)。最も墳丘が遺存していた石室の北側では、主軸上で厚さ約0.5mを測る。また、中軸上において、石室東

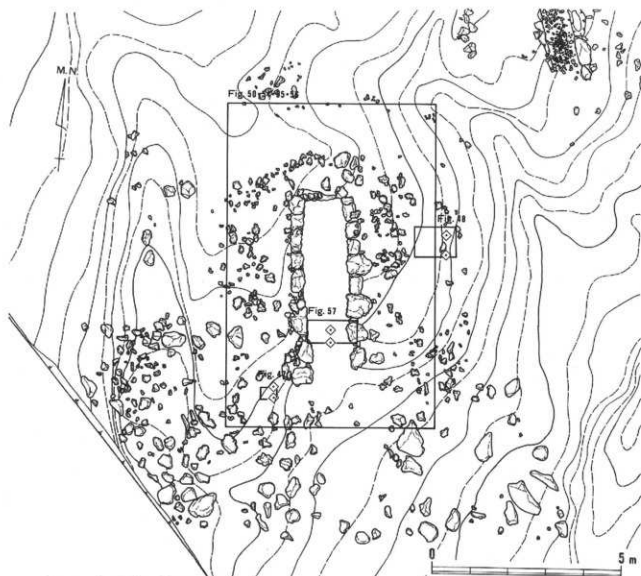


Fig. 43 第53号墳 挿図配置図

側は厚さ0.12m、西側は厚さ0.3m程度の墳丘盛土が遺存していた。墳丘盛土と古墳が立地している基盤層の土質は近似しており、墳丘盛土中には、石室掘形掘削時に基盤層から排出されたと推測する礫が多く含まれていた。前庭部と残存墳丘の最高点との比高差は0.88mを測り、墳丘北側裾部と残存墳丘の最高点との比高差は0.38mを測る。古墳は斜面地に築造されているため、墳丘は南側からみた場合に最も高くみえる。

墳丘盛土が遺存していた範囲は、主軸上で南北約8.0m、中軸上で東西約7.2mを測り、南北に長い楕円形を呈している。南北および東側の裾部は比較的良好に遺存していたが、西側の裾部は、先述したとおり小流路によりかなりの侵食を受けている。東側裾部については、流出した墳丘盛土上に流路の埋土が堆積している状況が土層から観察され、侵食を受けていないと考えられる。

墳丘北側で墳丘裾に沿って斜面地を分断する円弧状の凹みが認められ、墳丘を区画するために若干の掘り割りを行っていたと考えることができる。

石室前庭部は広い平坦面となっている。そこからは、須恵器・土師器片が集中して検出され

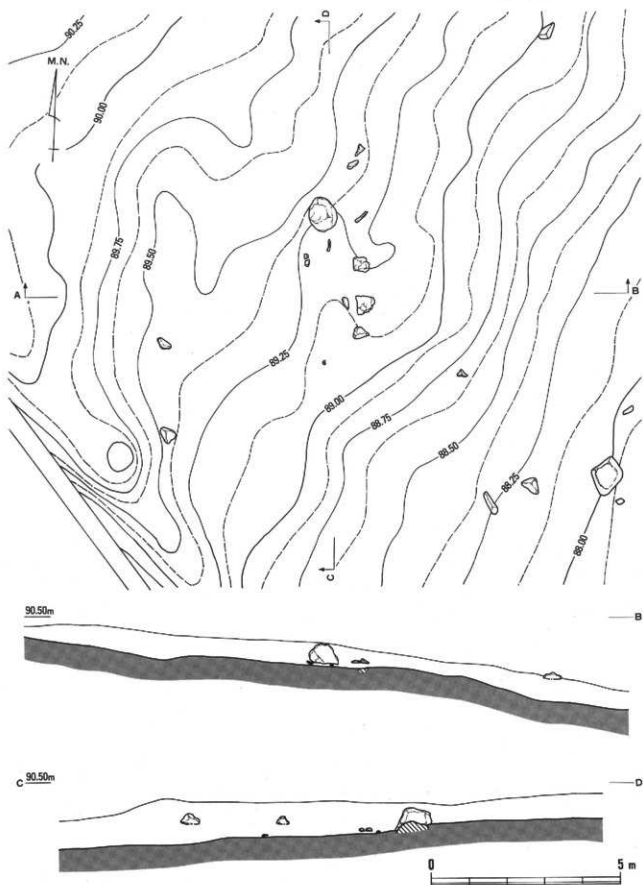


Fig. 44 第53号墳 調査前墳丘測量図



Fig. 45 第53号墳 墳丘測量図

た。置土等の造成土はみられなかったものの、この場所が墓前祭祀のための空間として平坦に造成された可能性がある。

墳形については、墳丘盛土の流出や小流路による侵食のため変形しているが、墳丘測量図の等高線は楕円形に回り、南北方向に長い楕円形を呈した円墳であったと推定する。墳丘西半部においては墳丘裾を巡る等高線が直線的にのびるが、これは小流路により侵食を受けたためである。ただし、墳丘南西部には石室開口部から張り出す部分が認められる。石室自体、西側壁の方が東側壁と比べて基底石1石分南へ長いことから、この張り出し部分が一種の前庭部側壁のようになっていたと復元することが可能である。そういう意味で、当墳の墳丘は整った楕円形ではなく、東西が対称とならない不整形なものであったと推測することができる。

c 墳丘に関連する遺構

当古墳においては、列石等の施設は確認していない。墳丘北半部において礫が列状に巡っているが、これらの礫は意図的に積まれている状況が観察されず、墳丘の作業面上にも接地していなかった(PL.27-1)。また、礫が並ぶ位置が石室堀形の肩と一致することから、これらは列石ではなく、石室堀形内に投入された礫が石室堀形の肩部に沿って墳丘検出面に露呈しているものとする。

d 墳丘に伴う遺物の出土状況

当古墳の墳丘上および周辺部からは、須恵器の杯蓋、杯身、甕、土師器の杯、甕が出土している(Fig.46)。これらの大半は、出土状況から原位置をとどめていないと推測する。ただし、前庭部で検出した土師器の甕(75)および墳丘構築作業面で検出した土師器の杯(74)は、出土状況および接合状況から原位置をとどめていると考える。その他、前庭部で検出した須恵器の杯身(68)および土師器の杯(73)は、基盤層に接地していなかったものの出土位置より石室内から流出した土器、あるいは前庭部に置かれた土器であった可能性が高い。残存墳丘の上面からは、須恵器の杯蓋をはじめとする土器類が出土した。これらは石室内のものが盗掘等で移動したものと考えられるが、これらの遺物が小片であることと小流路付近で出土したことから、当古墳より上方に位置する他の古墳から流出したものである可能性も否定できない。

①石室前庭部の遺物出土状況

石室前庭部において、開口部西側壁の基底石より南西0.4mの位置で、多数の土師器甕の破片を検出した(Fig.47, PL.30)。これらの破片を取り上げた時点で、土師器の甕(75)が基盤層上面に接地した状態で検出された。これは口縁部を東に向け、横倒しになった状況であった。甕は先述の石室入口の西側張り出し部裾に置かれたものと推測される。また、土師器の破片は細片のため図化し得なかったが、甕(75)以外に少なくとも別の甕が1個体あることを口縁端部や器壁調整の観察から確認している。なお、これらの土師器の甕には煤等は付着していない。

②墳丘構築作業面の遺物出土状況

東側墳丘の盛土中からは、土師器の杯(74)が出土している(Fig.48)。この杯は盛土層の境界面上で検出され、この杯が接地している面は基底石の上端に対応している。このことから、杯は石室構築時の作業面上に置かれたものであることが分かる。

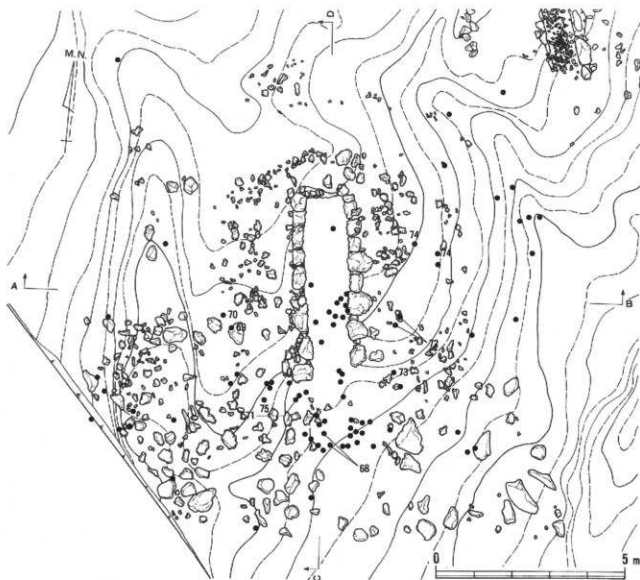


Fig. 46 第53号墳 遺物分布図

C 石室の調査

第53号墳の内部施設は無袖形の石室であり、主軸上で全長4.83m、中軸上で幅1.05mを測る。調査のために設定した石室主軸方位は磁北から $5^{\circ}47'41''$ 西偏し、ほぼ南に開口する。石室は、基盤面を穿った掘形内に築かれていた。八十塚古墳群内でこれまでに発掘調査が行われた無袖形の石室の中では、やや小型の部類に入る。石室の東西の側壁で長さが異なり、西側壁が基底石1石分南へ張り出している。

閉塞施設は、まったく検出されなかった。

a 石室の検出状況

腐植土を除去した段階で奥壁および東西の両側壁がほぼ露呈し、本墳の内部施設が南北方向

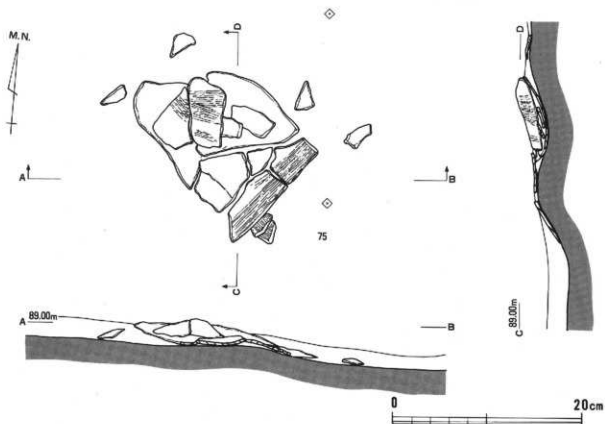


Fig. 47 第53号墳 前底部 土器出土状況図

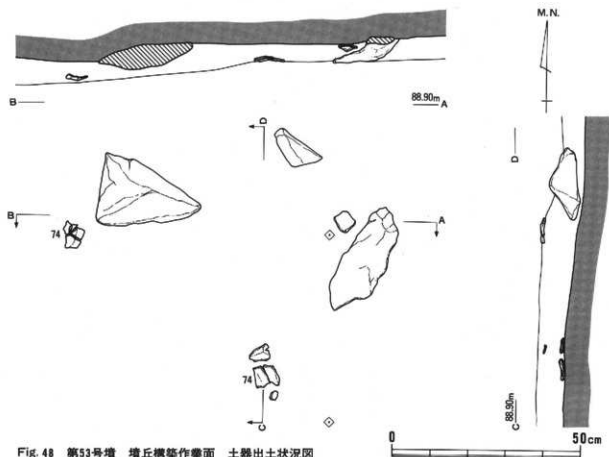


Fig. 48 第53号墳 墳丘構築作業面 土器出土状況図



Fig. 49 第53号墳 石室検出状況実測図

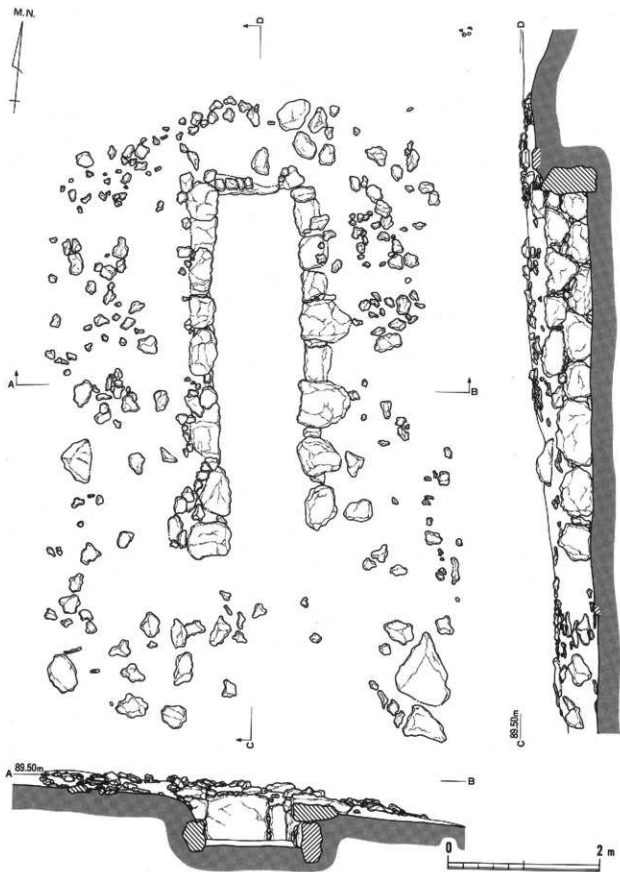


Fig. 50 第53号墳 石室上面実測図

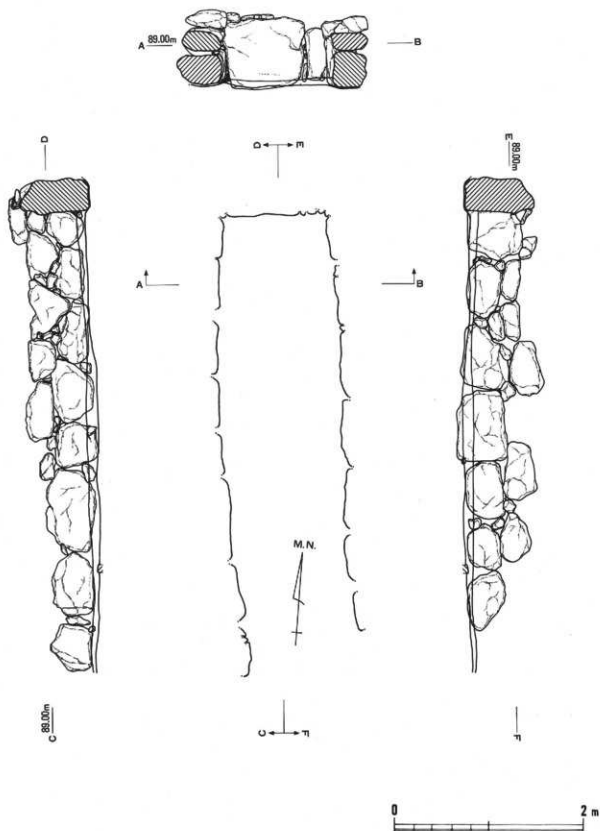


Fig. 51 第53号墳 石室実測図

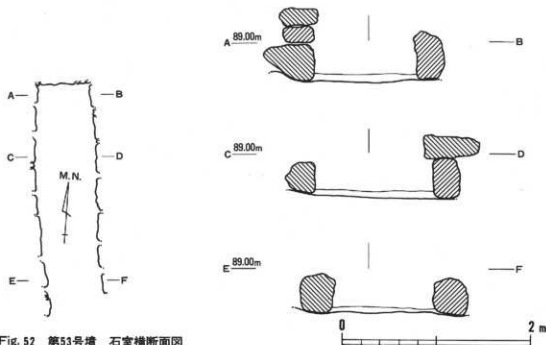


Fig. 52 第53号墳 石室横断面図

に主軸をもち、南に開口する無袖形の横穴式石室であることが判明した (Fig. 49, PL. 25)。

石室北半部には、石室内に落下した天井石が1石残存していた。この天井石は西側壁上に積まれていたが、天井石の長辺は検出した残存石室の幅より若干小さかった。このことから残存していた壁体の上部に、さらに石材を持ち送って数段積み上げた後にこの天井石が架構されたと推定することができる。天井石の東側は床面上に厚く堆積した石室内流入土上に落下しており、最終埋葬後しばらく経ってこの天井石が落下したことが分かる。この天井石が落下したことを石室崩壊に結びつけるならば、石室内流入土を石室崩壊以前の堆積土と石室崩壊後の堆積土に大別することができる。

石室内へは検出した段階で、この天井石以外にも直径5cm程度から50cm程度までの礫が多く投入されていた。これらの中には大きさや形状等から判断して、壁体を構成する石材と推定できるものも数点含まれていた。また、石室内に投入された礫の中には、人為的に割られた扁平な屑石も多く含まれていた。これらのことから石室の崩壊時に生じた凹みが、後世の石材採取・加工などの際に、礫や屑石の投棄坑として利用されたと推定できる。なお、石室検出時には墳丘の北西部においても、小流路が埋まる過程で生じた凹みに小礫や屑石を投棄した状況を検出している (PL. 74-1)。

b 石室の構造

石室は、やや胴張りの平面形を呈する無袖形横穴式石室である (Fig. 51, PL. 26・27-2)。西側壁は東側壁より基底石1石分長く、奥側壁から6石目の基底石以南の壁体が内側に彎曲している。この基底石を袖石として意識しているようにもみえるが、壁体の立面構造において立石の使用が認められないことや、この基底石を境に石材の用石法が変わる状況が観察されなかった点から無袖形石室の範疇に入ると考える。

壁体の多くは基底石から2段目まで遺存しており、遺存状況が良好な箇所では3段目まで遺

存していた。壁体として使用されている石材の多くは横位に積まれており、奥壁を除いては1mを超えるような大型の石材の使用は認められなかった。東西両側壁ともに基底石の大半は、上面を標高89.00m付近に揃えている。

①奥 壁

基底石は2石で構成されており、幅は1.08mを測る(PL.29)。床面からの残存高は最大0.81mである。2石の基底石のうち西側の石材は横位に立てて置かれており、東側の石材は西側の石材と高さをほぼ揃えて縦位に立てて据えられていた。

西側の石材は板状の石材であり、高さ0.71m、幅0.93m、最大厚0.34mで全体的にほぼ均一の厚さである。この石材は、壁面として使用されている面およびその背面がともに平滑な面をなしている。

東側の石材は柱状の長細いもので、高さ0.56m、幅0.32m、最大厚0.34mを測る。この石材は壁面として用いられている面のみ平滑に加工されていた。これらの石材の隙間には、小型の石材が充填されていた。

これらの基底石上には直径20cm程度の小石材が積まれており、8個体遺存していた。

②西 壁

基底石は計8石で構成されており、長さ4.84mを測る(PL.28-1)。床面からの残存高は、最大0.64mである。すべての基底石は最大面を接地面とし、横位に据えられていた。基底石上面の高さは、標高88.95mにほぼ揃えられていた。2段目の石材は、その上面を標高89.20mに揃えている。

大型の石材の隙間には、小型の石材が充填されていた。東壁と同様に奥壁との間に生じる隙間には、三角形の小石材を挿入していた。

③東 壁

基底石は計7石で構成されており、長さ4.44mを測る(PL.28-2)。西壁に対して、基底石1石分短い。床面からの残存高は最大0.75mである。奥壁側から1石目の基底石は、唯一縦位に立てて据えられている。その南側では、この石材の上面に高さを揃えるために基底石上部に2石の石材が横位に積まれていた。奥壁側から3石目以南の基底石は、すべて最大面を接地面とし横位に据えられていた。基底石の上面高は、標高88.95mにほぼ揃えられていた。

基底石間の隙間には小型の石材が充填されており、特に奥壁との間に生じる隙間には三角形の小石材を挿入していた。

④床 面

床面は全面にわたって厚さ約5cm程度の置土が認められた。置土は基底石を据え置いた後に敷かれており、1層のみで構成されている。置土は墳丘盛土や石室掘形の埋土と近似したものが使用されており、特に選択して使用されているという状況ではなかった。なお、置土上には敷石や棺台などの施設はなく、粘土による貼土も施されていなかった。

c 石室内の遺物出土状況

床面上で鉄釘片が183点出土した(Fig.53)。鉄釘(41~67)は木棺を緊結していたと推定されるもので、奥壁から南へ2m以内の範囲で集中して出土した。それらの内、床面から遊離し

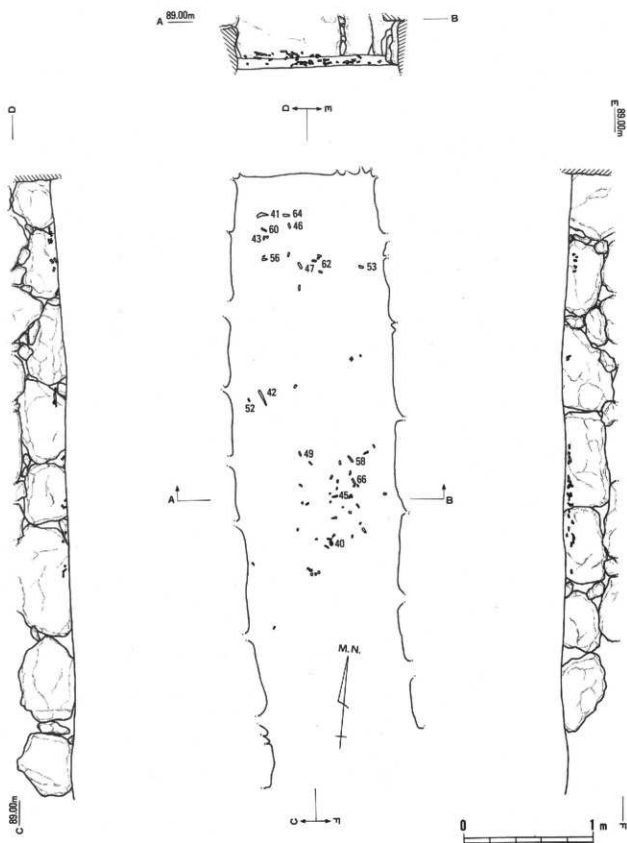


Fig. 53 第53号墳 石室床面遺物出土状況図

た状況で出土したのも多くみられたが、これらの多くは石室崩壊前の堆積土に含まれていたことから、原位置を大きくは動いていないと判断した。耳銀(40)は、石室中央部よりやや南方で出土している。これは床面直上から検出されたが、原位置を保っているのかどうかは断定できない。この他には、須恵器や土師器の小片が石室内より出土しているが、これらはいずれも流入土中より出土した細片である。

なお、石室内流入土は水洗選別を行ったが、玉類等の微細遺物はまったく認められなかった。

D 石室掘形の調査

当古墳では平面がU字形を呈する、2段に掘削された石室掘形を検出した。石室掘形は、古墳が立地している尾根状の地形の中央部を選んで穿たれていた。周辺は広い平坦面をなしており、石室掘形掘削に先行して基盤面を一部平坦に造成したことが想定される。

a 裏込めの状況

裏込めの土には、直径10cmから20cm大の花崗岩の小礫が多く含まれていた(Fig.54, PL.32-2・33-1)。石室掘形が穿たれている基盤層中にも同様の礫が多くみられたことから、掘形掘削時に掘り出された礫が、掘形埋め戻しの際に投入されたものと考えられる。礫は石室北半部において相対的に多く確認され、特に石室石材付近において集中して観察された。しかし、石室壁体をこれらの礫が支えている状況は確認されず、控え積みとして使用されたものではない。

b 石室掘形の形態

石室掘形の規模は、主軸上で南北7.18m、中軸上で東西3.98mを測り、石室の規模と比較してかなり大規模なものである(Fig.56, PL.34)。平面形はU字形を呈している。掘形北半部は2段の掘形となっており、下段の掘形の規模は南北2.65m、中軸上で東西2.6mを測る。

石室掘形には、基盤層に含まれる花崗岩が多く露頭していた。特に石室掘形西南の肩部には巨礫が多数露頭しており、これらが石室掘形の掘削位置を規制した可能性が高い。

北部の肩付近では、直径10cmから20cm大の礫が肩の平面形に沿うような状態で、円弧を描いて並んでいた(PL.27-1)。

石室掘形の底部から肩までの比高差は場所によって異なり、西側肩が最も高く比高差0.65mで、一方の東側肩では比高差は0.42mである。北側肩と底部の比高差は0.33mで、最も緩やかな勾配となっている。石室掘形の底面から1段目の段までの比高差も場所によって異なるが、主軸上では0.23mを測る。この段と石室基底石上面のレベルとは、一致していない。このことから、通常みられるような2段目の石材を積むための2段の石室掘形とは構造を異にすると考えられる。

掘形の底部は水平ではなく、東西では西側が、南北では北側がそれぞれ高くなっている。奥壁基底石の2石、東側壁の奥壁側1石目の基底石および西側壁の奥壁側2石目から4石目の基底石では、掘形底面に穿たれた掘え付け穴を検出したが、それ以外では認められなかった。これらの掘え付け穴は、基底石より一回り大きな浅いものであった。奥壁と西側壁基底石のみに

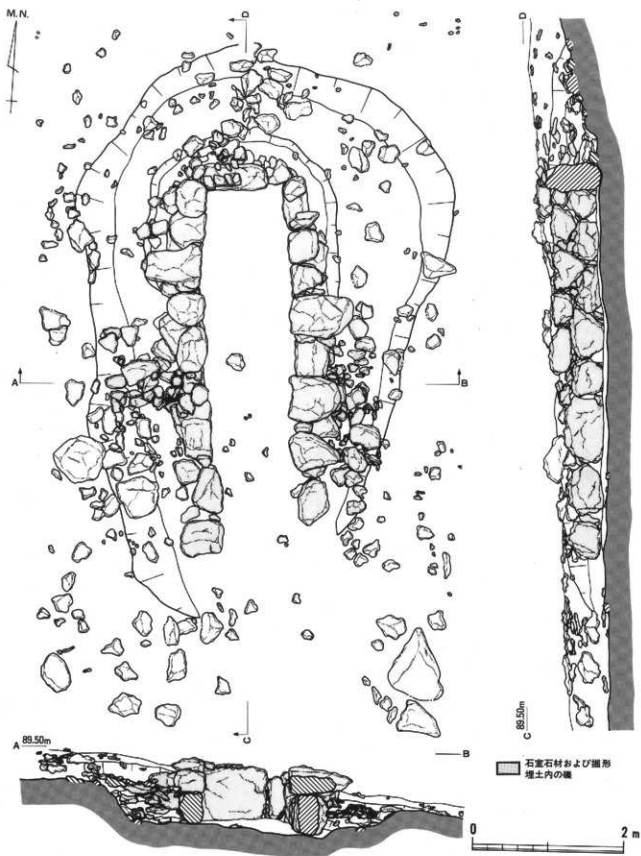


Fig. 54 第53号墳 石室および石室掘形実測図

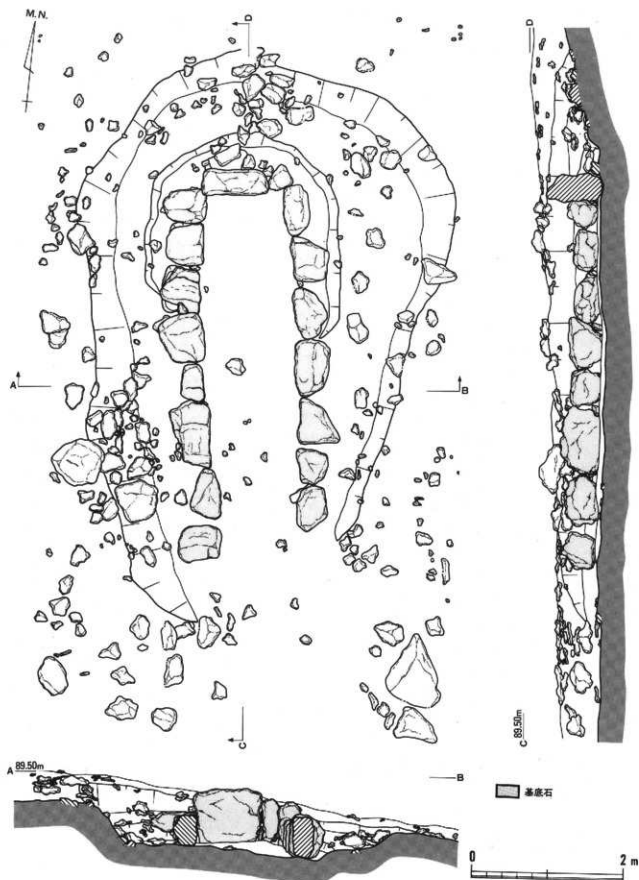


Fig. 55 第53号墳 基底石および石室掘形実測図

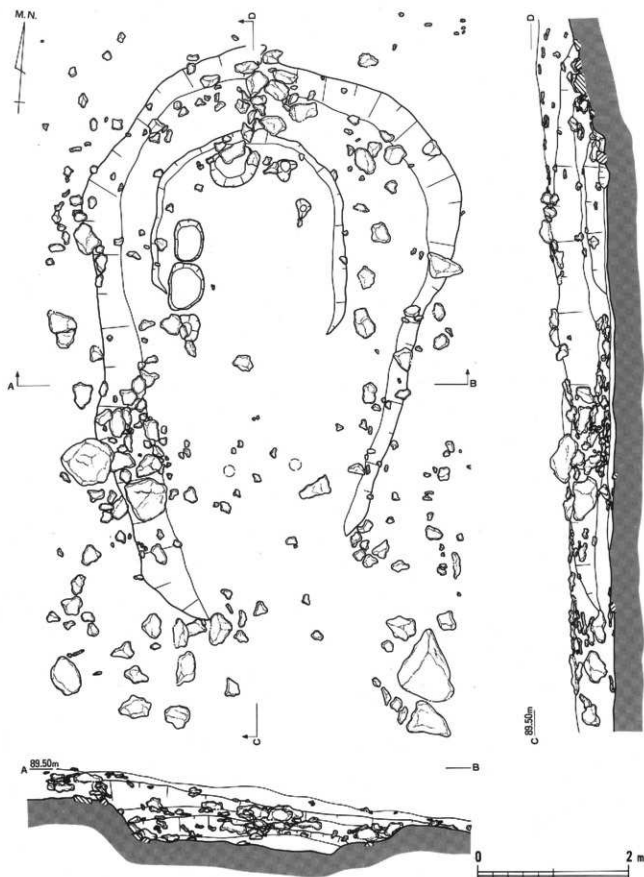


Fig. 56 第53号墳 石室掘形実測図

据え付け穴が認められたのは、前述のように石室掘形底面が平坦ではなく、北側と西側が高いために、石室構築時に基底石の上端高を揃える必要があったからであろう。

c 石室掘形面の遺構

掘形底面では、小型の土坑を2カ所検出した (Fig. 57, PL. 31)。これは石室の開口部より2石目の基底石に沿って東西対をなして位置しており、内部に直径2 cmから3 cmの円礫を充填していた。東側の土坑は直径約16 cm、深さ約7 cmを測り、土坑内には62個の円礫が充填されていた。西側の土坑は直径約18 cm、深さ約5 cmを測り、87個の円礫が充填されていた。

これらの土坑は基盤面に掘り込まれていた。したがって床面築造時には埋められていたことになる。ただし、石室の平面を意識した位置にあることから、石室基底石が設置された以降に掘られたものと推測する。

土坑内に投入されている円礫は東側のものは黒っぽい礫が主体であり、チャート・流紋岩・凝灰岩等から構成されている。一方、西側のものは白っぽい礫が主体であり、花崗岩等から構成されている。このように東西土坑に充填されている礫は、色調において明瞭な差異が認められ、色を意識した選別がなされた可能性が高い。

d 石室掘形内の遺物出土状況

石室掘形内では、南東部の裏込め中に須恵器の甕の口縁部(72)が出土した。破片であることから、掘形埋め戻し時に偶然に紛れ込んだものであろう。

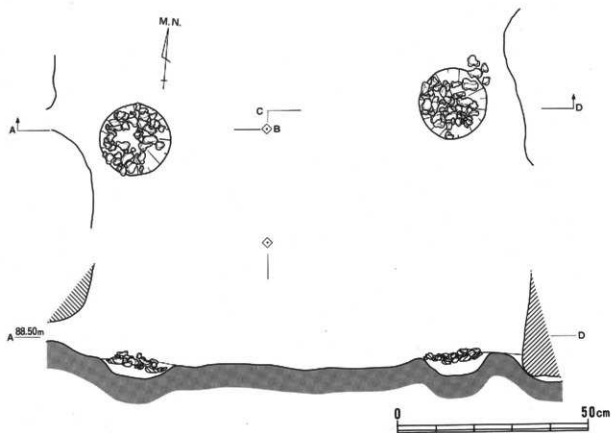


Fig. 57 第53号墳 石室掘形面土坑内円礫検出状況図

E 土 層

当古墳の調査では、石室主軸と中軸を基準として石室内を四分法で掘り下げた。墳丘にもこの延長上に畦を残しており、これらに沿って土層の観察および図面の作成を行った。土層は、墳丘盛土、石室掘形埋土、床面置土、石室内流入土に大別できる (Fig.58, PL.32-1)。

a 墳丘盛土および石室掘形埋土

2層から25層は、墳丘の盛土および石室掘形埋土である。墳丘盛土と石室掘形埋土の質的な相違は認められなかった。22層および23層の上面は石室基底石上面のレベルに対応し、石室構築の際の作業面となっていたと考えられる。23層上面からは、土師器の杯(74)が原位置を保った状況で出土している。この上面に24層から25層を積み、墳丘を構築している。37層から40層は、墳丘流出土である。また、墳丘西側の27層および28・29層は、墳丘西側を流れる小流路の埋土である。

b 床面置土

当古墳では、基盤面に直接置土をして床面としていた。置土は、26層のみで構成される。基底石の据え付け穴の埋土も同質であったことから、据え付け穴を埋める作業と、床面に置土を入れる作業は同一工程で行われたと推測される。

c 石室内流入土

41層から66層は、石室内に流入した堆積土である。これらは、先述したように、天井石が落下している面を境に、石室崩壊前の堆積土と石室崩壊後の堆積土に大別できる。42層および43層の上面には崩落した天井石がのっており、これらの土層およびこれらの下層は天井石崩落前の流入土と判断できる。上層には45層から66層が堆積しており、これらが天井石崩壊後の流入土であることが分かる。これらの土層は、多くの屑石や円礫等を含んでおり、石室が埋没する過程で、石室掘形裏込めに含まれる礫が流入したり、後世の石材利用時の屑石の廃棄坑として利用されていたことが分かる。

F 出土遺物

当古墳では、石室内からは耳環や鉄釘を除いて遺物は出土しなかった。それに対して、墳丘上や前庭部から、石室内に納められていたと推測できる土器片が出土している。前庭部からは、原位置を保つ壺が少なくとも2個体分検出された。東側墳丘内からは、基底石上面高と対応する盛土層の上面で土師器の杯(74)が検出されており、検出状況から墳丘築造中に置かれたものであることが分かる。

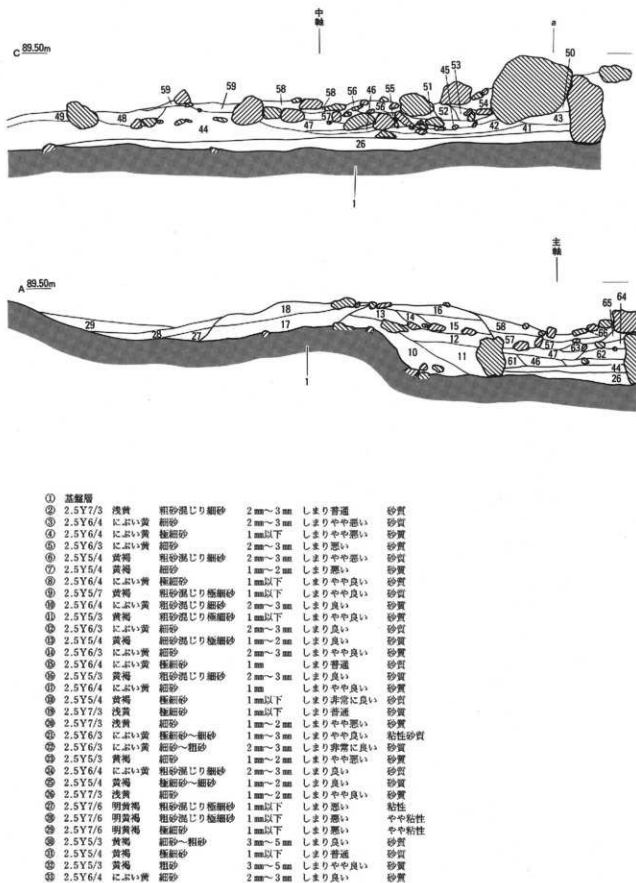
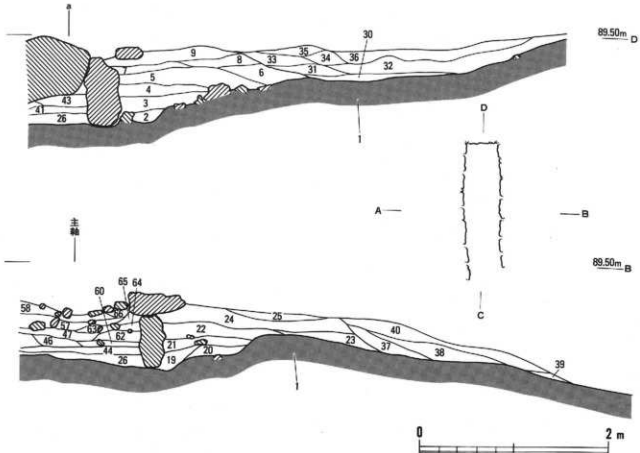


Fig. 58 第53号墳 土層断面図



③	2.5Y3/4	黄褐	極細砂	1mm以下	しまりやや良い	粘性砂質
④	2.5Y3/4	黄褐	細砂～粗砂	1mm～3mm	しまり悪い	粘性砂質
⑤	2.5Y6/4	にぶい黄	細砂	2mm～3mm	しまりやや悪い	砂質
⑥	2.5Y6/4	にぶい黄	極細砂～細砂	1mm～2mm	しまりやや良い	砂質
⑦	2.5Y6/5	にぶい黄	極細砂	1mm以下	しまり普通	砂質
⑧	2.5Y5/4	黄褐	粗砂混じり極細砂	1mm以下	しまりやや良い	砂質
⑨	2.5Y5/4	黄褐	細砂	2mm～3mm	しまり良い	砂質
⑩	2.5Y6/4	にぶい黄	極細砂～細砂	1mm～2mm	しまりやや悪い	粘性
⑪	2.5Y5/4	黄褐	細砂～粗砂	2mm～3mm	しまり良い	砂質
⑫	2.5Y6/6	明黄褐	粗砂混じり細砂	1mm～2mm	しまり悪い	砂質
⑬	2.5Y5/4	黄褐	細砂	2mm～3mm	しまり良い	砂質
⑭	2.5Y5/4	黄褐	極細砂	1mm以下	しまり悪い	砂質
⑮	2.5Y5/4	黄褐	粗砂混じり細砂	1mm以下	しまりやや悪い	砂質
⑯	2.5Y5/4	黄褐	粗砂混じり細砂	1mm以下	しまり悪い	粘性
⑰	2.5Y5/4	黄褐	極細砂～細砂	1mm～2mm	しまりやや良い	砂質
⑱	2.5Y7/4	浅黄	極細砂	1mm以下	しまり悪い	砂質
⑲	2.5Y5/4	黄褐	極細砂	1mm以下	しまり悪い	砂質
⑳	2.5Y5/6	黄褐	細砂～粗砂	3mm～4mm	しまり悪い	砂
㉑	2.5Y5/3	黄褐	極細砂	1mm以下	しまりやや良い	砂質
㉒	2.5Y5/4	黄褐	粗砂混じり極細砂	1mm以下	しまり良い	粘性
㉓	2.5Y5/3	黄褐	粗砂混じり極細砂	1mm以下	しまり普通	砂質
㉔	2.5Y5/4	黄褐	極細砂～細砂	1mm～3mm	しまり悪い	砂質
㉕	2.5Y5/6	黄褐	細砂～粗砂	3mm～4mm	しまり悪い	やや粘性
㉖	2.5Y3/4	黄褐	細砂～粗砂	1mm～3mm	しまり悪い	粘性砂質
㉗	2.5Y5/4	黄褐	極細砂	1mm以下	しまり良い	砂質
㉘	2.5Y5/4	黄褐	細砂	2mm～3mm	しまり良い	粘性
㉙	2.5Y6/4	にぶい黄	細砂	2mm～3mm	しまりやや良い	やや粘性
㉚	2.5Y5/4	黄褐	細砂	2mm～3mm	しまり悪い	砂質
㉛	2.5Y5/4	黄褐	極細	1mm以下	しまり良い	やや粘性
㉜	2.5Y5/4	黄褐	極細砂～細砂	1mm～2mm	しまり良い	粘性
㉝	2.5Y5/2	黄褐	極細砂～細砂	1mm～3mm	しまりやや悪い	やや粘性

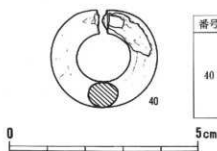


Fig. 59 第53号墳出土 遺物実測図(1)

Tab. 5 第53号墳出土 耳鏡観察表

番号	種類	法量 (cm・g)	端部形成	内部	備考
40	耳	長径	2.76	金板はめこみ 銅芯	端部は金板をはめ込み、 折りかえして成形。 金板は80%程度残存。 銅芯一部欠損。 断面はやや扁平な楕円形。
		短径	1.41		
		幅	0.78		
	鏡	厚さ	0.69		
		端部間隔	0.24		
		重さ	7.93		

a 石室床面の出土遺物

耳環(40)、鉄釘(41~47)が出土している (Fig. 59・60, Tab. 5・6, PL. 76)。これら以外に鉄釘片が多く出土したが、いずれも細片のため図化し得なかった。

b 前庭部の出土遺物

須恵器の杯身(68)、土師器の杯(73)、甕(75)が出土している (Fig. 62, Tab. 7)。甕以外は原位置を保っていないと判断している。

c 墳丘上および周辺の出土遺物

須恵器の杯身(69)、蓋形土器(70)が出土している (Fig. 62, Tab. 7, PL. 76)。

d 墳丘内の出土遺物

土師器の杯(74)が出土している (Fig. 62, Tab. 7)。

e 石室掘形の出土遺物

須恵器の甕(72)が出土している (Fig. 62, Tab. 7, PL. 76)。破片であることから、掘形を埋め戻す時に混入したものと考えられる。

G まとめ

第53号墳は楕円形状を呈する円墳で、現状で南北9.45m、東西5.37mの墳丘規模をもつ。墳丘西側は小流路によって侵食を受けている。しかし、石室開口部の西側に張り出し部が認められ、前庭部側壁としての機能を果たしていたことが推測される。このことから墳丘の形状は、当初から不整の楕円形を呈していた可能性がある。

主体部は、長さ4.83m、幅1.05mの規模をもつ無袖形の横穴式石室である。八十塚古墳群において確認されている無袖形石室の中では、やや小型の部類である。側壁は西側の方が長く、開口部では南側に張り出しており墳丘の張り出し部へ連続している。平面形はわずかではあるが胴張りであり、このような平面形の石室は、同古墳群中の無袖形横穴式石室では老松支群第4号墳でみられる。有袖形横穴式石室では、岩ヶ平支群第19号墳〔藤岡1985〕および老松町支

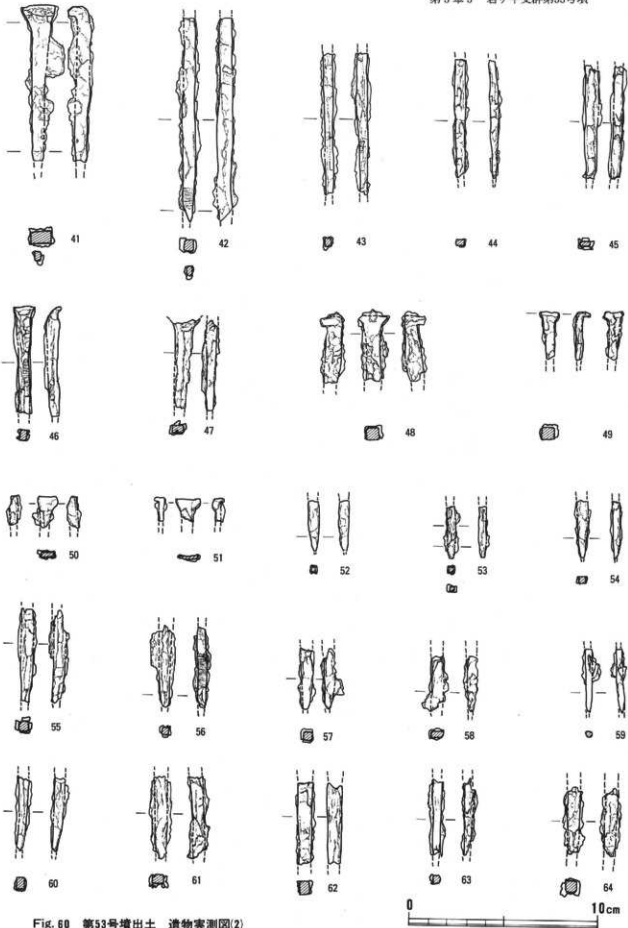




Fig. 61 第53号墳出土 遺物実測図(3)

Tab. 6 第53号墳出土 鉄釘観察表

番号	種類	出土遺構	法量			木質の状態	形態	備考
			長さ (cm)	頭部径 (cm)	厚さ (cm)			
41	鉄釘	石室内地横土	8.3	2.05	0.9	頭部より1~8mmの間に横目に付着。	尖部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
42	鉄釘	石室内地横土	10.8	欠損	0.85		頭部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
43	鉄釘	石室内地横土	7.5	欠損	0.7		頭部欠損。 尖部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
44	鉄釘	石室内流入土	6.4	欠損	0.45		頭部欠損。 尖部欠損。	
45	鉄釘	石室内流入土	5.9	欠損	0.6		頭部欠損。 尖部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
46	鉄釘	石室内地横土	5.75	1.1	0.55	残存頭部より6~30mmの間に横目に付着。	頭部一部欠損。 尖部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
47	鉄釘	石室内地横土	4.7	欠損	0.7		頭部一部欠損。 尖部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
48	鉄釘	石室内地横土	3.7	1.75	0.8		頭部欠損。 尖部欠損。	
49	鉄釘	石室内地横土	2.55	1.65	0.8		尖部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
50	鉄釘	石室内床面直上	1.6	1.1	0.6		頭部のみ残存。	
51	鉄釘	石室内床面直上	1.25	1.35	0.65		頭部のみ残存。	
52	鉄釘	石室内地横土	2.7	欠損	0.4		頭部欠損。 身部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
53	鉄釘	石室内地横土	2.7	欠損	0.45		頭部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
54	鉄釘	石室内地横土	3.1	欠損	0.4		頭部欠損。	
55	鉄釘	石室内地横土	5	欠損	0.9		頭部欠損。	
56	鉄釘	石室内地横土	4.3	欠損	0.6	残存頭部より14~33mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 身部は腐蝕著しい。	Fig. 38に出土位置を記載。
57	鉄釘	石室内地横土	3.25	欠損	0.65		頭部欠損。 身部欠損。	
58	鉄釘	石室内地横土	2.9	欠損	0.55		頭部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
59	鉄釘	石室内地横土 石室内流入土	3.4	欠損	0.3		頭部欠損。 身部欠損。	2個体接合。
60	鉄釘	石室内地横土	3.95	欠損	0.75	縦目に断片的に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
61	鉄釘	石室内地横土	4.5	欠損	0.8		頭部欠損。 尖部欠損。	
62	鉄釘	石室内地横土	4.4	欠損	0.75	残存頭部より10~40mmの間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
63	鉄釘	石室内地横土 石室内床面直上	4.5	欠損	0.5		頭部欠損。 尖部欠損。 身部欠損。	2個体接合。
64	鉄釘	石室内地横土	3.6	欠損	1		頭部欠損。 尖部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
65	鉄釘	石室内地横土	2.55	欠損	0.7	残存頭部より1~10mmの間に横目に付着。 遺存状態不良。	頭部欠損。 尖部欠損。	
66	鉄釘	石室内地横土	2.5	欠損	0.4		頭部欠損。 尖部欠損。 身部欠損。	Fig. 38に出土位置を記載。
67	鉄釘	石室内地横土 石室内床面直上	3.25	欠損	0.35		頭部欠損。 尖部欠損。	2個体接合。

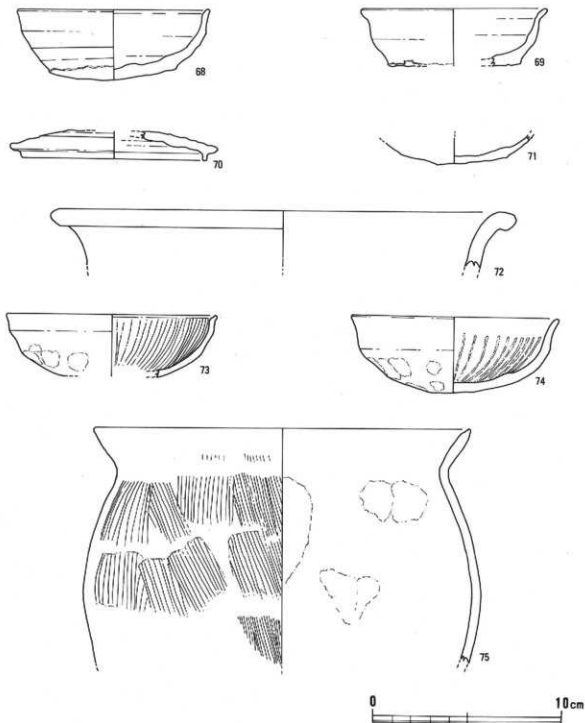


Fig. 62 第53号墳出土 遺物実測図(4)

群第3号墳〔勇・藤岡1978〕の例があげられる。

当墳の石室掘形は二段に掘削されたものであったが、その構築順序を復元すると、基盤層中に多量の巨礫が含まれていることからまず広範囲に浅く皿状に掘削し、次に巨石が含まれない箇所を選択し、さらに一段掘り下げたものと推測する。

墳丘盛土中より出土した土師器の杯(74)については、一時的に墳丘の構築を止めて、その作業面上に置いたものと推定される。作業面は石室基底石の上端に対応している。

Tab. 7 第53号墳出土 土器観察表

番号	種類	形状	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
68	須恵器	杯身	口径 10.15 底径 3.7	体部・口縁部は上外方向にのび、 端部はやや丸くおさめる。 口縁部はやや外反。 底部は深く、丸い。	マキアグ、ミズビキ成形。 底部粘土組成。 内面中央の停止ナデ調整の有 無は不明確。口縁へ少切り未調 整。内面はナデ調整。	クロロ回転：左方向。 色調：黄灰色。 胎土：密。1mm以下の石灰を少量含む。 焼成：良好。 残存：70%。
69	須恵器	杯身	口径 9.80 残存高 3.05	体部・口縁部は上外方向にのび、 端部はやや丸くおさめる。 口縁部は内反し、上部で外反。 底部は深く、平ら。	マキアグ、ミズビキ成形。 底部粘土組成。 内面中央の停止ナデ調整の有 無は不明確。口縁へ少切り未調 整。内面はナデ調整。	クロロ回転：左方向。 色調：暗青灰色。 胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：35%。
70	須恵器	盃	口径 9.8 残存高 1.35 つまみ径 不明 かえり角 0.4 かえり角度 16°	口縁部は丸くおさめる。口縁部内面 に凹下するかえりを付す。 かえりは断面長方形を呈し、端部 はやや丸くおさめる。 天井部は低く、平ら。	マキアグ、ミズビキ成形。 底部不明確。 内面はナデ調整。天井部外面2/ 3に凹転ヘリ有り調整。	クロロ回転：右方向。 色調：暗青灰色。 胎土：密。1mm以下の長石を含む。 焼成：良好。 残存：25%。
71	須恵器	杯身	口径 不明 残存高 1.6	底部はやや平ら。	マキアグ、ミズビキ成形。 内面中央の停止ナデ調整の有 無は不明確。 口縁へ少切り未調整。内面はナ デ調整。	クロロ回転：左方向。 色調：黄灰色。 胎土：密。1mm以下の石灰を含む。 焼成：良好。 残存：小片のみ残存。
72	須恵器	盃	口径 24.65 残存高 3.0 基部径 不明 体部最大径 不明	口縁部はやや肥厚し、断面は方 形に近い。	マキアグ、ミズビキ成形。 内面はナデ調整。	クロロ回転：不明。 色調：暗赤灰色。 胎土：密。1mm以下の黒色粒を少量 含む。砂粒付着。 焼成：良好。 残存：口縁部の20%。
73	土師器	杯	口径 11.15 残存高 3.3	体部・口縁部は上外方向にのび、 端部は面を待つ。 口縁上部はやや外反。	内面に暗文を持つ。 底部外面に指頭正圧。	クロロ回転：不明。 色調：明赤褐色。 胎土：密。2mm以下の黒質母を若干 含む。磨良な土を使用。 焼成：良好。残存：20%。
74	土師器	杯	口径 10.9 残存高 4.0	体部・口縁部は上外方向にのび、 端部はやや丸くおさめる。 口縁上部はやや外反。 底部は深く、丸い。	内面に暗文を持つ。 底部外面に指頭正圧。	クロロ回転：不明。 色調：褐色。 胎土：密。2mm以下の黒質母を少量 含む。 焼成：良好。残存：75%。
75	土師器	盃	口径 19.9 残存高 12.4 基部径 17.5 体部最大径 20.9	口縁部は上外方向にのび、端部は やや丸くおさめる。	外面はハケ調整。	クロロ回転：不明。 色調：黄褐色。 胎土：やや密。2mm以下の石灰、長 石を含む。 焼成：良好。残存：20%。

石室掘形の底面では、円礫を充填した特殊な小型土坑を検出した。それは、石室の開口部より2石目の基底石の側に、東西対になって穿たれていた。これらの土坑は基盤面に掘り込まれており、石室完成時には床面下に埋まってしまう。しかし、石室の平面を意識した位置にあることから、石室基底石が設置された以降に掘られたものであると考えられ、石室構築時に何らかの行為が行われたことが想像される。土坑内に充填されている礫は、色調において明瞭な差異が認められる。東側のものは黒色系礫が主体であり、一方、西側のものは白色系礫が主体であり、色に関して意識的な選別がなされた可能性が高い。

出土須恵器は石室前庭部や墳丘周辺・石室掘形等から出土し、良好な検出状況を示したものではない。杯身(68)(69)は、体底部外面に著しい未調整跡を残すもので、第52号墳にはみられなかったものである。(71)は杯身底部とみられるが、底部外面に同心円叩き目を有する特徴的なものである。(70)は細片のため不詳であるが、この復元が正しいならば、杯蓋ではなく蓋形土器を想定せねばならない。

当古墳の床面はすでに盗掘を受けており、埋葬時期を比定するような遺物は検出できなかったが、石室の構造から須恵器杯身(68)を中村氏編年Ⅲ型式2段階(中村, 1978)に比定し、7世紀第2四半期から第3四半期にあてられる。築造時期は墳丘作業面上から出土した土師器杯が西弘海氏の編年による飛鳥Ⅱ式に対応することより(西1982)、7世紀第2四半期から第3四半期にあてられる。

4 岩ヶ平支群第54号墳

- | | |
|-----------|--------|
| A 古墳の立地 | E 土 層 |
| B 墳丘の調査 | F 出土遺物 |
| C 石室の調査 | G まとめ |
| D 石室掘形の調査 | |

A 古墳の立地

第54号墳は発掘区の南端に位置しており、今回調査を行った5基の中では最も低いところに立地している (Fig.19)。微地形的には、古墳が立地する地点は周辺より基盤層が隆起しており、北から南へのびる幅10m程度の緩やかな尾根状の地形をなしている。石室掘形はこの尾根状地形の稜線を東へ避けて穿たれており、この稜線は石室掘形の西側肩に利用されていたものと推定される。

当古墳の周辺地形をみていくと、墳丘東側裾部は比較的良好に遺存しており周溝が残存していた。墳丘西側裾部においては、第53号墳東側から続いている小流路を検出した。この流路はさらに南へのびており、発掘区外へと続いている。この流路との埋土は墳丘上に堆積しており、古墳の築造が流路の形成に先立っていることが確認できた。古墳の南側は土石流堆積物の先端にあたり、比高差約1mの段差が形成されている。この場所には、基盤層に含まれる花崗岩の巨石が多数露頭していた。北側は、古墳が立地する尾根状地形を掘り割って墳丘区画を強調させた場所に、後に小流路が形成されたものと推定される。

このように当古墳は、巨石が多く古墳造営には不向きな場所に築造されている。なお、周囲から墓道などは検出されていない。

B 墳丘の調査

a 調査前の墳丘

当古墳は隆起した基盤層上に立地していたが、調査前においては露出した石室石材周辺の若干の隆起しか確認できなかった (Fig.64)。顕著な隆起が認められなかったのは、本来、低墳丘であったと推定される上、墳丘盛土の流出等、地形の改変を受けたためと考えられる。

調査前に地形測量を行った結果、標高86.75mから88.00mにかけて等高線が南へ張り出している状況が認められ、墳丘を確認することができた。しかし、具体的な墳丘の範囲については、墳丘の裾部が埋もれていたため確認できなかった。このように、発掘調査を行う以前においては古墳の存在は確認できたものの、墳形や墳丘規模については明らかにできなかった。また、

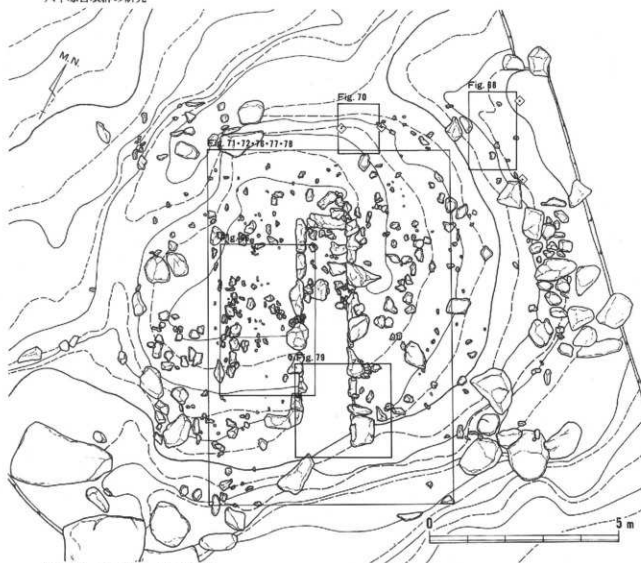


Fig. 63 第54号墳 挿図配置図

墳丘の中央部には後世の攪乱坑が存在しており、石室石材や崩壊した羨道部の天井石等の石材が露出していた。

b 検出時の墳丘

墳丘の遺存状況は極めて悪く、石室の西側においては掘形の肩付近まで盛土が流出していた (Fig. 65, PL. 37)。盛土が最も良好に遺存していた東側においても、厚さ0.25m程度しか遺存していなかった。盛土内には、石室掘形掘削時に基盤層から排出されたと推測される礫が多量に含まれていた。このような遺存状況にもかかわらず、基盤層の隆起している場所に古墳を築造しているため、墳丘裾部から残存墳丘最高点までの比高差は、第52号墳や第53号墳より大きくなっている。計測値は、残存墳丘最高点と前庭部の比高差が1.12m、墳丘北側裾部との比高差が0.77mを測る。

盛土が遺存していた範囲は、主軸上で南北9.8m、中軸上で東西4.06mを測る。しかし、古墳が立地している地点の基盤層が隆起しているため、実際には盛土が遺存していた範囲より広い範囲に裾部が認められた。墳丘測量図からも、標高87.00mの等高線が巡る広い範囲に裾部

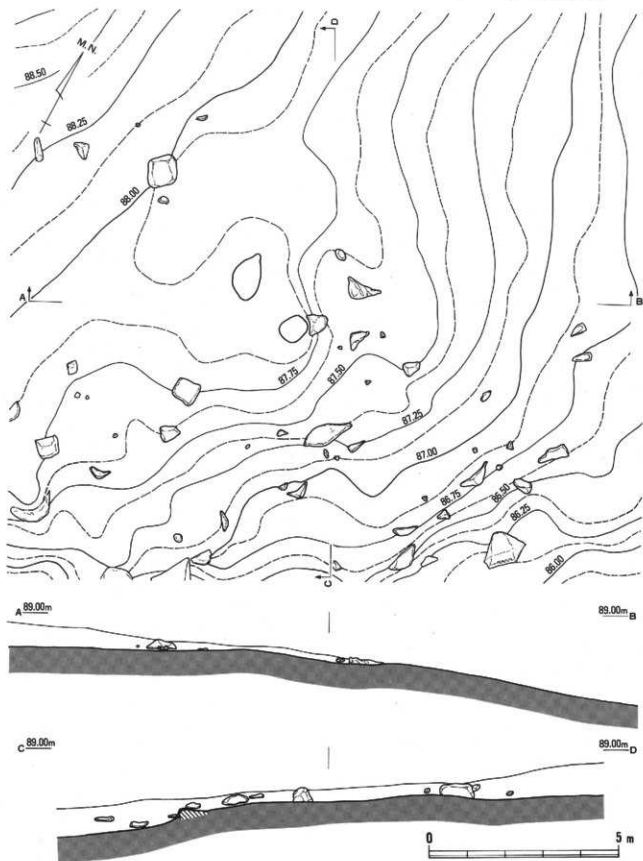


Fig. 64 第54号墳 調査前墳丘測量図



Fig. 65 第54号墳 墳丘測量図

が形成されていることを読みとることができる。墳丘北東部で検出した周溝は、盛土の残存部に接していたのではなく隆起した基盤層の裾部に位置していた。このことから、隆起した基盤層を墳丘の一部として意識していたと推測する。この隆起した基盤層を墳丘の範囲と考えると、墳丘の直径は15m程度であったと推定できる。

墳形については、盛土の多くが流出しているため、現状での形が築造当初の状況をどの程度とどめているのか不明である。盛土が残存していた範囲は南北に長い楕円形を呈しているが、等高線は円形に回り、前述の隆起した基盤層も円形を呈している。これらのことから、当古墳は円墳と推定できる。しかし、石室西側において検出した列石が石室主軸に平行して、直線的に並んでいることを重視すれば、方墳の可能性も否定できない (Fig.65, PL.37)。

c 墳丘に関連する遺構

①列石

当古墳の石室西側において、長さ約3mにわたり列石を検出した (Fig.66, PL.43)。これは径10cmから20cm程度の扁平な割石9石によって構成されており、石室主軸に平行して直線的に並んでいた。列石は墳丘盛土上に構築されたものではなく、すべて石室掘形の西肩部である基盤面に接地した状態で並べられていた。石室掘形の東肩部や北肩部では盛土が遺存していたにもかかわらず、列石は確認されていない。

列石は遺存状況が悪く1段目しか遺存しておらず、周辺の盛土もすべて流出していた。このため、本来的に列石が墳丘の裾部に置かれていたものか、墳丘内に埋め込まれていたものかは不明である。しかし、墳丘の勾配や石室との位置関係から、この列石が墳丘裾部に外護列石として積まれていたとは考えがたく、墳丘内列石である可能性が高い。

②周溝

当古墳では墳丘北東裾部において、円弧状に巡る周溝を検出した (Fig.67・68, PL.37)。周溝の残存部は約2m、幅は約0.8mを測る。周溝の深さは、最も深い箇所では肩上から底部までの比高差が0.15mを測り、断面はU字形を呈している。基盤層を掘削して造られており、墳丘盛土はこの溝の肩の位置までは遺存していなかった。周溝は北側で小流路による侵食を受けており、墳丘北側裾部や西側裾部では検出されていない。ただし、第53号墳と第54号墳の間には小流路があるが、これによって尾根が切断されたとは考えにくい。むしろ、第54号墳築造時にこの尾根状地形を切断する形で墳丘背後に周溝を造成し、この後、小流路が形成され周溝を侵食したと推察する方が妥当であろう。

d 墳丘に伴う遺物の出土状況

当古墳の墳丘上および周辺部からは、須恵器の平瓶(79)、蓋(83)、高杯(84・85)、甕(86)、長頸甕(87)、土師器の甕等が出土している (Fig.67)。これらの内、甕は細片となった状態で堆積土中から出土しており、検出状況からも原位置は保っていないと判断した。また、前底部で出土した須恵器の平瓶は、石室内から出土した破片と接合できた。したがって、平瓶は石室内に置かれていたものが移動したものと推定できる。一方、墳丘北側裾部で出土した土師器の甕については、出土状況から原位置を大きくは動いていないと判断した。石室掘形埋土から土

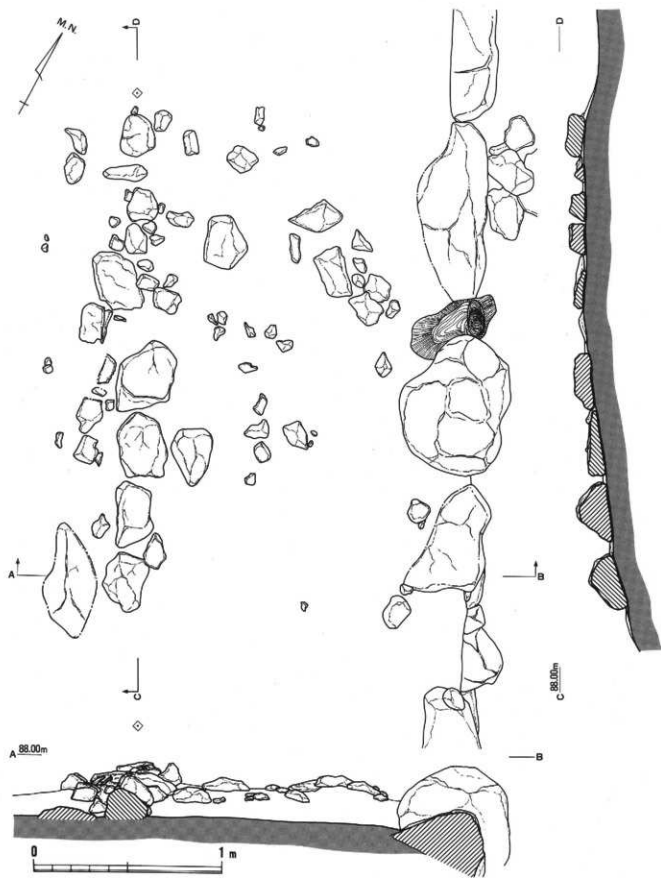


Fig. 66 第54号墳 列石実測図



Fig. 87 第54号墳 遺物分布図

師器の細片を検出しているが、石室掘形埋め戻しの際に混入したものとする。墳丘北側に接して検出した小流路中からは須恵器の杯身(112)、長頸壺の脚部(115)等の破片が出土している(Fig.112)。杯身は当古墳に伴う他の遺物より古相のものであることから、当古墳と直接的な関係はないと判断した。

①墳丘北側裾部の遺物出土状況

墳丘北側裾部からは、須恵器の甕(86)、土師器の甕が出土した(Fig.70)。これらはいずれも細片であり、多くは堆積土から出土した。

これらの遺物の内、土師器の甕のみ基盤層に接地した状況で検出していたが、非常に細かい破片となってまとまった状況で出土した。このことから、土師器甕は原位置を大きく動いていないと考える。この土器片は口縁部が西方向を向いているものと北方向を向いているものがある。また口縁部片の上部に底部の破片が重なっているなど、各破片のあり方に不整合性が看取できた。このような出土状況から、この甕は故意に破砕されていたと推測できる。

八十塚古墳群では岩ヶ平支群第10号墳の墳丘裾部から須恵器の甕が出土しており、故意に破

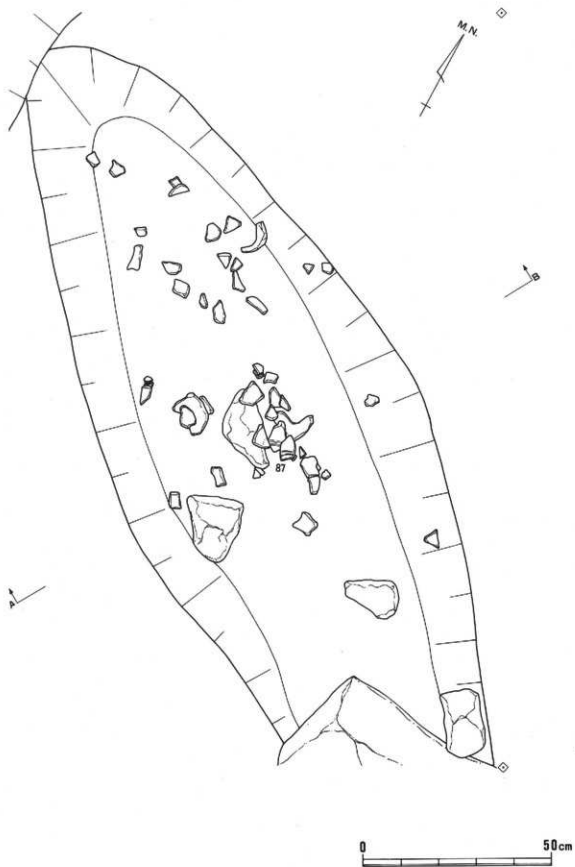


Fig. 68 第54号墳 墳丘東側周溝土器出土状況図

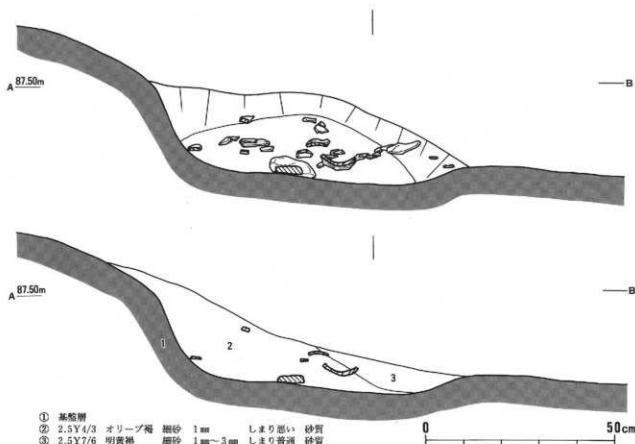


Fig. 69 第54号墳 墳丘東側周溝土器出土状況立面断面図および土層断面図

砕されたものとして報告されている〔古川₁₉₉₀〕。この際に破砕の根拠となったことは甕が細片化していたこと、器壁の表面に打点が観察できたことであった。当古墳とは、土師器と須恵器の相違点があるものの比較的近似した事例と理解することができる。

甕の周囲には、直径10cmから20cm程度の礫が数個存在していた。甕が検出された当初段階では、堅穴系小石室内に甕が伴っている可能性を考えていた。しかし、これらの礫の多くが基盤層に含まれるものであったことと、前述したように甕が破砕された状態で検出されたことから、これらの礫は遺構ではないと判断した。

②墳丘北東部周溝内の遺物出土状況

墳丘北東部の周溝内の埋土から、須恵器の高杯(84)と長頸壺(87)が出土した (Fig. 68, PL. 47)。長頸壺は細片となった状態で出土しており、各破片はいずれも数cm程度となっていた。破損の状況からは、脚部や口縁部といった各部位を単位として打ちかいている状況は観察できなかった。溝内での詳細な出土位置については、これらの多くが溝の底面に接して出土しているのではなく、底部から2cmから5cm程度高い位置で、溝の埋土に含まれた状態で出土した。

長頸壺はその後の接合の結果、完形の半分程度まで復元することができた。各破片の接合状況や、破片が周溝の底部に接して検出されていないことから、原位置を若干移動している可能性が指摘でき、本来的に周溝に伴っていたものかどうかは断定できない。しかし、墳丘上で行われた何らかの行為に伴うものである可能性がある。また、検出時における口縁部や底部の位置から、これが埋没時の土圧等によって形を崩じたのではなく、故意に破砕された可能性が高

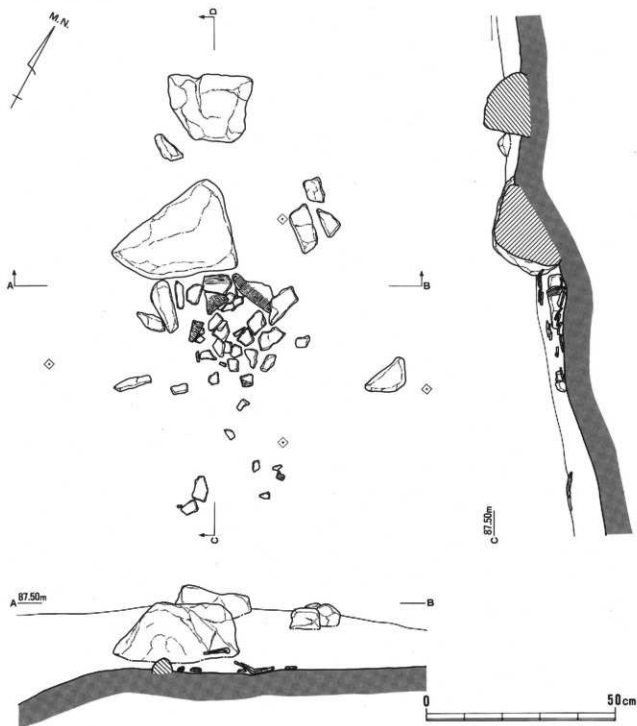


Fig. 70 第54号墳 墳丘北側裾部土器出土状況図

い。このような出土状況は、前述した第52号墳墳丘西側周溝での長頸壺の出土状況とは対照的である。

高杯は脚部のみが出土した。これは周溝の埋土内上層部から検出されており、この周溝に伴うものではないと考える。

C 石室の調査

第54号墳の内部施設は無袖形の横穴式石室であり、主軸上で全長5.75m、中軸上で幅1.14mを測る。調査のため設定した主軸方位は磁北から28°28'15"西偏し、南南東方向に開口する。石室は、基盤面を掘り込んで造成した石室掘形内に築かれていた。なお、石室規模は今回、発掘調査を行った5基の中で最大である。

a 石室の検出状況

石室上面の腐植土を除去した段階で奥壁および東西の両側壁の一部が露呈し、当古墳が南北方向に主軸をもち、南南東に開口する無袖形の横穴式石室であることが予測された (Fig.71, PL.35)。開口部付近には、天井石と推定できる石材を1石確認した。この石材は床面上に落下しており、原位置は保っていなかった。石室主軸と中軸の交点の南西付近においては、大型の石材が石室内へ落ち込んでいた。この石材は平滑な割面を有しており、転落した石室石材である可能性が高い。

奥壁付近においては、直径20cmから30cmの礫が集中していた (PL.36)。これらの石材と近似した規模の礫が、奥壁基底石上に1石積まれていた。このような礫を奥壁基底石上に天井まで積む例が八十塚古墳群で多く報告されている。これらのことから奥壁付近で観察された礫は、本来、基底石上に積まれていた石材であったと推定する。

また、石室内の流入土中には多くの花崗岩の小礫が含まれており、これらの小礫の中には扁平な屑石も多くみられた。このことから、石室崩壊によってできた凹地が後世の石材採取等の際に、小礫や屑石の投棄坑として利用されたことが推定できる。当古墳南側に元和年間 (1620年代) のものと推定される矢穴石がみられたことから、徳川氏大坂城の採石場に伴うものである可能性も指摘できる。

なお、閉塞施設については、検出されていない。

b 石室の構造

石室の平面形は、東西の両側壁が直線的にやや開くことが特徴としてあげられる。その点、胴張り平面形を呈する第53号墳とは様相を異にする。壁体は多くが基底石しか遺存しておらず、部分的に2段目の石材が遺存していた。なお、基底石上面の標高は揃っていない (Fig.72・73, PL.38・39)。

床面では初葬時に設置されたと推定できる敷石を検出しているが、排水溝等の施設はない。

①奥壁

奥壁は基底石が1石据えられており、その上に積まれていた小石材が1石遺存していた (PL.41-1)。基底石は横位に立てて使用されており、幅1.07m、高さ0.71m、最大厚0.65mを測る。壁面として使用されている面は平滑に加工され、その背面は中央部が凸状に膨らんで原面を残していた。この基底石上に遺存していた石材は、直径20cm程度のものであった。また、底部付近にできる東西の両側壁との隙間には、小石材が多く挿入されていた。

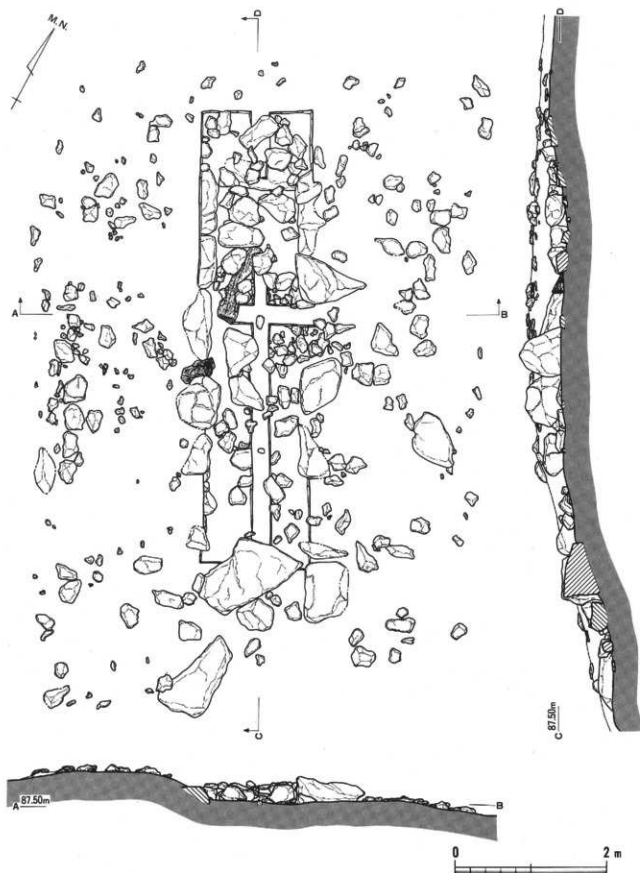


Fig. 71 第54号墳 石置検出状況実測図

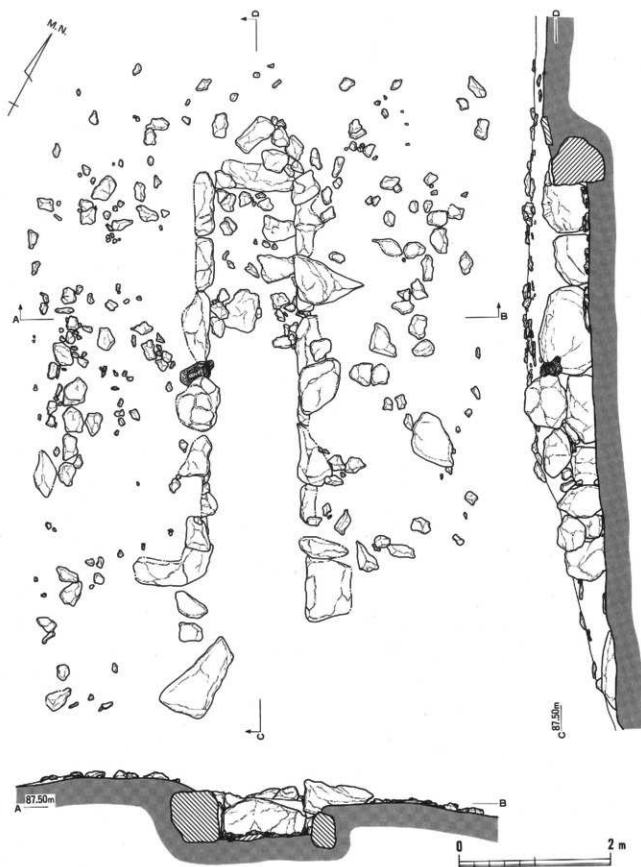


Fig. 72 第54号墳 石室上面実測図

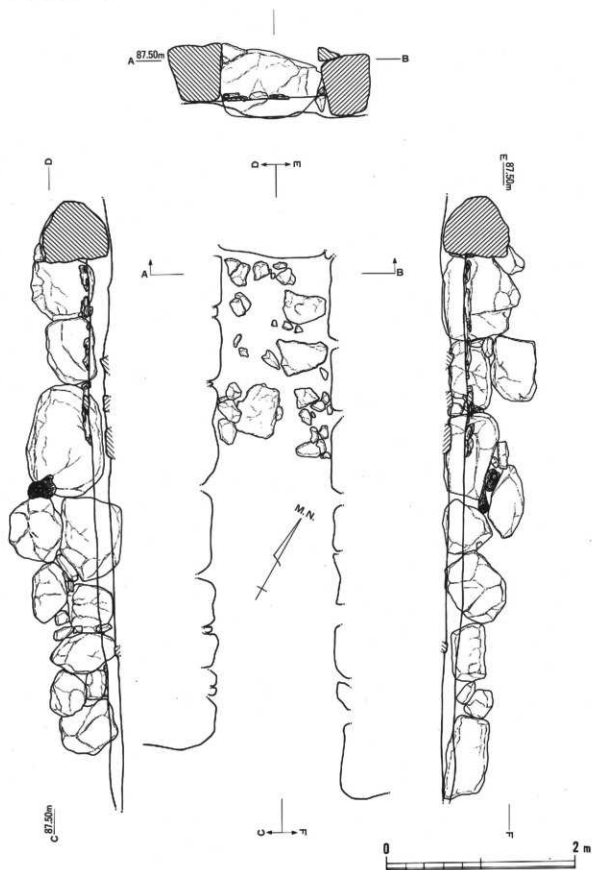


Fig. 73 第54号墳 石室実測図

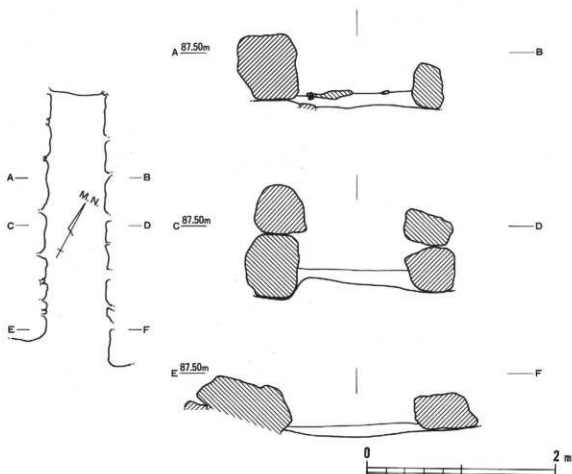


Fig. 74 第54号墳 石室横断面図

②西 壁

基底石は計8石で構成されており、壁体の長さは5.26mを測る（PL.40-1）。床面からの残存高は、最大0.9mを測る。基底石は石材を横位に立てて据え置いているものと、面積の最大となる面を接地面に利用しているものがある。奥壁側から3石目までの基底石は前者の用石法が観察され、4石目以南は後者の用石法へ変わっていた。開口部から1石目の基底石は基盤層中の巨石を壁体を利用したものであり、3石目の基底石は縦位に立てて据えられていた。

2段目の石材は3石遺存しており、これらの隙間には小型の石材を充填していた。基底石上面の標高は揃っておらず、横目地を通していたとは考えがたい。

③東 壁

基底石は計8石で構成されており、壁体の長さ5.74mを測る（PL.40-2）。残存高は最も遺存状況が良好な箇所、床面からの高さ0.75mを測る。基底石は西壁と同様、石材を横位に立てて据え置いているものと、面積の最大となる面を接地面に利用しているものがある。開口部から3石目および7石目の石材以外は、すべて横位に立てて据えられている。石室掘形は奥壁方向へ行くほど深くなるので、掘形が深いところほど石材を立てて使用していることになる。また、基底石間にできる隙間には、小型の石材を充填していた。

2段目の石材は計2石遺存していた。基底石上面の標高は揃っておらず、横目地を通していたとは考えられない。

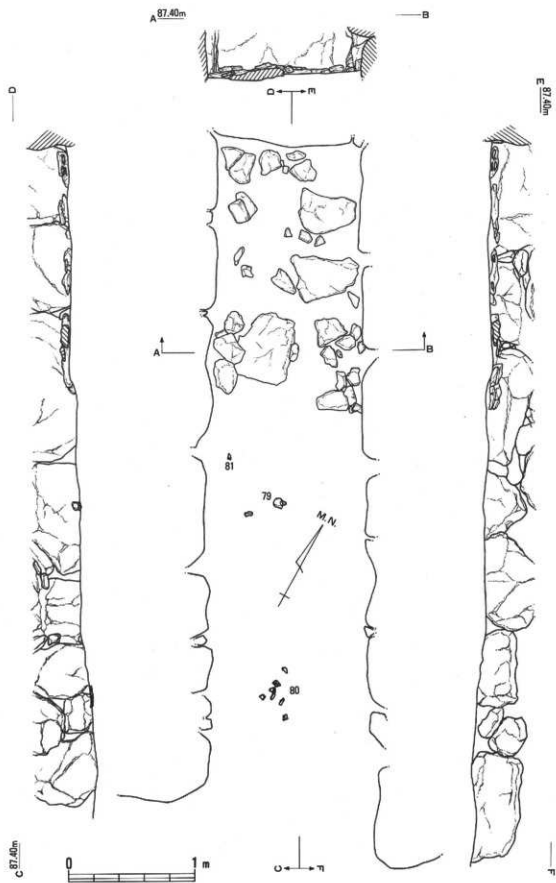


Fig. 75 第54号墳 石室床面遺物出土状況図

④床 面

床面は北半部の長さ2.17mの範囲で、花崗岩の扁平な割石を用いた敷石が設けられていた (Fig. 75, PL. 42-2)。これは扁平な大型の石材3石、小型の石材34石により構成されており、置土上に直接敷かれていた。また、床面上にはこれらの敷石以外にも流入土中に含まれている礫が多数みられたが、床面に密着しているもので、かつ上面に平滑な面をもっているものを敷石と認識して区別した。敷石が設けられている範囲の南側には攪乱坑が一部床面にまで達しており、攪乱坑からは敷石と推定される石材が出土している。このことから敷石の一部は、破壊された可能性が高い。

c 石室内の遺物出土状況

石室内からは鉄釘(76~78)と須恵器が出土したが、いずれも細片であった (Fig. 75, PL. 41-2)。鉄釘は石室内の奥壁付近で、石室内攪乱土中より出土した。須恵器は平瓶(79)、杯身(80)、高杯(81・82)が出土した。この内、杯身・平瓶・高杯(81)が床面より出土した。杯身は石室内の中軸より南側で細片となった状態で広範囲にわたり散在しており、原位置は保っていない。高杯(82)は石室内流入土の中に含まれていたものであるが、他の須恵器に比べてやや古い要素をもつものであることから、当古墳に伴う遺物ではないと考える。

平瓶は石室のほぼ中央で口縁部が出土し、その他の破片は前庭部付近の広い範囲にわたり細片となって出土した。したがって、二次的に移動したと考えることができる。以上のように、石室内では、明確に原位置を保っていると判断できる遺物は検出されなかった。なお、石室内の土はすべて、微細遺物の採集を目的とした水洗選別を行ったが、遺物はまったく確認されなかった。

D 石室掘形の調査

当古墳では、歪なU字形を呈する石室掘形を検出した。石室掘形は、古墳が立地している尾根状地形の稜線を東に若干そらして穿たれたものであり、この稜線は石室掘形の西側肩部として利用されたものと推定される。

a 裏込めの状況

裏込めの土には多量の花崗岩礫が含まれており、その多くは直径10cmから20cm程度のものがあつたが、中には直径50cm程度のものもみられた (Fig. 76, PL. 48・49)。これらの礫は掘形掘削時に掘り出されたものが、その後、埋め戻しの際に再び掘形内へ投入されたものと推定できる。礫は北半部に集中して投入されており、礫の一部は壁体を支えていた。石室北半部では基底石がすべて立てて据え置かれていたことから、これらの礫を壁体の裏込め石として使用することで基底石の安定を図ったものと推定できる。

b 石室掘形の形態

石室掘形の規模は主軸上で南北6.47m、中軸上で東西4.60mを測り、歪なU字形の平面形を

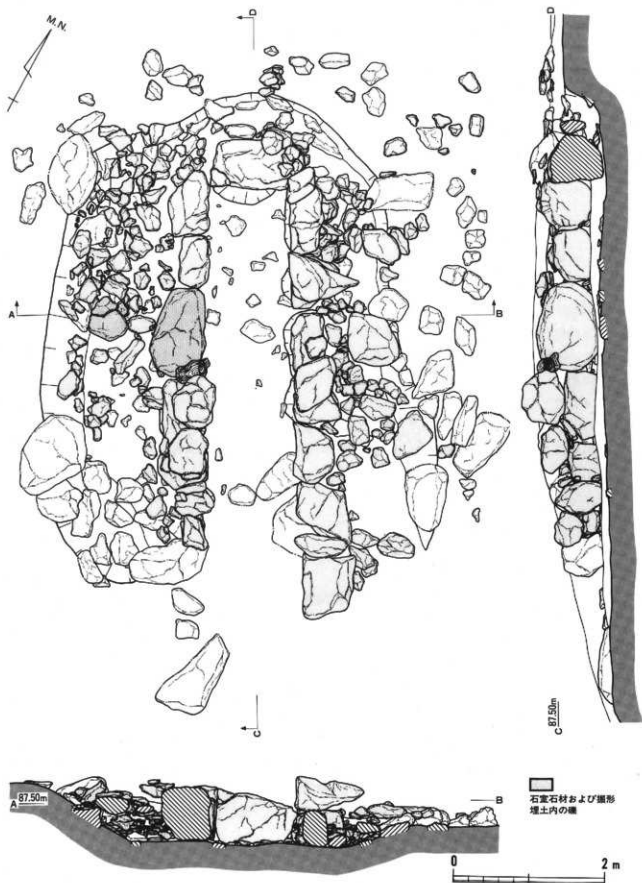




Fig. 77 第54号墳 基底石および石室掘形実測図



Fig. 78 第54号墳 石室掘形実測図

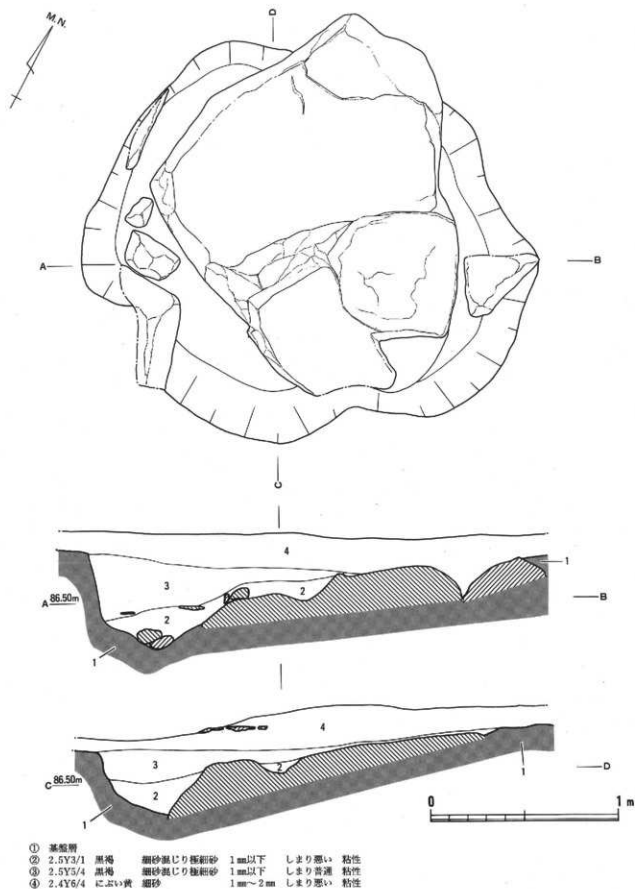


Fig. 79 第54号墳 石室掘形面土坑実測図

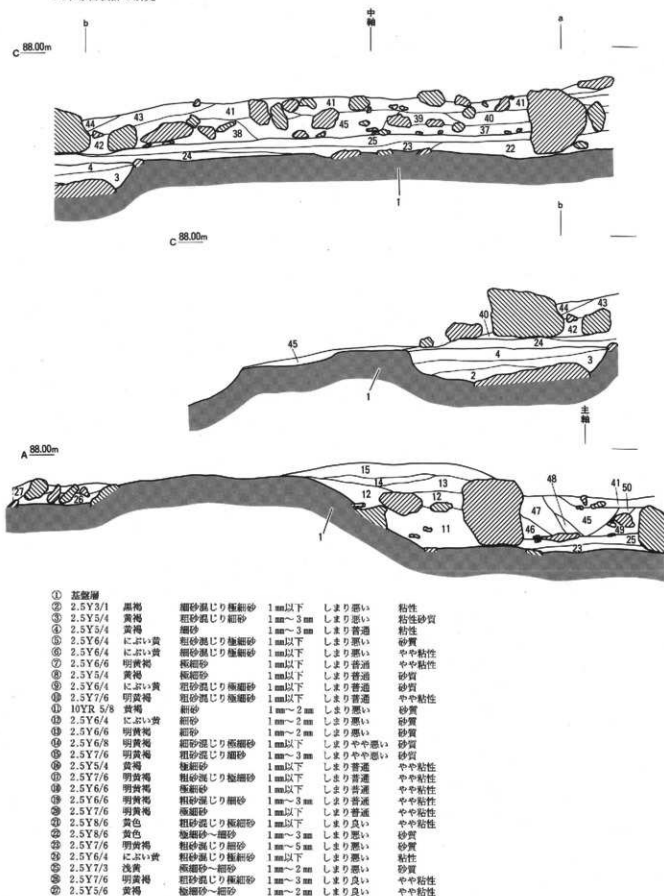
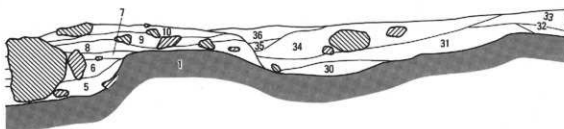


Fig. 80 第54号墳 土層断面図

88.00m D

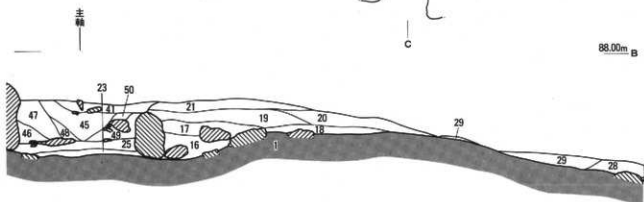


A—



—B

88.00m B



- | | | | | | |
|-----------|-------|----------|---------|---------|------|
| ② 2.5Y6/6 | 明黄褐 | 極細砂 | 1mm以下 | しまり良い | 砂質 |
| ③ 2.5Y7/6 | 明黄褐 | 細砂 | 1mm~2mm | しまりやや悪い | 砂質 |
| ④ 2.5Y6/4 | にぶい黄 | 粗砂混じり細砂 | 2mm~3mm | しまり悪い | 砂質 |
| ⑤ 2.5Y6/6 | 明黄褐 | 粗砂混じり細砂 | 2mm~3mm | しまり悪い | 砂質 |
| ⑥ 2.5Y7/3 | 明黄褐 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm以下 | しまりやや悪い | やや粘性 |
| ⑦ 2.5Y7/3 | 浅黄 | 粗砂混じり極細砂 | 1mm以下 | しまり悪い | やや粘性 |
| ⑧ 2.5Y7/6 | 明黄褐 | 粗砂混じり細砂 | 1mm~3mm | しまり普通 | やや粘性 |
| ⑨ 2.5Y7/6 | 明黄褐 | 粗砂混じり細砂 | 1mm~3mm | しまり悪い | 砂質 |
| ⑩ 2.5Y7/7 | 明黄褐 | 粗砂混じり細砂 | 1mm~3mm | しまり良い | 砂質 |
| ⑪ 2.5Y6/4 | にぶい黄 | 細砂~粗砂 | 1mm~3mm | しまり悪い | 砂質 |
| ⑫ 2.5Y7/8 | 黄色 | 粗砂混じり細砂 | 1mm~3mm | しまりやや悪い | やや粘性 |
| ⑬ 2.5Y3/3 | 暗オリーブ | 細砂~粗砂 | 1mm~3mm | しまり普通 | 砂質 |
| ⑭ 2.5Y6/4 | 黄褐 | 細砂 | 1mm~2mm | しまり良い | 砂質 |
| ⑮ 2.5Y6/4 | にぶい黄 | 極細砂 | 1mm以下 | しまり普通 | 砂質 |
| ⑯ 2.5Y6/4 | 黄褐 | 極細砂 | 1mm以下 | しまり良い | 砂質 |
| ⑰ 2.5Y6/4 | にぶい黄 | 極細砂 | 1mm以下 | しまり良い | 砂質 |
| ⑱ 2.5Y6/4 | 黄色 | 極細砂 | 1mm以下 | しまりやや悪い | 砂質 |
| ⑲ 10YR4/4 | 褐色 | 細砂 | 2mm以下 | しまり良い | やや粘性 |
| ⑳ 2.5Y6/3 | にぶい黄 | 細砂混じり極細砂 | 1mm以下 | しまり良い | 粘性 |
| ㉑ 2.5Y7/6 | 明黄褐 | 極細砂~細砂 | 1mm~3mm | しまり悪い | 砂質 |
| ㉒ 2.5Y5/4 | 黄褐 | 極細砂~細砂 | 1mm~3mm | しまり良い | やや粘性 |
| ㉓ 2.5Y6/4 | にぶい黄 | 極細砂~細砂 | 1mm以下 | しまり良い | やや粘性 |
| ㉔ 2.5Y6/4 | にぶい黄 | 極細砂~粗砂 | 1mm~3mm | しまり普通 | 砂質 |



呈している (Fig.78, PL.52・53)。石室掘形には、基盤層に含まれる花崗岩礫が多数露頭していた。石室掘形の南端には多くの巨石が露頭しており、これらが石室掘形の規模と位置を規制した可能性が高い。

石室掘形の底部から肩部までの比高差は、西側肩が最も高く約0.8mであり、東側肩での比高差は約0.4mを測る。北側肩と底部の比高差は約0.45mを測る。掘形底部は水平ではなく、西側が高く東側が低くなっており、中軸上での比高差約0.1mとなっている。南北方向では南側が北側より低くなっており、主軸上での比高差は約0.2mとなっている。

石室掘形底部の基底石据え付け穴は、すべての基底石にみられる訳ではない。奥壁基底石および東壁の奥壁側より1石目から4石目までの基底石と西壁の奥壁側より4石目から6石目までの基底石に対応する据え付け穴は穿たれていたが、他の基底石に対応するものは穿たれていない。東壁の奥壁側から5石目と6石目の基底石は基盤層に含まれる巨石上に積まれていた。

c 石室掘形面の遺構

石室掘形底面には南北2.1m、東西2.4mの土坑が穿たれていた (Fig.79)。これは基底石がのっていた花崗岩の巨石とその周囲を掘削したものであり、巨石は上面が割られていた。巨石は一部分しか露出しておらず、その大部分は基盤層中に埋没しており、直径5.0m以上の巨大なものである。土坑内の埋土からは須恵器、土師器等の遺物の他に、花崗岩の屑石や多量の炭化物を検出した。土坑埋土の最下層は、炭化物のみによって構成されていた。これらのことから、土坑は石室構築の際に障害となった掘形底面の巨石を除去することを意図して掘削されたと推定できる。土坑内の炭化物からは、火を焚くことによって巨石を加熱して割る方法が想像できる。土坑内の屑石は、巨礫の上部を割った際に生じたものであろう。

E 土 層

当古墳の調査では、石室主軸と中軸に沿って畦を設定し、土層の観察および図面の作成を行った。土層は、填丘盛土、石室掘形埋土、床面置土、石室内流入土に大別できる (Fig.80)。

a 填丘盛土および石室掘形埋土

5層から21層は、填丘盛土および石室掘形埋土である。填丘盛土と石室掘形埋土の質的な相違は、ほとんど観察できなかった。石室掘形埋土は、7層・17層と12層より下層にそれぞれ礫が集散的に投入されていた。盛土と石室の石材上面は対応しており、9層、13層、19層がそれぞれ基底石の上面と対応している。26層から36層は、填丘上および基盤層上の堆積土である。

b 床面置土

当古墳では、基盤面に置土をして床面としていた。置土は22層から25層で構成される。石室掘形底面が平坦でないため、22層・23層を敷くことによって平坦面を一度造成し、その上面に25層を敷いている。25層は石室南部で一部が流出している。2層から4層は巨石を除去するために穿たれた焼土坑の埋土である。

c 石室内流入土

37層から55層は、石室内に流入した堆積土である。これらは石室崩壊前の堆積土、石室崩壊後の堆積土および堆積した土の上面から穿たれた攪乱坑の埋土の3層に大別できる。42層および43層は、崩壊した石室壁体が落下した面を構成する層であり、この層より下層は石室崩壊前の堆積土と考えることができる。石室崩壊後の堆積層にも礫が含まれており、特に44層から55層は屑石を含む多くの礫が含まれていた。

F 出土遺物

第54号墳に伴うと考えることができる遺物は、墳丘および周辺、石室内、掘形面焼土坑内から出土している。これらの内、石室内から出土した遺物は、床面の直上から出土したものと、石室内の流入土より出土したものがある。また、墳丘に伴う遺物はいずれも細片で、遺物整理の段階で完全に復元できた個体は皆無であった。

a 石室床面の出土遺物

石室床面では、須恵器の平瓶(79)、杯身(80)、高杯(81)が出土した (Fig.82, Tab.8・9, PL.76)。これら以外にも若干の須恵器の細片が出土しているが、図化できなかった。平瓶(79)は全体の3分の2程度の破片が出土した。杯身(80)は床面直上で細片で出土したが、完形に復元することができた。高杯(81)は脚部の細片である。

b 石室内流入土の出土遺物

石室内流入土中では鉄釘(76~78)、須恵器の高杯(82)が出土した (Fig.81・82, Tab.8・9,

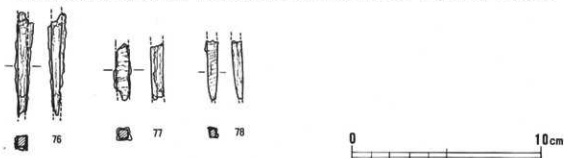


Fig.81 第54号墳出土 遺物実測図(1)

Tab.8 第54号墳出土 鉄釘観察表

番号	種類	出土遺情	法量		本質の状態	形態	備考
			長さ(cm)	頭部径(cm)	厚さ(cm)		
76	鉄釘	石室内流入土	5.4	欠損	0.75	縦目に断片的に付着。 遺存状態不良。	頭部欠損。
77	鉄釘	石室内埋土	3	欠損	0.6	残存頭部より2~27mm の間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。
78	鉄釘	石室内床面直上	3.1	欠損	0.48	残存頭部より1~30mm の間に横目に付着。	頭部欠損。 尖部欠損。

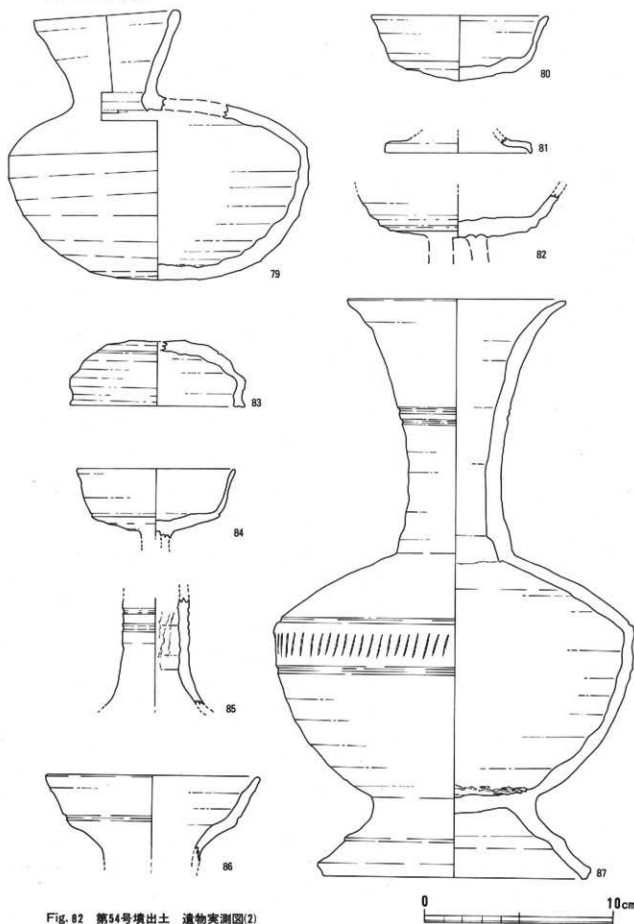


Fig. 82 第54号墳出土 遺物実測図(2)

Tab. 9 第54号墳出土 土器観察表

番号	種類	器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
79	須恵	平 底 器 皿	口径 器高 基部径 体底最大径 15.78	口縁部は外反しながら上外方向にのび、口縁端部の断面は長方形を呈する。体部上面はやや丸味をおび、肩部は比較的に明瞭な稜をもつ。底部はやや丸い。	マキアグ、ミズビヤ成形。 底部外面に凹陥へう割り調整。 内面はナゲ調整。 内面に頸部の接合痕あり。	クロロ回転：左方向。 色調：茶灰色。 胎土：密。1mm以下の石英を少量含む。 焼成：良好。 残存：50%。 1層内面と胴部に黒く焼けた所あり。
80	須恵	杯 形 甕	口径 器高 3.5	体部・口縁部は上外方向にのび、肩部はやや丸くおさめる。底部は深くやや平ら。	マキアグ、ミズビヤ成形。 内面中央の静止ナゲ調整。 凹陥へう切り未調整。 内面はナゲ調整。	クロロ回転：右方向。 色調：茶灰色。 胎土：密。1mm以下の黒色粒を若干含む。 焼成：良好。 残存：80%。
81	須恵	高 底 杯 形 甕	口径 残存高 基部径 器高 肩高 器底径 7.8	不明 不明 不明 不明 不明 不明	マキアグ、ミズビヤ成形。 内面はナゲ調整。	クロロ回転：不明。 色調：茶灰色。 胎土：密。1mm以下の石英を若干含む。 焼成：良好。 残存：頸底部の20%。
82	須恵	高 底 杯 形 甕	口径 残存高 基部径 器高 肩高 器底径 不明	不明 不明 不明 不明 不明 不明	マキアグ、ミズビヤ成形。 内面はナゲ調整。	クロロ回転：右方向。 色調：青灰色。 胎土：密。2mm以下の石英を含む。 焼成：良好整熟。 残存：頸底部の50%。
83	須恵	直 立 形 土 器	口径 器高 9.3 3.4	不明 不明	しあげナゲの有無は不明確。丁寧な割りがなされ、シャープなつくり。	クロロ回転：右方向。 色調：茶灰色。 胎土：密。 焼成：良好整熟。 残存：20%。 頸底部の重さ。
84	須恵	高 底 杯 形 甕	口径 残存高 基部径 器高 肩高 器底径 8.35 3.7 1.7 不明 不明	不明 不明 不明 不明 不明 不明	内面中央に静止ナゲ調整。底部粘土織。	クロロ回転：左方向。 色調：青灰色。 胎土：密。1mm以下の石英。黒色粒を少量含む。 焼成：良好。 残存：杯部の50%。
85	須恵	高 底 杯 形 甕	口径 残存高 基部径 器高 肩高 器底径 不明 不明 不明 不明 不明	不明 不明 不明 不明 不明 不明	残存部は、内・外面共にナゲ調整。胴部内面にしぼり目あり。	クロロ回転：不明。 色調：茶灰色。 胎土：密。1mm以下の石英。黒色粒を少量含む。 焼成：良好整熟。 残存：頸部の20%。
86	須恵	直 立 形 土 器	口径 残存高 基部径 器高 肩高 器底径 11.32 4.5 5.1 不明 不明	不明 不明 不明 不明 不明 不明	残存部は内面・外面共にナゲ調整。	クロロ回転：右方向。 色調：茶灰色。 胎土：密。1mm以下の黒色粒を若干含む。 焼成：良好整熟。 残存：口縁部の30%。
87	須恵	長 頸 甕 形 土 器	口径 器高 基部径 体底最大径 肩高 脚高 11.45 30.6 6.3 19.0 13.8 4.15	不明 不明 不明 不明 不明 不明	マキアグ、ミズビヤ成形。内面、外面ともにナゲ調整。 底部下半部は凹陥へう割りの後、ナゲ調整。内面に頸部と体部の接合痕あり。底部内面に工具による圧痕あり。	クロロ回転：不明。 色調：青灰色。 胎土：密。1mm以下の黒色粒を含む。 焼成：良好。 残存：70%。 胴底部の断面は長方形。

PL.76)。これら以外にも若干の須恵器および土師器の細片が出土しているが、図化できなかった。高杯(82)はシャープな稜を有しており、他の土器より若干古い様相を呈している。

c 墳丘上および周辺の出土遺物

須恵器の蓋(83)、高杯(84-85)、甕(86)、長頸甕(87)が出土した (Fig.82, Tab. 9, PL. 76)。蓋は、遺物整理時に掘形面の土坑内出土の破片と接合できた。これら以外にも若干の須恵器および土師器が出土しているが、細片のため図化できなかった。石室掘形埋土からは、土師器の小片が出土している。

d 石室掘形面土坑の出土遺物

須恵器の蓋(83)が出土した。蓋は墳丘上で出土した破片と接合することができた。この他にも土師器の甕が出土しているが図化できなかった。

G まとめ

第54号墳は、直径15m程度の規模をもつ円墳と考える。墳丘には、石室主軸と平行して直線的に並ぶ墳丘内列石を有する。このような円形の墳丘に直線的な列石が伴うという構造をもつ列石は、兵庫県下で数例確認されている。楕円形をした墳丘に直線的な列石が伴う例は、兵庫県神戸市所在の高塚山古墳群第6号墳〔丹治・橋詰1994〕や兵庫県姫路市所在の西脇古墳群B支群第1号墳〔高瀬1995〕等があげられる。これらの古墳で検出されている列石は、いずれも盛土上に並べられているのではなく、基盤層上に置かれたもので古墳完成時には盛土内へ埋め込まれていたものである。

主体部は長さ5.75m、幅1.14mの規模をもつ無袖形の横穴式石室であり、今回検出された5基の中では最大の規模をもつ。岩ヶ平支群でこれまでに検出されている無袖形石室と比較した場合でも、大規模な部類に入る。一方、無袖形石室のみにより構成される苦楽園支群では当石室と同等規模の石室が多く検出されており、類例として苦楽園支群第2号墳、同6号墳、同7号墳などがあげられる〔男・藤岡・古川1978〕。石室の平面形は、東西両側壁はともに直線的のびている。石材の用石法には特徴があり、基底石の多くが立てた状態で積まれていた。また、奥壁の基底石は一石で構成されており、その上部に小型の石材を積んでいた。この奥壁用石法は八十塚古墳群中で最も多くみられる形態である。床面には数石がみられた。

石室掘形は、南北6.47m、東西4.60mを測り、歪なU字形の平面形を呈している。石室の規模と比較した場合、かなり大規模な掘形を掘削しているのが特徴である。石室掘形底面には、基盤層中に含まれている花崗岩の巨石が露出しており、これを除去することを意図として巨石周辺に土坑が穿たれていた。さらに土坑内には多量の炭化物が検出され、火熱を利用して巨石を除去しようとしたことが窺える。このような類例は乏しいが、岩ヶ平支群第1号墳では、基盤層面に土坑が穿たれていることが床面土層断面図から確認でき、当古墳と同様の例であった可能性がある〔村川1959〕。

出土須恵器は石室内では細片のものしか出土していないが、平瓶(79)・長頸壺(87)等、残存状態の良好なものは、墳丘および周溝から出土している。平瓶は体部高が大きく、口頸部も高いやや大振りのもので、長頸壺は頸部中央に2条の凹線を、体部中央にも2条の凹線にヘラ描き紋を施し、脚部はやや高く中央に屈曲をもつなど、古墳時代的要素が残存している。

高杯(82)は脚部に2方の透し穴をもつ高脚高杯の破片で、今回調査した古墳の中では形態的に最も古い要素を示した須恵器である。黒漆色から灰色の硬質の焼き、質感のある胎土等が、生産地の違いを表現している。それ以外はほとんどが播磨系の胎土を呈している。

築造時期は、壁体中使用されている石材が大型であることや墳丘北東部周溝内より出土した長頸壺(87)にやや古い要素が認められることから、他の4基の古墳よりも築造時期は遡るものと考えられる。石室内出土の須恵器の杯身(80)は田辺氏編年のTK217併行期〔田辺1966〕、中村氏編年のⅢ型式1段階から2段階〔中村1978〕に相当し、当古墳の築造年代は7世紀第2四半期から第3四半期にあてられる。

5 岩ヶ平支群第55号墳

A 古墳の立地	E 土 層
B 墳丘の調査	F 出土遺物
C 石室の調査	G まとめ
D 石室掘形の調査	

A 古墳の立地

第55号墳は、調査区中央よりやや東に位置しており、標高88.00mから89.25mにかけての南向きの斜面地に築造されている (Fig.85, PL.58)。古墳が立地している地点の微地形を観察すると基盤面が隆起しており、幅7m程度の細い尾根状の地形となっている。これは第52号墳から第53号墳へと続く尾根状地形から派生するものである。ただし、当古墳北側には、これを切断する周溝が掘削されている。石室掘形は、この尾根状の地形の稜線を東へそらして穿たれており、稜線側に掘形の西肩を形成していた。

当古墳の周辺地形をみると、東方約10mにドンドン川が流れている。当古墳とドンドン川の間では、基盤層が侵食され多くの巨石が露頭していた。西方には第53号墳が位置しているが、両古墳間では小流路を検出している。墳丘裾部に堆積した墳丘流出土がこの小流路によって侵食を受けていることから、古墳築造後にこの小流路が形成されたと考えられる。南方は第54号墳が位置している地点まで比較的緩やかな斜面地である。北方も同様に緩斜面が続いている。

当古墳が立地する基盤層は、他の古墳が立地する基盤層に対して含まれる礫が比較的少なく、遺構面や墳丘盛土に含まれる礫も少なかった。

B 墳丘の調査

a 調査前の墳丘

発掘調査前の地形観察では、墳丘・石室等を認識することはできなかった (Fig.84)。調査前の地形で墳丘の隆起が認められなかったのは、墳丘が小規模であったことに加えて、墳丘盛土の大部分が流出していたためである。調査前の地形測量図 (Fig.84) からは、標高88.50mから89.00mにかけての等高線がわずかに南側へ張り出している状況が観察できる。しかし、この程度のわずかな張り出しは自然地形でもみられ、この時点で古墳の存在を推測することはできなかった。ただし、現状地形の観察において当古墳が立地する地点が、古墳の分布の空白地になっていることは、調査前より意識していた。当古墳を検出した結果、奥壁の上端が調査前にすでに地表に露頭していたことが調査前測量図より分かる。

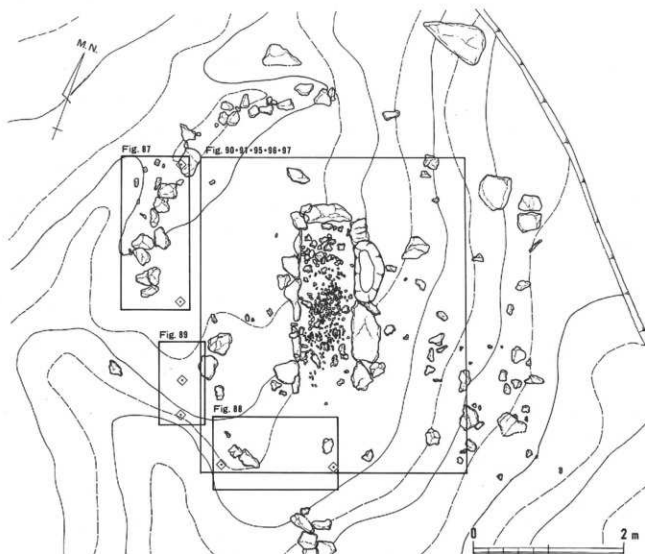


Fig. 83 第55号墳 挿図配置図

b 検出時の墳丘

墳丘盛土の残存状況は悪く、比較的良好に遺存していた北部でも厚さは0.2m程度であった(PL.58)。墳丘東半は特に盛土の流出が著しく、ほとんど遺存していなかった。墳丘西半においても、厚さ0.1m程度遺存しているにすぎなかった。

墳丘盛土は基盤層の土質と近似しており、直径10cm程度の礫が含まれていた。これらの礫は、本来、基盤層中に含まれていたものが石室掘形掘削時に排出されたものと考えられる。先述したとおり、立地する基盤層中に含まれる礫の量に比例して、他の4基と比べて含まれている礫の数は相対的に少ない。

前庭部と残存墳丘最高点の比高差は0.68m、北部の周溝底部と残存墳丘の最高点の比高差は0.43mを測る。

墳丘盛土が残存していた範囲は主軸上で南北5.73m、中軸上で東西3.25mを測る。墳丘の西側裾部から周溝や列石が検出されたことから、墳丘西側裾部は比較的良好に遺存していると推

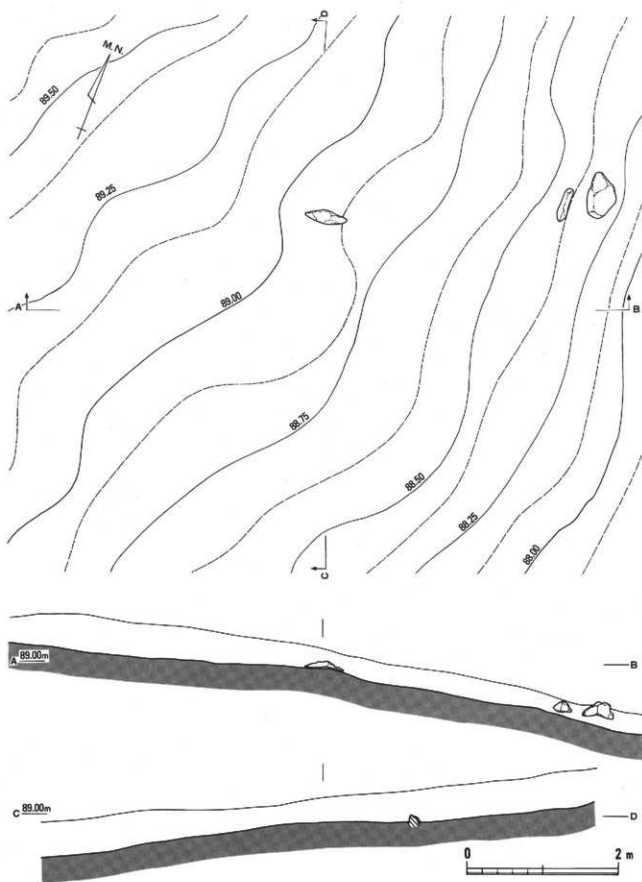


Fig. 84 第55号墳 調査前墳丘測量図

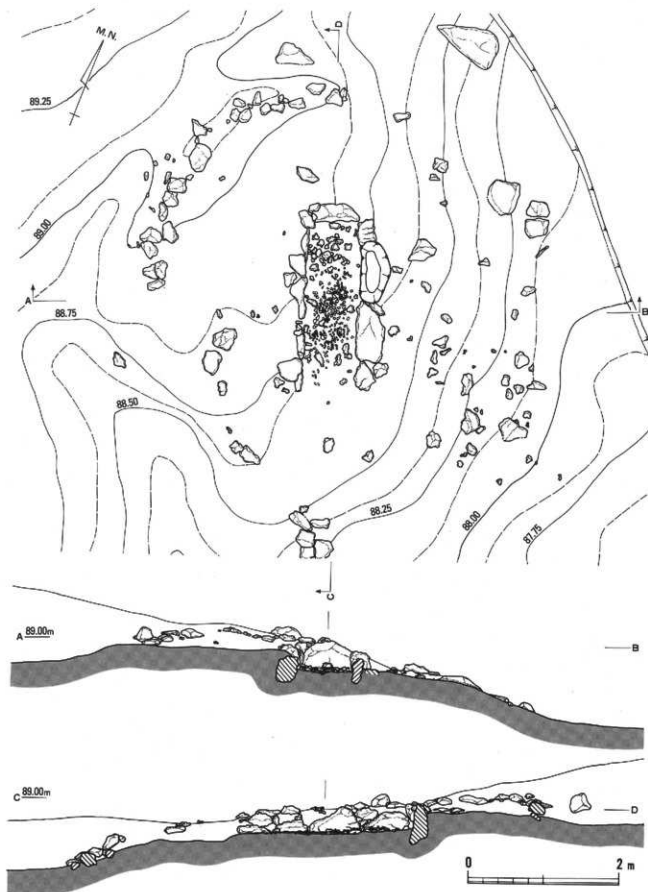


Fig. 85 第55号墳 墳丘測量図

測する。しかし、東側は墳丘盛土の流出が著しく、裾部は侵食を受けているだろう。墳丘北側裾部には、確認調査時にトレンチが掘削されていた。このような状況のため正確な墳丘規模は不明であるが、周辺の地形等を勘案すると直径約8mになると推測する。

墳形については、墳丘の北西部で直径20cm程度の礫が円弧を描くように並べられていることと墳丘の等高線から南北に長い楕円形を呈した円墳であると推測する。

c 墳丘に関連する遺構

①列石

墳丘の北西部と南西部から、それぞれ列石を検出した。北西部の列石は、直径5cmから25cm程度の19個の礫が、墳丘裾部に沿って長さ約4mにわたって円弧状に並んだ状況で検出された。礫は基盤層に接しており、墳丘盛土はこの列石の内側でのみ残存していた。この列石は周溝内側に沿っていることと墳丘盛土の範囲から、第54号墳で検出した墳丘内列石とは異なり、墳丘裾部に並べられていた外護列石である可能性がある。

墳丘南東側列石は北西側のものと比べて一回り内側に位置し、北西側のものとは連続しない別単位の列石と考える。これらは直径10cmから20cm程度の7個の礫が散在した状態で、長さ約2mにわたって円弧状に並んだ状況で検出された。この位置では、列石は墳丘盛土内に完全に埋没したと考えられる。このことから、南東側の列石は墳丘内列石であると推測する。

②周溝

墳丘北西側において、列石の外側に沿って円弧状に巡る幅約1m、長さ約3.5mの周溝を検出した(Fig.85)。周溝は深い部分で肩から底部までの比高差が0.4m程度である。周溝の底面は水平である。南側へいくほど浅くなっていき、墳丘の南半部では消失し確認できなかった。このことから、周溝は築造当初から墳丘の北半部にのみ巡っていたと推定する。これは墳丘の範囲を明確にすることを意図して、墳丘背後の基盤層を切断したためであろう。

d 墳丘に伴う遺物の出土状況

墳丘上およびその周辺部からは、多くの土器片が出土している。これらの内、器種が特定できたものは、須恵器の杯蓋2点、杯身4点、高杯2点、平瓶1点、脚付甕1点、壺1点、土師器の杯1点、壺1点である。他の4基の古墳と比べて、多くの土器が出土した。また、須恵器の壺が伴うのは、5基の中で当古墳だけである。当古墳から出土した遺物の内、器種が特定できなかった細片の多くは、盛土上面に堆積した土中で検出したものである。須恵器の杯身(90)は、小流路の堆積土中から検出されたものであり、当古墳に直接伴う遺物であるかどうかは断定できない。

①石室前庭部の遺物出土状況

前庭部からは須恵器の杯蓋2点、杯身3点、高杯1点、壺1点、平瓶1点が出土している(Fig.88, PL.61-2)。それらは検出状況および出土土層の検討から、原位置を大きく動いていないと考える。出土層位は、大きく上層と下層に分かれる。上層の遺物として須恵器の杯身(94)、平瓶(96)、壺(97)があり、下層の遺物は須恵器の杯蓋(89・92)、杯身(93・95)、土師器の杯(101)がある。下層遺物は墳丘調査時には検出できておらず、基盤面立ち割り時にはじめ

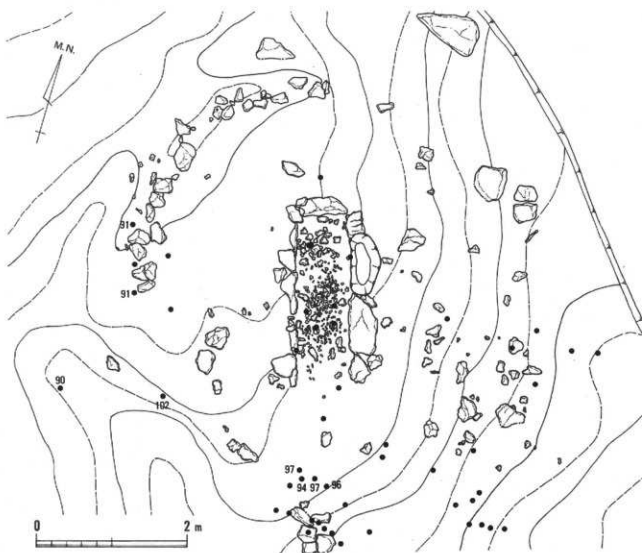


Fig. 86 第55号墳 遺物分布図

て検出した。そのため、前庭部に置かれていたであろう下層の土器については、出土状況等を記録することができなかった。これらの土器には若干の型式差が認められる。特に杯蓋には中村氏編年のⅢ型式2段階のもの(92)とⅢ型式3段階のもの(89)が含まれ〔中村, 1978〕、ともに下層から出土している。

②墳丘北西側周溝の遺物出土状況

墳丘北西側裾部に検出した周溝からは、須恵器の脚付甕(91)と土師器の細片が出土した(Fig. 87)。また、墳丘北側にある試掘トレンチ掘削時に出土した須恵器高杯(99)も、周溝内の遺物であった可能性が高い。これらの内、脚付甕は破片で散在して出土したが、整理作業時に接合することができた。これらの遺物は、基盤層に接地していたことやこれらを含む土層が小流路による攪乱を受けていないことなどから、原位置を保っているものと判断した。脚付甕は故意に破砕された可能性がある。周溝内で検出した土師器片は、細片のため器種・法量などの詳細は不明である。

後述するが、石室では2面の床面が検出されており、追葬が行われたと推測している。初葬時の床面(第1次面)からは遺物が出土していないことから、それらが追葬時にかき出し行為

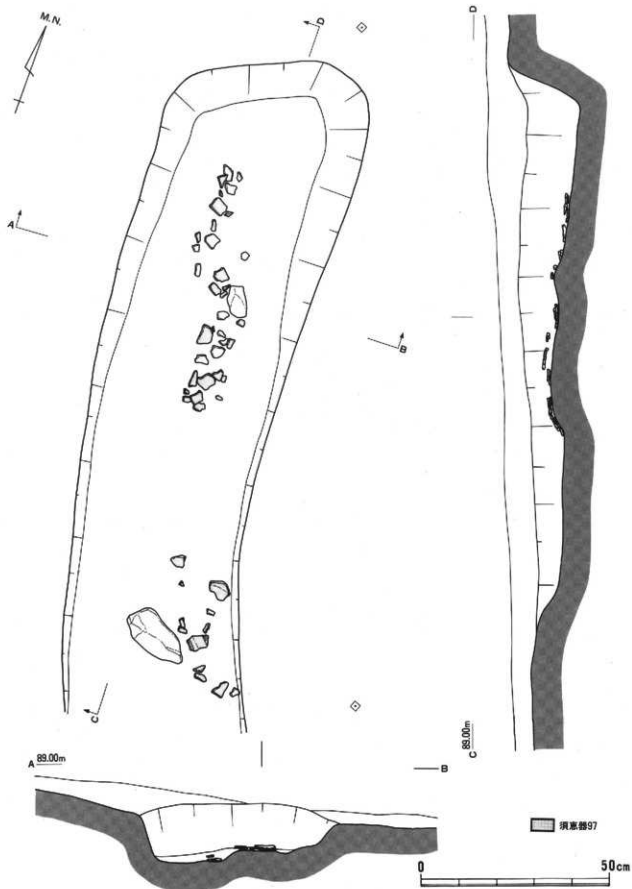


Fig. 87 第55号墳 墳丘北西側周溝 土器出土状況図

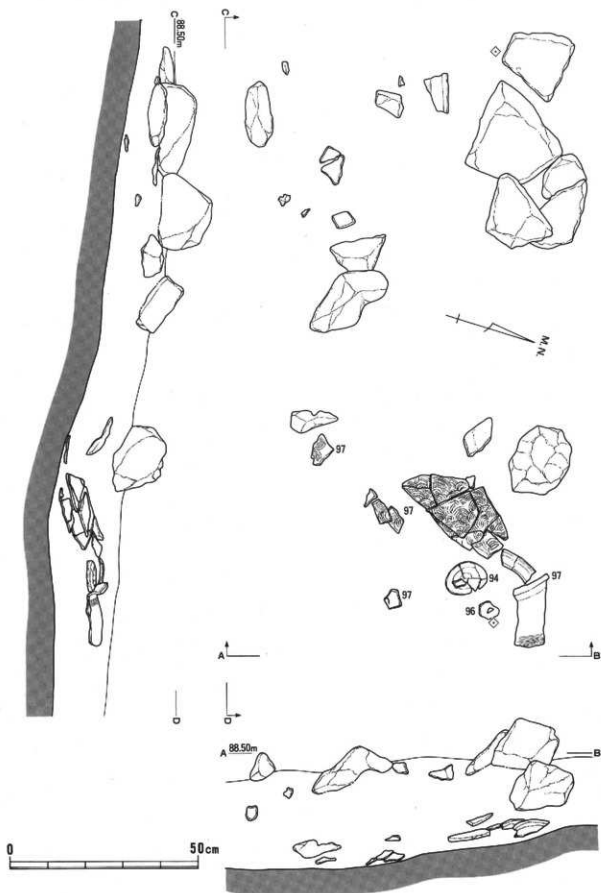


Fig. 88 第55号墳 前庭部 土器出土状況図

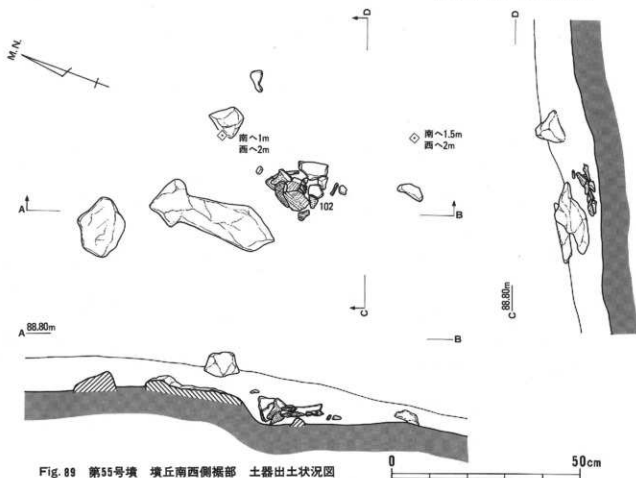


Fig. 89 第55号墳 墳丘南西側裾部 土器出土状況図

によって石室内からもち出されたと考えられる。周溝内で検出された土器が、追葬時のかき出し行為によって廃棄された初葬時の遺物である可能性を考えておきたい。

③墳丘南西側裾部の遺物出土状況

墳丘の南西側裾部では、須恵器の杯身(90)および土師器の甕(102)を検出している (Fig. 89)。須恵器の杯身は堆積土中で検出しており、原位置を保っていない。一方、土師器の甕は基盤面に接して検出されたので、原位置を保っていると考える。

C 石室の調査

第55号墳の内部施設は無袖形の横穴式石室であり、主軸上で全長2.22m、中軸上で幅0.7mを測る。調査のため設定した石室主軸方位は磁北から $19^{\circ}19'55''$ 西偏し、南南東方向に開口する。石室は基盤面を掘り込んで造成した掘形内に構築されていた。八十塚古墳群で確認されている横穴式石室の中では、最小規模のものである。

a 石室の検出状況

石室は堆積土下に埋没していたため、腐植土を除去した段階では確認できなかった。流土を除去した段階で、ようやく奥壁や東西の両側壁の一部を検出し、当古墳が南北方向に主軸をもち、南南東に開口する無袖形の横穴式石室であることが判明した (Fig. 90, PL.57)。東側壁

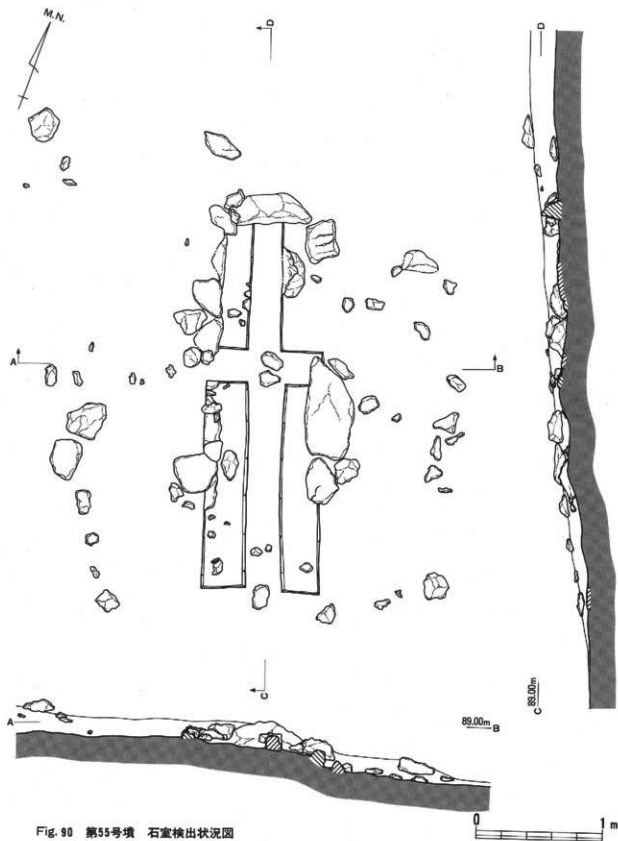


Fig. 90 第55号墳 石室検出状況図

の北半部では、後世に石室基礎石を抜去した際にできたと考えられる直径50cm程度の攪乱坑があった。石室内には、奥壁付近において直径40cm程度の石材が一石落ち込んでいた。この石材は平滑な面を有しており、石室の壁体に使われている石材と同程度の大きさであることから、

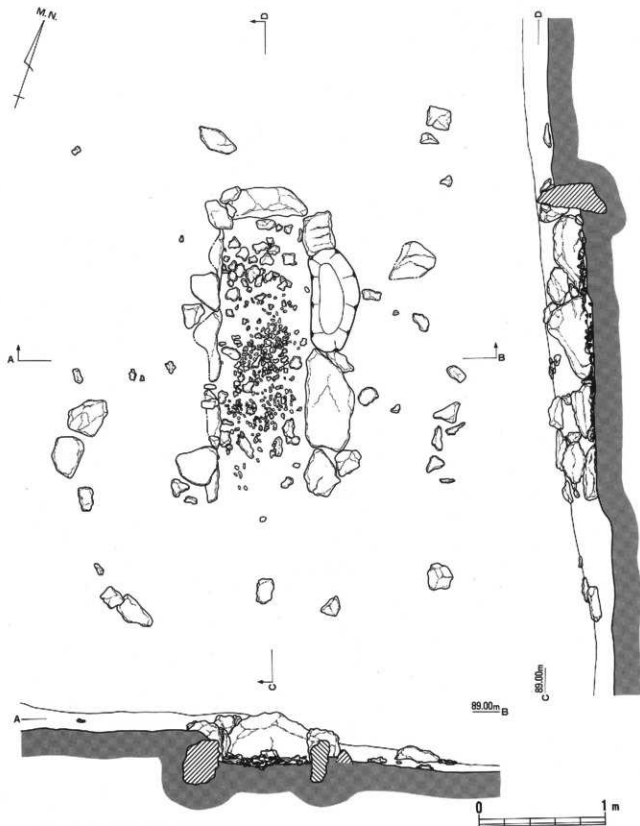


Fig. 91 第55号墳 石室上面実測図

崩落した石室石材の可能性が高い。閉塞施設は検出されなかった。

石室内の状況は他の古墳と異なり、流入土中にはあまり多くの礫を含んでいない。これは当古墳が小規模であり、石室崩壊後、早い時期に流入土によって完全に埋没したために、他の古

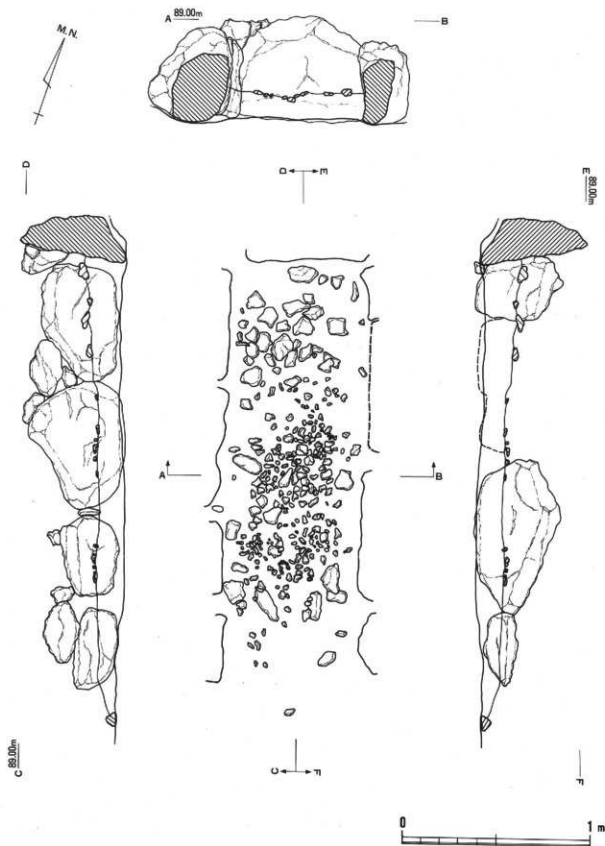


Fig. 92 第55号墳 石室実測図 (第2次面)

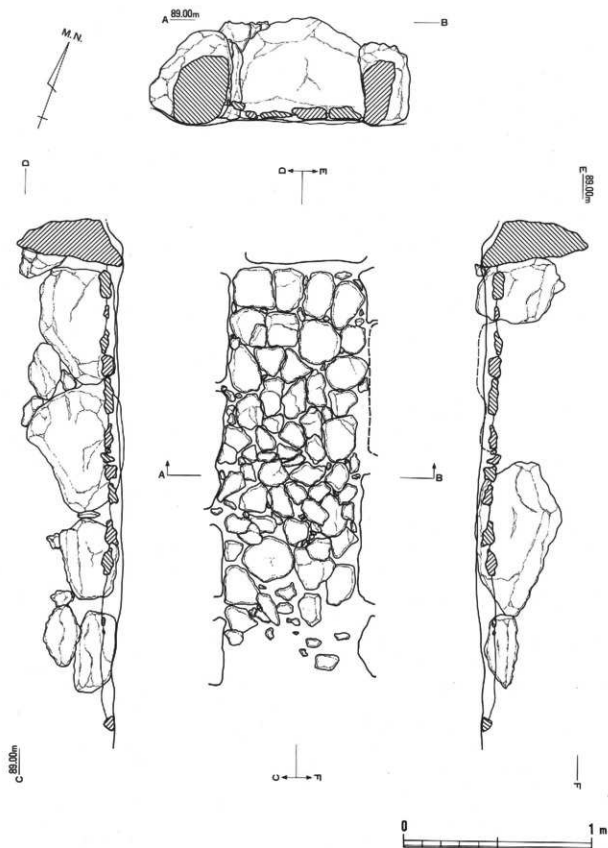


Fig. 93 第55号墳 石室実測図 (第1次面)

墳のように、後世に石室埋没の過程に生じた凹地を礫や屑石の廃棄の場として利用されなかったためと考えられる。

b 石室の構造

石室は無袖形の小型横穴式石室であり、東西の両側壁は直線的にのびている。床面は2面検出されたが、床面下の排水溝等の施設は認められなかった (Fig.93, PL.59)。

壁体遺存状況は極めて悪く、その多くは基底石しか残存しておらず、基底石から2段目の石材は数石残存しているにすぎなかった。壁体の立面構造においては、標高88.95m付近に目地を通していたことが推定できるが、これは奥壁上面の高さとは一致していない。このことから、側壁は石材を2段以上積み上げて構築されていたと推測する。

東西の両側壁とも奥壁側の基底石に比較的大型の石材を使用し、開口部へ行くほど小型の石材を使用している傾向が認められる。開口部の基底石は、東西両側壁とも特に小型の石材が使用されている。また、基底石はすべて横位に据え置かれており、残存していた2段目の石材は最大面を底面として積まれていた。

①奥 壁

基底石は1石で構成されており、横位に石材を立てていた (PL.61-1)。基底石石材は幅65cm、高さ56cm、最大厚は26cmを測り、平滑な部分を選択し壁面として使用していた。底部は安定の悪い斜めの面をもっているが、その面を石室掘形の肩に沿わせることで安定性を得ている。頂部は断面三角形の尖った形状をしている。

基底石上には、合計3石の石材が遺存していた。これらの内、最も西側の石材は奥壁と西壁にわたって、石室主軸に対し斜めに積まれていた。基底石の底部付近の奥壁と東西の両側壁の隙間には、それぞれ小型の石材が充填されていた。

②東 壁

検出された基底石は3石であるが、石材の抜き取り穴の存在から1石以上の基底石がもち去られたことが分かる (PL.60-2)。2段目の石材は、まったく遺存していなかった。これらの基底石は、いずれも横位に据え置かれていた。基底石として使用されていた石材の大きさは一定しておらず、特に開口部の石材は非常に小型のものが使用されていた。また、底面が他の基底石と比べて高くなっていることから、第52号墳で想定したような羨門部付近における天井石を架構しない構築用石法を考えている。

奥壁側から1石目の石材と開口部から2石目の石材は上面の標高が88.90mに揃っており、ここに目地を通していたことが推測できる。また、奥壁上端の高さは、この目地より高いことから、基底石の上にはさらに石材が積まれていたであろう。

③西 壁

基底石が4石遺存しており、部分的に2段目まで遺存していた (PL.60-1)。基底石はいずれも石材を横位に立てて使用しており、開口部側の2石は奥壁側の2石に対して小型のものが用いられていた。奥壁側の2石の上面は、標高88.95m付近にほぼ揃っていた。また、奥壁側1石目の石材上面と2石目の石材上面の間にできる隙間には2段目の石材を谷積みし、高さを揃えていた。

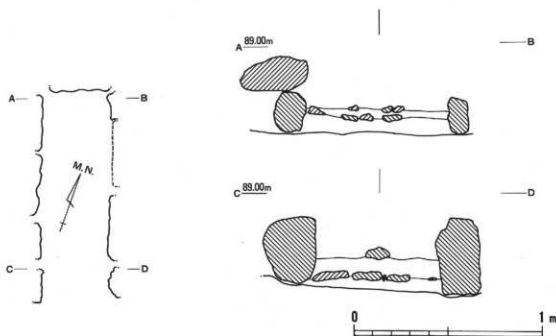


Fig. 94 第55号墳 石室横断面図

④床 面

床面は2面検出された。上面を第2次面とし、下面を第1次面とする。床面は2面みられるものの、石室規模が非常に小さいこととそれに伴う遺物がまったく出土しなかったことから、複次葬を行っていたと断定できない。しかし、第1次面に排水施設等の他機能を求めることは難しく、墳丘に伴う出土土器に型式差が認められることと整然と並んだ第1次面の敷石の存在などから、消極的ながらも第2次面を追葬時の床面、第1次面を初葬時の床面として認識する。

床面（第2次面） 第2次面には直径5cmから10cmの小礫が敷かれていたが、北半部と南半部では使用されている礫の大きさが異なっている（Fig.92, PL.59）。奥壁から南へ0.6m付近までは直径10cm程度の礫が敷かれており、以南では直径5cm程度の礫が多くなっている。ただし、南半部でも壁体沿いに10cm大の礫が若干観察された。

第2次面に伴う出土遺物としては、開口部付近で耳環(88)が出土しており、その他に須恵器・土師器片が少量出土している。土器の出土状況や耳環の出土位置により、これらの遺物は原位置を保っていないと推測する。ただし、床面自体が損壊を受けた形跡は確認されなかった。

床面（第1次面） 第1次面には、直径20cm前後の小判形の扁平な石材が隙間なく整然と敷かれていた（Fig.93, PL.64）。石室全面にわたって敷かれているのではなく、奥壁から南へ2m付近までに限られて敷かれていた。これは、玄室を意識しているか、あるいは、遺体を安置する範囲を意識していることが考えられる。敷石の敷き方は、大型の石材を先に敷設し、その隙間に小礫を充填していた。

第1次面に伴う遺物は、まったく認められなかった。なお、石室内流入土をすべて持ち帰り、石室内遺物の有無や微細遺物の採集を目的として水洗選別を行ったが、第1次面に伴う遺物は認められなかった。その理由としては、追葬時のかき出し行為が考えられる。また、第2次床面における水洗選別の結果でも鉄釘片が出土しなかったことから、消極的ながら釘を使用しないで板材を緊結した木棺の存在や、木棺を使用しない埋葬方法を想定することができる。

D 石室掘形の調査

当古墳では、U字形の平面形を呈する石室掘形を検出した。基盤層を掘り込んで構築しており、石室本体に対して一回り大きい。

a 裏込めの状況

他の古墳と同様に、裏込めの土には基盤層に含まれていたと推測される小礫が含まれていた (Fig. 95, PL. 65)。しかし、他の古墳と比べてその量は相対的に少ない。一部は基底石裏側を支えており、控え積みとしての役割を果たしていた。これは、基底石を立てて使用することによる安定の悪さを補完するためであろう。土質は当時の表土と基盤層が混じったものと考えられる黄灰色のやや粘性のある砂質土であり、第53号墳のものと近似していた。

b 石室掘形の形態

石室掘形の規模は主軸上で南北3.24m、中軸上で東西2.19mを測り、U字形の平面形を呈している (Fig. 97, PL. 66)。石室掘形の肩部には、北側を中心に基盤層中に含まれる巨石の一部が露出していた。この巨石上には、奥壁の石材がもたれかかっていた。このような基盤層中に含まれる巨石は除去が困難なことや控え積みとして利用できることから、意図的にそのまま石室掘形肩部に残されたのであろう。

底部から肩部までの深さは、北西側が最も深く比高差約0.4mを測る。南へいくほど、この比高差は小さくなり消滅する。東西の肩部は西側の方が高くなっているが、これは古墳の立地する尾根状地形の高まりを西肩に利用しているためである。

石室掘形底面は、東西南北とも石室を構築する範囲は、ほぼ水平である。石室掘形の底面には、基底石の据え付け穴が検出された。据え付け穴は直径0.3mから0.4m程度であり、各基底石の大きさより一回り大きく、比較的浅いものである。東壁の基底石据え付け穴は、奥壁側の基底石3石に対応するものが穿たれており、開口部の石材に対応するものは検出されなかった。西壁の基底石据え付け穴に関しては、開口部の1石を除く3石分の基底石据え付け穴を検出している。また、奥壁側1石目の据え付け穴は、奥壁基底石の据え付け穴と連続していた。

E 土 層

石室主軸と中軸に沿って畦を設定し、土層の観察および図面の作成を行った (Fig. 98)。土層は大きく墳丘盛土、石室掘形埋土、床面置土、石室内流入土に分かれる。

a 墳丘盛土および石室掘形埋土

2層から7層は、墳丘の盛土および石室掘形埋土である。石室掘形埋土と、この上面に盛られた墳丘盛土の土質は異なっており、墳丘盛土には明黄褐色の精良な土が用いられていた。一方、石室掘形の埋土は、黄灰色を呈しており礫を含んでいた。10層から19層は残存墳丘上の堆

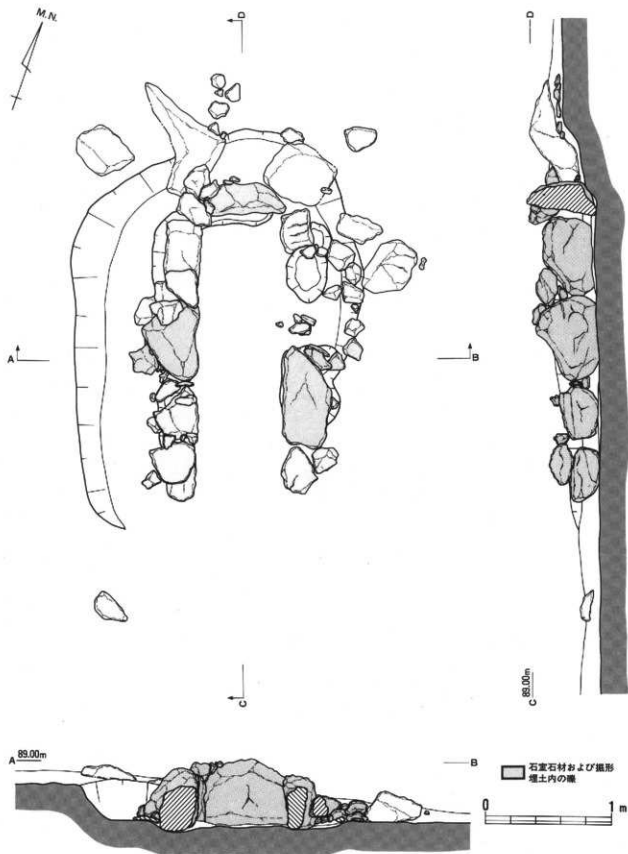


Fig. 95 第55号墳 石室および石室掘形実測図

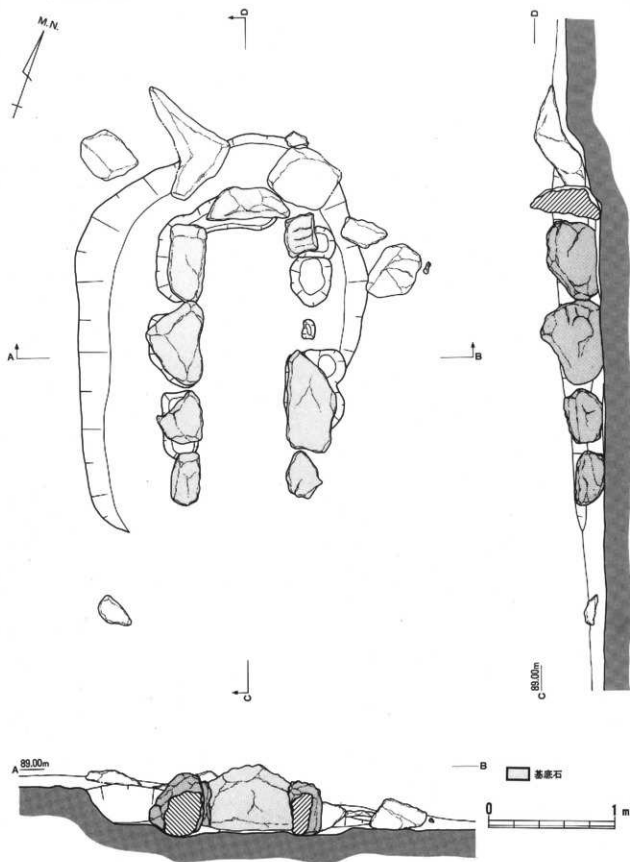


Fig. 96 第55号墳 基礎石および石置掘形実測図

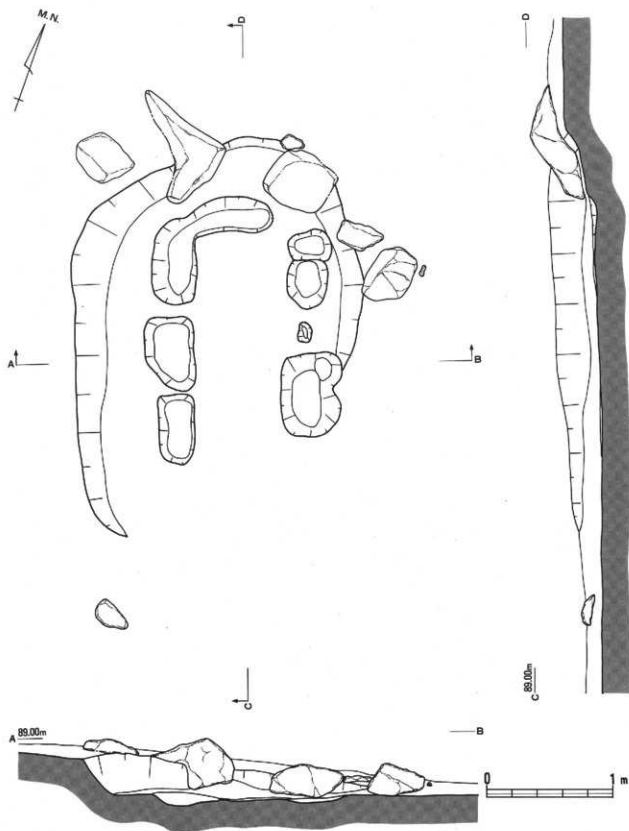


Fig. 87 第55号墳 石室掘形実測図

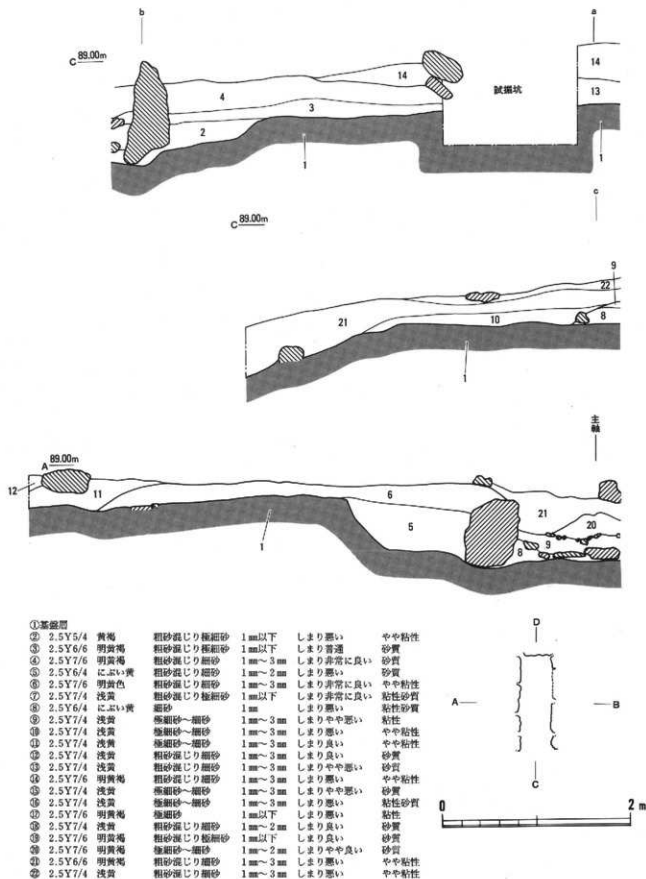
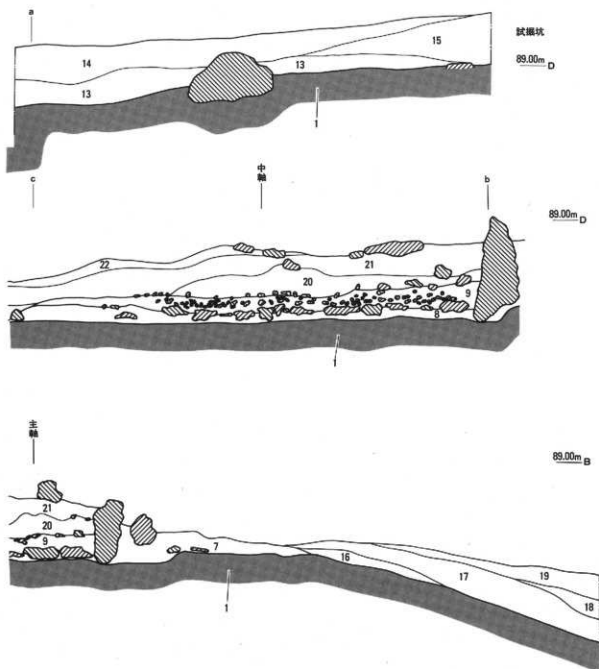


Fig. 98 第55号墳 土層断面図



積土であり、これらは墳丘盛土が流出して堆積したものと推定している。

b 床面置土

当古墳では、基盤面に直接置き土をして床面としていた。8層は第1次面に対応する置き土であり、他の古墳と比較して層厚は薄い。9層は第2次面に対応する置き土であり、層中には床面に敷かれたものと同規模の礫が多く含まれていた。材質的にも第2次面の敷石との差異は見出すことはできなかった。

c 石室内流入土

20層から22層は、石室内に流入した土である。21層および22層は、比較的多くの礫を含んでいた。

F 出土遺物

第55号墳では、今回調査した他の古墳と比べて多くの遺物が出土した。墳丘に伴うものが多いことが特色としてあげられる。須恵器には型式差が認められ、石室の2面の床面に対応して、初葬時と追葬時にそれぞれ伴う遺物があると考えられる。前庭部から出土した土器は完形品が多いのに対して、墳丘北西側の周溝から出土した土器は細片であった。

a 石室床面の出土遺物

図化し得たのは、第2次床面から出土した耳環(88)のみである (Fig.99, PL.62)。これは金銅張りで、いわゆる金環である。地金については、完形のため不明である。この他に土師器の細片が流入土中より多数出土した。接合状態から1個体であるとする。

先述したとおり、第1次床面に伴う遺物は認められなかった。

b 墳丘の出土遺物

①前庭部

出土状況から、上層のものと下層のものに大別される。

上層 須恵器の杯身(94)、平瓶(96)、甕(97)が出土している (Fig.100・101, PL.77・78)。

下層 須恵器の杯蓋(89・92)、杯身(93・95)、高杯(98)、土師器の甕(100)、杯(101)が出土している。

②周溝の出土遺物

須恵器の高杯(99)、脚付甕(91)があげられる (Fig.100・101, PL.77・78)。

③墳丘南西側裾部の出土遺物

須恵器の杯身(90)と土師器の甕(102)を図化することができた (Fig.100・101, PL.77)。

墳丘には、上記のもの以外にも須恵器・土師器の細片が出土しているが、これらはいずれも原位置を保っていなかった。

G まとめ

第55号墳は、南北に長い楕円形状を呈する円墳である。墳丘規模は、南北5.73m、東西3.25mを測る。主体部は無袖形の横穴式石室であり、長さ2.22m、幅0.7mを測る。主体部の規模は八十塚古墳群においてこれまで規模が確認されている横穴式石室の中では、最小規模である。特に幅において、成人男性の身体が納まる最低限の大きさである。八十塚古墳群の中で確認されている小型の石室としては、岩ヶ平支群第15号墳・第23号墳・第28号墳があげられる。その中で最も規模の小さい第28号墳の石室は、奥室幅が0.85m、残存長4.41mを測る〔古川₁₉₉₀〕。

Tab. 10 第55号墳出土 耳鐲観察表

番号	種類	法量 (cm・g)	端部形成	内部	備 考
88	耳	長径	2.11	不明	端部は金板をはめ込み、 折りかえして成形。 鍍金は完存し、保存状態 は良好。 断面はほぼ正円。 完形のため内部不明。
		短径	1.09		
		幅	0.49		
	釦	厚さ	0.52		
		端部間隔	0.22		
		重さ	4.32		



Fig. 99 第55号墳出土 遺物実測図(1)

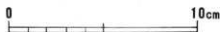
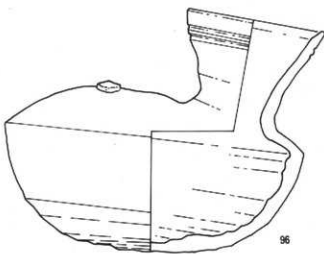
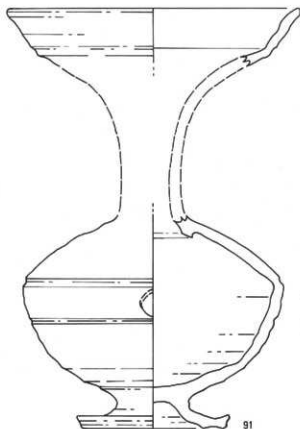
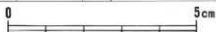


Fig. 100 第55号墳出土 遺物実測図(2)

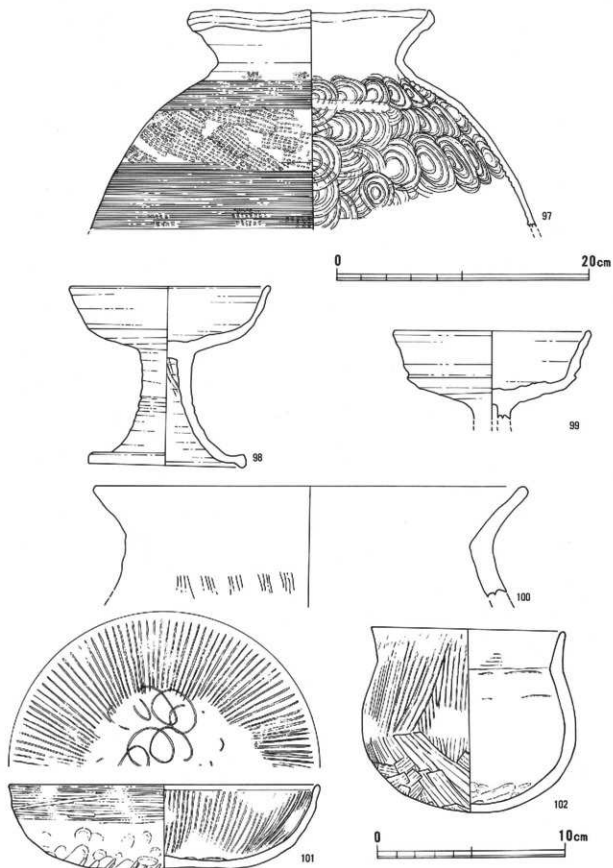


Fig. 101 第55号墳出土 遺物実測図(3)

Tab. 11 第55号墳出土 土器観察表

番号	種類	器形	法線 (cm)	形態の特徴	手段の特徴	備考
89	須恵器	杯	口径 通高 残存高さ 基部径 最大10.7 3.6 1.9 つみみ高さ かみり角 70°	口縁部は丸くおさまる。口縁部内面に内鑿するかみりをつける。かみりは断部二角形を呈し、端部は丸くおさまる。9.9天井は大きく、外周中央部に3等分して縦走線様のつみみを付す。	マキアグ、ミズビキ成形。天井部外周2/3に凹部へつくり調整。天井部内周中央に静止ナゲ調整。底部斜土組成形。	口クロ同色；右方向。色調：暗灰色。胎土：赤。1mm以下の石英、長石を含む。焼成：良好。残存：80%。焼け過ぎ面あり。
90	須恵器	杯	口径 通高 残存高さ 基部径 最大10.0 3.65	体部・口縁部は上方向へのび、端部はやや丸くおさまる。底部は深く、平ら。	マキアグ、ミズビキ成形。底面内周中央に静止ナゲ調整。底面にナゲ切り未調整。	口クロ同色；右方向。色調：暗灰色。胎土：赤。3mm以下の石英を含む。焼成：良好。残存：80%。焼け過ぎ面あり。
91	須恵器	瓶	口径 残存高さ 基部径 最大14.3 3.45 13.75 8.05	口縁部は丸くおさまる。口縁部内面に内鑿するかみりをつける。かみりは断部二角形を呈し、端部は丸くおさまる。1.1基部は、さらに1条の凹線を含め、両面凹線の間に口部の孔をあける。脚部先端は下方へ突出。	マキアグ、ミズビキ成形。外周底部の2/3の範囲に凹部へつくり調整。下半部にはナゲ調整。その他は内・外周ともナゲ調整。	口クロ同色；右方向。色調：暗灰色。胎土：赤。1mm以下の石英を含む。焼成：良好。残存：53%。黒く焼けた部分がある。
92	須恵器	杯	口径 通高 残存高さ 基部径 最大9.65 3.2 1.48 1.1 0.3 かみり角 55°	口縁部は丸くおさまる。口縁部内面に内鑿するかみりをつける。かみりは断部二角形を呈し、端部は丸くおさまる。2.1天井は広く平らであり、外周中央部に縦走線様のつみみを付す。	マキアグ、ミズビキ成形。天井部外周2/3に凹部へつくり調整。底面斜土組成形。	口クロ同色；右方向。色調：暗灰色。胎土：赤。1mm以下の石英、長石を含む。焼成：良好。残存：80%。底面にナゲ切り「X」のへばり型あり。
93	須恵器	杯	口径 通高 残存高さ 基部径 最大9.1 3.1	体部・口縁部は上方向へのび、端部はやや丸くおさまる。底部は深く、やや平ら。	マキアグ、ミズビキ成形。底面内周中央に静止ナゲ調整。底面にナゲ切り未調整。	口クロ同色；右方向。色調：暗灰色。胎土：赤。3mm以下の石英、黒色粒を少量含む。焼成：良好。残存：90%。
94	須恵器	杯	口径 通高 残存高さ 基部径 最大9.4 3.3	体部・口縁部は上方向へのび、端部はやや丸くおさまる。底部は深く、平ら。	マキアグ、ミズビキ成形。底面にナゲ切り未調整。底面斜土組成形。	口クロ同色；右方向。色調：暗灰色。胎土：赤。3mm以下の石英を若干含む。焼成：良好。残存：80%。
95	須恵器	杯	口径 通高 残存高さ 基部径 最大8.34 3.3	体部・口縁部は内鑿みにのび、端部はやや丸くおさまる。底部は深く、平ら。	マキアグ、ミズビキ成形。へう切り未調整。底面斜土組成形。	口クロ同色；右方向。色調：暗灰色。胎土：赤。2mm以下の石英、黒色粒を少量含む。焼成：良好。残存：70%。黒く焼けた部分がある。部分的に磨耗。
96	須恵器	平	口径 通高 残存高さ 基部径 最大7.2 13.0 5.1 15.8	断面はやや内鑿みに上方向へのび。口縁部は2条の凹線。両面には凹形の数土盤1個付す。背部と体部の境は明確な線をなす。	マキアグ、ミズビキ成形。外周底部の2/3の範囲に凹部へつくり調整。内面にナゲ調整の痕を残す。	口クロ同色；右方向。色調：暗灰色。胎土：赤。1mm以下の石英、黒色粒を少量含む。焼成：良好。残存：70%。黒く焼けた部分がある。部分的に磨耗。
97	須恵器	杯	口径 通高 残存高さ 基部径 最大19.1 17.5 14.65 11.0	口縁部は上方向へのび、端部は上方向に突出。	マキアグ、ミズビキ成形。外周はタテを揃した後、タテ目を開す。	口クロ同色；不明。色調：暗灰色。胎土：赤。2mm以下の石英、長石を含む。焼成：良好。残存：20%。
98	須恵器	杯	口径 通高 残存高さ 基部径 最大10.4 9.5 9.5 6.1 8.3	杯部の断面と体部の境は不明瞭。体部・口縁部は上方向へのびる。口縁部は丸くおさまる。口縁部に2本の凹線。脚部先端は下方へ突出。	マキアグ、ミズビキ成形。底面斜土組成形。底面外周に1/2の範囲でへう切り後、下半部にはその上からナゲ調整。	口クロ同色；右方向。色調：暗灰色。胎土：赤。3mm以下の石英を少量に含む。1mm以下の黒色粒を含む。焼成：良好。残存：65%。
99	須恵器	杯	口径 通高 残存高さ 基部径 最大10.3 4.7 2.1 2.1 12.9 12.9	杯部の断面と体部の境は不明瞭な線をもちて顕し。体部・口縁部は上方向へのび。口縁部は丸くおさまる。	マキアグ、ミズビキ成形。底面斜土組成形。底面内周中央に静止ナゲ調整。杯部断面外周に1/2の範囲でへう切り後、下半部にはその上からナゲ調整。	口クロ同色；不明。色調：暗灰色。胎土：赤。2mm以下の石英、長石を含む。焼成：良好。残存：65%。
100	須恵器	杯	口径 通高 残存高さ 基部径 最大15.0 3.65 12.9 12.9	口縁部は上方向へのび、端部は丸くおさまる。	外周に深いハケ目を持つ。内面に磨耗の痕跡を残す。	口クロ同色；不明。色調：暗灰色。胎土：赤。1mm以下の黒色粒を少量含む。焼成：良好。残存：口縁部と断面の20%。
101	須恵器	杯	口径 通高 残存高さ 基部径 最大16.2 4.5	口縁部は上方向へのび、内鑿みにのび、やや平らな面を持つ。内面底部にはやや凹線と数条状の凹線が刻まれている。	外周底部に凹部を有す。	口クロ同色；不明。色調：暗灰色。胎土：赤。2mm以下の黒色粒を少量に含む。焼成：良好。残存：70%。
102	須恵器	杯	口径 通高 残存高さ 基部径 最大10.2 9.8 9.7 11.2	口縁部は上方向へのび、端部は丸くおさまる。口縁部は粗粒状に重む。	外周に深いハケ目を持つ。内面に磨耗の痕跡を残す。	口クロ同色；不明。色調：暗灰色。胎土：赤。1mm以下の石英、長石を含む。焼成：良好。残存：70%。

これらの無袖形石室と比較しても、55号墳の石室規模が小さいことが分かる。

墳丘には、周溝や列石等が認められた。列石は、墳丘の南西側裾部と北西側裾部に弧を描いて巡らされていた。当古墳のように、墳丘の背面にまで列石が巡らされている例は八十塚古墳群中ではこれまで確認されていないが、他の群集墳では兵庫県姫路市西脇古墳群B支群第2号墳〔高瀬,1995〕や兵庫県養父郡八鹿町箕谷1号墳〔谷本・岡・藤原,1987〕等が類例としてあげられる。当墳の場合、南西側裾部の列石は、墳丘盛土の中に埋められていたと推測することができる。また、列石を構成する礎の形状は丸みを帯びていることから、石垣状に上部に石を積み上げていた構造も考え難い。これらのことから、列石は墳丘表面を覆うものではなく、墳丘盛土を単位ごとに土留める機能を果たしていたと推測する。

石室床面は、今回調査した5基の中で唯一、2面検出された。石室規模が非常に小さいことと第1次面から遺物がまったく出土しなかったことから、複次葬と断定するのは難しい。しかし、第1次面に排水施設等、床面以外の機能を想定することは難しく、初葬時の床面と推定するに至った。

第1次面からは遺物がまったく出土しなかったのは、追葬時のかき出し行為によって、北西側周溝等に廃棄されたためと想像される。

石室内埋土はすべて採集し、遺物の有無の確認と微細遺物の採集を目的として水洗選別を行ったが、鉄釘はまったく確認されなかった。鉄釘が認められない理由については、消極的ながら木棺を使用しない埋葬方法の可能性を考えたい。

出土遺物の大半は石室前庭部および周溝出土であるが、出土した6個の蓋杯が当古墳群の時代相をよく表現している。特に焼き歪んでいる杯蓋(89)のやや平たく擬宝珠状に造形されたつまみや、内面の内側に小さく後退した受け部等の口端形状からみて、今回の調査古墳出土須恵器の中でも最新の形態を示し、合わせて杯身の底部内面が平坦な傾向をもつことなどは、他の古墳のなかでも最も新しい要素を示すものである。また、小型台脚部をもつ脚付盃(91)や、体部がやや薄平たく、肩に稜を残す平瓶(98)なども、最も新しい要素を示したものである。やや歪んだ口縁部をもつ小型甕(99)を含めて、土器の形態に統一性があり、杯蓋(94)以外はすべて播磨特有の黄色気味の灰色の硬い胎土をもつものである。おそらく須恵器のすべてが播磨からの供給を受けたものではないだろうか。

築造時期は、前庭部出土の須恵器杯蓋が田辺氏編年のTK217併行期〔田辺1966〕、中村氏編年のⅢ型式2段階・Ⅲ型式3段階〔中村,1978〕に相当することから、7世紀第2四半期から第3四半期にあてられる。杯蓋には同じ型式の範疇に入るものの若干の新旧がみられ、これらがそれぞれ初葬と追葬に対応するものと考えられる。

当古墳の確認は第56号墳と同様に他の古墳に比べて遅れたが、それは当古墳が小規模であったことに起因する。当古墳の場合、調査前の現状地形に奥壁の一部が露出していたことが検出後に明らかになっている。八十塚古墳群における小型横穴式石室や竪穴系小石室は今回の調査ではじめて確認されたが、他にも小規模石室が存在する可能性は高く注意を要する。

6 岩ヶ平支群第56号墳

A 古墳の立地	E 土 層
B 墳丘の調査	F 出土遺物
C 石室の調査	G まとめ
D 石室掘形の調査	

A 古墳の立地

第56号墳は発掘区の北西端に位置しており、標高89.75mから90.00mにかけての南向きの斜面地に築造されている (Fig.103, PL.10・11)。当古墳は南北にのびる尾根状の地形上に立地しており、石室掘形はこの尾根状地形の稜線より東側に穿たれている。石室の主軸と尾根状地形の稜線は、平行していない。この尾根状の地形は、第52号墳と第53号墳が築造された尾根とは別のものである。

石室の北方約5mの当該敷地北西隅には不自然な隆起地形がみられ、この隆起は敷地外へと続いていた。これは敷地外に存在している古墳の墳丘である可能性が考えられる。

石室の西方は地形が尾根状地形の稜線に向かって上りの傾斜となっているが、尾根状地形の稜線自体は敷地外に位置しており、本来の微地形は敷地西側を通る道路によって改変されている。石室の東方には、約2m離れたところに石室主軸にほぼ平行して、第52号墳西側墳丘裾部から第53号墳の西側墳丘掘部へと続く小流路が延びている。この小流路により当古墳築造時の旧地表面は浸食を受けていると推定される。古墳の南側は尾根状地形が下り斜面となって続いている。

第56号墳と他の古墳の位置関係をみていくと、第52号墳および第53号墳が近在している。本墳から第52号墳までの距離は約9mを測る。標高では第52号墳より若干低い位置に立地しており、その比高差は0.6m程度である。古墳間には小流路が延びている。一方、第53号墳は当古墳より低い位置に立地しており、比高差約1mである。第53号墳までの距離は約7mを測り、平面的には最も近い場所に位置している。両古墳間においても、第52号墳から続く小流路が延びている。

B 墳丘の調査

第56号墳では、墳丘盛土はまったく認められなかった (Fig.103)。しかし、石室壁体上面が基盤層面よりも上部で検出されており、さらに天井石が架構されていたことを想定すれば、それを覆う程度の低い墳丘が存在していた蓋然性が高い。

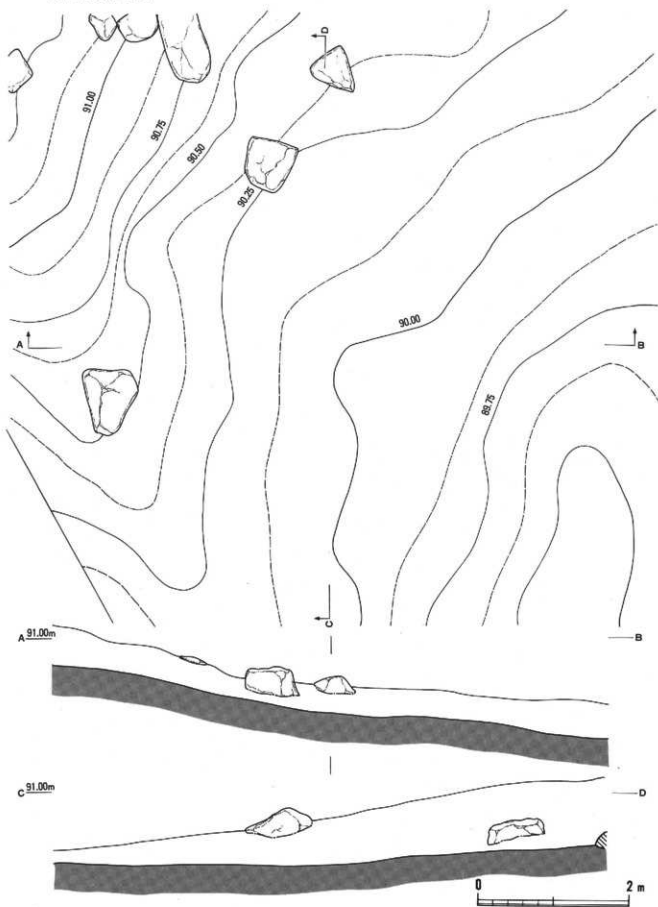


Fig. 102 第56号墳 調査前墳丘測量図

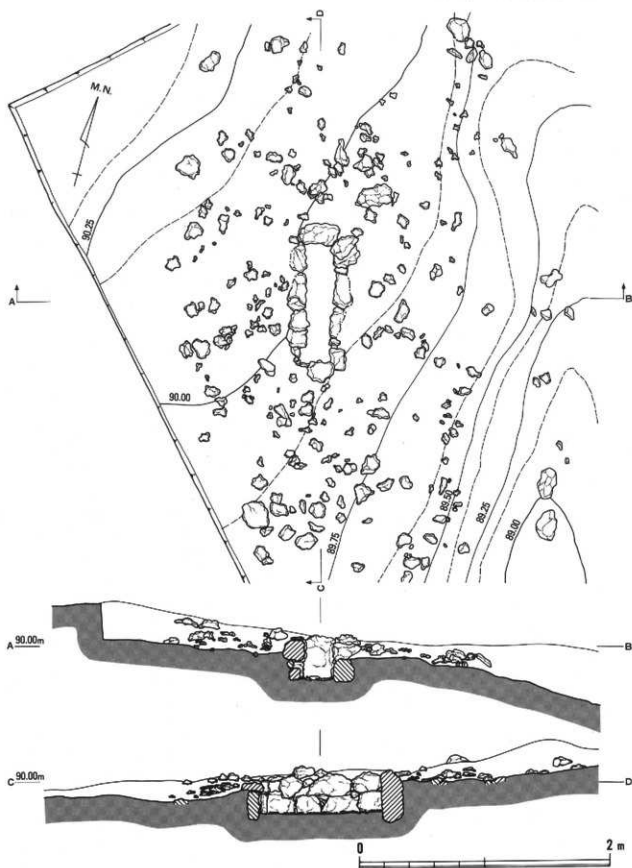


Fig. 103 第56号墳 墳丘測量図

C 石室の調査

第56号墳の内部施設は竪穴系小石室であり、八十塚古墳群で初めて確認された石室形態である。主軸上で長さ1.59m、中軸上で幅0.45mを測る。調査のため設定した主軸方位は磁北から15°10'西偏している。石室は基盤面を掘り込んだ石室掘形内に築かれていた。

a 石室の検出状況

現状では墳丘はまったく認められておらず、また、石室は堆積土下に埋没していたので、腐植土を除去した時点では確認することができなかった。堆積土を除去した際に、北壁や東西の両側壁が一部露呈し、この位置に竪穴系小石室が存在していることが明らかになった (Fig. 104, PL.67)。

石室内では南半部において、扁平な割石が1石観察された。これは大きさや形状から判断して、壁体を構成する石材であったと考えられる。

当古墳の石室残存状況は、ほとんど基底石しか残っていない他の古墳と比べて、非常に良好であった。石室掘形が竪穴状であることが、石室石材を遺存させた大きな要因であろう。また、当古墳が小規模であるために古墳として認識されず、後世において盗掘や石室の再利用が行われなかったことや、石室を構築する石材が小規模であるため、後世において石材として利用されなかったことも遺存状況が良好な理由として考えられる。ただし、天井石は一石も残存していなかった。

b 石室の構造

石室の平面形は、中央部がやや膨らむ長方形を呈している。西壁における南壁側から2石目の石材は南壁の幅に合わせるように屈曲しており、それによって石室平面プランで側壁中央部がふくらんでいるようにみえる。石室の構築過程において、東西の側壁を北壁の幅に合わせて設定し、南壁の幅に合わせて調整した結果であると推測することができる (Fig.106, PL.68・69)。

壁体は、多くが2段目まで遺存していた。2段目の石材の上面の高さがほぼ揃っていることから、おそらく、その上に天井石が架構されていたと考える。

基底石の目地は東壁と西壁が標高88.80mでほぼ揃っているが、北壁および南壁の基底石上面の標高とは一致していない。これらのことから、北壁・南壁と東壁・西壁は別工程で積まれた可能性が高い。北壁および南壁を先行して構築し、その後に東西の壁体を構築した工程を想定することができる。

①北 壁

1石の石材により構成され、床面からの残存高は0.63mを測る (PL.71-1)。石材は縦位に使用されており、幅0.59m、高さ0.68m、最大厚0.28mを測る。石材は平滑な部分を選択し、壁面として使用していた。

北壁上面の高さは東西両側壁の2段目の高さとはほぼ同じであり、この高さに目地を通していたと推測される。

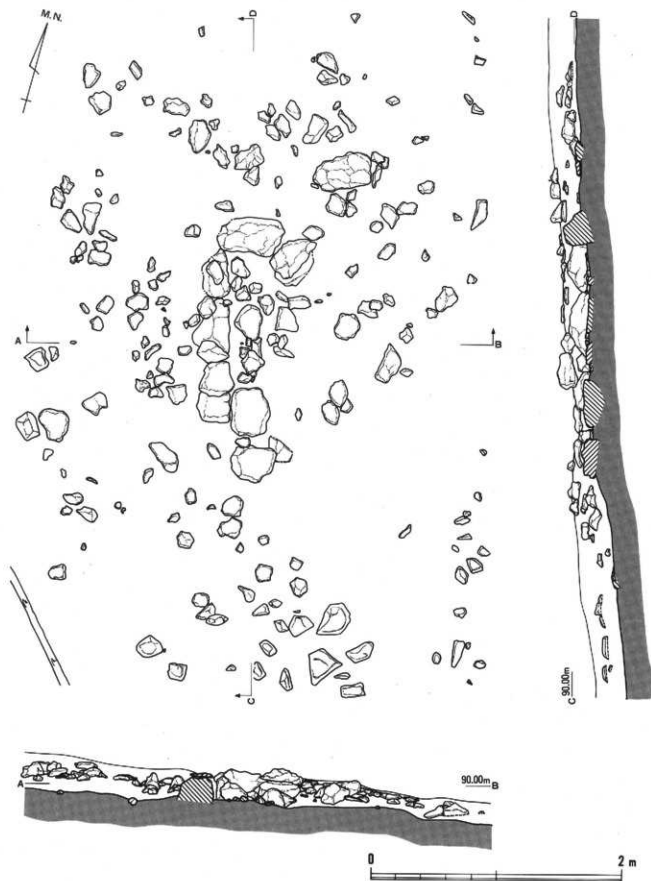


Fig. 104 第56号墳 石室検出状況実測図

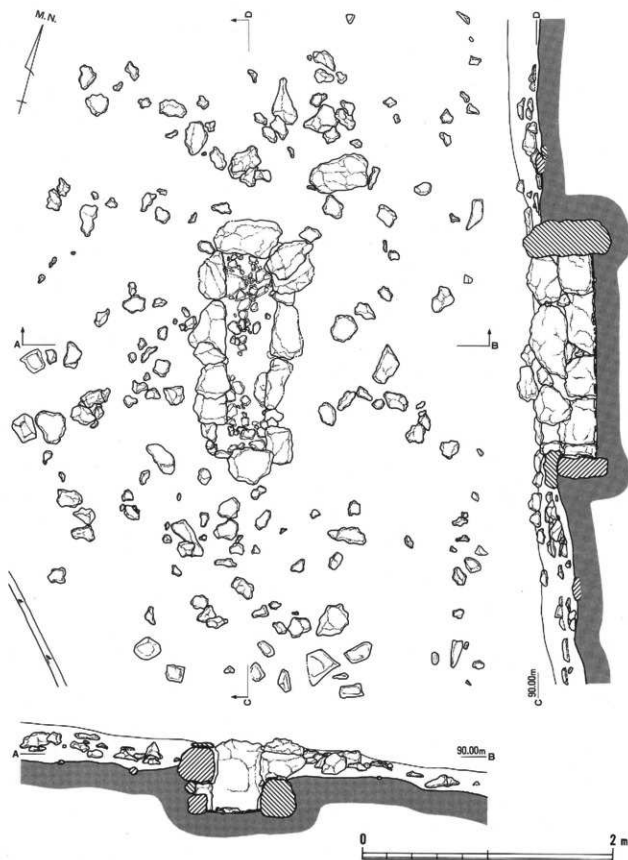


Fig. 105 第56号墳 石室上面実測図

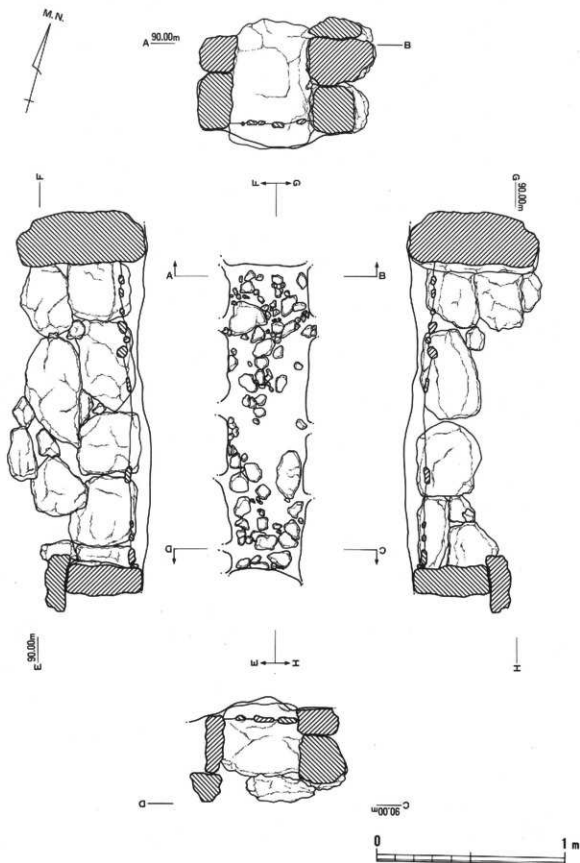


Fig. 106 第56号墳 石室実測図

②南 壁

基底石は1石で構成され、2段目の石材が1石遺存していた(PL.71-2)。壁体の床面からの残存高は、0.63mである。基底石は板状を呈し、幅0.43m、高さ0.40m、最大厚0.15mを測る。この石材は縦位に使用されていた。2段目には幅0.36m、高さ0.10mを測る板状石材が横位に使用されていた。

③東 壁

基底石は4石で構成される。2段目の石材は4石遺存していた(PL.70-2)。壁体は長さ1.62mで、残存高は0.59mを測る。基底石はすべての石材を横位に使用していた。基底石として使用されている石材は、高さ・幅ともに50cm以内の小型のものであった。基底石は上面の標高を88.80mにほぼ揃えて積まれているが、南壁から1石目の石材の上面のみ低くなっている。この石材上には2段目の石材を2石積むことで、他の基底石との高さを調整している。

北壁側から1石目の基底石上には2段目の石材が遺存していたが、2段目の石材上にはさらに高さを調節するために積まれた1石の小石材が遺存していた。また、これらの石材の隙間には小石材が挿入されていた。

④西 壁

西壁は東壁と比べて遺存状況が良好で、2段目の石材も多く残っていた(PL.70-1)。基底石は5石で構成されており、2段目の石材は4石遺存していた。壁体は、長さ1.67m、残存高0.62mを測る。

基底石は、すべて石材を横位に立てて使用していた。基底石として使用されている石材は、高さ・幅ともに50cm以内の小型のものであった。2段目の石材は北壁側から2石目の石材が横位に立てて使用されているほかは、すべて最大面が底部にくるようにして基底石上に積まれていた。石材の隙間には、小石材が挿入されていた。

⑤床 面

床面は、厚さ約6cmの置土の上に直径10cmから直径30cm程度の比較的大きな礫がまばらに敷かれており、その間に風化した花崗岩の小礫と炭化物が充填されていた(PL.69)。その上には、炭化物が厚く堆積していた。

これは木炭敷きと考えられるが、敷石床面と炭化物層の間に間層が見られないことから追葬はなかったと推測する。敷石の中には若干赤化したものがあり、被熱している可能性がある。なお、側壁石材には、被熱した形跡は見受けられなかった。床面からは、遺物はまったく出土しなかった。

石室内の土は、すべて遺物の有無の確認や微細遺物の採集を目的とした水洗選別を行ったが、遺物はまったく確認されなかった。床面は炭化物層を含め損壊を受けておらず、当古墳にはもともと副葬品等の遺物がなかったことが想定される。また、鉄釘が破片さえ出土しなかったことから、木棺を使用しない埋葬方法の可能性を考えたい。第55号墳と異なり、石室規模において成人を埋葬することができないことから、成人を埋葬したとするなら、改葬墓を考えることができる。

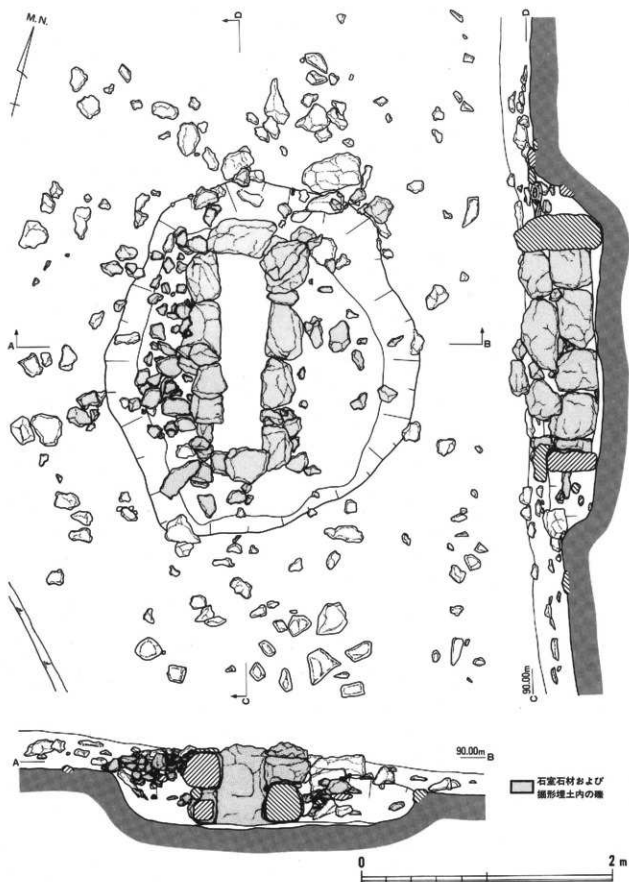


Fig. 107 第56号墳 石室および石室掘形実測図